付論　ツォンカパ年代考と翻訳研究

目次

凡例 i

1 付論 A について i

2 付論 B から D について i

付論 A ツォンカパの年代考 1

1 研究の目標と方法 1

2 『信仰入門』に明示されている年号と年齢 8

3 『信仰入門』の四季節の記述から推定される年代 9

4 主要な著作の執筆年代 25

付論 B 『中論註：正理大海』訳註 31

付論 C『菩提道次第小論』訳註 69

付論 D 『入中論釈：密意解明』訳註 121

凡例

1　付論 A について

本副論文は、ツォンカパの直弟子であるケードゥプジェ・ゲレーペルサン（mKhas grub rje dge legs dpal bzang po, 1358–1438）は書いたツォンカパの伝記と、ギェルワンチュージェ・ロサン・ティンレー・ナムギェル（ rGyal dbang chos rje blo bzang 'phrin las rnam rgyal, 19c）のツォンカパ伝とチャハルゲシェ・ロサン・ツルティム（Cha har dge bshes blo bzang tshul khrims, 1740–1810）ツォンカパ大伝を参照しながら、ツォンカパの年代を考察したものである。この考察によってツォンカパの思想的変遷と著作の年代をより確実になる。

2　付論 B から D について

（1）　チベット語テキストについて

1. チベット語のテキストはショル版を底本とし、Buddhist Digital Resource Center (BDRC) により画像データ化されているクンブン版、タシルンポ版、ラプラン版、デルゲ版にも参照し、校正した。
2. 異読が存在する場合には採用する読みをテキストの本文中に与え、その他の読みを脚注に与えた。D はデルゲ版、K クンブン版、L ラタン版、T タシルンポ版、Z ショル版の読みを表す。
3. 　五つの版の中で、接尾辞 pa / ba の使い方は統一してていないが、本文は、原則として、ga/ da/ ba/ sa/ na/ ma/で終わる音節の後には pa、それ以外の音節には ba を付けることにする。
4. 　デルゲ版、クンブン版、タシルンポ版、ラプラン版、ショル版のフォリオ番号をテキストの中に挿入した。
5. 　原文中に与えられている科段を見出しとして用い、テキストの中に挿入した。その際、科段の番号は *The Collected Sa-bcad of rJe yab sras gsung 'bum (1).* 福

田洋一編. 東洋文庫, 1996. Studia Tibetica, 33;『西蔵仏教基本文献』1 に従った。さらに、訳者の判断で段落分けを行っている。

(2) 和訳について

1. 訳文において原語あるいは同義語を提示する際には（）を用い、訳文の補いを意味する時には〔〕を用いる。
2. 原文の中に与えている科段を見出しとして用い、原文と訳文の中に挿入した。その際、科段の番号は *The Collected Sa-bcad of rJe yab sras gsung 'bum (1)*. 福田洋一編. 東洋文庫, 1996. Studia Tibetica, 33;『西蔵仏教基本文献』1 に従った。さらに、チベット語テキストと対応して段落分けを行っている。
3. 原文の中の引用文の典籍は訳文の脚注に提示した。その際に、チベット語とサンスクリット語の原テキストとの両方が現存する場合は、サンスクリット語の原テキストも提示したが、チベット語のみの訳文を提示した。チベット語に木版と校訂のテキストとの両方がある場合に、両方とも提示した。その際、例えば、「YṢ, 16(22a6)」のように書いた。YṢは略語、16 は校訂テキストのページ数、(22a6) はデルゲ版のフォリオ番号を示す。

なお、付論のみで参照している文献についても本論の文献表にまとめた。

付論 A ツォンカパの年代考

1　研究の目標と方法

ツォンカパはチベット仏教の復興に大きな貢献をした高僧であり、ゲルク派の開祖でもある。ツォンカパの年代を詳細に考察することによって、彼の著作の執筆年及びその背景などが明らかになる。本稿は、ツォンカパの年表を確定することを目標とする。

ツォンカパの伝記として最も権威あるものは、ツォンカパ全集の第一巻目にケードゥプジェ・ゲレーペルサン（mKhas grub rje dge legs dpal bzang, 1358–1438）とトクデンパ・ジャンペルギャツォ (rTogs ldan pa 'jam dpal rgya mtsho, 1356–1428)[1] という二人の直弟子の著した同時代の伝記が２つずつ、都合 4 つの文献が収録されているものである。それぞれは以下の通りである。

1. ケードゥプジェ『偉大なる聖師ツォンカパの素晴らしく希有なる御事跡、信仰入門[2]（*rJe btsun bla ma tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka, 71fols, Toh. 5259.
2. トクデンパ『聖ツォンカパ大伝[3]の補遺：御事跡の善説拾遺（*rJe btsun tsong kha pa'i rnam thar chen mo'i zur 'debs rnam thar legs bshad kun 'dus*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka, 11fols, Toh. 5260 .

---

[1] ツォンカパが 1392 年 36 歳のとき、遁世修行のためにウルカに行ったときに伴っていた 8 人の弟子のうちの一人である。

[2] 『聖ツォンカパ伝』のタイトル訳を使用する。'jug ngogs は、「渡し場」や「入り口の門」の意味であるので、dad pa'i 'jug ngogs で「信仰への入り口」「信仰へと導くもの」という意味であるが、意訳である『信仰入門』が日本語の通りもよく、分かりやすいので本稿でもこの訳を踏襲する。

[3] ケードゥプジェの『信仰入門』をトクデンパは『大伝（*rNam thar chen mo*）』と呼んでいる。現在「大伝」と言うと、後に検討するロサン・ツルティムの著した伝記かロサン・ティンレー・ナムギェルの著した伝記を指すことが多いので、注意が必要である。

3. ケードゥプジェ『宝のごとく尊き師の大海のごとく広大な秘密の御事跡の一部を述べた物語、宝の穂（*rJe rin po che'i gsang ba'i rnam thar rgya mtsho lta bu las cha shas nyung ngu zhig yongs su brjod pa'i gtam rin po che'i snye ma*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka, 16fols, Toh. 5261.
4. トクデンパ『師の秘中の秘なる御事跡：素晴らしく希有なる物語（*rJe'i rnam thar shin tu gsang ba ngo mtshar rmad du byung ba'i gtam*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka 3fols, Toh. 5263[4].

トクデンパの 2 と 4 は、それぞれケードゥプジェの 1 と 3 の補遺[5]という性格を有しているが、枚数から分かるように、非常に簡略なものであるため、ツォンカパの活動の年代を考証するための情報はほとんど得られない[6]。

1 から 3 までの伝記の成立順序については、『聖ツォンカパ伝』の解説で考察されている[7]。ツォンカパの生前に、1 のツォンカパ逝去以前の部分、3、2 の順に成立し、ツォンカパが亡くなってから 1 の最後の部分が書き足されたと推定される。4 は『聖ツォンカパ伝』には訳出されていないため、同書に成立順序に関しての言及はないが、この伝記のコロフォンに「兎年の 8 月 8 日に書いた」とあり、もしこれがツォンカパ生前であれば 1411 年となって少し早すぎる。一方、24 年後の兎年（1435 年）ではトクデンパは亡くっているので、その間の 1423 年に書かれたものと推定され、上に挙げた 4 つの中では一番成立が新しいことになる。これはツォンカパ没後 4 年目のことである。

ツォンカパの生涯の時間軸を決定するとき、以上の四書のうちケードゥプジェの『信仰入門』がもっとも基本的な伝記資料となる。まず、その大部分がツォンカパ生前に書かれた同時代史料であり、しかも弟子の筆頭であるケードゥプジェがツォンカパか

[4] 『聖ツォンカパ伝』には、このトクデンパの秘密の伝記の補遺は収録していない。この『秘中の秘なる御事跡』には 2 の『善説拾遺』よりも、さらに多くの神秘的なエピソードが記されている。一方、『聖ツォンカパ伝』には、ツォンカパ全集の『小品集』に収録されている自伝『私の業績の要説（*Rang gi rtogs pa brjod pa mdo tsam du bshad pa*）』が訳出されている。これはツォンカパが晩年に自らの生涯を修学期、教学の確立期、仏教の布教期の三つに分けて略述したものであり、*rTogs brjod mdun legs ma* という略称のもと、現在でもゲルク派の僧院で広く読誦されている。しかし、これはツォンカパが仏教を学んでいく過程を述べたものであり、活動の記録ではないので、伝記としての情報量は少ない。

[5] ただし、2 の『善説拾遺』は、3 の『秘密の伝記』と似た内容の神秘的な体験の話が多い。

[6] 『善説拾遺』の中で唯一年代が書かれているのは、ツォンカパの誕生が 1357 年であったことである（NTLK, a2）。後に述べるように、ケードゥプジェの『信仰入門』には生年の記述はないが、亡くなった年と年齢が記載されているので、そこから逆算して生年が 1357 年であったことが確定でき、『善説拾遺』の記述と一致する。

[7] 石濱ほか（2008, 280–281）参照。

ら直接話を聞いて書いているので、全くの同時代資料であり、その内容の信頼性が高い。さらに、『信仰入門』は、若い頃の修学期を除いて、中央チベットに出てからの記録が編年体のように時間軸に沿って記述されている。ただし、編年体と言っても年代の記述があることは稀であり、ほとんどは「次の春に」や「夏と冬を過ごした」など、季節の移り変わりを記しているのみである。これら季節の記述は大抵、どこにいたか、あるいはどこに移ったかという場所の記録とセットになっており、さらには誰と会ったか、誰と一緒に行動したかも記されていることが多い。これらの情報も時間軸を確定することによって、ツォンカパの生涯の事跡を辿る重要なメルクマールになる。

ツォンカパの著作には執筆年が記されていることは少ないが、著作場所は記されていることが多い。著作の内容と前後関係を考慮するなら、多くの著作について執筆年を確定するか、あるいは絞り込むことができる。中でも重要な著作に関しては、『信仰入門』の中に執筆時期が記録されているので、本研究によってこれらの著作の執筆年を確定することが出来る。

同様な試みはこれまでにもチベット高僧によって行われてきた。特にチャハルゲシェ・ロサン・ツルティム（Cha har dge bshes blo bzang tshul khrims, 1740–1810）[8]が 1790 年に執筆した『偉大なる一切智者ジェ・ツォンカパの御事跡を分かりやすく述べたもの、一切の吉祥の源（*rJe thams cad mkhyen pa tsong kha pa chen po'i rnam thar go sla bar brjod pa bde legs kun gyi 'byung gnas*）』は、ツォンカパの年齢と年代を対応させて、一年ごとにツォンカパの事績を詳細に記述し、さらに付録として年齢と年代とを対応させた年譜を付している[9]。ただし、ロサン・ツルティムはコロフォンにおいて伝記を執筆するときの典拠として、ケードゥプジェの『信仰入門』と『秘密の伝記』、トクデンパの『善説拾遺』の他は、ツォンカパ全集の ka 帙に収録されている『ロタクドゥプチェンとお会いになった様子[10]とケードゥプジェに歯（聖遺骨）をお与えになっ

[8] 『藏文典籍目録』（中巻）によると、チャハルゲシェ・ロサン・ツルティムはモンゴル人であり、小さい頃に出家して、モンゴル語とチベット語を学んだ。23 歳のとき、北京の雍和宮へ行ってアキャ・ロサン・テンペ・ギェルツェンなどの元で仏典を学び、71 歳のときに亡くなった（SHDZ, 19–21）。

[9] タイトルは伝記とは別に『偉大なる一切智者ジェ・ツォンカパ伝の要義（*rJe thams cad mkhyen pa tsong kha pa chen po'i rnam thar gyi bsdus don*）』となっている。

[10] ロタク・ドゥプチェン・ナムカ・ギェルツェン（lHo brag grub chen nam mkha' rgyal mtshan, 1326–1401）あるいはロタク・ケンチェン・チャクドルワ（lHo brag mkhaen chen phyag rdor ba）は、ロタク地方のダオ（bra bo）大僧院の院長である。この著作はナムカ・ギェルツェンがツォンカパと邂逅したときに起こった様々な神秘的出来事を記したものである。その中に、彼は 70 歳（1395 年）の 6 月 4 日に、ツォンカパをロタクのダオ寺に招いたことを記している（LDJ, a4–b1）。しかし、『信仰入門』の季節から計算すると、ツォンカパはロタクに行ったのは、1394 年の夏である。

たことについて[11]（*lHo brag grub chen dang mjal tshul / mkhas grub rje la tshems gnang skor*）』という二つの事跡についての短い神秘的な記述を挙げているのみである。このうち、時間軸が明瞭に示されているのは『信仰入門』のみであり、ロサンツルティムの編年体の記述も、『信仰入門』のみに基づいて推定されたものと見られる。内容の記述においても、『信仰入門』を「大伝」と呼んで頻繁に引用し、それを骨子として『秘密の伝記』など他の資料や、書簡、ツォンカパの自伝、讃歎偈や著作の帰敬偈、廻向偈などを引用して肉付けを行っている。

本書を Rudolf Kaschewsky がモンゴル語訳を参照しながらドイツ語訳しているが、その序論には、チベットの歴史的背景、ツォンカパの伝記が列挙され、ロサン・ツルティムの略伝、モンゴル語原典およびチベット語訳の文献学的情報などが述べられている。訳注では、モンゴル語原文とチベット語訳の対応、地名や人名についての情報、主要なツォンカパの対応箇所の指摘などが記されている[12]。

従来、ツォンカパ伝についての研究では本翻訳書が参照されてきたが、後に述べるようにロサン・ツルティムの伝記には、年代に関して『信仰入門』と部分的に齟齬があり、それに基づいた Kaschewsky の研究を見直す時期に来ている。本書で行ったような、同時代資料であり、その後の全てのツォンカパ伝の情報源となった『信仰入門』のみに基づいて年代を確定していく作業が必要となるのである。

また現在よく読まれているもう一つの「大伝」に、ギェルワンチュージェ・ロサン・ティンレー・ナムギェルの『偉大なるツォンカパの御事跡、牟尼の教えを美しく飾る希有なる宝環 (*Tsong kha pa chen po'i rnam thar thub bstan mdzes pa'i rgyan gcig ngo mtshar nor bu'i phreng ba*）』がある[13]。コロフォンによれば、ケードゥプジェの『信仰入門』と『秘密の伝記』を基礎にしながら、他の多くの伝記の名を挙げて[14]、それらを全て一つに統合して伝記を書いたと述べている。木版本もあるが、稀覯本であり、通常はインドのサールナートで 1967 年にタイプ版で出版されたもの、あるいは中国の青海民族出版社で 1981 年に出版された活字本が広く一般に読まれている。しかし、本

[11] これも内容は予言や諸仏、諸菩薩などがヴィジョンの中に顕れる様子を記述したものであるが、著者は不明である。ケードゥプジェは三人称で記されている。

[12] Kaschewsky（1971）. ただし全訳ではなく、節によっては要約のみである。

[13] 彼が書いたツォンカパ伝のコロフォンに 1843 年に書き初め、1845 年に仕上げたことが記されている。そこから、彼は 19 世紀の人物であることがわかるが、生年は不明である。その他にダライ・ラマ 10 世（Tshul khrims rgyal mtsho, 1816–1836）と 11 世（mKhas grub rgya mtsho, 1838–1855）の伝記も書いている。

[14] ただし、上述のロサン・ツルティムの伝記は言及されていない。このロサン・ティンレー・ナムギェルの伝記に言及される資料については、後述する。Buddhist Digital Resource Center（BDRC, http://www.bdrc.org）でアクセスできるものについては情報を記述した。

書も年代の記述に関しては『信仰入門』の情報を越えるものではない。後に指摘するように、このロサン・ツルティムの伝記とロサン・ティンレー・ナムギェルの伝記とでは、年代の確定にずれがある。『信仰入門』の四季による時間記述から年代を推定するときに異なった解釈をとったためと思われる。

以上のように、ツォンカパの伝記における年代を確定するためには、まず『信仰入門』の記述からどれだけことが推定できるかを示す必要がある。結果としては多くの年代においてロサンツルティムの推定と一致するが、本稿の作業の価値は、根本資料に立ち返ってそこで確実に言えることのみを典拠を示しながら確定していくことにある。今後は後代の伝記における年代推定に頼ることなく、同時代資料から推定できる年代のみを使用することができるようになるであろう。

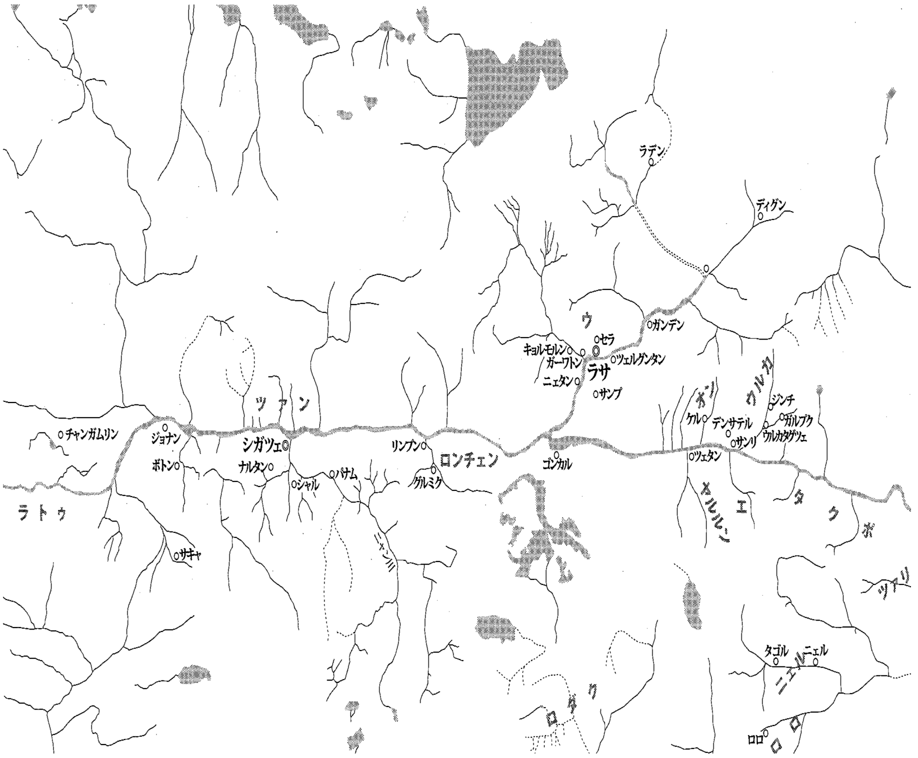

図 1　ツォンカパ伝と関連する地図『聖ツォンカパ伝』p.xvi

ここでは『信仰入門』における時間記述について、次のような方法で年代確定をする。

1. 『信仰入門』の中で年代が明示的に言及されている箇所を確認する。
2. 年齢のみが言及されている箇所を確認する。生年と没年および 1 での絶対的年代が分かっているので、年齢の記述から推定できる年代も 1 に次いで確実な年

代だと言える。

3. 1 と 2 で判明している年代を元に『信仰入門』における四季の記述から年代を計算していく。確定できない年代については確定できないことを明示する。また、年代だけではなく、『信仰入門』に記録されているツォンカパの足取りと誰の元に行ったか、あるいは誰と共に行動したかについても併記する。
4. 『信仰入門』に言及されているツォンカパの主要な著作を抜き出し、執筆年を確定する。この年代確定の作業の過程で、上記ロサン・ツルティムとロサン・ティンレー・ナムギェルの伝記との齟齬がある場合には、特に推定の根拠を示して考察を加えた。

上に挙げたロサン・ティンレー・ナムギェルのツォンカパ大伝『希有なる宝環』のコロフォンには、参照した伝記類が列挙されている。そのうち、現在 BDRC において確認できるものは必ずしも多くはない。ツォンカパ全集 ka 帙に収録されている上記 1〜4 の以外には、次の 3 点のみが確認できた。

1. ジャムヤン・チュージェ・タシペルデン（’Jam dbyangs chos rje bkra shis dpal ldan, 1379–1449)『ツォンカパ秘密の伝記の祈願（*Tsong kha pa’i gsang ba’i rnam thar gsol ’debs*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa’i dpal. gsung ’bum, Zhol par ma, ka, 8fols, Toh. 5262.
2. サンサン・ネリンパ・チメラプギェー（Zang zang ne ring pa ’chi med rab rgyas, 14c）『ジェ・ツォンカパの伝記・宝の蔵（*rJe tsong kha pa chen po’i rnam thar nor bu’i bang mdzod*）』、『大士の出世方式：金の灯心（*Bu chen byon tshul gser gyi bang mdzod*）』、『ジェ・ツォンカパの伝記：宝の倉など（*rJe tshong kha pa chen po’i rnam thar nor bu’i bang mdzoad sogs*）』BDRC. W23937, Delhi: Jayyed Press (Dorje Tsering).
3. デシー・サンゲーギャムツォ（sDe srid sangs rgyas rgya mtsho, 1653–1705）『ガンデン仏教史・黄琉璃（*dGa’ ldan chos ’byung bai DUr+ya ser po*）』BDRC. W1KG1610. 中国蔵学出版社、1989.

これら以外に、BDRC のコレクションの中で確認できるツォンカパの伝記および伝記が含まれる仏教史のうち、ロサン・ツルティムの『ツォンカパ伝』以前あるいは同時代に著されたものには以下のものがある。

1. グーロツァワ・ションヌペル（’Gos lo ts’a ba gzhon nu dpal, 1392–1481）『青冊（*Deb ther sngon po*）』BDRC. W7494. 四川民族出版社、1985, pp.1249–1256.
2. クンガ・ギェルツェン（Kun dga’ rgyal mtshan, 1432-1506）『カダム仏教史・明

灯（*bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*）』BDRC. W23748. 西蔵人民出版社、2003, pp.674–705.

3. パンチェン・ソナム・タクパ（Paṇ chen bsod nams grags pa, 1478-1554）『新旧カダム仏教史：心の荘厳（*bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan*）BDRC. W933. 西蔵古籍出版社、2001, pp.44–55.
4. ロサン・チューキ・ギェルツェン（Blo bzang chos kyi rgyal mtshan, 1570-1662）『宝ごとくのゲデン・カギュの甚深なる道を相続する簡略な事跡：蔵の標題（*dGe ldan bka' brgyud rin po che'i zab lam brgyud pa'i rnam par thar pa mdor bsdus gter gyi kha byang lta bu*）』BDRC. W9848. Paṇ chen thams cad mkhyen pa blo bzang chos kyi rgyal mtshan dpal bzang po'i gsung 'bum, bKra shis lhun po par ma, ka 11fols.
5. ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドゥ（'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus, 1648–1721）『ヴァジュラ・ヴァイラヴァ仏教史（*'Jigs byed kyi chos 'byung khams gsum las rnam par rgyal ba*）』BDRC. W22186. Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje'i mchog gi gsung 'bum, Bla brang par ma, ca, 824fols;『ツォンカパの絵伝[15]（*rNam thar ras bris*）』BDRC. W22186. Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje'i mchog gi gsung 'bum, Bla brang par ma, nga 26fols.
6. ロサン・テンペ・ギェルツェン（Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan, 1708-1768）『ジェ・リンポチェの御事跡の要点の略説（*rJe rin po che'i rnam thar gyi bsdus don cung zad brjod pa*）』BDRC. W30533. A ky'a sprul sku gnyis pa blo zang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po'i zhal snga nas kyi bka' 'bum, sKu 'bum par ma, na 12fols.
7. スムパケンポ・イシェー・ペルサン（Sum pa mkhan po ye shes dpal bzang, 1704–1788）『仏教史パクサムジョンサン（*Chos 'byung dpag bsam ljon bzang*）』BDRC. W7667. 甘粛人民出版社、1992、pp.410–528.
8. クンチョク・ジクメワンポ（dKon mchog 'jigs med dbang po, 1728–1791）『クンブム・チャンパリン寺統史（*sKu 'bum byams pa gling gi gdan rabs mu tig 'phreng ba*）』BDRC. W2122. 'Jam dbyangs bzhad pa dkon mchog 'jigas med dbang po'i gsung 'bum, Bla brang par ma, kha, 42fols.
9. イシェー・ギェルツェン（Ye shes rgyal mtshan, 1713–1793）『勝者ツォンカパ伝（*rGyal ba tsong kha pa'i rnam thar*）』『菩提道次第師資相承伝：上巻（*Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar* stod cha）』BDRC. W2DB4613. 西藏人民出版

[15] この著作に基づくタンカは、『聖ツォンカパ伝』の巻末に掲載され、各事績の書き込みが和訳されている（石濱ほか, 2008, 247–276）。

社、2010, pp.512–641.

10. トゥケン・ロサン・チューキニマ（Thu'u kwan blo bzang chos kyi nyi ma, 1737–1802）『一切宗義善説水晶鏡[16]：ゲルク派の章（*Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long las / dge ldan pa'i grub mtha' byung tshul*）』[17]BDRC. W21507. rJe btsun bla ma dam pa thu'u kwan blo bzang chos kyi nyi ma dpal bzang po'i gsung 'bum, Zhol par ma, kha, 73fols.

これらの伝記は全て基本的にはケードゥプジェの『信仰入門』と『秘密の伝記』を元に書かれているため、年代に関して新たな情報が加えられることはない。

2 『信仰入門』に明示されている年号と年齢

『信仰入門』において、十二支による年号が言及されているのは以下の 13 箇所である。これらのうち、年代と年齢の両方が言及されているのは、【3】申年（1392）の 36 歳と【7】卯年（1411）の 55 歳の 2 箇所である[18]。『信仰入門』には、ツォンカパの亡くなった年齢は記述されていないが、【3】と【7】の年代と年齢から計算すると、ツォンカパが亡くなった【13】の 1419 年には、ツォンカパは 63 歳であったことが分かる。また前述したように、ツォンカパの生まれた年は酉年 1357 年であることが確定できる。その他の年代に対応する年齢も計算できるので、以下の表の→の後に記す。＝は年齢が『信仰入門』に明示されていることを示す。

【1】丑年（1373）→ 17 歳（9b6、和訳[19], 42）
【2】午年（1390）→ 34 歳（22b6、和訳, 66）
【3】申年（1392）＝ 36 歳（27b6、和訳, 83）
【4】子年（1408）→ 52 歳（44b2、和訳, 106）
【5】丑年（1409）→ 53 歳（44b4、和訳, 106）
【6】寅年（1410）→ 54 歳（50a3、和訳, 115）

[16] 著作年時は 1801 年であり、1790 年に執筆されたロサン・ツルティムの伝記よりも年代が後になるが、ほぼ同時代に独立して書かれており、また有名な著作でもあるのでここに挙げた。

[17] 立川ほか（1995）で和訳されている。ツォンカパ伝は 4 頁から 51 頁までである。

[18] チベットでは、基本的に生まれたとき 1 歳と数え、それ以後新しい年（lo gsar）が来るごとに 1 歳を加算するという数え年で年齢を計算している。ここでも、ツォンカパは申年（1392 年）に 36 歳であったと記載されているので、生年の 1357 年から計算すると、数え年であることが確認できる。以下、本稿での年齢も、数え年で記載することとする。

[19] フォーリオ数はショル版ツォンカパ全集の『信仰入門』のフォーリオ番号・行番号、和訳のページ数は『聖ツォンカパ伝』のページ数である。

【7】卯年（1411）＝ 55 歳（50a6、和訳, 116）
【8】龍年（1412）→ 56 歳（50b3、和訳, 116）
【9】その翌年（1414）→ 58 歳（51b2、和訳, 118）
【10】未年（1415）→ 59 歳（52a3、和訳, 119）
【11】酉年（1417）→ 61 歳（52a5、和訳, 119）
【12】戌年（1418）→ 62 歳（54a1、和訳, 121）
【13】豚年（1419）→ 63 歳（54a4、和訳, 136）

また『信仰入門』で年齢のみが言及されている箇所は次の 5 箇所である。これらについても、年代を計算し確定することができる。

(1) 3 歳→ 1359 年（5a2–3、和訳, 29）
(2) 7 歳→ 1363 年（7b6、和訳, 29）
(3) 16 歳→ 1372 年（8b5–9b5、和訳, 38）
(4) 17 歳＝丑年（1373）（9b6、和訳, 42）
(5) 19 歳→ 1375 年（10b4、和訳, 43）

以上は、『信仰入門』に明示された情報から年代と年齢を確定できる時間軸の定点である。これらを時間軸上の定点として、次に『信仰入門』の記述から計算できる年代を推定していくことにしたい。

3 『信仰入門』の四季節の記述から推定される年代

1.2 に挙げた年代（あるい年齢）以外に、『信仰入門』において明確な年代の記述はないが、ケードゥプジェは、ツォンカパが場所を移動するたびに、細かくその季節について言及している。第 2 節で確定できた年代の間の年については、その季節の記述を頼りに年代を推定していくことが可能である。冬から春の間に年が改まると考えて、年代を一年繰り上げる。これは正確に計算できるものではなく、推定作業になり、定点の間で辻褄が合うように調整する必要がある。また 2 年あるいは 3 年同じところに滞在している場合には、その間の出来事はそれ以上正確な年代を指摘することはできない。

『信仰入門』の中で、季節の移り変わりが連続して書かれるようになるのは、20 歳以降である。それまでの年代は、大まかなことしか分からない。ツォンカパは 7 歳（1363 年）までは自分の家で過ごし、7 歳から 16 歳（1372 年）の間はチュージェ・ト

ンドゥプ・リンチェン（Chos rje don grub rin chen）[20]のもとで勉学していた。そして、16 歳のとき、中央チベットのツァン（gtsang）に勉学に行く事になった。『信仰入門』では丑年（1373 年）の秋、つまりツォンカパ 17 歳のときにディクン ('bri gung) に到着し、ディクンのチェンガ・リンポチェ・チューキ・ギェルポ (sPyan snga rin po che chos kyi rgyal po, 1335–1407)[21]のところで大乗の発心の儀軌や五支マハームドラーなどの法を聴聞した。そこからデワチェン (bde ba can) に行って、そこで 2 年間に般若思想を学び、般若思想に通達した。19 歳（1375 年）にサンプ (gsang phu）とデワチェンに行って議論をしてまわり、さらにシャル寺 (zhwa lu）の大僧院長タツェパ・リンチェン・ナムゲル（sGra tshad pa rin chen rnam rgyal, 1318–1388)[22]のところでマイトリーパ流の十三尊のチャクラサンヴァラ尊の灌頂を聴聞した。また、ナルタン寺 (snar thang)、サキャ寺 (sa skya)、ダルサンデン寺 ('dar bzang ldan)、ガムリン寺 (ngam ring)、ガロン僧院 ('ga' rong chos sde）などに行って議論をして回った。寺院をまわって議論するということはチベット語で grwa skor と言い、勉強中の僧侶は他の寺院へ行って学問の成果や自分の学問を上達させるために議論を行うことの意味である。議論の内容はクラスによって異なるが、学僧の勉強内容は五部大論と言われている因明 (pramāṇa, shad ma)、般若 (prajñāpāramitā, phar phyin)、中観 (madhyamaka, dbu ma)、律 (vinaya, 'dul ba)、倶舎 (abhidarmakośa, mngon pa mdzod) との五つの大論である。このような学び方が最初に形成されたのはチャパ・チューキセンゲ (Phya pa chos kyi seng ge, 1109–1169) が活躍した時代であると言われている。また、寺院での学期は社会の一般的な学期と違い、春学期、夏学期、秋学期、冬学期との四つの学期から成る。ケードゥプジェは『信仰入門』に季節の移り変わりが連続して書かれている。そのため、20 歳以降の年代について、季節順に考察していきたい。以下、四季を一つのセットとして番号を付けて列挙する。太字にしてあるところは、第 4 節で時間軸上の定点として確認した年号である。

〈1〉20 歳（1376）[23]

[20] トンドゥプ・リンチェンはツォンカパ幼少期の恩師であり、出家戒も彼が授けた。『信仰入門』には「トンドゥプ・リンチェンの伝記」が記載されている（DJG, 6b1–7b5、和訳, 32–35）。

[21] チューキ・ギェルポは、1351 年にディクンカギュ派の第十代目の座主となった (DKZ, 1559–1560)。

[22] タツェパ・リンチェン・ナムギェルとはプトンの大弟子であり、シャル寺の第一代目の僧院長である。

[23] ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』にツォンカパは 19 歳のときに、ニャオン・クンガペル（Nya dbon kun dga' dpal, 1285–1379）の紹介を受け、前にも面会があったレンダワのところへ行き、レンダワから『阿毘達磨倶舎論』とその自註を聴聞したと述べている

夏は、ツェチェン寺（rtse chen）に行き、そこで賢者ニャオン・クンガペルから般若思想を聴聞する。ニャオンクンガペルから彼の弟子である聖レンダを紹介され、レンダワがツォンカパに『阿毘達磨倶舎論』とその自註を教えた。（11b2、和訳, 45）

秋は、ニャントゥ（nyang stod）のサムリン（bsam gling）で聖レンダワから『入中論』を聴聞する。（13b5, 和訳, 48）

冬は、デワチェンで過ごす。

〈2〉21 歳（1377）[24]

キョルモルン寺 (skyor mo lung）の僧院長であるカシパ・ロセル（bKa' bzhi pa blo gsal）[25]のもとで律を学んだ。律を勉強しながら、『根本律経』の大部の注釈書を暗記した。その際に、上半身が重い病気にかかって、様々な治療法を試してみたが、効果はなかった。（14a4、和訳, 49–50）

冬はネーニン寺（gnas rnying dgon）に行き、ネーニンで求道者や随行者の懇請により『阿毘達磨集論』を講義する。（15a4-a6、和訳, 50-51）

〈3〉22 歳（1378）

春、ナルタンを通り、サキャ寺に行き、レンダワの下に 11 ヶ月間滞在し、レンダワから道果説、『阿毘達磨集論』、『プラマーナヴァールティカ（*Tshad ma rnam 'grel*）』、『入中論』、『根本律経』などの経典や論書など聴聞する。

（NTDG, 56–59）が、『信仰入門』では、ツォンカパは 19 歳（1375）のときにサンプ寺やデワチェンなどで議論をして回り、その後、様々な地域へ行って、多くの高僧から法を聞いている。そして、ネーニンで般若思想の議論をしたと記している（DJG, 10b4–11b2）。そのように計算すると、〈1〉は 20 歳の夏になる。これについては、ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカパ大伝』にも「20 歳の辰年の夏学期にツェチェンにいらっしゃい [⋯] 聖レンダワはその夏はサキャからツェチェンにいらっしゃっているので、〔ツォンカパはレンダワから〕『阿毘達磨倶舎論』の自註を聴聞する。（dgung lo nyi shu pa me 'brug lo'i dbyar chos la rtse chen du phebs nas[⋯]rje btsun red mda' pa dbyar de sa skya nas rtse chen na phebas 'dug pa la mngon pa mdzod rang 'grel gyi steng nas mdzub khrid du gsan）」と述べられている（NTZJ, 82–83）ので、20 歳であることには間違いがないと考えられる。

[24] ロサン・ツルティムは、ツォンカパ 20 歳のときに、キョルモルン寺の僧院長であるカシパ・ロセル (dKa' bzhi pa blo gsal）のところに行ったと指摘している（NTDG, 617）。ロサン・ティンレー・ナムギェルがツォンカパ 21 歳というように明確に記述されていないが、「22 歳のときの春にナルタンを通られ、サキャ寺に行った」と述べている（NTZJ, 89）ので、20 歳の冬にデワチェンに滞在したというところから 22 歳の春のところまでの間に一年間経ているが推定できる。19 歳から 30 歳までロサンツルテンの指摘と 1 年間はずれる。

[25] カシパ・ロセルの全名はロドゥセルパ（Blo gros gsal pa）であるが、生年不明。

また、ドルジェリンチェン師からサキャ派流の『二分別』[26]を聴聞する。レンダワの紹介より、サキャの東宮の老法友から口伝を受け、リンチェンガン学堂 (rin chen sgang bla brang) の裏手に置いて、中性音の「ハ」音を出すことにより、上半身の病が完全に治した。(15a6-b4, 和訳, 51)

〈4〉23 歳（1379）

春、ツォンカパとレンダワはサキャからラトゥ地域（la stod）のタムリン（dam ring）に行き、そこで春と夏を過ごした。さらに、ツォンカパがレンダワから『プラマーナ・ヴァールティカ』の自註を聴聞した。(15b5–6、和訳, 51)

秋、故郷から送ってきた日用品を受け取るために、ウ（dbus）に行く。法友や弟子たちが進め、さらにアムドから母もしきり懇請してきたことにより、一度アムドに帰ろうとして、メルド・ラルン（mal gro lha lung）まで行くが、結局故郷に帰ることを中止した。メルド・ラルンのソナム・タクパ（bSod nams grags pa）から聖典の音読儀礼を受け、瞑想修行をした。また、『プラマーナ・ヴァールティカ』の注釈書である『論理の蔵』を紐解くうちに、ダルマキールティの流派と論理学に対して無量の信心が生じた。(15b6-17b3、和訳, 52-54)

冬は、デワチェンに滞在する。(17b3、和訳, 54)

〈5〉24 歳（1380）

春の前半ツァンのナルタンに行き、大翻訳家であるトンドゥプ・サンポ (Don ’grub bzang po) の論理学の注釈書[27]の講義を聴聞した。(17b3–4、和訳, 54)

夏は、ナルタンで『プラマーナ・ヴァールティカ』と上下の『阿毘達磨』を論題として議論をする。(17b5、和訳, 55)

秋は、エ（er）に着き、翻訳家であるナムカ・サンポ (Nam mkha’ bzang pa) より『詩鏡注』などを聴聞した。また、レンダワから中観思想、論理学、『阿毘達磨倶舎論』などを聴聞した。般若思想と律もそれぞれの師のところで何度も聴聞した。なお、ナルタン寺の僧院長であるクンガ・ギェルツェン（Kun dga’ rgyal mtshan）から『中観思想の六論書』の音読儀礼を授かった。デワチェン寺のジャムペル・リンチェン（’Jam dpal rin chen）からもテキストの音読儀礼を受けた。それから、ツォンカパとレンダワ師弟はサキャに行き、ツォンカパは難解思想[28]の議論を行った。(17b5–18a4, 和訳, 55-56)

---

[26] 『ヘーヴァジュラ・タントラ（*Hevajra Tantra*）』の注釈書である。

[27] 『プラマーナ・ヴァールティカ』の注釈書である。

[28] 般若思想、論理学、『阿毘達磨倶舎論』と『大乗阿毘達磨集論』、律のことを指している。

〈6〉25 歳（1381）

春、サンプ寺、ツェタン寺 (rtses thang dgon) などで般若思想を学び終わり、それ以外の四大難解思想（dka’ chen lhag ma bzhi）[29]の議論を行う。ツェタンでの議論を終えた後、ヤルルンナムギェル (yar lung rnam rgyal）寺でカシミールのパンディタである大沙門シャーキャシュリーバドラ（Śākyaśrībhadra, 1127–1225）[30]の律の伝統を受け継ぐ大集会堂の院長であるカシパ・ツルリンパ（dKa’ bzhi pa tshul rin pa）が親教師をし、チジンパの僧院長 (Tshogs pa bye rdzing pa’i mkhan po）である持戒僧のシェルゴンパ長老 (Sher mgon pa）が掲磨師をし、チジンパの読誦師であり、律僧であるソナム・ドルジェ (bSod nams rdo rje）が秘密師をし、ツォンカパは具足戒を受けた[31]。

それから、ディクン・カギュ派の本山であるテル (thal)[32]に行き、チェンガリンポチェ・タクパチャンチュプ (sPyan lnga rin po che grags pa byang chub)[33]のところで道果説、ナーローパの六法、パグモドゥパの全集、ジクテンゴンポの全集などを聴聞された。翻訳家であるナムカ・サンポのところで、声明の音符を全て学びたいと強く希望したが、環境が整わず希望はかなわなかった。

それからツォンカパは学期の合間にオン (’on）のケル仏殿に行き、ツァコポンポ (Tsha kho dbon po ngag dbang grags pa)[34]などの多くの三蔵僧に対し

このとき、『信仰入門』で「『中観思想の六論書』の講義をしてくれる者はおろか、テキストの音読儀礼を行ってくれる者すら見いだしがたい状況だった」と述べている（DJG, 18a4）ので、ツォンカパはまだ中観思想についての議論は行っていないと考えられる。

29 前註参照。

30 シャーキャシュリーバドラはインドのナーレンドラ僧院大学の最後の座主と言われ、チベットに招かれてサキャ派の大学僧サキャパンディタの出家の親教師を務め、ラデン寺やロタクで教えを説いた。『聖ツォンカパ伝』の 161 頁に参照。

31 ツォンカパは具足戒を受けた年について様々な説があるが、『信仰入門』では春、サンプ寺、ツェタン寺などで般若思想以外の四大難解思想の議論を行い、ツェタンでの議論を終えた後に具足戒を受けたことを示している。この記述は連続的な内容となっているので、ツォンカパは 25 歳の 1381 年に具足戒を受けたと考えられる。王森氏はツォンカパが具足戒を受けた年は 1385 年であることを指摘している（王森 1997, 321）。

32 パクモドゥ・カギュー派の祖師であるパクモドゥパ・ドルジェ・ギェルポ（Phag mo gru pa rdo rje rgyal po, 1110–1170）によって建てられた寺院である。

33 パクモドゥパ政権の第三代目の摂政であり、パクモドゥ・カギュ派の第十代目の座主である。ツォンカパが書いた彼の伝記はツォンカパ全集の第二巻目に入っている。

34 ツァコポンポ・ガワンタクパはツォンカパの最初の 4 人の弟子の中の一人である。彼の生没年は不明であるが、ツォンカパは彼に 3 回の書簡を送っている。一通目の書簡の奥書に「ギャモロン（rgya mo rong）で寺院を建て終わった」(KBTB, 193b4–5）と書か

て、般若思想、論理学、中観思想などを説いた。（18a6–20a2、和訳, 56–60）

〈7〉26 歳（1382）–29 歳（1385）

それから、キショ（skyid shod）に行き、ツェルに滞在し、チベット語に訳出された全ての経典と論書を熟読された。全ての経典の内容を分析するための様々な方法について初めて思いを至らせた。『現観荘厳論』の注釈書に対する大部の解説書も著した。

冬学期に、デワチェンに着き、多くの経典を講義した[35]。（DJG, 20b6、和訳, 62）

〈8〉30 歳（1386）

春は、ウトゥ（dbu stod）のチャユル（bya yul）に行き、善知識 70 人に講義を行った。（20b6、和訳, 62）

再びツェルに行き、著作中の般若思想の解説書の残りを著し、仕上げはデワチェンにおいて行った。キョルモルン寺において、ツェル派の師トクデン・イシェー・ギェルツェン (rTogs ldan ye shes rgyal mtshan）に『カーラチャクラ・タントラ』の大部分の注釈書である『無垢の光』の講義を聴聞した。キョルモルン寺において、多数の三蔵僧に対して大小多くの論書の講義を行われた。(21a1–3、和訳, 62)

〈9〉31 歳（1387）[36]

れているので、彼がギャモロンで寺院を建てたことが分かる。二通目は『道の三要素』として知られている。三通目の内容は『菩提道次第大論』の内容の説明である（KBTB, 194b5–196a3）。

[35] ロサン・ティンレー・ナムギェルはツォンカパが 32 歳のとき、『現観荘厳論』の注釈書『善説の金の輪』を著したと述べている（NTZJ, 108）。王森氏も、32 歳のときに『現観荘厳論』の注釈書を著したと指摘している（王森 1997, 323）。しかし、『信仰入門』の〈12〉が丑年（1390 年の 34 歳）の春であることから逆算すると、〈11〉は 33 歳で、〈10〉は 32 歳、〈9〉は 31 歳、〈8〉は 30 歳となる。その春の直前に〈7〉の冬が来るので、それは 29 歳 1385 年であろうと推定される。そして、『現観荘厳論』の注釈書『善説の金の輪』の大部の解説も 1382 年から 1385 年の間に著されたと考えられる。ロサン・ツルティムの伝記では、25 歳から 29 歳の間のこととして、著作年を特定していない（NTDG, 84）。ツォンカパは 26 歳から 30 歳までの四年間にツェルに滞在したと考えられる。

[36] 『善説の金の輪』の奥書に「chos grwa chen po bde ba can du rab byung gi lo snron gyi zla ba la mjug yongs su rdzogs（大寺院のデワチェンでラプチュン（rab byung）の五月（lo snroan）に完全に仕上げた）」と書いている。ラプチュンとは、キジォロツァワ・ダペーウセル（Gyi jo lo tsa ba zla ba’i ’od zer）によって提唱したチベット暦の 60 年周期の名称であり、その始まりは 1027 年（丁卯の年）になる（藏漢大辞典, 2664）。ラプチュンは全て丁卯の年となる。ツォンカパが生きている間に丁卯の年は 1387 年だけである。したがって、『善説の金の輪』は、31 歳（1387）に完成したと考えられる。『信仰入門』でも

次の夏、デワチェンで講義を行った。(21a3–4、和訳, 62)

冬は、トゥルン(stod lung)のツォメー(mtsho smad)とガンカル(ngang dkar)でカーラチャクラ(dus ’khor)を学び、また講義も行った。(21a4–5、和訳, 63)

〈10〉32 歳(1388)

春、ゴンカル (gong dkar) 寺にいるゴムパ・チューギュル (sGom pa chos rgyal) の招待に従い、〔ゴンカルの〕五明仏殿(rigs lnga lha khang)に滞在した。そこで、70 人を超える三蔵僧に対して、般若思想、論理学、『阿毘達磨倶舎論』と『大乗阿毘達磨集論』、『根本律経』などを講義した。(21a6–21b1、和訳, 63)

冬、ムンカル(mon khar)のタシドン(bkra shis gdong)に滞在した。多くのテキストを同時に説くために、その月の 10 日から 30 日までに関係書籍を研究し、翌月の 3 日までにマルパ (Mar pa lo tsa’ chos kyi blo gros, 1001–1097)、ミラレーパ(Mi la ras pa bzhad pa’i rdo rje, 1040–1123)などの小作品をいくつか説いた。5 日からは、1 日の間にサンスクリットの 15 冊のテキストを冒頭から読み始め、毎日に 15 のセッションの講義を行った。そして、『プラマーナ・ヴァールティカ』、『般若経』、『阿毘達磨倶舎論』、『阿毘達磨集論』、『根本律経』、「弥勒の説いた四つの法」[37]、「中観思想の五論書」[38]、『入中論』、『四百論』、『入菩提行論』といった計 17 冊の論書の講義を行った。そのうち、難解な部分は、以前チベットで著された注釈書に基づいて精細に講義し、三ヶ月間にわたって全てを完了した。講義の間に、ツォンカパはヴァジュラ・ヴァイラヴァ (金剛怖畏尊) の灌頂の追体験などの瞑想を行い、生起次第と究竟次第との二次第の瑜伽を行った。(21b4-22b2、和訳, 64-5)

〈11〉33 歳(1389)

夏は、ヤルルンのオカルタク(o kar brag)に滞在し、チャクラサンヴァ尊の修習とマントラの読誦、四座の瑜伽 (thun bzhi’i rnal ’byor)、ニグマ六法 (ne gu chos drug) などの瞑想を行う。(22b2、和訳, 65)

秋はキショに行き、レンダワとともにポタラに滞在し、勝法についての多くの講義を行う。レンダワは再びツァンに行く。(22b4、和訳, 66)

ツェルで書き始められ、夏にデワチェンで仕上げられたと述べている。

37 「弥勒の五法」のうち、『中辺分別論』、『法法性分別論』、『現観荘厳論』、『究竟一乗宝性論』の四つを指す。

38 「中観思想六論書」のうち、『中論』、『廻諍論』、『空七十論』、『六十頌如理論』、『広破論』の五つを指す。

冬は、キョモルンの岩山で多くの学僧にカーラチャクラ、般若思想、論理学、阿毘達磨思想などの講義を行う。(22b6、和訳, 66)

〈12〉**34 歳（1390）**

春、主要な密教経典の解釈と灌頂、作法、口伝などの全てを徹底的究明するため、また、聖者レンダワと討論する必要性が生じたため、ツァンに行き、ロンのヌプチュールン（rong gi snubs chos lung）に滞在した。集会堂長の尊者タクパ・シェーニェン (Grags pa bshes bsnyen）から様々な教えを聴聞した。この時期にラマ・ウマパ（Bla ma dbu ma pa）と初めて出会い、ラマ・ウマパはツォンカパから弁天の許可灌頂をもらう。(22b6-23a4、和訳, 66-7)

〔夏学期〕タクツァン城に行く。そこで翻訳家のチュージェ・キャプチョクペルサン (Chos rje skyabs mchog dpal bzang po）が大役となり、翻訳家のタクパ・ギェルツェン (Grags pa rgyal mtshan)、レンダワ、翻訳家のトンドゥプ・サンポ、ツォンカパによる大法話会が行われた。そのとき、タクパ・ギェルツェンは般若思想、チュージェ・キャプチョク・ペルサンは『二分別』、レンダワは自作の『プラマーナ・ヴァールティカ』の注釈書を講義した。師弟二人は学期の間にバウバニェル ('ba' 'u 'ba' gnye'）に行き、そこでツォンカパはレンダワから『グヒヤサマージャ・タントラ』の根本タントラの講義をひとわたり聴聞する。 この時期に、ツォンカパが顕教と密教の両方とも重視する姿勢が表れ、密教の学習を本格的に始める。レンダワはサキャに帰り、ツォンカパはロンのチュールンに行く。ラマ・ウマパと多くの法談をし、文殊菩薩の法についても多く聴聞する。そこで実践修行に入る決意をする。(23b4–25a4、和訳, 67–70)

秋は、ロンノルンプク (rong no lung phug) に滞在する。

秋の終わりに、ニャントゥのコンスムデチェン（gong gsum sde chen）寺でチューキペルワ（chos kyi dpal ba）より『カーラチャクラ・タントラ』の大註釈書についての解釈を聞く。(25a4–25b4、和訳, 70–71)

〈13〉35 歳（1391）

秋の終わり (34 歳) から春学期の初めにかけて、ゾクリン（rdzogs ring）で、チューキペルワよりタントラの註釈書や作法の指導などを聴聞する。(25b4、和訳, 71)

春の終わりから秋の初めにかけて、コンスムデチェン寺で密教の法を聴聞する。(26a5、和訳, 72–73)

〈14〉**36 歳（1392）**

秋の終わりから冬（35 歳)、春、夏までシャルに滞在し、尊者キュンポレー

パ (rJe btsun dam pa khyung po lhas pa) から瑜伽タントラの大マンダラなど下位の三密教経典群の教説を聴聞する。また、ルーイーパ流とクリシュナチャーリン流のチャクラサンヴァラ・タントラ尊を始めとした無上瑜伽タントラの教説など全てを聴聞する。(26b4–27b1、和訳, 73–4)

パナム (pa rnam) のパクリ (phag pa ri) でチューキペルワから再びヴァジュラガルバ (Vajragarbha, rDo rje snying) 著の注釈書、ヴァジュラパーニ (Vajrapāṇi) 著の『上の注 (*stod 'grel*)』、ナーローパ著の大注釈書などの『カーラチャクラ・タントラ』と『グヒヤサマージャ・タントラ』と関係する多数の論書を聴聞する。また、ギェルツェンタクパ (rGyal mtshan grags pa) からプトン著の『金剛出現大注』、瑜伽タントラの根本タントラである『真実要略タントラ』とそれの解説書である『金剛尖タントラ』、『吉祥最勝』、『悪趣清浄タントラ』などと、『真実光明』、『コーサラの荘厳』、『吉祥最勝の大注』など多くの経典を聴聞する。(27b3–6、和訳, 75)

申年の秋にラマ・ウマパとともにウのガワトン (dga' ba gdong) に滞在し、ラマウマパを介して文殊菩薩に対して中観思想や顕教、密教の区別などの様々な質問を行う。(27b6–31b3、和訳, 75–82)

その秋にドカム (mdo khams) に行く。ラマ・ウマパを見送りにラサに出て、秋の終わりに、キョルモルンで講義を行う。(32a2–3、和訳, 83)

申年の冬に近い 10 月に 36 歳であり、キョルモンから 8 人の弟子と共にウルカに行く。シカ・ネウゾンパ (gZhis ka sne'u rdzong pa) がよい奉仕をし、遁世修行に入る。(32a2–5、和訳, 83–84)

〈15〉37 歳 (1393)

冬 (36 歳) から春にかけて、オルカル ('ol khar) のチュールン (chos lung) に滞在し、師弟皆で四力を有する修行に励む。(32a5-33a3、和訳：84)

夏は、ジンチ (rdzing phyi) の弥勒像を参拝し、供養を行う。(33a3、和訳, 85)

冬、タクポメンルン (dwags po sman lung) のギャソクプ (rgya sog phu) に行く。ヴァジュラヴァイラヴァ十三尊の我入修行を途切れることなく行う。(33a3–4、和訳, 85)

〈16〉38 歳 (1394)[39]

[39] 『新旧カダム仏教史：心の荘厳』とロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカパ大伝』ではツォンカパは 39 歳のときにロタクに行ったことを記述している (KDCN, 48; NTZJ, 143)。王森氏もそれにしたっている (王森 1997, 329)。しかし、『信仰入門』で申年の冬に近い 10 月に 36 歳であることを指摘している。それからロタクに行くまでの季節は、

春、ウルカに行ってカルミ・ユンテン・ユンドゥン（gar mi yon tan g-yung drung）が建てたジンチの仏殿を修復する。仏殿を開眼した。(33a4-b1、和訳, 85-87)

〔夏、〕[40]ロタクのナムカ・ギェルツェンに招かれてタオ寺に行く。ツォンカパはロタクの諸僧に『大乗菩薩集学論』などの講義を行った。尊者ロタクに五大陀羅尼の灌頂など、灌頂や随許などを賜った。ツォンカパは尊者ロタクから菩提道次第の手引きを聴聞する。そこで 7 ヶ月滞在した。(34b1–4、和訳, 87)

『讃歌、梵天の冠 (*bstod pa tshangs pa'i cod pan*)』を著し、インドのシンギリに行こうとするが、本尊である弥勒がとめたので、インド行きを断念し、ニェル地方に行く。(34b4–35a1、和訳, 87–88)

〈17〉39 歳（1395）

〔春、〕ニェルのロロに着き、ロロトゥタク (lo ro stod stag) に五ヶ月程滞在した。そこでティンンレーパ (Brin las pa）が著した『教えの階梯大論（*bsTan rim chen mo*）』を詳しく読むことによって大きな確信を得た。また、そこで『教えの階梯大論』の講義をする。再び遁世修行に入り、その中で顕教と密教の全ての教えについて間違いない確信を得た。さらに、全ての所化それぞれの能力に応じて導くことができる修道カキュラムを確信した。(34b4–36a2、和訳, 88–91)

夏は、下ニェルのセルジェカン（gsal rje gangs）のヤルデン（yar 'dren dgon pa）寺で過ごす[41]。それから、師弟三十人でツァリのマチェン (tsa ri ma chen）に行き、チャクラサンヴァラ尊の灌頂の追体験などを行う。その後、

春、夏、冬、春である。すなわち、1393 年 37 歳の春、夏、冬、と 1394 年 38 歳の春である。その後の 1394 年 38 歳の夏の後半にロタクに行っていると考えられる。ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』でもツォンカパ 38 歳のときにロタク・ナムカ・ギェルツェンと会ったと述べている（NTDG, 139）。

[40] ロタク・ナムカ・ギェルツェンが著したものに「lug zla'i tshes bzhi'i nyin lho brag bra bo dgon par phyag phebs byon pa bdag gis bsu ba la phyin pas （6 月 4 日にロタクタオ寺にいらしゃったので、私は出迎に行った）」と書いているので、夏であることが窺える（LDJ, a4–b1）。

[41] ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカパ大伝』に、40 歳である火鼠年に下ニェルのセルジェカンのヤルデン寺に行ったと述べている（NTZJ, 152）。しかし、『信仰入門』から計算すると、ツォンカパは 39 歳の春の初めに、ニェルのロロに着き、ロロトゥタクで五ケ月間滞在した。これは春の初めから夏の後半までである。その後に、「夏は、下ニェルのセルジェカンのヤルデン寺で過ごす」と書いているので、この夏は 1395 年の夏を指していると考えられる。

再びニェル地方に行き、下ニェル地方のセンゲゾン（seng ge rdzong）に滞在した[42]。そこでセルチェブムパ (gser phye 'bum ba）寺[43]に供養し、律を講義する。（36a2–36b4、和訳, 90–91）

〈18〉40–41 歳（1396–1397）

春、ニェルのガンチュン（sgang chung）に滞在し、講義を行う[44]。（36b4–b6、和訳, 92）

夏は、ニェルのラトン寺（rwa grong）に滞在する。タルマリンチェン (Dar ma rin chen）が寺院をまわって十大難解テキストを議論し終え、ツォンカパに会いに来る。ラトンの僧院長が施主となり、法話会を開いた。ニェルの行政管たちが互いに席次を争っていたが、ツォンカパのおかげで争うことなく、法話会で融和した。(36b6–37a6、和訳, 92–93)

ニェルを出発して再びウルカに行く。オテクンギェル聖山の麓下（'o de gung rgyal lha zhol）にあるラディン（lha sdings）に一年間滞在し、講義する（40 歳の秋と冬、41 歳の春と夏）。この聖地でラマ・ウマパと聖文殊を一体のものとみなして強く祈願を立てたことにより、素晴らしい祝福の体験が顕れた。そして、ブッダパーリタ本人から直接に自分が著わした注釈書[45]の内容を授けるというようなヴィジョンが顕れ、中観思想の最終的な確信を得る。また、『無上の御仏世尊に対して、甚だしく深い縁起をお説きになったことを讃嘆する善き教えの心髄』を著される。（37b1–38b2、和訳, 92–93）

秋は、ウルカに行く。（38b2、和訳, 95）

〈19〉42 歳（1398）

〔1397 の〕冬から春に、ガルパク（mgar phag）に滞在し、ウカルの僧侶たち

---

[42] ロサン・ツルテンムの『ツォンカパ大伝』に「de nas smad seng ge rdzong du phebs/dgung lo bzhi bcu'i me byi lo'i dpyid gnas der bzhugs/(それから、下ニェル地方のセンゲゾンにいらっしゃった。40 歳である火鼠年の春はそこで過ごした)」と述べている（NTDG, 149）ので、ここから、53 歳までロサン・ツルティムの指摘と 1 年間はずれる。しかし『信仰入門』に、春はニェルギャムチョンに滞在したことを記録しているので、下ニェル地方のセンゲゾンに滞在したとき、39 歳であると考えられる。ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカパ大伝』でも 39 歳のとき、セルチェブム寺に滞在したことを指摘している（NTZJ, 268）。

[43] 石濱ほか（2008, 166）の註 144 参照。

[44] ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』に、41 歳であると書かれている（NTDG, 152）が、〈17〉に書いたように 39 歳の夏はニェルのセルジェカンのヤルデン寺で過ごした。その後に、春にニェルギャムチョンと書いているので、40 歳になると考えられる。

[45] ブッダパーリタが著した『根本中論』の註釈である。一般的に『ブッダパーリタ註』と呼ばれている。

に講義する。（38b2、和訳, 95）

夏は、エ地方のテウラン（e'i ste'u rang）に行って、そこに滞在する。（38b3、和訳, 95）

冬は、ウルカのタクドン（brag gdong）に滞在する。ジンチの弥勒像を拝観し、神変会を祝うと思い、十五日の間に盛大に供養する。（38b3–5、和訳, 95）

〈20〉43 歳（1399）

盛春、ジンチでカプチュパ（dKa' bcu pa）を始めとする比丘二百人ほどに対して講義を行う（38b5、和訳, 95）

夏は、ニャンのダンド寺（mdangs mdo'i dgon pa）に行き、ニャンポ（nyang po）で僧侶たちに講義する。（38b5–6、和訳, 95）

秋は、長官ナムカ・サンポの招待により、キショに行く。ポタラ宮に滞在し、サンプ寺、デワチェン寺、グンル寺の三寺 (gsang bde gung gsum)、ガワトン寺、キョルモル寺、スルプ寺の三寺 (dga' skyor zul gsum) の人々を始めとする百人以上の三蔵僧に『中観光明』、律、修行次第などの法話を行う。（38b6–39a3、和訳, 95–96）

〈21〉44 歳（1400）

春は、ガワドンに行く。密教に入るときの条件について考えたことをまとめ、所化たちに『瑜伽師地論』の「菩薩地」における「菩薩戒」の章や『師に関する五十頌』、『密教が戒める十四大罪』などの講義をする。（39a3–b3、和訳, 96–97）

夏、ガワドンでレンダワを迎え、師弟二人で多くの法を説く。その後、師弟二人はラデン (rwa sgreng) の隠棲所に行く。（39b3–5、和訳, 97）

冬は、ラデン寺に滞在する。ツォンカパは『大乗荘厳経論』、『中辺分別論』『大乗集菩薩学論』、『瑜伽師地論』の「声聞地の章」などを整理し、シャマタ（zhi gnas）の講義し、それを実践させた。レンダワは『六十頌如理論』と『グヒヤサマージャ』の五次第などを講義した。師弟二人は顕教と密教の修道の肝要な点について多く議論する。（39b6–40a3、和訳, 97–98）

〈22〉45 歳（1401）

翻訳家のチューゲルとディクン・チューゲルとの二人の会談要求により、春の初めにディクンに行き、講義を行う[46]。チューギェル・チェンガ・リンポチェからナーローの六法とマハームドラの倶生の瑜伽などを聴聞する。

[46] ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカパ大伝』でもツォンカパは 45 歳のとき、ディクンに行き、講義を行ったことを記している（NTZJ, 176）。

(40a3–4、和訳, 98)

夏は、ナムツェデン (gnam rtsed ldeng) 寺で滞在した。翻訳家のチューギェル・キャプチョク・ペルサンとレンダワとツォンカパの三人は六百人を超える僧侶とともに夏安居し、『根本律経』の講義を行い、律を復興する。夏安居の終わりにレンダワはツァンに戻る。(40a4–b6、和訳, 98–99)

二人のチューギェルはその取り巻きの僧とともにラデン寺に行く。そして、タクセンゲの麓に隠棲所を建てた。翻訳家のチューギェル・キャプチョクペルサンが強く勧め、また、多くの人々が促したこともあり、『菩提道次第広論』を著された[47]。また、そこで、『瑜伽師地論』の「菩薩地」における「菩薩戒」の章の註釈書、『密教が戒める十四の大罪』、『師に関する五十頌』の註釈書などを著す。それから、翻訳家のチューゲルは『菩提道次第広論』の経冊を持ち、ツァンに行く。(41a1–b1、和訳, 99–100)

〈23〉46 歳 (1402)

夏と冬、ラデン寺で滞在し、『菩提道次第広論』などの講義を行う[48]。(41b1–2、和訳, 101)

〈24〉47–49 歳 (1403–1405)

夏は、ミーワンポ・タクパ・ギェルツェン (Mi'i dbang po grags pa rgyal

[47] ロサン・ティンレー・ナムギェルとロサン・ツルティムとの『ツォンカパ大伝』に、ツォンカパは 46 歳のとき、『菩提道次第大論』を書いたと指摘されるが、『信仰入門』の季節から計算すると、ツォンカパは 45 歳の春の初めにディクンに行き、講義を行ったことになる。その夏は、ナムツェデン寺に滞在し、再びラデン寺に戻り、45 歳の秋にタクセンギェの下 (brag seng ge'i zhol) で『菩提道次第大論』を書いたと考えられる。『信仰入門』に「chos rje rnam gnyis 'khor dang bcas pa slar raw sgeng du byon / brag seng ge'i zhol du dben gnas btab/ chos rje lo tsa' bas nan cher bskul zhing/gzhan yang gsol ba 'debs pa du m'i ngor / rgyal b'i gsung rab mtha' dag gi gnad bsdus pa / shing rta chen po klu sgrub dang thogs med gnyis kyi lam srol/ byang chub lam gyi rim p'i sgo nas skal ba ldan pa sangs rgyas kyi sar 'khrid p'i tshul rgyas par ston p'i lam rim chen mo'i rtsom pa mdzad (二人の法王とその取り巻きの僧は再びラデン寺にお出ましになり、タクセンギェの麓下に隠棲所を建てた。翻訳家のチューギェルが強く勧め、また、たくさんの人々が促したこともあり、『菩提道次第大論』を著された)」と述べている (DJG, 41a1–3; 和訳, 99) ことから、再びラデン寺に戻ったのは 45 歳の秋であり、『菩提道次第大論』の執筆年は 45 歳秋から冬の間である考えられる。そして、46 歳の夏と冬もそこで過ごし、『悉地の穂』と『師に関する五十頌の解説』などを著したと推測される。

[48] 〈22〉にあるようにツォンカパは春の初めにディクンに行き、講義を行った。夏は、ナムツェディン寺に滞在し、再びラデン寺に戻った。そこで、夏と冬を過ごした (40a3–41b2)。ラデン寺に戻ったのは 45 歳の秋であり、45 歳の冬、46 歳の夏と冬もそこで過ごしたことが分かる。

mtshan pa）[49]に招かれ、オンのデチェンテン（’on sde chen steng）に行き、夏安居を行う。そこで、『菩提道次第広論』の手引き中観思想、論理学の難解箇所を読み解く法話を行う。(42a2–3、和訳, 102)

それから、オテクンゲルの山麓にある、オルカルの弥勒寺に行き、求道者に修道次第と生起次第・究竟次第の法を説く。阿闍梨ナーガーディ (Nāgādi, klu byang）著の『五次第の註釈書』の註釈書、『真言道次第論』[50]、『全ての魔に勝利する』と大部の護摩儀軌などを著す。二年間（1403 年秋から 1405 年秋頃まで)、チャパリン（byams pa gling）に滞在する。(42a3–42b6、和訳, 102–103)

冬（1405 年 49 歳）は、チャンチュプルン (byang chub lung）に滞在する。(42b6、和訳, 103)

〈25〉50–**52** 歳（1406–**1408**）

春、キショに行く。(42b6–43a1、和訳, 103)

夏安居は、セラチューディン（se ra chos sdings）に滞在し、『グヒヤサマージャ・タントラ』の五次第と母タントラの究竟次第の講義を行う。そこで、『了義未了義の区別』と中論の註釈書である『正理の大海』を著す。(43a1–5、和訳, 103)

〔52 歳（1408）のときに、〕[51]明の永楽帝からの招待を辞退し、皇帝に返信を書いた。それから、セラチューディンにおいて『正理の大海』、『了義未了義の区別』、『四百論』、『真言道次第論』、『悉地の穂』、『弟子の望みを満たすもの』などをサンプ寺とデワチェン寺の比丘、ガーワドン、キョルモルン、スルプ三寺の座主、タンサク寺 (thang sag pa）の元座主など約六百人の僧侶に講義する。

２年間（1406 年夏から 1408 年夏まで）セラチューディンに滞在する。(43a5–b5、和訳, 103–105)

夏安居の終わりに、王タクパゲルツェに招かれ、キメー（skyid smad）のドゥムブルン (grum bu lung）に行く。(43b5–6、和訳, 105)

冬（1408 年）は、キメーのドゥムブルンで過ごし、『菩提道次第広論』、ルーイーパ流のの『チャクラサンヴァラ・タントラ』の成就法と母タントラの究竟次第などを講義する[52]。(43b6–44a1、和訳, 105)

---

[49] タクパ・ギェルツェン（1374–1432）はパクモドゥパ政権の第五代目の摂政である。

[50] ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』でも、ツォンカパは 49 歳のときに、『真言道次第論』を著したと述べている（NTDG, 210–211.)。

[51] ツォンカパは永楽帝への書簡に子年 6 月 19 日と書いている（KBTB, 270a6–b1)。

[52] 〈24〉に書いているように２夏をセラチューディンで過ごしている。つまり、50 歳の夏

子年（1408 年）の 12 月下旬にラサへ出発し、大晦日の日に祈願会への参加を呼びかける告知儀式を行った。八千人を超える僧侶が集まり、法会の始まりを告げる宴を行う。（44b2–4、和訳, 106）

〈26〉**53 歳 丑年（1409）**

丑年の 1 月の 1 日から 15 日までの間、大祈願会を開催する。（44b4–48a4、和訳, 106）

初春、セラチューディンに滞在し、六百人以上の三蔵僧たちに対して、『中論』、『瑜伽師地論』の「菩薩地」の菩薩戒の章の大註釈、『遍く良き成就法』、『菩提道次第広論』など顕教と密教の法について講義する。（49a6、和訳, 114）

晩春、チェンガ・リンポチェ・ソナムサンポ（sPyan snga rin po che bsod nams bzang po）が招かれ、サンリのプチン（zangs ri'i phu mchin）に着き、チェンガ・リンポチェ・ソナムサンポと大僧院長ギェルサン（mKhan chen rgyal bzang）を始めとするテルの比丘達に『菩提道次第広論』を講義する。（49b1–2、和訳, 114）

阿闍梨カプチュパ（Slob dpon dka' bzu pa）と阿闍梨ドゥジンパ（Slob dpon 'dul 'dzin）の二人を上首とする大半の僧衆はドク山に行き、ゲデン・ナンパルギェルウェーリン (dge ldan rnam par rgyal ba'i gling）を建てる。（49b2–6、和訳, 114）

夏、ウルカのサムテンリン（bsam gtan gling）で夏安居し、ウルカとタクポ (dwags po）などの僧侶に講義する。（49b6–50a1、和訳, 115）

秋も、この地方で利他の活動を行った。（50a2–3、和訳, 115）

〈27〉**54 歳 寅年（1410）**

寅年の 2 月 5 日に大本山ガンデン寺に行く。そこで、『菩提道次第広論』、『グヒヤサマージャ・タントラ』の註釈書である『明らかにする灯明』、『阿毘達磨集論』、『瑜伽師地論』などの講義を行う。また、『グヒヤサマージャ・タントラ』を解説したタントラである『四天女請問』と『智慧金剛集』の大部の註釈も著す。（50a3–5、和訳, 115）

〈28〉**55 歳 卯年（1411）**

翌年、『五次第を明らかにする灯明』、『五次第の完全なる座』の手引きなどを著す。それから、57 歳になるまで、寿命に係わる障害があることを払うために、55 歳の卯年の初冬に、師弟 30 とともにヴァジュラバイラヴァ尊の

から 52 歳の夏までである。冬はキメーで過ごし、子年の 12 月の下旬にラサへ出発した。子年は丁度ツォンカパ 52 歳のときである（42b6–44b3、和訳, 103–105）。

『寿命を伸ばす修法』の幻輪を作り、厳しい瞑想に入った。（50a5–b3、和訳, 115–116）

〈29〉**56 歳 龍年（1412）**

秋 8 月 7 日から、師弟 30 人とともに瞑想に入り、厄払いを行う。（50b3–51b2、和訳, 116）

〈30〉57 歳 （1413）

御年 57 歳のとき、病に伏す。（51a1–51b1; SNRN, 12a3; 和訳, 116–117; 199–202）

〈31〉**58 歳 翌年（1414）**[53]

王タクパギェルツェンに招かれ、オン（'on）のタシトカ（bkra shis do khar）に夏安居に行く。そこで、百人以上の三蔵僧に中観、論理学、『菩提道次第広論』などの講義を行う。それから、再びガンデン寺に戻り、『チャクラサンヴァラ・タントラ』のルーイーパ流の大注釈書と究竟次第の四座の瑜伽の大小の手引きと成就法、『グヒサマージャ・タントラ』の根本タントラとその註釈書である『五次第を明らかにする灯明』の校正を行い、『グヒサマージャ・タントラ』の語義を詳説する細注と、各章ごとの難解な箇所と一般的に難解な箇所の解釈を決定する研究、項目ごとに分析してまとめたものなどを著す。（51b2–52a1、和訳, 118）[54]

〈32〉**59 歳 未年（1415）**

夏に、密教の修道堂（sngags kyi sgrub mchod khang）の基礎を置く[55]。（52a2–4、和訳, 119）

〈33〉**61 歳 酉年（1417）**

[53] 『信仰入門』には詳細な記述はないが、この年に明の永楽帝が再度に使者を派遣してツォンカパを招待するが、ツォンカパの代わりに弟子のチャムチェン・チュージェ（Byams chen chos rje sh'akya ye shes, 1352–1435）が上京したと、ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』に記述している（NTDG, 280）。

[54] 58 歳から 59 歳までの 1 年間に密教に関する多くの著作を著わした。具体的な著作については次の『信仰入門』に言及されている著作を参照。

[55] 『信仰入門』にツォンカパ 60 歳のことを詳細に述べていないが、『カダム仏教史：明灯』、『ガンデン仏教史：如意樹という賢者を喜ぶもの』、『ガンデン仏教史：黄琉璃』、『新旧カダム仏教史：心の荘厳』、『菩提道次第師資相伝承（下）』、『如意樹仏教史』にツォンカパは 60 歳のときに、彼の指示にしたがって、弟子のジャムヤン・チュージェ（'Jam dbyangs chos rje bkra shis dpal ldan/ 1379–1449）がデプン寺（'bras spungs）を建てたことを記述している（KDCM, 743–744; GDCK, 72; GDCS, 104; KDCG, 110; LRLG, 656-657; CBHZ, 582–583）。ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』でも同様な記述が見られる（NTDG, 283）。

3 月から工学に通暁したものを招集して、仏像などの作成に着工する[56]。（52a5–53b6、和訳, 119）

〈34〉**62 歳 戌年（1418）**

ガンデン寺で密教や中観などの講義を行う。（54a1–3、和訳, 121）

夏と秋に、仏殿の回廊の壁画も完成し、『入中論釈：密意解明』の執筆も終わる。（54a3–4、和訳, 121–122）

〈35〉**63 歳 豚年（1419）**[57]

春と夏の間に三蔵僧に『チャクラサンヴァラ・タントラ』の根本タントラなどの講義を行い、『『チャクラサンヴァラ・タントラ』ルーイーパ流』の注釈書を脱稿され、圓寂する。（54a5–66a3、和訳, 122–142）

4 主要な著作の執筆年代

『信仰入門』に言及されている主要な著作の執筆年については、以上の年譜から確定する。

1. 1385–1387（29–31 歳）

『般若波羅蜜の教えの論書『現観荘厳論』の注釈書並び善説の金の輪 上（*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa legs bshad gser phreng*, stod cha）』 Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par, tsa. 405fols, Toh. 5412.

『般若波羅蜜の教えの論書『現観荘厳論』の注釈書並び善説の金の輪 下（*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa legs bshad gser phreng*, smad cha）』 Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par,tsha. 267fols, Toh. 5412.

[56] 密教の修道堂となるガンデンヤンパチェン（dga' ldan yangs pa can）は 1415 年に建築が始まって、この年に完成した。

[57] 『カダム仏教史：明灯』、『ガンデン仏教史：如意樹という賢者を喜ぶもの』、『ガンデン仏教史：黄琉璃』、『新旧カダム仏教史：心の荘厳』、『菩提道次第師資相伝承』、『如意樹仏教史』にこの年に、ツォンカパの弟子であるチャムチェン・チュージェがセラ寺を建てたことを記述している（KDCM, 748; GDCK, 101–1; GDCS, 138; KDCG,137; 110; LRLG, 665; CBHZ, 595）。ロサン・ツルティムの『ツォンカパ大伝』でも 1419 年にチャムチェン・チュージェがセラ寺を建てたことを読み取れる（NTDG, 320）。

2. 1397（41 歳）

『無上の教主である仏世尊に対して甚深なる縁起をお説きになったことを通じて称賛する善説真髄（縁起讃）(*Sangs rgyas bcom ldan 'das 'jig rten thams cad kyi ma 'dris pa'i mdza' bshes chen po ston pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel bar' byung ba gsung ba'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa snying po*）』In『小品集（*bKa' 'bum thor bu*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, kha. 3fols, Toh.5275.

3. 1401（45 歳）

『菩提道次第広論（*Byang chun lam rim chen mo*）』 Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, pa, 523fols, Toh.5392.

4. 1402（46 歳）

『菩薩戒の大註釈：菩提の正道（*Byang chub sems dpa'i tshul khrims kyi rnam bshad byang chub gzhung lam zhes bya ba*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka, 108fols, Toh. 5271.

『秘密真言の戒の解説：悉地の穂（*gSang sngags kyi tshul khrims kyi rnam bshad dngos grub kyi snye ma*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka, 70fols, Toh. 5270.

『師に関する五十頌の解説ー弟子の望みを満たすもの（*Bla ma lnga bcu pa'i rnam bshad slob m'i re ba kun skong zhes bya ba*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ka, 29fols, Toh. 5269。

5. 1403–1405（47–49 歳）

『成就法の設定の解説：吉祥なる秘密集の要点を明らかにする（*rNam gzhag rim pa'i rnam bshad dpal gsang ba 'dus pa'i gnad kyi don gsal ba*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, cha, 81fols, Toh. 5290.

『勝者普遍主大金剛持の道の次第：全ての秘密の要点を分類する（*rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen po'i lam gyi rim pa gsang ba kun gyi gnad rnam par phye ba*）』（＝『真言道次第』）Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ga, 441fols, Toh. 5281.

『全ての魔に勝利するもの（*'Jigs byed kyi sgrub thabs bdud las rnam rgyal*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, tha, 15fols, Toh. 5337.

『吉祥金剛怖畏の善なる業四つの護摩悉地の海（*dPal rdo rje 'jigs byed kyi 'phrin las bzhi'i sbyin sreg dngos grub kyi rgya mtsho*）』Tsong kha pa blo

bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, da, 28fols, Toh. 5347.

6. 1406（50 歳）

『了義・未了義の区別する論書：善説心髄（*Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos legs bshad snying po*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, pha, 114fols, Toh. 5396.

『根本中観頌般若と名づくものの解説：正しい論理の大海（*dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ba, 218fols, Toh. 5401.

7. 1410（54 歳）

『グフヤサマージャ・タントラの釈タントラである四天女請問の詳説：プラーナーヤーマの真実を明らかにする（*dPal gsang ba 'dus pa'i bshad rgyud lha mo bzhis zhus kyi rgya cher bshad pa srog rtsol gyi de kho na nyid gsal ba*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ca, 47fols, Toh. 5285.

『グフヤサマージャ・タントラの智慧金剛集の詳説：タントラを説明するあり方の教えをはっきり示す（*dPal gsang ba 'dus pa'i bshad pa'i rgyud ye shes rdo rje kun las btus pa'i*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ca, 60fols, Toh. 5286.

8. 1411（55 歳）

『タントラの王である吉祥なるグフヤサマージャ・タントラの教え：五次第を明らかにする灯明（*rGyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i man ngag rim pa lnga rab tu gsal ba'i sgron me*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ja, 312fols, Toh. 5302.

『タントラの王である吉祥なるグフヤサマージャ・タントラの五次第の完全なる座手引き（*rGyud kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i rdzogs rim rim lnga gdan rdzogs kyi dmar khrid*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, nya, 58fols, Toh. 5314.

9. 1414–1415（58–59 歳）

『世尊の勝楽なる輪の現観の詳説：如意牛（*bCom ldan 'das dpal 'khor lo bde mchog gi mngon par rtogas p'i rgya cher bshad pa 'dod pa 'jo ba*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ta, 84fols, Toh. 5320.

『瑜伽自在者ルーイーパ流の勝楽の究竟次第の解説：悉地の穂（*rNal 'byor gyi dbang phyug l'u i pa'i lugs kyi bde mchog rdzogs rim gyi rnam bshad*

dngos grub snye ma）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ta, 62fols, Toh. 5324.

『勝楽ルーイーパ流の究竟次第である大瑜伽自在者の導く次第の概説（*bDe mchog l'u i pa'i lugs kyi rdzogs rim rnal 'byor chen po'i khrid kyi rim pa mdor bsdus*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, tha, 62fols, Toh. 5340.

『瑜伽ルーイーパ流の世尊輪律の明らかな大楽の成就法（*rNal 'byor gyi dbang phyug l'u i pa'i lugs kyi bcom ldan 'das 'khor lo sdom pa'i sgrub thabs bde chen gsal ba*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ta, 37fols, Toh. 5323.

『グフヤサマージャ・タントラの詳説たる灯明の語義詳説の複註（*gSang 'dus rgya cher bshad pa sgron ma gsal ba'i tshig don ji bzhin 'byed pa'i mchan gyi yang 'grel*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, nga, 476fols, Toh. 5282.

『グフヤサマージャ・タントラの詳説たる灯明の難点の決定をなす宝の芽（*gSang 'dus rgya cher bshad pa sgron ma gsal ba'i dka' gnas kyi mtha' dpyod rin po che'i myu gu*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ca, 138fols, Toh. 5284.

『全てのタントラの王吉祥グフヤサマージャ・タントラの根本タントラ、灯明する詳説によって述べる略科文（*rGyud thams cad kyi rgyal po dpal gsang ba 'dus pa'i rtsa ba'i rgyud / sgron ma rab tu gsal bar byed pa'i rgya cher bshad pas 'chad pa'i sa bcad bsdus don*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ca, 32fols, Toh. 5283.

『菩提道次第小論（*Lam rim chung ba*）』[58]Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, pha, 201fols, Toh. 5393.

10. 1418（62 歳）

『入中論釈：密意解明（*bsTan bcoas chen po dbu ma la 'jug pa'i rnam bshad dgongs pa ras gsal*）』Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, ma, 267fols, Toh. 5408.

11. 1419（63 歳）

『まとめている勝楽タントラを詳説する隠密の意味を明らかにする（*bDe*

58 『信仰入門』に『菩提次第中論』について言及していないが、ロサン・ティンレー・ナムギェルの『ツォンカパ大伝』と『カダム仏教史：明灯』に、この年に『菩提次第中論』を著したことを述べている（NTZJ, 259; KDCM, 703）。

mchog bsdus pa'i rgyud kyi rgya cher bshad pa sbas pa'i don kun gsal ba）』
Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal. gsung 'bum, Zhol par ma, nya, 238fols, Toh. 5316.

以上の考察によって、ツォンカパの生涯における重要なエピソード及び主要な著作の年代をより正確に把握することができた。

付論 B 『中論註：正理大海』訳註

ツォンカパはナルタン寺の僧院長であるクンガー・ギェルツェンから『中観思想の六論書』の伝授を受けたが、当時のチベット寺院では、般若思想、論理学、上下アビダルマ、律の議論のみが行われ、中観思想に関しての議論がなかったことがケートゥジェの『信仰入門』から伺える[59]。ツォンカパより前に中観の見解を重要しているのはレンダワぐらいであり、ツォンカパはレンダワから中観思想を学んだ。しかし、伝記ではレンダワから『中論』の教えを受けたことについての記録はない。

ツォンカパは 40 歳から 41 歳までの間に、中観思想の最終的な確信を得て、『縁起讃』[60]を著したことは『信仰入門』に示されている[61]。その後に 45 歳の頃に『菩提道次第大論』を著した。そして、それから 5 年を立てからナーガールジュナ作の『中論』に対する大註釈書を著した。それは『中論註：正理大海』である[62]。『中論註：正理大海』の正式な題名は以下の通りである。

> དབུ་མ་རྩ་བའི་ཚིག་ལེའུར་བྱས་པ་ཤེས་རབ་ཅེས་བྱ་བའི་རྣམ་བཤད་རིགས་པའི་རྒྱ་མཚོ། (『根本般若中論頌釈・正理の大海』)

ここでは本研究と関連する第 24 章「聖諦の考察」における二諦説について、以下のテキストを抜き出して和訳する。

D	sde dge par ma, ba. Toh.5401. 243a3-255a1.
K	sku ’bum par ma, ba. 243a3-255a1.
L	bla brang par ma, ba.253b4-267a3.
T	bkra shis lhun po par ma, ba. 236b2-247b6.
Z	zhol par ma, ba. 234b4-246a5.

[59] 付論 A 参照。

[60] ツォンカパは文殊から教えを聞き、最終的な中観の見解を得たことについては福田（2018 2, 82–128）参照。

[61] 著作年代については、付論 A 参照のこと。以下同様。

[62] ツォンカパ以前の中論及び中論註などについては根本（2010）の付論 A 参照。

O2 (འགྲེལ་པར་ཁ་འཕངས་པའི་དོན་ངེས་པར་བྱ་བ།)

གཉིས་པ་ནི། འདིར་ཚིག་[63]གསལ་ལས་བདེན་གཉིས་རྒྱས་པར་འཇུག་པ་ལས་ཤེས་པར་[234b5]བྱ་བར་གསུངས་པས་དེའི་དོན་ཅུང་ཟད་བཤད་པར་བྱའོ། །

དེ་ལ་[L253b5]ཤེས་བྱ་ནི་གང་ལ་བདེན་པ་གཉིས་རྣམ་པར་འབྱེད་པའི་དབྱེ་བའི་[K243a4][D243a4]གཞི་[T236b3]ཡིན་ལ།ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་དང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་དེ་ལས་ཕྱེ་བའི་ངོ་བོའོ། །

ཕྱེ་བ་སོ་སོའི་དོན་[234b6]ངེས་པར་བྱ་བ་ལ་གསུམ།[L253b6] **P1** ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་དང་། **P2** དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་བཤད་པ་དང་། **P3** བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་གྲངས་[K243a5][D243a5]ངེས་བསྟན་[T236b4]པའོ། །

O2 註釈で付け加えた意味を確定すべきである

第二は、これに関して、『プラサンナパダー』に二諦説について詳しくは『入中論』から知るべきであると説かれているので、その意味を少し説明しよう。

そのうち、所知は二諦を区別する基体であり、世俗諦と勝義諦はそれ〔所知〕から区別する存在（ངོ་བོ།）である。

区別しているそれぞれの意味を説明するには三つ〔がある〕。**P1** 世俗諦〔の説明〕と、**P2** 勝義諦の説明と、**P3** 二諦の数が確定していることを示すことである。

P1 ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་བཤད་པ།

དང་པོ་ལ་གསུམ། **Q1** ཀུན་རྫོབ་དང་བདེན་པའི་སྒྲའི་དོན་བཤད་པ་དང་། **Q2** ཀུན་རྫོབ་བདེན་[L254a1]པའི་མཚན་ཉིད་[235a1]དང་།**Q3** ཀུན་རྫོབ་པའི་དབྱེ་བའོ། །

Q1 ཀུན་རྫོབ་དང་བདེན་པའི་སྒྲའི་དོན་བཤད་པ།

དང་པོ་ནི། འོ་ན་ཀུན་རྫོབ་ནི་གང་བདེན་པ་ནི་གང་ཞེ་ན། དེ་ལ་གཟུགས་ལ་[K243a6][D243a6]སོགས་པ་རྣམས་ཀུན་[T236b5]རྫོབ་གང་གི་ངོར་[L254a2]བདེན་པར་འཇོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ནི། ཆོས་རྣམས་ལ་རང་བཞིན་གྱིས་[235a2]གྲུབ་པའི་རང་གི་ངོ་བོ་མེད་པ་ལ་ཡོད་པར་སྒྲོ་འདོགས་པའི་མ་རིག་པ་ཡིན་ཏེ། དངོས་པོ་ལ་བདེན་པར་གྲུབ་པ་མི་སྲིད་པས་[K243b1][D243b1]བདེན་པར་[L254a3]འཇོག་པ་ནི་བློའི་ངོར་ཡིན་[T236b6]ལ། བདེན་འཛིན་མིན་པའི་བློའི་ངོར་བདེན་པར་གཞག་[64]ཏུ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

[63] D, K, T, Z: ཚིག་ L:ཚིགས་ 以後 D, K, T, Z では全て ཚིག་གསལ། L では ཚིགས་གསལ། で綴られる。

[64] D, K:བཞག་ L, T, Z: གཞག་

དེ་[235a3]ལྟར་ཡང་འཇུག་པ་ལས།

> གཏི་མུག་རང་བཞིན་སྒྲིབ་ཕྱིར་ཀུན་རྫོབ་སྟེ། །
> དེས་གང་[L254a4]བཅོས་མ་བདེན་པར་སྣང་དེ་ནི། །
> [K243b2][D243b2]ཀུན་རྫོབ་བདེན་ཞེས་ཐུབ་པ་དེས་གསུངས་[T237a1]ཏེ་[65]། །
> བཅོས་མར་གྱུར་པའི་དངོས་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཏུའོ། །

ཞེས་སོ། །

འདིར་འཇུག་[235a4]འགྲེལ་ལས།

> དེ་ལྟར་རེ་ཞིག་[66]སྲིད་པའི་ཡན་ལག་གིས་ཡོངས་སུ་བསྡུས་པ་ཉོན་མོངས་པ་ཅན་གྱི་མ་རིག་པའི་[K243b3][D243b3]དབང་གིས་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་རྣམ་པར་[T237a2]བཞག་[67]གོ།
> དེ་ཡང་ཉན་ཐོས་དང་རང་སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ཉོན་[235a5]མོངས་[L254a6]པ་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་སྤངས་པ། འདུ་བྱེད་གཟུགས་བརྙན་ལ་སོགས་པའི་ཡོད་པ་ཉིད་དང་འདྲ་བར་[K243b4][D243b4]གཟིགས་པ་རྣམས་ལ་ནི་བཅོས་མའི་རང་བཞིན་ཡིན་[T237a3]གྱི། བདེན་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ་བདེན་པར་མངོན་པར་རློམ་པ་མེད་[L254b1]པའི་ཕྱིར་རོ། །
> [235a6]བྱིས་པ་རྣམས་ལ་ནི་སླུ་བར་བྱེད་པ་ཡིན་ལ་དེ་ལས་གཞན་པ་རྣམས་ལ་ནི་སྒྱུ་མ་ལ་སོགས་པ་ལྟར་རྟེན་[K243b5][D243b5]ཅིང་འབྲེལ་བར་འབྱུང་བ་ཉིད་ཀྱིས་[68]ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དུ་འགྱུར་[T237a4]རོ། །

ཞེས་གསུངས་པས་ནི་ཀུན་རྫོབ་[L254b2]བདེན་པ་ཡོད་པར་འཇོག་པ་རྣམས་[235b1]མ་རིག་པས་ཡོད་པར་འཇོག་པ་དང་། ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་སྤངས་པའི་ཉན་རང་དང་བྱང་[K243b6][D243b6]སེམས་ཀྱི་ངོར་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་མི་འཇོག་པར་སྟོན་པ་མིན་ནོ། །

དེ་[T237a5]ལ་དང་པོའི་[L254b3]རྒྱུ་མཚན་ནི་ཐར་བཤད་པ་ལྟར་ཉོན་མོངས་པ་ཅན་གྱི་མ་རིག་[235b2]པ་ནི་བདེན་འཛིན་ཡིན་པས་དེས་བཟུང་བའི་དོན་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་དང་། ཀུན་[K244a1][D244a1]རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཡིན་ན་ཐ་སྙད་དུ་ཡོད་པས་ཁྱབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

[T237a6][L254b4]དེས་ན་ཆོས་རྣམས་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡོད་པར་འཇོག་པའི་འཇོག་སའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་ན་ནི། [235b3]ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་ལ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་[K244a2][D244a2]བྱས་པ་དེ་མ་ཡིན་དགོས་པ་ཡིན་ནོ། །

གཉིས་པའི་རྒྱུ་མཚན་ནི་ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་[L254b5]རིག་པའི་ཀུན་རྫོབ་[T237b1]སྤངས་པ་རྣམས་ལ། གང་གི་ངོར་བདེན་པར་འཇོག་པའི་བདེན་ཞེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་མེད་[235b4]པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས། འདུ་བྱེད་རྣམས་

[65] D:སྟེ་ K, Z, L, T: ཏེ་

[66] D, K, T, Z: ཞིག་ L: ཤིག་

[67] D, K, T, Z: བཞག་ L: གཞག་ 以後 D, K, T, Z: རྣམ་པར་བཞག་ L:རྣམ་པར་གཞག་で綴られる。

[68] K, L, T, Z: ཀྱིས་ D:གྱིས་

དེ་དག་གི་[K244a3][D244a3]ངོར་མི་བདེན་པར་བསྒྲུབས་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མ་ཡིན་པར་[L254b6]མ་[69]བསྒྲུབས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་དེ་དག་གི་ངོར་[T237b2]འདུ་བྱེད་རྣམས་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དུ་གསུངས་པས་ནི། དེའི་ངོར་ཀུན་རྫོབ་[235b5]དང་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་ནང་ནས་བདེན་པར་གཞག་ཏུ་མེད་པས་ཙམ་[K244a4][D244a4]གྱི་སྒྲས་ནི་བདེན་པ་[L255a1]གཅོད་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་གཅོད་པ་ག་ལ་ཡིན། དེ་ལྟར་[70]ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་བདེན་[T237b3]ཚུལ་ནི་མ་རིག་པའི་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོ་ཙམ་དུ་ཡིན་པས། ཀླུ་[235b6]བའི་གཞུང་ལས། [L255a2]ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའོ། ། ཞེས་གསུངས་[K244a5][D244a5]པ་ནི་མ་རིག་པ་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོར་བདེན་པ་ལ་བྱའི་ཐ་སྙད་དུ་བདེན་པར་གྲུབ་པ་ལ་མི་བྱ་སྟེ། གཞན་[T237b4]དུ་ན་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ཐ་སྙད་[L255a3]དུ་ཡང་མི་[236a1]སྲིད་པའི་ལུགས་དང་འགལ་བའི་ཕྱིར་དང་། བདེན་གྲུབ་འགོག་པ་དང་བདེན་མེད་སྒྲུབ་[K244a6][D244a6]པ་རྣམས་ཐ་སྙད་དུ་བྱེད་ན་ཐ་སྙད་དུ་བདེན་པར་གྲུབ་པ་འཇོག་པ་མི་འཐད་ལ། མི་བྱེད་ན་དོན་དམ་དུ་[T237b5]ཡང་[L255a4]བྱར་མི་རུང་བས་རྣམ་གཞག་དེ་[236a2]རྣམས་མི་སྲིད་པར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ། །

འོ་ན་ཆོས་ཉིད་དང་བདག་གཉིས་བདེན་འཛིན་ཀུན་རྫོབ་པའི་[K244b1][D244b1]ངོར་བདེན་པས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་འགྱུར་རོ་སྙམ་ན། བདེན་འཛིན་ཀུན་[L255a5]རྫོབ་པའི་ངོར་བདེན་[T237b6]པ་ཙམ་ཞིག་ལ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་[236a3]པར་འཇོག་ན། དེ་ལྟར་འགྱུར་མོད་ཀྱང་དེ་ལྟར་ནི་མི་སླུའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་བདེན་ས་དེ་ཀུན་རྫོབ་པ་གང་གི་ངོར་[K244b2][D244b2]བདེན་པའི་ཀུན་རྫོབ་པ་དང་དེའི་ངོར་བདེན་[L255a6]ཚུལ་བཤད་པ་ཙམ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

P1 世俗諦の説明

第一〔世俗諦〕には三つが〔ある〕、**Q1** 世俗と諦の語義を説明することと、**Q2** 世俗諦の定義、**Q3** 世俗なるものの分類である。

Q1 世俗と諦の語義を説明すること

第一〔世俗と諦の語義を説明すること〕は、世俗とは何か、諦とは何かと言うのならば、そのうち、色などは、いかなる世俗の知にとって諦であると設定されているところの世俗というのは、諸法において自性によって成立している自らの在り方がないながら、あると増益している無明である。なぜならば、事物において真実成立はありえないので、真実として設定しているのは、知にとってであり、真実執着でない知にとっては真実であると設定することがないからである。

以上のように『入中論』に、

[69] K, L, T, Z: མ་ D:མི་
[70] D, K: ལྟ་ T, L, Z: ལྟར་

> 愚痴は自性を覆うがゆえに世俗である。すなわち、それ（愚痴）によって作られたものが真実なものとして顕れているところのそれは、世俗諦であると牟尼はお説きになった。作られたものとなっている事物は世俗である[71]。

と説かれている。

『入中論』自註に、

> そのように、輪廻の〔十二〕支が完全に集められる有染汚の無明の力によって世俗諦を設定する。
>
> それについても、有染汚の無明を断じている声聞と独覚の〔阿羅漢〕、〔第八地以上の〕菩薩たちは行である鏡像などが存在しているのと同じようにご覧になっているのは、作られたものの存在であって、諦ではないのである。なぜならば、〔彼らが〕諦として直接に信じることはないからである。
>
> 凡夫などに対しては欺かせるものであるが、それ以外の者たちに対しては、幻などのように、縁起していることによって単なる世俗になるのである[72]。

とお説きになっていることは、世俗諦が存在していると設定しているものは無明によって存在すると設定しているのであって、有染汚の無明を断じている声聞、独覚、菩薩の知にとって世俗諦を設定しないのであると示しているのではないのである。

そのうち、第一の理由は、前に説明した通り、有染汚の無明は真実執着であるので、それによって把握される対象は言説においてさえ存在し得ないからであり、世俗諦であるものは、言説において存在しているものだからである。

したがって、諸法を世俗において存在しているものと設定するときの設定基体 (འཇོག་ས།) である世俗は、有染汚の無明をさして世俗であると言うときのその〔世俗〕ではあり得ない。

第二の理由は、有染汚の無明の〔意味での〕世俗を断じた〔聖者〕たちには、〔対象を〕諦であると設定するところの、諦であると思い込む（བདེན་ཞེན།）〔知である〕世俗（＝無明）が存在しないことを根拠にし、諸行（འདུ་བྱེད།）は、かれらにとって諦ではないと論証されるのであり、世俗諦ではないと論証されるわけではないからである。

したがって、彼ら〔聖者たち〕にとって諸行などは世俗のみであるとお説きになっている。それゆえ、その〔聖者たち〕にとっては世俗と諦という二つのうち、諦であると設定されることないので、「唯」という語は諦であることを退けているのであり、

---

[71] MAK, 6.28, 7: mohaḥ svabhāvāvaraṇād dhi saṃvṛtiḥ satyaṃ tayā khyāti yad eva kṛtrimam | jagāda tat saṃvṛtisatyam ity asau muniḥ padārthaṃ kṛtakañ ca saṃvṛtiḥ || MAKt, 205b2–3.

[72] MABh,107.17–108.6（255a1–3）.

世俗諦であることをなぜ退けているのであろうか。以上のように、世俗諦の諦の在り方は無明である世俗の知にとってのみであるので、チャンドラキールティのテキストに世俗として諦であるので、世俗諦である[73]とお説きになっているのは、無明である世俗の知にとって諦であることをさしているのであって、言説において真実成立であることをさしているのではないのである。なぜならば、さらに言うならば、自らの特質によって成立しているものは言説においてさえもありえないという学説と矛盾するからであり、真実成立を否定し、真実〔成立は〕存在しないことを論証することなどは言説であるとするのならば、言説において真実として成立しているものを設定することは不合理である。また、もしそうでないのならば、勝義においてもまた不合理であるので、それらの設定はありえないことになってしまうからである。

それでは、法性と二我は真実執着である世俗の知にとって真実であるので、世俗諦であることになってしまうのであると考えるならば、真実執着である世俗の知にとって唯の真実であるものを世俗諦であると設定するのならば、そのようになってしまうのであるが、そのように主張しないのである。世俗諦のその諦の基体は如何なる世俗の知にとって諦であるかという世俗とその知にとって諦である在り方を単に説明しているだけであるからである。

Q2 ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།

གཉིས་[T238a1]པ་ནི། ཕྱི་ནང་གི་དངོས་པོ་[236a4]འདི་རྣམས་རེ་རེ་ལ་ཡང་དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོ་བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་དེ་དེ་ཡང་མྱུ་གུ་ལྟ་བུ་གཅིག་ལ་མཚོན་ན། ཞེས་[K244b3][D244b3]བྱ་[L255b1]ཡང་དག་པ་དེ་ཁོ་ནའི་དོན་གཟིགས་པའི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་[74]པའི་[T238a2]མྱུ་གུའི་ངོ་བོ་དང་། ཤེས་བྱ་བརྫུན་པ་[236a5]སླུ་བའི་དོན་འཇལ་བའི་ཐ་སྙད་པའི་ཤེས་པས་རྙེད་པའི་མྱུ་གུའི་ངོ་བོའོ། །

དེའི་སྔ་མ་ནི་མྱུ་གུའི་[L255b2]དོན་དམ་བདེན་པའི་ངོ་བོ་ཡིན་ལ་ཕྱི་མ་ནི་[K244b4][D244b4]མྱུ་གུའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་ངོ་བོའོ། །

དེ་ལྟར་ཡང་འཇུག་པ་[T238a3]ལས།

> དངོས་ཀུན་ཡང་དག་[236a6]བརྫུན་པ་[75]མཐོང་བ་ཡིས། །
> དངོས་རྙེད་ངོ་བོ་གཉིས་ནི་འཛིན་པར་[L255b3]འགྱུར། །
> ཡང་དག་མཐོང་ཡུལ་གང་དེ་དེ་ཉིད་དེ། །

---

[73] PSPD, 493.5: lokasaṃvṛtyā satyaṃ lokasaṃvṛtisatyaṃ / PSPDt, 163b2: འཇིག་རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པ་ནི། ། འཇིག་རྟེན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་སྟེ།（世間の世俗諦とは、世間〔の〕世俗諦である。すなわち）という言葉がある。

[74] D, K, L, Z: རྙེད་ T: རྙད་

[75] D, K: པ་ L, T, Z: པའི་

> མཐོང་བ་བརྫུན་པ་[76]ཀུན་རྫོབ་བདེན་[K244b5][D244b5]པར་གསུངས། །

ཞེས་སོ། །

འདིས་ནི་སྨྱུ་གུའི་ངོ་བོ་[T238a4]ལ་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་ངོ་བོ་གཉིས་[236b1]ཡོད་པའི་དོན་དམ་ནི་ཤེས་[L255b4]པ་སྔ་མ་དང་ཀུན་རྫོབ་ནི་ཤེས་པ་ཕྱི་མས་རྙེད་པར་སྟོན་གྱི། སྨྱུ་གུའི་ངོ་བོ་གཅིག་ཉིད་ཤེས་པ་སྔ་ཕྱི་གཉིས་ལ་ལྟོས་ནས་[K244b6][D244b6]བདེན་པ་གཉིས་སུ་སྟོན་པ་མིན་ཏེ། འཇུག་[T238a5]འགྲེལ་ལས།

> དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རང་གི་[L255b5]ངོ་བོ་རྣམ་པ་[236b2]གཉིས་ཉེ་བར་བསྟན་ཏེ་འདི་ལྟ་སྟེ་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའོ། །

ཞེས་དངོས་པོ་རེ་རེའི་ངོ་བོ་ལ་གཉིས་གཉིས་སུ་ཕྱེ་ནས་དོན་དམ་པ་ནི་[K245a1][D245a1]ཡང་དག་པའི་དོན་གཟིགས་པའི་[T238a6]ཤེས་པ་དང་། ཀུན་རྫོབ་[L255b6]ནི་བརྫུན་པ་མཐོང་བའི་ཤེས་པས་རྙེད་པར་གསུངས་སོ། །

[236b3]སྨྱུ་གུའི་ཆོས་ཉིད་ནི་དེའི་རང་བཞིན་ཡིན་པས་དེའི་ངོ་བོ་ཞེས་བྱ་ལ་སྨྱུ་གུའི་ཁ་[K245a2][D245a2]དོག་དང་དབྱིབས་ལ་སོགས་པ་ཡང་སྨྱུ་གུའི་བདག་ཉིད་ཡིན་པས་དེའི་ངོ་[T238b1][L256a1]བོའོ། །

མཚན་གཞི་བུམ་པ་ལྟ་བུ་ཞིག་[77]ཤེས་བྱ་བརྫུན་པ་སླུ་བའི་དོན་དུ་ངེས་པ་ལ་གཞི་དེ་ལ་[236b4]བདེན་པར་འཛིན་པའི་ཞེན་ཡུལ་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་སུན་ཕྱུང་བའི་[K245a3][D245a3]ལྟ་བ་རྙེད་དགོས་[L256a2]ཏེ། བདེན་པ་རིགས་པས་མ་ཁེགས་པར་བརྫུན་པ་ཚད་མས་མི་འགྲུབ་[T238b2]པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་གཞི་དེ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་དོན་དུ་བློས་འགྲུབ་པ་ནི་དོན་དམ་པར་[236b5]ཡོད་པ་བློས་ཁེགས་པ་ལ་ངེས་པར་ལྟོས་སོ། །

[L256a3]བུམ་སྣམ་[K245a4][D245a4]ལ་སོགས་པ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན་ཡང་།[78]དེ་དག་བློས་གྲུབ་པ་ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་དོན་བློས་[T238b3]འགྲུབ་མི་དགོས་ཏེ། བུམ་སྣམ་སོགས་རང་བཞིན་གྱིས་མེད་བཞིན་དུ་སྣང་བའི་སྒྱུ་མ་[236b6]ལྟ་བུ་ཡིན་ཡང་[L256a4]དེ་དག་གྲུབ་པའི་བློས་སྒྱུ་མ་[K245a5][D245a5]ལྟ་བུའི་དོན་འགྲུབ་མི་དགོས་པ་བཞིན་ནོ། །

དེའི་ཕྱིར་དབུ་མའི་ལྟ་བ་མེད་པའི་སོ་སྐྱེའི་ཤེས་ངོ་ལ་ལྟོས་ཏེ་བུམ་སྣམ་སོགས་ཀུན་[T238b4]རྫོབ་བདེན་པ་དང་འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ཏེ་དོན་དམ་[L256a5]བདེན་པར་སྨྲ་བ་ནི་[237a1]རིགས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། [K245a6][D245a6]འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> དེ་ལ་སོ་སོ་སྐྱེ་བོ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ཉིད་འཕགས་པ་སྣང་བ་དང་བཅས་པའི་སྤྱོད་ཡུལ་ཅན་རྣམས་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་ཡིན་[T238b5][L256a6]ལ། དེའི་རང་བཞིན་སྟོང་[237a2]པ་ཉིད་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་དེ་རྣམས་ཀྱི་དོན་[K245b1][D245b1]དམ་པའོ། །

---

[76] D, K, L, T, Z: པའི་

[77] D, K, T, Z: ཞིག་　L: ཅིག་

[78] D, K, L, T, Z: ཀྱང་།　以後 D, K, L, T, Z はཀྱང と綴られる。

ཞེས་གསུངས་པ་ལས་བཟློག་ནས་སྨྲ་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

སོ་སོ་སྐྱེ་བོ་རྣམས་ཀྱིས་ནི་བུམ་པ་ལ་སོགས་པ་ལ་བདེན་པར་[L256b1]འཛིན་ལ་དེ་ཉིད་དོན་དམ་པར་ཡོད་པར་འཛིན་[T238b6]པ་[237a3]ཡང་ཡིན་པས། དེ་དག་གི་ཤེས་ངོ་དེ་ལ་[K245b2][D245b2]ལྟོས་ཏེ་བུམ་སོགས་རྣམས་དོན་དམ་པར་གྲུབ་པ་ཡིན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་པའི་དོན་མིན་ནོ། །

དེ་དག་གི་ངོར་དོན་དམ་[L256b2]པར་གྲུབ་པའི་གཞི་བུམ་པ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་འཕགས་པའི་རྒྱུད་ཀྱི་སྣང་[237a4]བ་སྒྱུ་མ་ལྟ་བུའི་[T239a1]དོན་གཟིགས་པ་ལ་[K245b3][D245b3]ལྟོས་ནས་ཀུན་རྫོབ་པ་ཡིན་ནོ། །

ཤེས་པ་དེ་ལ་ལྟོས་ན་བདེན་པར་གཞག་ཏུ་མེད་པས་ཀུན་རྫོབ་[L256b3]ཙམ་ཞེས་གསུངས་སོ། །

དེ་ལྟ་ནའང་དེ་དག་གི་རང་བཞིན་དོན་དམ་བདེན་པར་གསུངས་པས་བུམ་སོགས་ཀུན་[237a5]རྫོབ་དང་[T239a2]དེ་དག་གི་རང་[K245b4][D245b4]བཞིན་འཕགས་པའི་དོན་དམ་མོ་ཞེས་ཕྱེ་ནས་བརྗོད་པར་བྱའི། བུམ་སོགས་[L256b4]འཕགས་པ་ལ་དོན་དམ་མོ་ཞེས་སྨྲ་བར་མི་བྱ་སྟེ། དེའི་ཡང་[237a6]དག་པའི་དོན་མཐོང་བའི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་བུམ་སོགས་མ་རྙེད་པའི་ཕྱིར་དང་། ཡང་དག་པའི་དོན་[D245b5][K245b5][T239a3]མཐོང་བའི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་པ་དོན་དམ་བདེན་[L256b5]པའི་མཚན་ཉིད་དུ་གསུངས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

Q2 世俗諦の定義

第二〔世俗諦の定義〕は、これら内外の実在のいずれにも、世俗諦と勝義諦という二つずつのあり方 (ངོ་བོ།) がある。それについて芽のようなものを例にすると、正しい所知すなわち真実義の対象をご覧になる正理知によって得られる（＝認識される）芽のあり方と、虚偽なる所知すなわち欺く対象を量る言説知によって得られる芽のあり方とである。

このうち前者は、芽の勝義諦のあり方であり、後者は、芽の世俗諦のあり方である。以上のように『入中論』に、

> 全ての事物は真実を見る〔知〕と偽りを見る〔知〕によって、存在が認識される。〔したがって、全ての事物は〕二つのあり方を持っていることになる。正しい知を見る対象であるもの〔それ〕は真実（tattva）であり、誤った認識の対象は世俗諦であると〔世尊が〕お説きになった[79]。

と述べている。

これ〔偈〕によって芽というもの (ངོ་བོ།) に二諦のあり方がある〔のうち、〕勝義は前者の知であり、世俗は後者の知にとって得られると示すのであって、芽という一つの在り方を前者と後者との二つ〔の知〕に関して二諦として示しているのではないの

[79] MAK, 6.23, 7: samyagmṛṣādarśanalabdhabhāvaṃ rūpadvayaṃ bibhrati sarvabhāvāḥ | samyagdṛśāṃ yo viṣayaḥ sa tattvaṃ mṛṣādṛśāṃ saṃvṛtisatyam uktam || MAKt, 205a5–6.

である。すなわち、『入中論自注』に、

> 一切の実在の二種類の自性が示されている。すなわち、世俗と勝義である[80]。

と各々の実在のあり方において二つずつに分けたうち勝義のものというのは、正しい対象をご覧になる知と、世俗は虚偽なものを見る知によって得られると説かれている。

芽の法性はそれ〔芽〕の自性であるので、それのあり方というのであるが、芽の色と形などもまた芽の自体であるので、それの在り方である。

述定されている壺のようなものは、虚偽なる所知すなわち欺く対象として確定するために、その基体に対して真実であると捉える知の思念対象は正理知によって否定される見解を得る必要がある。なぜならば、真実なものが正理によって否定されずに虚偽なものは量によって成立することができないからである。

したがって、その基体が世俗諦の意味（དོན།）として知によって成立するのは、勝義として存在していることが知によって否定されることに必ず依る。

壺、布などは世俗諦であるけれども、それらは知によって成立している時、世俗諦の意味が知によって成立する必要はないのである。なぜならば、壺、布などは自性によって存在しないのに、幻のように顕れているのであるが、それらを成立している知によって幻のようにという意味が成立する必要はないのと同様である。

したがって、中観の見解を持っていない凡夫の知にとっては壺、布などは世俗諦であって、聖者にとっては勝義諦であると主張するのは正しくないのである。『入中論釈』に、

> そのうち、それぞれの凡夫の勝義であるものその同じものが、顕れを伴う活動対象を有する（顕れを活動対象としている）聖者たちにとっての唯世俗であり、その同じもの〔唯世俗〕が空であるというそのことが、それら〔諸々の聖者にとって〕の勝義のものである[81]。

と説かれているテキストの真意を逆転して語っているからである。

凡夫は壺などを真実として執着する。また、それ〔壺〕が勝義としても存在していると捉えるので、彼らの知にとっては、壺などは勝義として成立しているのであって、世俗の対象ではないのである。

彼らにとって勝義のものとして成立している基体である壺などは、聖者の心相続が幻のように顕れている対象をご覧になっていることに依って世俗である。その知に依るのならば、諦であると設定することがありえないので、単なる世俗であると説かれ

[80] MABh, 102.14–15（253a6）.
[81] MABh, 108.13–16（255a5）.

ているのである。

そのようであっても、それらの自性は勝義諦であると説かれているので、壺などは世俗であり、それらの自性は聖者の勝義であると言って分けて述べるべきであって、壺などは聖者にとって勝義であると主張すべきではないのである。なぜならば、それ〔聖者〕の正しい対象を見ている正理知によって壺などは得られているのではないのであるからである。正しい対象を見ている正理によって得られている対象が勝義諦の定義であると説かれているからである。

Q3　ཀུན་རྫོབ་པའི་དབྱེ་བ།

གསུམ་པ་ནི།　ཤེས་བྱ་བརྫུན་པ་སླུ་བའི་དོན་མཐོང་བའི་ཤེས་པ་ལ་ཡང་རབ་རིབ་ལ་སོགས་པའི་འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུས་མ་[237b1]སླད་[82]པའི་[K245b6][D245b6]དབང་པོ་གསལ་[T239a4]བའི་ཤེས་པ་དང་། [L256b6]འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུས་བསླད་པའི་དབང་པོ་སྐྱོན་ཅན་གྱི་ཤེས་པ་གཉིས་ཡིན་ལ་དེ་ནི་རྨི་ལམ་ལ་ལྟོས་ནས་ལོག་པའི་ཤེས་པར་བཞག་གོ།

དེ་ལྟར་ཡང་འཇུག་པ་ལས།

མཐོང་བ་བརྫུན་པའང་[K246a1][D246a1]རྣམ་པ་གཉིས་[237b2][L257a1]འདོད་དེ། །
[T239a5]དབང་པོ་གསལ་དང་དབང་པོ་སྐྱོན་ལྡན་ནོ། །
སྐྱོན་ལྡན་དབང་ཅན་རྣམས་ཀྱི་[83]ཤེས་པ་ནི། །
དབང་པོ་ལེགས་གྱུར་ཤེས་ལྟོས་ལོག་པར་འདོད། །

ཅེས་གསུངས་[L257a2]སོ། །

ཡུལ་ཅན་[K246a2][D246a2]ལ་ལོག་མ་ལོག་གཉིས་སུ་ཕྱེ་བ་དེ་བཞིན་དུ་དེའི་ཡུལ་ལ་[T239a6]ཡང་[237b3]ཡང་དག་དང་ལོག་པ་གཉིས་སུ་[84]གསུངས་ཏེ།　འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུའི་གནོད་པ་མེད་པའི་དབང་པོ་དྲུག་གི་ཤེས་པས་བཟུང་བའི་[L257a3]དོན་དང་།　འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུའི་གནོད་པ་ཡོད་[K246a3][D246a3]པའི་དབང་པོ་དྲུག་གི་ཤེས་པས་བཟུང་བའི་དོན་ནོ། །

[T239b1]དེ་ལྟར་ཡང་[237b4]འཇུག་པ་ལས།

གནོད་པ་མེད་པའི་དབང་པོ་དྲུག་རྣམས་ཀྱིས། །
བཟུང་བ་གང་ཞིག་[L257a4]འཇིག་རྟེན་གྱིས་རྟོགས་ཏེ་[85]། །
འཇིག་རྟེན་ཉིད་ལས་བདེན་ཡིན་ལྷག་མ་ནི། །

[82] D, K, T, Z: སླད་　L: བསླད་
[83] K, L, T, Z: ཀྱི་　D:གྱི་
[84] L,T: གཉིས་　D, L, Z: གཉིས་སུ་
[85] D, K, T: དེ་　L, Z: ཏེ་

[K246a4][D246a4]འཇིག་རྟེན་ཉིད་ལས་ལོག་པར་རྣམ་པར་བཞག།

ཅེས་གསུངས་སོ། །

དེ་ལ་[T239b2]དབང་[237b5]པོ་ལ་གནོད་པའི་སྐྱོན་ནང་ན་ཡོད་པ་ནི་[L257a5]རབ་རིབ་དང་མིག་སེར་ལ་སོགས་པ་དང་ད་ཏུ་ར་ཟོས་པ་ལ་སོགས་པའོ། །

དབང་པོ་ལ་གནོད་པའི་སྐྱོན་[K246a5][D246a5]ཕྱི་ན་ཡོད་པ་ནི། མེ་ལོང་དང་བྲག་ཕུག་ལ་སོགས་པ་ནས་སྒྲ་བརྗོད་པ་དང་སོས་ཀའི་[86]ཉི་མའི་[237b6]འོད་ཟེར་[T239b3]བྱེ་མ་[L257a6]སྐྱ་[87]བོའི་ཡུལ་དང་ཉེ་བར་གྱུར་པ་ལ་སོགས་པ་སྟེ། དེ་དག་ནི་དབང་པོ་ལ་གནོད་པའི་སྐྱོན་ནང་ན་ཡོད་པ་དག་མེད་པར་གཟུགས་[K246a6][D246a6]བརྙན་དང་བྲག་ཆ་དང་སྨིག་རྒྱུ་ལ་ཆུ་ལ་སོགས་པར་འཛིན་པའི་རྒྱུར་འགྱུར་རོ། །

དེ་བཞིན་[L257b1]དུ་[238a1]མིག་འཕྲུལ་མཁན་ལ་སོགས་[T239b4]པས་སྦྱར་བའི་སྔགས་དང་སྨན་ལ་སོགས་པ་ཡང་ཤེས་པར་བྱའོ། །

ཡིད་ཀྱི་དབང་པོའི་གནོད་པ་ནི་དེ་དག་[K246b1][D246b1]དང་གྲུབ་མཐའ་ལོག་པ་དང་གཏན་ཚིགས་ལྟར་སྣང་དང་གཉིད་[238a2]ཀྱི་གནོད་[L257b2]པ་སོགས་སོ། །

དེ་ལྟར་ན་ཐོག་མ་མེད་པ་ནས་ཞུགས་པའི་[T239b5]བདག་ཏུ་འཛིན་པ་གཉིས་ཀྱི་མ་རིག་པ་ལ་སོགས་པས་བསླད་པའི་གནོད་པ་ནི་འདིར་གནོད་པའི་རྒྱུར་མི་[K246b2][D246b2]གཟུང་གི་སྔར་བཤད་པ་ལྟར་གྱི་འཁྲུལ་[L257b3]གྱི་དབང་པོ་ལ་[238a3]གནོད་པའི་འཁྲུལ་རྒྱུ་རྣམས་གཟུང་ངོ་། །

དེ་ལྟ་བུའི་གནོད་པ་མེད་པའི་ཤེས་པ་[T239b6]དྲུག་གིས་བཟུང་བའི་ཀུན་རྫོབ་པའི་དོན་དང་། དེ་ལས་བཟློག་པའི་དོན་ལ་ཡང་དག་དང་ལོག་པར་འཇོག་[K246b3][D246b3]པ་ནི་འཇིག་[L257b4]རྟེན་པའི་ཤེས་པ་ཁོ་ན་ལ་ལྟོས་[238a4]ནས་ཡིན་ཏེ། དེ་དག་ཇི་ལྟར་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་དོན་དུ་ཡོད་པ་ལ་འཇིག་རྟེན་པའི་ཤེས་པས་གནོད་[T240a1]པ་མེད་པ་དང་ཡོད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ནས་ནི་ཡང་དག་དང་ལོག་[L257b5]པ་གཉིས་སུ་མེད་དེ། [K246b4][D246b4]ཇི་ལྟར་གཟུགས་བརྙན་ལ་[238a5]སོགས་པ་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་དོན་དུ་མེད་པ་བཞིན་དུ། མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་སྔོན་པོ་ལ་སོགས་[T240a2]པ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་སྣང་བ་ཡང་སྣང་བ་ལྟར་[L257b6]གྱི་དོན་དུ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེའི་ཕྱིར་ཤེས་པ་དེ་[K246b5][D246b5]གཉིས་[238a6]ལ་འཁྲུལ་མ་འཁྲུལ་ཡང་དབྱེར་མེད་དོ། །

འོ་ན་དབང་པོ་གཟུགས་ཅན་ལ་འཁྲུལ་གྱི་གནོད་པ་ཡོད་པས་ཡུལ་ལོག་པར་སྣང་བ་[T240a3]དང་། ཡིད་ཀྱི་ཤེས་པ་[L258a1]ལ་གཉིད་ལ་སོགས་པའི་གནོད་པ་ཡོད་པས་རྨི་ལམ་དུ་མིར་སྣང་བ་སོགས་[238b1]ལ་མི་ལ་སོགས་[K246b6][D246b6]པར་འཛིན་པ་དང་། སད་པའི་དུས་སུ་སྒྱུ་མའི་རྟ་གླང་གི་སྣང་བ་ལ་རྟ་གླང་དང་སྨིག་[L258a2]རྒྱུ་ཆུར་སྣང་བ་ལ་ཆུར་འཛིན་པའི་ཡུལ་རྣམས་[T240a4]ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཡིན་པར་འཇིག་རྟེན་པའི་བློ་རང་དགའ་བས་ཀྱང་རྟོགས་མོད་ཀྱང་། ཡིད་ལ་གྲུབ་[238b2]མཐའ་ངན་[K247a1][D247a1]པའི་གནོད་པ་ཡོད་པས་ལོག་པར་བཟུང་བའི་དོན་རྣམས་འཇིག་[L258a3]རྟེན་པའི་བློ་རང་དགའ་བས་ཕྱིན་ཅི་

[86] D, K, T, Z: ཀའི་ L: ཁའི་

[87] D, K, L, Z: སྐྱ་ T: སྐྱེ་

ལོག་ཏུ་ཇི་ལྟར་རྟོགས་ཤེ་ན་[88][T240a5]འདིར་གནོད་པ་ཡོད་མེད་དཔྱོད་པའི་གནོད་པ་ནི་ལྷན་སྐྱེས་ཀྱིས་ཕྱིན་ཅི་ལོག་[K247a2][D247a2]ཏུ་འཛིན་པའི་གནོད་པ་[238b3]ལ་མི་བྱེད་པས། གྲུབ་མཐའ་ངན་པས་[L258a4]བཏགས་པ་ནི་གྲུབ་མཐས་བློ་བསྒྱུར་བ་ཁོ་ནས་ལོག་པར་བཏགས་[89]པའི་གཙོ་བོ་ལ་སོགས་པ་ཡིན་ལ། [T240a6]དེ་དག་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཏུ་འཇིག་རྟེན་པའི་བློ་རང་དགའ་བས་མི་[K247a3][D247a3]རྟོགས་ཀྱང་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་མངོན་[238b4]དུ་མ་ཕྱོགས་པའི་[L258a5]ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་ལོག་པར་རྟོགས་ན། འཇིག་རྟེན་པའི་ཤེས་པས་ལོག་པར་རྟོགས་པ་ཡིན་ནོ། །

བདག་འཛིན་ལྷན་སྐྱེས་[T240b1]གཉིས་ཀྱིས་བཟུང་བའི་དོན་ལྟ་བུ་ནི། གནོད་པ་[K247a4][D247a4]མེད་པའི་དབང་པོས་[L258a6]བཟུང་བ་ཞེས་པ་ཡིན་ལ།[238b5]འཇིག་རྟེན་པའི་བསམ་པ་རང་དགའ་བ་ལ་ལྟོས་ནས་ཡང་དག་པའམ་བདེན་པ་ཡིན་མོད་ཀྱང་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་དོ། །

དབུ་མ་རང་རྒྱུད་པ་གང་དག་ཤེས་པ་[T240b2]རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་[K247a5][D247a5][L258b1]གྲུབ་པར་སྣང་བ་ནི་སྣང་བ་ལྟར་དུ་ཡོད་པར་ངེས་པས་ཡུལ་[238b6]ཅན་ལ་ཡང་དག་[90] དང་ལོག་པ་གཉིས་མི་འབྱེད་པར་ཡུལ་དུ་སྣང་བ་ལ་ཇི་ལྟར་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་ཡོད་མེད་འབྱེད་པ་རྣམས་ནི། [L258b2]བདེན་གཉིས་ལས།

> སྣང་[T240b3]དུ་[K247a6][D247a6]འདྲ་ཡང་དོན་བྱེད་དག །
> ནུས་པའི་ཕྱིར་དང་མི་ནུས་ཕྱིར། །
> ཡང་དག་ཡང་[239a1]དག་མ་ཡིན་པའི། །
> ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ནི་དབྱེ་བ་བྱས། །

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་བཞེད་དོ། །

[L258b3]ལུགས་འདི་ནི་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་ལ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་[K247b1][D247b1]པར་གང་སྣང་[T240b4]བ་ཐམས་ཅད་ཤེས་པ་དེ་མ་རིག་པས་[239a2]བསླད་པའི་སྣང་བར་བཞེད་པས། ཀུན་རྫོབ་པའི་དོན་ལ་ཡང་དག་པ་དང་ལོག་པ་གཉིས་[L258b4]སུ་མི་འབྱེད་དོ། །

འདིར་འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> གང་ཞིག་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་བརྫུན་པ་དེ་ནི་ཀུན་[K247b2][D247b2]རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་མ་ཡིན་[T240b5]ནོ་

ཞེས་གསུངས་པ་ནི་བརྡ་[239a3]ལ་བྱང་བའི་འཇིག་རྟེན་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར། བྱད་བཞིན་[L258b5]གྱི་གཟུགས་བརྙན་ལྟ་བུ་དེ་བྱད་[91]བཞིན་དུ་མི་བདེན་པས་དེ་ལ་ལྟོས་པའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མིན་ནོ། །

དེ་ལྟ་ནའང་ཤེས་བྱ་བརྫུན་[K247b3][D247b3]པ་སླུ་བའི་དོན་མཐོང་བས་[T240b6]རྙེད་པའི་དོན་ནི་[239a4]ཡིན་པས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའོ། །

---

[88] D, K, T, Z: ཤེ་ན་ L: ཞེ་ན་ 以後 D, K, T, Z は ཤེ་ན と綴られ、L は ཞེ་ན と綴られる。

[89] D, K, T, Z: བཏགས་L: བརྟགས་

[90] D, T, Z: ཡང་དག་ K: ཡང་ཡང་དག་ L: དག་

[91] D, L, T: བྱད་ K, Z: བྱེད་

[L258b6]གཟུགས་བརྙན་སྣང་བའི་ཤེས་པ་སྣང་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བ་བཞིན་དུ། མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་སྔོན་པོ་ལ་སོགས་པ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་སྣང་བ་[K247b4][D247b4]ཡང་སྣང་ཡུལ་[T241a1]ལ་འཁྲུལ་པར་[239a5]མཚུངས་སོ། །

[L259a1]གཞལ་བྱ་བདེན་པ་འཛོག་ན་དེ་ལྟར་འཁྲུལ་བ་དེས་འཛོག་པ་འགལ་ཡང་གཞལ་བྱ་བརྫུན་པ་འཛོག་པ་ལ་དེ་ཉིད་གྲོགས་སུ་འགྲོ་བ་ཡིན་ནོ། །

དེ་ལྟ་མ་ཡིན་ན་སྒྱུ་མ་ལྟ་[L259a2]བུའི་དོན་དང་བརྫུན་པ་རྣམས་[K247b5][D247b5]ཐ་སྙད་དུ་[T241a2]འཛོག་[239a6]དགོས་པས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མི་སྲིད་པར་འགྱུར་ཏེ། ཐ་སྙད་དུ་མི་བདེན་ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་འགལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

Q3 世俗の分類

第三〔世俗の分類〕は、虚偽なる所知すなわち欺く対象を見ている知についてもまた眼病などの一時的な迷乱の原因によって汚されていない明晰な感覚器官の知と、一時的な迷乱の原因によって汚された過失を有している感覚器官の知という二つの知である。それ〔後者〕は前者に関して誤った知であると設定されている。

以上のように『入中論』に、

> 虚偽な知に関してさらに二種類があると主張する。すなわち、明晰な感覚器官と欠点のある感覚器官である。欠点のある感覚器官を持つ人たちの知は、正しい感覚器官の知に関して誤っていると主張しているのである[92]。

とお説きになっている。

対象を持つもの（知）について誤ったものと正しいものの二つに分けるのと同様に、対象についても正しいものと誤ったものの二つ〔に分けられる〕とお説きになっている。一時的な迷乱の原因による障害がない六つの感覚器官の知によって把握されている対象と、一時的な迷乱の原因による障害がある六つの感覚器官の知によって把握されている対象である。

以上のように『入中論』に、

> 障害がない六つの感覚器官によって、
> 把握されているものを世間は理解している。
> 〔そのようなものは〕世間においてだけ真実であり、
> 残りは、世間においてだけ誤っているものと設定する[93]。

[92] MAK, 6.24, 7: mṛṣādṛśe 'pi dvividhā matā hi spaṣṭendriyā doṣavadindriyāś ca | sadindriyajñānam apekṣya mithyā jñānaṃ mataṃ doṣavadindriyāṇām || MAKt, 205a6–7.

[93] MAK, 6.25, 7: vinopaghātena yad indriyāṇāṃ ṣaṇṇām api grāhyam avaiti lokaḥ | satyaṃ hi

と説かれている。

その場合、感覚器官に対する障害の過失が内側にあるというのは、眼病と黄色く見える眼病、タットゥラ（dattra）という植物を食べたことなどである[94]。

感覚器官に対する障害の過失が外にあるというのは、鏡、洞窟などから声を出すことや春の太陽の光が灰色の砂漠という対象と近づいていることなど、すなわち、それらは感覚器官に対する障害の過失が内にはないけれども、鏡像と、こだま、陽炎を水などと把握する原因となっているものである。同様に魔術師などが用いる真言と薬なども知るべきである。[95]。

意という感覚器官（ཡིད་ཀྱི་དབང་པོ།）に対する障害というのはそれらの〔真言〔呪文〕と薬など〕と誤った学説、誤った論証因と眠りという障害などである[96]。

そうであるのならば、無始時来から慣れている二我執の無明などによって汚された障害はここでの害するものの原因として捉えないのであるけれども、前述のように一時的な感官器官に対する障害の誤った原因などを捉えるのである。

以上のような障害のない六識によって捉えられている世俗の対象と、それより逆の対象について正しいものと誤ったものを設定するのは世間の知のみに依存しているものである。なぜならば、それらは顕れている通りの対象として存在していることについて、世間の知によって障害がないものとあるものであるからである。

聖者にとっては正しいものと誤ったものという二つに分けられることがないのである。なぜならば、鏡像などが顕れている通りのものとして存在しないのと同様に、無明を持っている者たちにおいては、青などが自相によって成立していると顕れているが、顕れている通りのものとしては存在しないからである。

それゆえに、その二つの知に関して、迷乱しているものと迷乱していないものともに区別することがないのである。

〔対論者〕「そうであるのならば、感官器官である有色（དབང་པོ་གཟུགས་ཅན།）には一時的な障害があるので、対象が誤って顕れていることと、意識には眠りなどの障害があるので、夢において人として顕れるものなどを人などとして捉えていること、目が覚めた時に、〔夢の中で〕顕れた幻の馬と象は、馬と象である〔と捉えることと〕、陽炎が水として顕れていたものに対して水であると捉えている対象などは誤っていると世間の普通の知によっても理解されるけれども、意において正しくない学説の障害があるので、誤って捉えている諸対象を世間の普通の知が顛倒しているとどのように理解

tal lokata eva śeṣaṃ vikalpitaṃ lokata eva mithyā || MAKt, 205a7.

[94] MABh, 104.8–10（253b6–7）参照。

[95] MABh, 104.10–17（253b7–254a2）参照。

[96] MABh, 104.17–20（254a1–3）参照。

するのであるか」というのならば、ここでは障害があるものとないものについて考察するところの障害とは、倶生によって顛倒して捉えている障害のことをさしているのではないので、正しくない学説によって仮設しているのは、学説によって心が変化している者のみが誤っている仮設している中心的なものなどである。それらは顛倒していると世間の普通の知によって理解することができないけれども、真実を現前にしない言説の量によって誤っているものであると理解しているのならば、世間の知によって誤っているものであると理解しているのである。

二つの倶生の二我執によって把握されている対象のようなものは、障害がない感覚器官によって把握されているものと言われているのであり、世間の普通の考えにとって正しいもの、あるいは真実なものではあるけれども、言説においても存在しない。

中観自立派のものたちは〔対象持つもの〕の対象が自らの特質によって成立しているものとして顕れているところの知は、顕れている通りに存在していると確定される。それゆえに、対象を持つ者の知においてもまた正しい〔知〕と誤った〔知〕との二つに区別することなく、対象において顕れている通りに自らの特質によって存在するか存在しないかという諸々の区別がある。〔区別があることについて〕、『二諦分別論』に、

> 顕れていることにおいて等しいけれども、効果的な作用をできるから、あるいはできないから、正しい世俗と誤った世俗との分類をなさった[97]。

と説かれている通りにご主張なさっているのである。

この派（帰謬派）は、無明を持っている者において自らの特質によって成立しているものとして顕れているもの全ては、その知が無明によって汚された顕れであると主張なさっているので、世俗の対象において正しいものと誤ったものという二つにものを区別しないのである。

これについては、『入中論釈』に、

> 世俗においてさえ虚偽なるものは世俗諦ではないのである[98]。

と説かれているのは、名前の意味について学んだ世間の世俗の知にとって例えば顔の鏡像は、顔であるということは真実ではないものであるので、これに関連して世俗諦ではないのである。

そうであっても、虚偽なる所知という欺くものの対象を知覚しているものによって〔言説の量によって〕得られる対象であるので、世俗諦である。

鏡像は顕れている知が顕れる対象おいて迷乱しているのと同様に、無明を持ってい

[97] SDV, 163（2a4）.
[98] MABh, 107.16–17（254b7–255a1）.

る者たちにおいては、青などが自相によって成立しているものであると顕れているのもまた、顕れている対象において迷乱しているのと等しいのである。

真実なる所量を設定するのならば、以上のように迷乱している知が設定するのは矛盾するが、虚偽なる所量を設定するためにはその同じものが役に立つのである。

そうでないのならば、幻のようなものの対象と虚偽なものなどを言説として〔存在することを〕設定する必要があるので、世俗諦はありえないことになってしまう。なぜならば、言説において真実ではないならば、世俗諦と矛盾しているからである。

P2 དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་བཤད་པ།

གཉིས་པ་ལ་གསུམ། **Q1** དོན་དམ་པ་[L259a3]དང་བདེན་པའི་དོན་བཤད་པ་དང་། **Q2** དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་[K247b6][D247b6]བཤད་པ་[239b1]དང་།[T241a3] **Q3** དོན་དམ་བདེན་པའི་དབྱེ་བ་བཤད་པའོ། །

Q1 དོན་དམ་པ་དང་བདེན་པའི་དོན་བཤད་པ།

དང་པོ་ནི། ཚིག་གསལ་ལས།

> དོན་ཡང་དེ་ཡིན་ལ་དམ་པ་ཡང་[L259a4]ཡིན་པས་ན་དོན་དམ་པའོ། །
> དེ་ཉིད་བདེན་པ་ཡིན་པས་དོན་དམ་བདེན་པའོ། །

ཞེས་གསུངས་པས་གཞན་དག་[K248a1][D248a1]དམ་པ་མཉམ་[239b2]གཞག་ཟག་[T241a4]མེད་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་དང་དོན་དམ་དེའི་ཡུལ་ལ་འཆད་པ་ལྟར་མི་[L259a5]བཞེད་ཀྱི། དོན་དང་དམ་པ་གཉིས་ཀ་དོན་དམ་བདེན་པ་ཉིད་ལ་བཞེད་དོ། །

དོན་དམ་བདེན་པའི་བདེན་ཚུལ་ནི། མི་སླུ་[K248a2][D248a2]བ་ཡིན་ལ་དེ་ཡང་གནས་ཚུལ་གཞན་དུ་གནས་ཤིང་[239b3]སྣང་[T241a5]ཚུལ་གཞན་དུ་སྣང་ནས་[L259a6]འཇིག་རྟེན་ལ་མི་སླུ་བའི་ཕྱིར། དོན་དམ་པའི་བདེན་པར་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་ཡོད་པར་བཞག་པ་ཙམ་ཡིན་ཏེ། རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པའི་[K248a3][D248a3]འགྲེལ་པ་ལས།

> གལ་ཏེ་དེ་ལྟ་ནའང་ཇི་ལྟར་[L259b1]མྱ་ངན་ལས་[239b4]འདས་པ་[T241a6]དོན་དམ་པའི་བདེན་པར་གསུངས་ཤེ་ན། དེའི་བདག་ཉིད་དུ་འཇིག་རྟེན་ལ་མི་སླུ་བའི་ཕྱིར་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཁོ་ནས་དེ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པར་གསུངས་སོ། །
> [K248a4][D248a4]འདུས་བྱས་སླུ་བ་[L259b2]གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་མ་[239b5]ཡིན་ནོ། །
> བདེན་པ་གསུམ་[T241b1]ནི་འདུས་བྱས་ཉིད་ཡིན་པས་རང་བཞིན་མེད་བཞིན་དུ་སྣང་བས། བྱིས་པ་རྣམས་ལ་སླུ་བར་བྱེད་པ་ཉིད་ཀྱི་ཕྱིར་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་[L259b3]པར་རྣམ་པར་

[K248a5][D248a5]བཞག་གོ།

ཞེས་སྐྱང་འདས་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པའི་ངོར་[239b6]བཞག་པ་ལ་དེ་ལྟ་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པར་[T241b2]མི་འཐད་དོ་ཞེས་པའི་ལན་དུ་གསུངས་སོ། །
འོན་རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པ་ལས།

སྐྱ་[L259b4]ངན་འདས་པ་བདེན་གཅིག་པུ། །
རྒྱལ་བ་རྣམས་[K248a6][D248a6]ཀྱིས་ནམ་གསུངས་པ། །
དེ་ཚེ་ལྷག་མ་ལོག་མིན་ཞེས། །[240a1]
མཁས་པ་སུ་ཞིག་རྟོག་པར་བྱེད། །

ཅེས་སྐྱང་འདས་གཅིག་[T241b3]པུ་བདེན་གྱི་གཞན་རྣམས་[L259b5]མི་བདེན་ཞེས་གསུངས་པ་ཇི་ལྟར་དྲང་སྙམ་ན། འདིའི་ལན་ནི་རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པའི་[K248b1][D248b1]འགྲེལ་པ་ལས།

> འོན་ནི་བཅོམ་ལྡན་[240a2]འདས་ཀྱིས། དགེ་སློང་དག་བདེན་པ་དམ་པ་འདི་ནི་གཅིག་སྟེ། འདི་ལྟ་སྟེ་མི་སླུ་བའི་[L259b6]ཆོས་ཅན་མྱ་ངན་ལས་[T241b4]འདས་པའོ། །
> ཞེས་གང་གསུངས་པ་དེ་ཇི་ལྟར་ཞེ་ན། ཇི་ལྟར་འདུས་བྱས་ལོག་པར་སྣང་བས་[K248b2][D248b2]བྱིས་པ་རྣམས་ལ་སླུ་བར་བྱེད་[240a3]པ་ཡིན་པ་དེ་བཞིན་དུ། མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ནི་མ་ཡིན་[L260a1]ཏེ། རྟག་ཏུ་སྐྱེ་བ་མེད་པའི་རང་བཞིན་གྱིས་ངོ་བོ་ཁོ་ནར་[T241b5]གནས་པ་ཉིད་ཀྱི་ཕྱིར་རོ། །
> དེ་ནི་བྱིས་པ་རྣམས་ལ་ཡང་འདུས་བྱས་ལྟར་སྐྱེ་བའི་ངོ་བོར་ནམ་ཡང་མི་[K248b3][D248b3]སྣང་ངོ་། །
> དེའི་[L260a2]ཕྱིར་མྱ་ངན་[240a4]ལས་འདས་པ་ནི་རྟག་ཏུ་ཁོ་ནར་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ཉིད་དུ་གནས་པའི་ཕྱིར་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཁོ་ནས་བདེན་[T241b6]པ་དམ་པར་གསུངས་ཀྱི།

ཞེས་མི་སླུ་བ་བདེན་པར་གསུངས་པའི་དོན་དང་དེ་[L260a3]ཡང་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་[K248b4][D248b4]གིས་ཡིན་པར་གསུངས་པའི་ཕྱིར་དང་། མདོ་སྡེ་ཉིད་ལས་ཀྱང་མི་སླུ་བའི་ཆོས་ཅན་ཞེས་བདེན་པའི་དོན་དེ་ལ་གསུངས་པའི་[240a5]ཕྱིར་དང་། འདུ་[T242a1]བྱེད་ཐམས་ཅད་ནི་རྫུན[99]པ་སླུ་བའི་[L260a4]ཆོས་ཅན་ཞེས་རྫུན་པའི་དོན་སླུ་བ་ལ་གསུངས་པས་ཀྱང་[K248b5][D248b5]བདེན་པའི་དོན་མི་སླུ་བ་ཡིན་པར་ཤེས་[240a6]སོ། །
དེས་ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་བདེན་པ་ནི་བདེན་འཛིན་གྱི་ངོར་བདེན་པ་དང་དོན་[T242a2]དམ་བདེན་པ་[L260a5]གཉིས་སྒྲ་དོན་མི་འདྲའོ། །
རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པའི་འགྲེལ་པ་ལས། མྱང་འདས་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་[K248b6][D248b6]པར་གསུངས་པ་ནི། མྱང་འདས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པར་[240b1]ཡོད་པ་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོར་འཇོག་པའི་དོན་[L260a6]ཡིན་གྱི་

[99] D, K, L, T: བརྫུན་ Z: རྫུན་ 以後 D, K, L, T は བརྫུན と綴られ、Z は རྫུན と綴られる。

ཐ་སྙད་དུ་དེ་[T242a3]བདེན་པར་བཞེད་པ་མིན་ནོ། །

P2 勝義諦の説明

第二〔勝義諦の説明〕には三つがある。**Q1** 勝義と諦の意味の説明と、**Q2** 勝義諦の定義の説明、**Q3** 勝義諦の分類の説明である。

Q1 勝義と諦の意味の説明

『プラサンナパダー』に、

> 「義もそれであり、勝れたものでもあるので勝義である。それこそ諦であるので、勝義諦である[100]。

と説かれているので、他の者たちが勝れたものは無漏の三昧智であり、勝義はそれの対象であると説明している通りに主張なさらず、義と勝れたもののいずれも勝義諦であると主張なさっているのである。

勝義諦というところの諦のあり方は、欺かないものである。それもまた存在しているのとは別の存在として顕れて世間に対して欺かない。それゆえに、勝義諦であると世間の言説の力によって存在しているのであると設定しているだけである。すなわち、『六十頌如理論釈』に、

> もしそうであっても、どのように、涅槃は勝義諦であると説かれているのかというならば、それ〔涅槃〕自体として世間を欺かないから、世間の言説のみによってそれは勝義諦であると説かれる。
> 有為である欺くものは何であれ勝義諦ではないのである。
> 三諦（苦諦、集諦、道諦）は、有為であるので、自性がないながら、顕れているので、諸々の凡夫を欺くものである。それゆえに、世俗諦であると設定される[101]。

と言い、涅槃は世俗諦〔の知〕にとって設定されているが、そのようであるのならば、勝義諦として不合理であるという答えとして説かれている。

では、『六十頌如理論』に、

[100] PSPD, 494.1: paramaś cāsāv arthaś ceti paramārthaḥ / tad eva satyaṃ paramārthasatyaṃ/ PSPDt, 163b5–6.

[101] YṢV, 36（7b5）.

> 涅槃はただ一つの諦であると、
> 常に諸仏が説かれた。
> その時、残りが誤っているのではないのであると、
> どの学者が分別するのであるか[102]。

と涅槃のみが諦であって、他の諸々は諦ではないのであると説かれているのをどのように結びつけるのであるかと思うならば、これの答えは『六十頌如理論釈』に、

> そうであるならば、世尊が諸々比丘よ。この勝れた諦というのは一つである。すなわち、欺かないことを有法としている涅槃であると説かれていることはどのようなことであるかと言うのならば、有為は誤って現われていることによって凡夫などを欺くものであるのと同様に、涅槃ではないのである。なぜならば、常に不生起という自性によってただ本質 (ངོ་བོ།) のみに住しているからである。それは、凡夫などにおいてもまた有為のように生起の存在 (ངོ་བོ།) としては決して顕れないのである。
> それゆえに、涅槃は常に涅槃のみとして住しているから、世間の言説のみによって勝れた諦であると説かれているのであって[103]、

と欺かないものが諦であると説かれている意味である。それもまた言説の力によって〔存在するもの〕であると説かれているので、経典にもまた「欺かないことを有法としている」というのが諦の意味であると説かれているので、「全ての行は虚偽で欺くことを有法としている」[104]と虚偽なるものの意味は欺くものをさして説かれていることに

---

[102] YṢ, 13（21b5）. 瓜生津氏は本書をチベット訳からサンスクリットへ還元することを試みた（瓜生津 1985, 81）。

[103] YṢV, 36（7b6–8a2）: འོ་ན་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་དགེ་སློང་དག་འདི་ལྟ་སྟེ། མི་སླུ་བའི་ཆོས་ཅན་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་འདི་ནི་བདེན་པའི་མཆོག་གཅིག་པུའོ་ཞེས་གསུངས་པ་དེ་ཇི་ལྟ་བུ། ཇི་ལྟར་འདུས་བྱས་ལོག་པར་སྣང་བས་བྱིས་པ་རྣམས་ལ་སླུ་བ་དེ་བཞིན་དུ་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ནི་དེ་ལྟ་མ་ཡིན་ཏེ། རྟག་པར་སྐྱེ་བ་མེད་པའི་རང་གི་ངོ་བོར་གནས་པའི་ཕྱིར་དེ་ནི་བྱིས་པ་རྣམས་ལ་འདུས་བྱས་ལྟར་སྐྱེ་བའི་ངོ་བོར་ནམ་ཡང་མི་སྣང་ངོ།། དེ་བས་ན་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ནི་རྟག་ཏུ་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ཉིད་དུ་གནས་པས་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཀྱིས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་བཤད་དོ།། ツォンカパの引用は、原文そのままではなく、前後に少しずれがある。

[104] PSPD, 237.11–12: sūtra uktaṃ tan mṛṣā moṣadharma yad idaṃ saṃskṛtaṃ / etad dhi khalu bhikṣavaḥ paramaṃ satyaṃ yad idam amoṣadharma nirvāṇaṃ sarvasaṃskārāś ca mṛṣā moṣadharmāṇa iti； PSPDt, 81a2–3: མདོ་ལས་དགེ་སློང་དག་འདུས་བྱས་སླུ་བའི་ཆོས་ཅན་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་བརྫུན་པ་ཡིན་ལ། མི་སླུ་བའི་ཆོས་ཅན་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་བདེན་པ་དམ་པའོ་ཞེས་བྱ་བ་དང་། དེ་བཞིན་དུ་འདི་ནི་སླུ་བར་བྱེད་པའི་ཆོས་ཅན་ནོ།། འདི་ནི་འཇིག་པའི་ཆོས་ཅན་ནོ་ཞེས་གསུངས་སོ།།（経典に「比丘たちよ。有為という欺く有法は何であれ、それは虚偽であり、欺かない有法という涅槃は何であれ、それは勝れた諦であると言うべきであり、同様に、それは欺く有法であ

よっても真実の意味は欺かないものであると知るのである。

したがって、世俗諦の諦は真実執着にとっての真実であるということと勝義諦の両方の語義は異なるのである。

『六十頌如理論釈』に、涅槃は世俗として真実である[105]と説かれているのは、涅槃が勝義諦として存在していることは世俗にとって設定されるという意味であって、言説においてそれが真実であると主張なされたのではないのである。

Q2 དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།

གཉིས་པ་ལ་གཉིས། **R1** དངོས་ཀྱི་དོན་དང་། **R2** རྩོད་པ་སྤང་བའོ། །

Q2 勝義諦の定義の説明 [240b1]

第二〔勝義諦の定義の説明〕に二つがある。**R1** 本論と、**R2** 非難を退けることである。

R1 དངོས་ཀྱི་དོན།

དང་པོ་ནི། [K249a1][D249a1]དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་ནི་འཇུག་པ་ལས། ཤེས་བྱ་ཡང་དག་[L260b1]པའི་དོན་མཐོང་[240b2]བས་[106]རྙེད་པ་ལ་གསུངས་པ་སྔར་བཤད་པ་[T242a4]ལྟར་ཡིན་ལ། དེའི་འགྲེལ་པ་ལས།

> དེ་ལ་དོན་དམ་པ་ནི་ཡང་[K249a2][D249a2]དག་པ་གཟིགས་པ་རྣམས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་པར་གྱི་ཡུལ་ཉིད་ཀྱིས་བདག་གི་རང་[L260b2]གི་ངོ་བོ་རྙེད་པ་ཡིན་གྱི། རང་གི་བདག་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་[240b3]ནི་མ་ཡིན་ཏེ་འདི་ནི་ངོ་བོ་གཅིག་ཡིན་[T242a5]ནོ། །

ཞེས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་འཇལ་བའི་ཟག་མེད་ཀྱི་ཡེ་[K249a3][D249a3]ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་ལ་རང་གི་ངོ་བོས་མ་གྲུབ་པར་གསུངས་པས། [L260b3] མཉམ་གཞག་ཟག་མེད་ཀྱིས་རྙེད་རྒྱུ་ཞིག་[107]བྱུང་ན་བདེན་པར་གྲུབ་པ་ཡིན་ནོ་ཞེས་སླ་བ་བཀག་པ་[240b4]ཡིན་ནོ། །

ཡེ་ཤེས་[T242a6]ཀྱི་ཁྱད་པར་ཞེས་གསུངས་པས་ནི་འཕགས་པ་[K249a4][D249a4]རྣམས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་གང་ཡིན་གྱིས་རྙེད་[L260b4]པས་མི་ཆོག་གི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་པར་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་པ་ཞིག་དོན་

る。これは消滅する有法である」とお説きになっている）

[105] YṢV, 36（7b6）：དེ་བས་ན་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པར་ཡོངས་སུ་བརྟགས་པ་ཡིན་ནོ། །（したがって、涅槃もまた世俗諦であると完全に考察するのである）

[106] D, K, T, Z: བས་ L: བའི་

[107] D, K: ཞིག་ L,T, Z:ཅིག་以後 D, K: ཞིག と綴られ、Z は ཅིག と綴られる。

དམ་བདེན་པར་སྟོན་པའོ། །

རྙེད་པའི་དོན་ནི་ཤེས་[240b5]པ་དེས་དེ་[T242b1]ལྟར་གྲུབ་པའི་དོན་ཡིན་ཏེ་ཀུན་རྫོབ་ལ་ཡང་[K249a5][D249a5]འདྲའོ། །

ཡེ་ཤེས་[L260b5]དེས་ཇི་ལྟར་རྙེད་པའི་ཚུལ་ནི། རབ་རིབ་ཅན་གྱི་མིག་གིས་བར་སྣང་གི་གཞིར་སྐྲ་ཤད་འཛག་པར་མཐོང་བ་ན། རབ་རིབ་མེད་པའི་མིག་གིས་གཞི་དེར་སྐྲ་ཤད་འཛག་པའི་སྣང་བ་[240b6]ཙམ་ཡང་[T242b2]མ་མཐོང་བ་[L260b6]བཞིན་དུ་མ་རིག་པའི་[K249a6][D249a6]རབ་རིབ་ཀྱིས་གནོད་པ་བྱས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ཕུང་པོ་ལ་སོགས་པའི་རང་གི་ངོ་བོ་དམིགས་པ་དེ་ཉིད། མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་དང་བྲལ་བའི་སངས་རྒྱས་དང་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་འཛལ་བའི་ཟག་[L261a1]མེད་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས། [241a1]རབ་[T242b3]རིབ་མེད་པའི་མིག་བཞིན་[K249b1][D249b1]དུ་གཉིས་སྣང་ཕྲ་མོ་ཡང་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་རང་བཞིན་གང་གིས་གཟིགས་པ་ནི་དོན་དམ་བདེན་པ་སྟེ། འཇུག་པ་[L261a2]ལས།

> རབ་རིབ་མཐུ་ཡིས་སྐྲ་ཤད་ལ་སོགས་པ། །
> ངོ་བོ་ལོག་[241a2]པ་གང་ཞིག་རྣམ་བརྟགས་པ། །
> [T242b4]དེ་ཉིད་བདག་[K249b2][D249b2]ཉིད་གང་དུ་མིག་དག་པས། །
> མཐོང་སྟེ་དེ་ཉིད་དེ་བཞིན་འདིར་ཤེས་ཀྱིས་[108]། །

ཞེས་གསུངས་[L261a3]ཤིང་དེའི་འགྲེལ་པ་ལས་ཀྱང་།

> ཕུང་པོ་ལ་སོགས་པ་དེ་དག་ཉིད་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་དང་བྲལ་བ་སངས་[241a3]རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་རྣམས་[T242b5]ཀྱིས་[K249b3][D249b3]རབ་རིབ་ཅན་མ་ཡིན་པས་སྐྲ་ཤད་མཐོང་བའི་ཚུལ་དུ་རང་བཞིན་གང་[L261a4]གིས་གཟིགས་པ་དེ་ནི་དེ་དག་གི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ། །

ཞེས་སངས་རྒྱས་ཀྱི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་འཛལ་བའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་མ་རིག་པའི་[241a4]རབ་རིབ་ཀྱིས་བསླད་པ་ལ་སྣང་[T242b6]བའི་[K249b4][D249b4]དོན་རབ་རིབ་མེད་པའི་མིག་གིས་སྐྲ་ཤད་[L261a5]མ་མཐོང་བ་ལྟར་མ་གཟིགས་པར་གསུངས་སོ། །

R1 本論

第一〔本論〕は、勝義諦の定義については『入中論』に正しい所知の対象を見ることによって得られるものである[109]とおっしゃったことは前述の通りであり、その〔『入中論』〕註釈に、

> 勝義のものは、正しいものをご覧になっている者たちの特別な智慧の対象であることによって自らの存在を獲得しているものであって、それ自体によって成

[108] D: གྱིས་ K, L, T, Z: ཀྱིས་

[109] 『入中論』第 6 章第 23 偈をさしている。

> 立しているものではないのである。すなわち、これが〔二つのあり方のうちの〕一つのあり方である[110]

と真実を量る無漏の智慧によって得られるのであり、自らの存在によって成立しているものではないと説かれているので、無漏の三昧智によって得られるべきなんらかのものが生じたならば、真実として成立しているのであるという主張を否定したのである。

特別な智慧と説かれているので、聖者たちのいずれの智慧によって得られたことでは不十分で、特別な智慧であるという如実智によって得られたものが勝義諦であると示されいる。

得られた対象というのは、その〔智〕によってその通りに成立している対象である。すなわち、世俗においても等しいのである。

その〔無漏の三昧〕智によってどのように得られるのであるかという仕方は、眼病にかかっている者の目によって空間に毛髪が垂れているのが見える時に、眼病にかかっていない者の目によってその空間に毛髪が垂れている顕れさえも見えないのと同様に、無明の眼病によって害されている者たちが蘊などの自らの存在を知覚しているそれ自体（自性を見ているものその同じものを）を無明の習気と離れた仏陀と、真実を量る無漏の智慧は、眼病にかかっていない者の目と同様に二つの微細な顕れさえもご覧にならないあり方によって、ある自性によってご覧になっているのが勝義諦である。すなわち、『入中論』に、

> 眼病の力によって毛髪などの顛倒した存在が妄分別される。その同じものをある仕方で清浄な目によって見えているのである。すなわち、それが真実であるのと同様にここで知るべきである[111]。

と説かれていおり、その註釈でも、

> 蘊などのそれら自体は、無明の習気から離れた仏世尊方が眼病のない者であるので、髪の毛が見える仕方で、〔蘊などの〕ある自性をご覧になるのが彼ら（諸仏）たちの勝義諦である[112]。

と仏陀の真実を量る智慧によって無明の眼病にかかっている者に顕れている対象を眼病にかかっていない者の目によって髪の毛が見えないのと同様にご覧にならないので

---

[110] MABh, 102.16–18（253a6–7）

[111] MAK, 6.29, 8: vikalpitaṃ yat timiraprabhāvāt keśādirūpaṃ vitathaṃ tad eva | yenātmanā paśyati śuddhadr̥ṣṭis tat tattvam ity evam ihāpy avaihi|| MAKt, 205b3.

[112] MABh, 110.8–11（255b5–6）.

あると説かれている。

R2 རྩོད་པ་སྤང་བ།

གཉིས་པ་ལ་གཉིས། **S1** ཇི་ལྟ་བ་གཟིགས་པ་མི་འཐད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ་དང་། **S2** ཇི་སྙེད་པ་གཟིགས་པ་མི་འཐད་[241a5]པའི་རྩོད་པ་སྤང་བའོ། །

S1 ཇི་ལྟ་བ་གཟིགས་པ་མི་འཐད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ།

[T243a1]དང་པོ་[K249b5][D249b5][L261a6]ནི། གལ་ཏེ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་རྙེད་ན་འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> གལ་ཏེ་རྣམ་པ་དེ་ལྟ་བུའི་རང་བཞིན་མཐོང་བ་མེད་པ་ཉིད་མ་ཡིན་ནམ་དེའི་ཕྱིར་ཇི་ལྟར་[L261b1]དེ་དག་གིས་[241a6]གཟིགས་[T243a2]ཤེ་ན། བདེན་མོད་ཀྱི་[K249b6][D249b6]འོན་ཀྱང་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་དེ་དག་གིས་གཟིགས་སོ་ཞེས་བརྗོད་དོ། །

ཞེས་ཅི་ཡང་མ་གཟིགས་པ་ལ་དེ་ཁོ་ན་གཟིགས་པར་བཤད་ཅིང་། དེའི་[L261b2]ཤེས་བྱེད་དུ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་[T243a3]ཤེས་[241b1]ཀྱི་ཡུལ་ལས་[K250a1][D250a1]ཀྱང་འདས་པར་བཤད་པ་དྲངས་པ་དང་། སངས་རྒྱས་ཀྱི་ས་ལ་སེམས་སེམས་བྱུང་གི་རྒྱུ་བ་གཏན་ལོག་པར་བཤད་པ་དང་[L261b3]ཇི་ལྟར་མི་འགལ་ཞེ་ན། མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་གཟིགས་ཞེས་པ་ནི་[K250a2][D250a2]ཡུལ་གང་ཡིན་ཐམས་[T243a4]ཅད་མ་[241b2]མཐོང་བ་ལ་མི་བྱེད་པའི་ཚུལ་རབ་བྱེད་བཅོ་ལྔ་པའི་སྐབས་སུ་བཤད་ཟིན་ནོ། །[113]

བདེན་པ་གཉིས་[L261b4]ལ་འཇུག་པ་ལས།

> ལྷའི་བུ་དག་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཆོག་དང་ལྡན་པ་ཐམས་[K250a3][D250a3]ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་[T243a5]ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་[241b3]གྱི་བར་ལས་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་[L261b5]པའོ་ཞེས་བརྗོད་པ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་དོན་དམ་བདེན་པའོ་ཞེས་བརྗོད་པའི་ཚེ་ན་བློ་ལ་ཡུལ་དང་ཡུལ་ཅན་གཉིས་སོ་སོར་སྣང་བ་ལྟར་[K250a4][D250a4]མི་མཐོང་བ་ལ་བཤད་[T243a6]པས། གཉིས་སྣང་[241b4]ལོག་པའི་ཁུངས་ཡིན་[L261b6]གྱི་སངས་རྒྱས་ཀྱིས་དོན་དམ་མ་རྟོགས་པའི་ཁུངས་མིན་ནོ། །འཇུག་འགྲེལ་ལས་ཀྱང་།

> དངོས་པོ་བྱས་པ་ཅན་ལ་མ་རེག་པར་རང་བཞིན་འབའ་ཞིག་མངོན་སུམ་[K250a5][D250a5]དུ་མཛད་པས་དེ་ཉིད་[T243b1]ཐུགས་སུ་ཆུད་པའི་[L262a1]ཕྱིར་སངས་རྒྱས་[241b5]ཞེས་བརྗོད་དོ། །

ཞེས་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་གཞན་དབང་ལ་མ་རེག་པར་ཆོས་ཉིད་འབའ་ཞིག་ཐུགས་སུ

113 D, K: ཏོ། ། L,T, Z: ནོ། །

ཆུད་པར་གསུངས་སོ། །

[L262a2]སེམས་སེམས་[K250a6][D250a6]བྱུང་གི་རྒྱུ་བ་ལོག་པ་ནི་ཚིག་གསལ་[T243b2]ལས་རྣམ་རྟོག་གི་རྒྱུ་བ་ལོག་པ་[241b6]ལ་གསུངས་ཏེ་སྔར་བཤད་ཟིན་ཏོ། །[114]

གཞན་ཡང་འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> རང་བཞིན་དེ་ཡོད་པ་མིན་ན་དེ་རྟོགས་པའི་ཕྱིར་དུ་[L262a3]བྱང་སེམས་རྣམས་དཀའ་བ་སྤྱོད་པ་དོན་[K250b1][D250b1]མེད་པ་ཤེས་བྱེད་དང་བཅས་པས་བརྐྱབས་ཏེ། [T243b3]ཇི་སྐད་དུ་དེ་དག་གི་རང་བཞིན་[242a1]ཡང་གང་ཞིག་ཅེ་ན། དེ་དག་གི་བཅོས་མ་མ་ཡིན་པ་དང་གཞན་ལ་ལྟོས་པ་མེད་པ་གང་[L262a4]ཡིན་པ་སྟེ། མ་རིག་པའི་རབ་རིབ་དང་བྲལ་བའི་ཤེས་པས་རྟོགས་[K250b2][D250b2]པར་བྱ་བའི་རང་གི་ངོ་བོའོ། །
>
> ཅི་དེ་ཡོད་དམ་མེད་དོ་ཞེས་དེ་[T243b4]སྐད་[242a2]དུ་སུ་སྨྲ། གལ་ཏེ་མེད་ན་ནི་ཅིའི་དོན་དུ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་[L262a5]ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན་པའི་ལམ་སྒོམ་པར་འགྱུར་ཏེ། གང་གི་ཕྱིར་ཆོས་ཉིད་དེ་རྟོགས་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་བྱང་ཆུབ་[K250b3][D250b3]སེམས་དཔའ་རྣམས་དེ་ལྟར་དཀའ་བ་བརྒྱ་ཕྲག་རྩོམ་པ་ཡིན་ནོ། །
>
> [T243b5][242a3]ཇི་སྐད་དུ་རིགས་ཀྱི་བུ་དོན་དམ་[L262a6]པ་ནི་སྐྱེ་བ་མེད་པ་དང་འགག་པ་མེད་པ་དང་འཇིག་པ་མེད་པ་དང་། འོང་བ་མེད་པ་དང་། འགྲོ་བ་མེད་པ་དང་ཡི་གེ་རྣམས་ཀྱིས་བརྗོད་པར་[K250b4][D250b4]བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་དང་ཡི་གེ་རྣམས་ཀྱིས་རབ་ཏུ་བསྟན་དུ་མེད་ཅིང་སྤྲོས་[L262b1]པས་[T243b6]རྟོགས་[242a4]པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་སྟེ། རིགས་ཀྱི་བུ་དོན་དམ་པ་ནི་བརྗོད་དུ་མེད་ཅིང་ཞི་བ་འཕགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་སོ་སོ་རང་གིས་རིག་པར་བྱ་བའོ། །
>
> རིགས་ཀྱི་བུ་དོན་དམ་[K250b5][D250b5]པ་ནི་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་[L262b2]རྣམས་བྱུང་ཡང་རུང་མ་བྱུང་ཡང་རུང་སྟེ། [T244a1]གང་གི་དོན་དུ་[242a5]བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་སྐྲ་དང་ཁ་སྤུ་དག་བྲེགས་ནས་གོས་ངུར་སྨྲིག་བགོས་ཏེ། ཡང་དག་པར་དད་པས་ཁྱིམ་ནས་ཁྱིམ་མེད་པར་རབ་ཏུ་འབྱུང་[K250b6][D250b6][L262b3]ཞིང་རབ་ཏུ་བྱུང་ནས་ཀྱང་། ཆོས་དེ་ཉིད་ཐོབ་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་[T244a2]སྐྲའམ་གོས་ལ་མེ་ཤོར་བ་ལྟར་[242a6]བརྩོན་འགྲུས་རྩོམ་ཞིང་གནས་པ་རྣམ་པར་འཇིག་པར་མི་བྱེད་པའོ། །
>
> རིགས་ཀྱི་བུ་གལ་ཏེ་དོན་དམ་པ་ཡོད་པར་མ་གྱུར་[L262b4]ན་ནི་ཚངས་པར་སྤྱོད་པ་[K251a1][D251a1]དོན་མེད་པར་འགྱུར་ཞིང་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་རྣམས་འབྱུང་བ་[T244a3]དོན་མེད་པར་འགྱུར་རོ། །
>
> གང་གི་[242b1]ཕྱིར་དོན་དམ་པ་དེ་ཡོད་པ་དེའི་ཕྱིར་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་དོན་དམ་པ་ལ་[L262b5]མཁས་པ་ཞེས་བྱའོ། །

ཞེས་[K251a2][D251a2]གསུངས་ཏེ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་རྟོགས་པ་ཁས་ལེན་པར་མི་ནུས་ན། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་དཔྱོད་པའི་ནོར་མ་ནོར་[T244a4]གྱི་དཔྱད་པ་དུ་མ་ཞིག་[242b2]བྱེད་པའི་ངལ་བ་དོན་མེད་དེ་དོན་དམ་པ་ལ་

[114] D, K, L, T, Z: ཏོ། །

[L262b6]མཁས་པ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་དང་། ཐུབ་པ་ཆེན་པོས་[K251a3][D251a3]ཆོས་ཕུང་པོ། ། བརྒྱད་ཁྲི་བཞི་སྟོང་གསུངས་པ་ལ། ། གང་གིས་དེ་ཉིད་མི་ཤེས་པ། ། དེ་ཡི་ཐམས་ཅད་འབྲས་བུ་མེད། ། ཅེས་བཅོམ་[T244a5]ལྡན་[L263a1]འདས་ཀྱིས་[242b3]གསུངས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

འཇུག་པ་ལས།

> ཤེས་བྱའི་བུད་ཤིང་སྐམ་པོ་མ་ལུས་[K251a4][D251a4]པ། །
> བསྲེགས་པས་ཞི་དེ་རྒྱལ་རྣམས་ཆོས་སྐུ་སྟེ། །
> དེ་ཚེ་སྐྱེ་བ་མེད་[L263a2]ཅིང་འགག་པ་མེད། །
> སེམས་འགགས་པ་[115]དེ་སྐུ་ཡིས་མངོན་སུམ་མཛད། །

ཅེས་[T244a6]གསུངས་ཤིང་[242b4]དེའི་འགྲེལ་པ་ལས།

> ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་རྣམ་པ་[K251a5][D251a5]ཐམས་ཅད་དུ་དེའི་ཡུལ་ཅན་སེམས་དང་[L263a3]སེམས་ལས་བྱུང་བ་རྣམས་མི་འཇུག་པས། སྐུ་ཁོ་ནས་མངོན་སུམ་དུ་མཛད་པར་རྣམ་པར་བཞག་གོ།

ཞེས་གསུངས་པ་[T244b1]དང་ཡང་མི་འགལ་[242b5]ཏེ་སངས་རྒྱས་པའི་ཚེ་སེམས་སེམས་བྱུང་གི་[K251a6][D251a6]རྒྱུ་བ་རྣམ་[L263a4]རྟོག་རྣམས་མི་འབྱུང་བས། དེའི་སྒོ་ནས་ཆོས་ཀྱི་སྐུ་མངོན་དུ་བྱས་པར་མི་འཇོག་གི་ཡོངས་[116]སྤྱོད་རྫོགས་པའི་སྐུ་ཁོ་ནས་མངོན་དུ་མཛད་པར་འཇོག་ཅེས་པའི་དོན་ཡིན་པའི་[T244b2]ཕྱིར་རོ། །

དེ་ཁོ་ན་[242b6]ཉིད་མངོན་སུམ་[L263a5]དུ་རྟོགས་པའི་[K251b1][D251b1]ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ངོར་ནི་རང་གི་ཡུལ་དང་ཡུལ་ཅན་གྱི་བར་ན་གཉིས་སུ་སྣང་བ་ཕྲ་མོ་ཡང་མེད་པར་ཆུ་ལ་ཆུ་བཞག་པ་བཞིན་དུ་མཉམ་པར་ཞུགས་པ་ཡིན་ལ་དེའི་ཕྱིར། དེས་ཇི་སྙེད་པའི་དོན་རྣམས་[L263a6][T244b3]མངོན་སུམ་དུ་འཇལ་བ་[243a1]མ་ཡིན་ཏེ། འཇལ་[K251b2][D251b2]ན་ནི་ཤུགས་ལ་རྟོགས་པ་མི་རུང་བས་དངོས་སུ་རྟོགས་དགོས་ཤིང་དེ་ཡང་རྣམ་པ་མེད་པར་འཇལ་བ་འདི་བའི་ལུགས་མིན་པས། གཟུགས་སྒྲ་ལ་སོགས་[L263b1]པའི་རྣམ་པ་དངོས་སུ་[243a2]ཤར་བའི་བློ་ལ་ཡུལ་ཡུལ་[T244b4]ཅན་གཉིས་སུ་སྣང་བ་མེད་པ་བྱར་[K251b3][D251b3]མི་རུང་བའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ཇི་སྙེད་པ་མ་གཞལ་ན་ཆོས་ཅན་དང་ཆོས་ཉིད་ཡ་བྲལ་དུ་ཐལ་བར་མི་འགྱུར་ཏེ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་རྟོགས་[L263b2]པའི་རིགས་ཤེས་ཀྱི་ངོ་ན་ཆོས་ཅན་དང་[243a3]ཆོས་ཉིད་ཀྱི་འབྲེལ་བ་མི་འཇོག་པའི་ཕྱིར་[T244b5]དང་། སྔོན་པོ་རྟོགས་པའི་ཐ་སྙད་པའི་[K251b4][D251b4]ཚད་མའི་ངོ་ན་[117]དོན་དམ་བདེན་པ་མེད་པས་དེ་གཉིས་འབྲལ་མི་དགོས་པ་དང་འདྲ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

གཞན་[L263b3]ཡང་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་[243a4]ཀྱིས་ཇི་སྙེད་པའི་དོན་རྣམས་འཇལ་

---

[115] K: པས་ D, L, T, Z: པ་

[116] D, K, T, Z: ཡོངས་ L:ཡོང་

[117] K, L, T, Z: ངོ་ན་ D:ངོན་

ནི། ཡང་དག་པའི་[T244b6]དོན་མཐོང་བའི་རིགས་ཤེས་[K251b5][D251b5]ཀྱིས་ཀུན་རྫོབ་པའི་བདེན་པ་རྙེད་པར་འགྱུར་བས་བདེན་གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་[L263b4]འཚོལ་བ་དང་། ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་རྣམས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་ཡུལ་ཅན་གྱི་རིགས་[243a5]ཤེས་ཀྱི་དབང་གིས་གཞག་དགོས་པར་འགྱུར་རོ། །

R2 非難を退けること

第二〔非難を退けるということ〕には二つがある。**S1** 如実をご覧になることは妥当ではないという非難を退けることと、**S2** 如量をご覧になることは妥当ではないという非難を退けることである。

S1 如実をご覧になることは認められないという非難を退けること

第一は、もし〔対論者が、〕仏陀の如実智によって勝義諦を得るのならば、『入中論釈』に、

> もしそのような形象の自性が見えないのではないのか。それゆえ、どのように彼らがご覧になるのであるかというのならば、〔見えないというのは〕真実であるけれども、しかし、ご覧にならないあり方によって彼らがご覧になるのであると述べている[118]。

と何もご覧にならないことを真実義をご覧になっていると説明しているし、その論証因として勝義諦は一切知の対象よりも超えていると説明していることを引用し[119]、仏地において心と心所の動きというのは完全に排除されていると説明しているのとどうして矛盾しないのかというならば、「ご覧にならないあり方によってご覧になる」というのは、対象である全てのものを見ないことをさしているのではないことについては、第 15 章の箇所ですでに説明した。

『入二諦経』に、

> 諸々の天子よ。勝義諦は一切の種類の最上のものを有している一切智の対象に至るまでより超えているのである。すなわち、ありのままが勝義諦であると述べているようなものではないのである[120]。

---

[118] MABh, 110.12–14（255b6–7）.

[119] MABh, 110.15–111.5（255b7–256a2）.

[120]『世俗諦と勝義諦を示した経』という経典の中に以下のように書いている。SPN, 247a4–7: ལྷའི་བུ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཆོག་དང་ལྡན་པ་དང་། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་བར་ལས་ཡང་དག་པར་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ལྷའི་བུ་དེ་ལ་རྟོག་པ་དང་རྣམ་པར་རྟོག་པ་ཐམས་ཅད་འཇུག་པའང་མེད། ཟློག་པའང་མེད་དོ། ། དོན་དམ་པར་ན་དེ་ལ་ཕ་རོལ་ཡང་མེད།ཚུར་རོལ་ཡང་མེད། དབུས་ཀྱང་མེད་དེ།ལྷའི་

と勝義諦であると述べている時に、知には対象と対象を持つものの両方がそれぞれ顕れるのと同様には見えないのであると〔勝義諦を〕説明しているので、二つの顕れを退けている根拠であって、仏陀が勝義を理解されていないという根拠ではないのである。

『入中論釈』にも、

> 作られた実在に触れることなしに自性（法性）のみを目の当たりになさることによって、真実をご理解なさっているので、仏陀と言われるのである[121]。

と仏陀の如実知によって、依他起には触れずに法性のみをご理解なさっていると説かれている。

心と心所の動きを排除しているということは、『プラサンナパダー』に〔心と心所の〕妄分別の動きが退けられているということをさして説かれている[122]。すなわち、すでに説明した。

さらに『入中論釈』に、その自性が存在していないのならば、それを理解するために、菩薩たちが苦行を行うことは無意味であるという〔ことを〕典拠とともに論証しているのである。すなわち、

> それらの自性は何であるのかというならば、それらは作られたものではないことと、他に依存していないことであり、無明の眼病と離れている知によって理解される自性である。
> それが存在するか存在しないかとそのように誰が語るのであろうか。もし存在しないのならば、何のために菩薩たちは波羅蜜の道を修習することになるのか。すなわち、その法性を理解するために、菩薩たちがそのように何百も苦労を努力するのは何のためであるのか。
> 善男子よ。勝義は生起することなく、滅することなく、消滅することなく、来ることなく、行くことなく、諸々の文字によって述べられるものではない、諸々

བུ་འདི་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་སྒྲོ་བཏགས་ཏེ་བརྗོད་མོད་ཀྱི། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ་ཞེས་བྱ་བ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །（天子たちよ。勝義諦は一切の種類のものの最上のものを有している。一切智者の智慧の対象に至るまでも超えているのである。すなわち、天子よ。それ〔勝義諦〕において全ての分別と妄分別を生じることもなく、退けることもないのである。勝義というならば、それには彼岸なく、此岸もない。中もまたないのである。天子よ。これは勝義諦であると増益して述べるけれども、勝義諦であると述べられるようなものではないのである。）ツォンカパはこの文章を省略して引用したと思われる。

121 MABh, 201.17–19（283a2）.

122 PSPD, 374.1–2: vikalpaś cittapracāraḥ tadrahitatvāt tattattvaṃ nirvikalpaṃ// yathoktaṃ sūtre / paramārthasatyaṃ katamat / yatra jñānasyāpy apracāraḥ kaḥ punar vādo ’kṣarāṇām iti / ; PSPDt, 120a3–4.

> の文字によって語られるものではなく、戯論によって理解すべきものではないのである。すなわち、善男子よ。勝義は述べられることがないし、寂静で諸々の聖者それぞれによって自内証されるべきものである。
> 善男子よ。勝義は諸々の如来が出現してもしなくても良いのである。すなわち、何のために、諸々の菩薩が髪と髭を剃って、袈裟を着て、正しく信仰することによって家から家を捨てて出家し、出家してからも、その教えを得るために、髪の毛あるいは袈裟に火が着いたように精進して住することを恐れないのであるのか。
> 善男子よ。もし勝義は存在していないならば、梵行は無意味になってしまい、諸々の如来が出現していることは無意味になってしまうのである。
> 勝義諦は存在しているゆえに、諸々の菩薩をさして勝義諦に暁通するものであると述べるべきである[123]。

と説かれている。なぜならば、真実義の意味を理解することを認めることができないのならば、真実義を考察するという間違いあるいは間違いない多くの考察を行う苦労は無意味である。なぜならば、勝義に曉通することがありえないからである。〔そして〕、偉大なる牟尼が八万四千の法蘊をお説きになったことに対して、真実を知らない者〔には〕、その〔法蘊〕全ての果はないのである。と世尊がお説きになっているからである。
『入中論』に、

> 所知という乾いた薪を残りなく、燃やしたことによって寂静、それは諸々の勝者の法身である。その時、生起することなく、滅することなく、その滅した心をお身体によって現量になさっているのである[124]。

と説かれているし、その『入中論釈』に、

> その智慧の対象である真実義に対して全面的に〔真実義〕その対象を持つものである諸々の心と心所が働かないので、お身体のみで現量〔で理解〕なさっているものであると設定しているのである[125]。

---

[123] MABh, 306.5–307.7（314a7–b5）.
[124] MAKt, 216b3–4.
[125] MABh, 362.6–9（332a1–2）：དེ་ལྟ་ན་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་དུ་དེའི་ཡུལ་ཅན་སེམས་དང་སེམས་ལས་བྱུང་བ་རྣམས་མི་འཇུག་པས་སྐུ་ཁོ་ནས་མངོན་སུམ་དུ་མཛད་པར་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་རྣམ་པར་གཞག་གོ། །（その智慧の対象である真実義に対して全面的に〔真実義〕その対象を持つものである諸々の心と心所が働かないので、お身体のみによって現量〔で理解〕なさっているもの

と説かれていることとも矛盾しないのである。なぜならば、成仏した時に、心と心所の動きという諸々の妄分別は生じないので、それを通して法身が現〔量〕で〔了解している〕とは設定しないのであるけれども、受用を円満にしたお身体のみが現〔量〕で〔理解をなさる〕と設定するという意味であるからである。

真実義を直接に知覚する智慧にとっては自らの対象と対象を持つものの間に微細なる二つの顕れもまたなく、水に水を入れたように等引している。それゆえに、それが諸々の如量の対象を直接に量るのではないのである。なぜならば、量るならば、間接的に理解することはありえないので、直接的に理解する必要があり、それもまた無形象で量っていることはこの〔帰謬派の〕説ではないので、色、声などの形象が直接に顕れる心において対象と対象持つものの二つとしの顕れがないとすることがありえないからである。

それが如量を量ることがないのならば、有法と法性が離れていることになってしまうことにならないのである。なぜならば、真実義を理解する正理知の側面では、有法と法性との関係を設定しないからであり、青を理解している言説の量の側面では、勝義諦がないので、その両方が離れている必要がないのと等しいからである。

さらに、仏の如実智が諸々の如量の対象を量るならば、正しい対象を見る正理知によって世俗諦を得ることになるので、二諦の定義が混乱し、諸々の世俗諦は真実義の対象を持つものである正理知の力によって設定する必要があることになってしまうのである。

S2 ཇི་སྙེད་པ་གཟིགས་པ་མི་འཐད་པའི་རྩོད་པ་སྤང་བ།

[T245a1]གཉིས་པ་ནི། ལུགས་འདི་ལ་[K251b6][D251b6]སངས་རྒྱས་ཀྱི་སར་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་[L263b5]པའི་ཡེ་ཤེས་འདོད་དམ་མི་འདོད། གཉིས་པ་ལྟར་ན་འཇུག་པ་ལས། སྟོབས་བཅུའི་མཁྱེན་ཚུལ་གསུངས་པ་ཡང་[243a6]མི་འཐད་ལ། སངས་རྒྱས་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པར་[T245a2]ཁས་བླང་དུ་མི་རུང་བས་རང་གི་[K252a1][D252a1][L263b6]སྟོན་པ་ལ་སྐུར་བ་བཏབ་པར་འགྱུར་རོ། །

དང་པོ་ལྟར་ན། ཤེས་པ་རྣམས་ལ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་དེར་སྣང་བ་མེད་ན་ནི་འགའ་ཡང་[243b1]འཁྲུལ་བར་མི་འགྱུར་བས་ཡོད་དོ། །

དེའི་ཚེ་དེ་[L264a1]རྣམས་[K252a2][D252a2]སངས་རྒྱས་ཀྱི་[T245a3]ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ལ་སྣང་དགོས་སོ། །

དེ་ལྟ་ན་ཇི་ལྟར་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་དོན་དུ་མེད་པས་འཁྲུལ་བར་འགྱུར་རོ་སྙམ་ན། དེ་ལ་ཇི་སྐད་[L264a2]བཤད་པའི་སྐྱོན་དུ་འགྱུར་[243b2]བས་ཕྱོགས་གཉིས་པ་ནི་མི་འདོད་དོ། །

དེ་ཡང་འཇུག་[K252a3][D252a3]འགྲེལ་དུ་མདོ་དྲངས་[T245a4]པ་ལས།

であると世俗において設定しているのである）

> ཡང་ཤིང་རྟའི་འཁོར་ལོ་ཙམ་གྱི་ས་ཕྱོགས་ན་སྣང་བར་མ་གྱུར་པའི་སེམས་ཅན་གང་དག་དེ་[L264a3]བཞིན་གཤེགས་པ་ལ་སྣང་བར་གྱུར་པ་དེ་དག་ནི་ཆེས་མང་གི །[243b3]སྟོང་གསུམ་གྱི་སྟོང་ཆེན་པོའི་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཁམས་[K252a4][D252a4]ཀྱི་ལྷ་དང་མི་རྣམས་ནི་དེ་[T245a5]ལྟ་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་ཕྱི་རོལ་པའི་དྲང་སྲོང་མངོན་ཤེས་ལྔ་དང་ལྡན་[L264a4]པ་དང་ཉན་རང་དང་བྱང་སེམས་ལ། ཤིང་རྟའི་འཁོར་ལོ་ཙམ་གྱི་ས་ཕྱོགས་ན་མི་སྣང་བ་སངས་རྒྱས་ལ་[243b4]སྣང་བའི་སེམས་ཅན་ཆེས་མང་བར་[K252a5][D252a5]གསུངས་པ་ལྟར་སྣང་ནས་མཁྱེན་[T245a6]པ་ཡིན་གྱི་མི་སྣང་བ་མིན་ནོ། །

སྣང་[L264a5]བའི་ཡུལ་ཡང་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་མ་བསླད་པའི་ཇི་སྙེད་པ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་མཚན་དཔེ་སོགས་དང་། མ་རིག་པའི་བག་[243b5]ཆགས་ཀྱིས་བསླད་པའི་[K252a6][D252a6]ཇི་སྙེད་པ་མ་དག་པའི་སྣོད་བཅུད་ལ་སོགས་[T245b1]པ་གཉིས་[L264a6]སོ། །

དེའི་དང་པོ་ནི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་སར་ལྡོག་པའི་དོན་མེད་ལ་གཉིས་པ་ནི་ས་དེར་རྒྱུ་ལོག་པས་ལྡོག་པ་ཡིན་ནོ། །

སྣང་ཚུལ་ནི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་མཚན་དཔེ་མ་རིག་པ་མ་[243b6]སྤངས་[K252b1][D252b1]པའི་གང་ཟག་ལ་སྣང་བ་ན་རང་གི་[L264b1]མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་[T245b2]དེར་སྣང་བ་ནི། ཡུལ་དེ་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱི་དབང་གིས་བྱུང་བའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་མིན་གྱི་ཡུལ་ཅན་དེ་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་བསླད་པའི་དབང་གིས་སྣང་[K252b2][D252b2]བ་ཡིན་[244a1]ཏེ། [L264b2]དེ་ནི་གང་ཟག་གཞན་ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བ་ཙམ་གྱི་ངོར་ནས་[T245b3]ཡུལ་ཅན་དེ་ལ་སྣང་བ་མིན་པར་རང་ངོར་ནས་དེ་ལྟར་སྣང་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ལ་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་[244a2][L264b3]ཀྱིས་[K252b3][D252b3]བསླད་པའི་དོན་སྣང་བ་ན། མ་རིག་པའི་བསླད་པ་ཡོད་པའི་གང་ཟག་ལ་དེ་[T245b4]དག་སྣང་བ་ཁོ་ནའི་སྒོ་ནས་སངས་རྒྱས་ལ་སྣང་བ་ཡིན་གྱི། གཞན་ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བ་ལ་མ་ལྟོས་པར་སངས་རྒྱས་ཀྱི་རང་ངོར་ནས་[L264b4]སྣང་བ་མིན་ནོ། །

དེའི་[244a3]ཕྱིར་[K252b4][D252b4]གཟུགས་སྒྲ་སོགས་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་དེར་སྣང་བ་[T245b5]སངས་རྒྱས་ཀྱིས་མཁྱེན་པ་ཡང་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བའི་ངོར་ནས་ཡིན་གྱི། གང་ཟག་དེ་ལ་[L264b5]དེར་སྣང་བ་ལ་མ་ལྟོས་པར་སངས་རྒྱས་[244a4]རང་གི་[K252b5][D252b5]ངོར་ནས་དེ་ལྟར་སྣང་བའི་ཚུལ་གྱིས་མཁྱེན་པ་མིན་པས་དེ་སྣང་བས་འཁྲུལ་བར་[T245b6]འགྱུར་བའི་དོན་མེད་དོ། །

དེ་ལྟར་ན་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་རང་ངོར་ནས་ནི།[L264b6]དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་བདག་མེད་པ་དང་རང་བཞིན་གྱིས་མེད་པའི་ངོ་བོར་[K252b6][D252b6][244a5]རྫུན་པ་སྒྱུ་མ་བཞིན་དུ་སྣང་གི་བདེན་པར་མི་སྣང་ལ། མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་སྣང་བའི་[T246a1]ཆ་ནས་ཡེ་ཤེས་དེ་ལ་སྣང་བ་ན་གང་ཟག་གཞན་[L265a1]དེ་ལ་བདེན་པར་སྣང་བར་ཤར་བ་ཙམ་མོ། ། རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པ་ལས་ཀྱང་།

> [K253a1][D253a1]དངོས་ལ་[244a6]མཁས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ནི། །
> དངོས་པོ་མི་རྟག་སླུ་བའི་ཆོས། །
> གསོག་དང་[L265a2]སྟོང་པ་བདག་[T246a2]མེད་པ། །

རྣམ་པར་དབེན་ཞེས་[126]བྱ་བར་མཐོང་། །
གནས་མེད་དམིགས་པ་ཡོད་མ་ཡིན། །
རྩ་བ་མེད་[K253a2][D253a2]ཅིང་གནས་པ་མེད། །
མ་རིག་རྒྱུ་ལས་ཤིན་ཏུ་བྱུང་། །
[244b1]ཐོག་མ་དབུས་མཐའ་རྣམ་[L265a3]པར་སྤངས། །
ཆུ་ཤིང་བཞིན་དུ་སྙིང་པོ་མེད། །
དྲི་ཟའི་གྲོང་[T246a3]ཁྱེར་འདྲ་བ་སྟེ། །
རྨོངས་པའི་གྲོང་ཁྱེར་མི་བཟད་པ། །
འགྲོ་བ་སྒྱུ་མ་བཞིན་དུ་སྣང་། །

[K253a3][D253a3]ཞེས་གསུངས་ཤིང་ཚིགས་བཅད་ཕྱི་མ་གཉིས་ཀྱི་[L265a4]མཚམས་སྦྱོར་[244b2]དུ་འཕགས་པ་མཛད་པ་མཐར་ཕྱིན་པ་རྣམས་ཁོ་ནས་དེ་ལྟར་གཟིགས་པ་འབའ་ཞིག་ཏུ་མ་ཟད་ཀྱི་སློབ་[T246a4]དཔོན་ཡང་རང་གི་ཤེས་པ་ལ་ལྟོས་ནས་ཀྱང་དེ་ལྟར་རྟོགས་[K253a4][D253a4]པར་གསུངས་པས། ཚིགས་[L265a5]བཅད་དང་པོ་ལྟར་གཟིགས་པ་ནི་མཛད་[244b3]པ་མཐར་ཕྱིན་པའི་འཕགས་པའི་གཟིགས་ཚུལ་ལོ། །

ཇི་ལྟ་བ་དང་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱང་ངོ་བོ་ཐ་མི་དད་[T246a5]པས་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་གཅིག་གིས་[K253a5][D253a5]ཀྱང་ཤེས་[L265a6]བྱ་ཀུན་ལ་ཁྱབ་པར་བཤད་པ་དང་ཡང་མི་འགལ་ཏེ། ཡེ་[244b4]ཤེས་ཆོས་སྐུ་དང་གཟུགས་སྐུ་གཉིས་ངོ་བོ་གཅིག་ཡིན་ཡང་དེ་གཉིས་ཕན་ཚུན་ཡིན་མི་དགོས་པ་བཞིན་དུ་ཡེ་ཤེས་གཉིས་ཀྱང་དེ་དང་[T246a6]འདྲའོ། །

S2 如量をご覧になることは認められないという非難を退けること

第二〔如量をご覧になることは認められないという非難を退けること〕は、〔もし、対論者が、〕この学説において仏地では、如量智を認めるのであるか認めないのであるか。後者〔認めない〕の通りであるのならば、『入中論』に十力のご覧になるあり方をお説きになっている[127]ことも不合理であり、仏陀を一切知者であると認めることもありえないので、自らの教主を損減することになるのである。

前者の通りであるならば、諸々の凡夫において自相によって成立してないのならば、そのように顕れることがないのならば、全く迷乱していないことになってしまうので、〔実際には、自相によって成立しているように顕れることは〕存在しているのである。その時に、それらは仏陀の如量智に顕れる必要がある。

そうであるのならば、顕れた通りの対象として存在しないので、迷乱することになっ

[126] D, K: ཞེས་　L, T, Z: ཅེས་
[127] MAKt, 217a4–b7 参照。

てしまうのであると考えるならば、それについて、以上に述べた過失になってしまうので、後者の立場は認められないのである。

それについても、『入中論釈』に教典を引用している中に、

> また、馬車の車輪ぐらいの地に顕れることにならなかった有情は、如来には顕れることになった。それらは大変多いのであるが、三千大千の世界の諸々の神と人はそのようではないのである[128]。

と、五神通力を具えた外道の仙人と声聞、独覚、菩薩において馬車の輪ぐらいの地は〔有情は〕顕れないが、仏に顕れる有情が非常に多いとお説きになっているように顕れてご理解なさるのであって、顕れないのではないのである。

顕れの対象もまた、無明の習気によって汚されていない全てのものという仏の相好などと、無明の習気によって汚されている全てのものという不浄の器（世間と有情世間）などの二つである。

そのうち、前者〔仏の相好など〕が、仏地において退けられる意味がないけれども、後者が、その地において〔心と心所の妄分別の〕動きを退けることによって退けられるのである。

顕れのあり方については、仏陀の相好が無明を断じていないプトガラに対して顕れる時に、自らの特質によって成立していないながら、その者に〔自らの特質によって成立しているかのように〕顕れるのは、その対象が無明の習気の力によって生じているという理由によってではなく、対象を持つものが無明の習気によって汚された力によって顕れるのである。なぜならば、それは、他のプトガラにおいて単にそのように顕れていることからその対象を持つものに顕れているのではなく、〔対象〕自身の側からそのように顕れているからである。

仏の如量知において無明の習気によって汚されている対象が顕れる時、〔仏の如量智に顕れるのは、〕無明によって汚された人〔の知〕にそれらが顕れることによってのみ仏に顕れるのであって、他〔の人の知〕にそのように顕れることに基づくことなく仏自身の側で顕れるわけではない。

したがって、色、声などが自相によって成立していないのに、〔自相によって成立しているものとして〕顕れるものを仏がお知りになるのも無明を有する者にそのように顕れている側からであり、そのプトガラにそのように〔自相によって成立しているものとして〕顕れていることに基づくことなく、仏自身からそのように顕れるという仕方によってお知りになるのではないので、そのように〔自相によって成立している

[128] MABh, 392.7–11（342a6–7）.

ものとして〕顕れることによって迷乱することになってしまうという意味はないのである。

そうであるのならば、如量智自身の側では、全ての事物は無我であり自性が存在しないものとして顕れるので、虚偽である幻のようなものとして顕れるのであり、真実なるものとして顕れることはあり得ない。しかし、無明を有するプトガラたちに顕れたものを通じて、その〔如量〕智に顕れる時、他のプトガラ（無明を有している人）に真実なものとして顕れたもの〔が、そのようなもの〕として〔仏智に〕立ち昇ったにすぎない。

『六十頌如理論』でも、

> 事物に通達している者たちは、
> 事物は無常であり、欺く法であり、
> 貯蓄することであり、空であり、無我であり、
> 寂静であるものを見る[129]。
> 拠り所なく、知覚されない、
> 根がなく、住することなく、
> 無明の原因から全く生じた、
> 始まり、中間、終わりを断じる[130]。
> 芭蕉の木と同様に心髄がないのである、
> ガンダルヴァの町と等しいのである、
> すなわち、耐えられない愚人の町であり、
> 衆生は幻のごとく顕現するのである[131]。

とお説きになっており、後の二句の結合で、行うことを完全にした諸々の聖者のみがそのようにご覧になるだけでなく、阿闍梨も自らの知に関してもまたそのように理解しているとお説きになっているので、最初の一句のようにご覧になるのは、行いを完全した聖者のご覧になる仕方である。

如実智と如量智もまた異なる存在ではないので、仏の一つの智慧によっても全ての所知において遍充しているのであると説明したのとも矛盾しないのである。すなわち、智慧という法身と色身との二つは、同じ在存在であるが、それら二つは相互である必要がないのと同様に二つの智慧のそれと等しいのである。

---

[129] YṢ, 12（21a7）; 瓜生津（1985, 77）参照。
[130] YṢ, 12（21a7–b1）.
[131] YṢ, 12（22a1）.

Q3 དོན་དམ་བདེན་པའི་དབྱེ་བ་བཤད་པ།

གསུམ་པ་[L265b1]ནི། དོན་[K253a6][D253a6]དམ་པའི་བདེན་པ་ལ་རྒྱས་པར་དབྱེ་ན་སྟོང་པ་ཉིད་བཅུ་དྲུག་དང་། འབྲིང་དུ་[244b5]ཕྱེ་ན་དངོས་པོ་དང་དངོས་མེད་དང་རང་དང་གཞན་གྱི་ངོ་བོ་སྟོང་པ་ཉིད་དེ་བཞི་དང་། བསྡུས་ན་གང་ཟག་དང་ཆོས་ཀྱི་བདག་[L265b2]མེད་གཉིས་སུ་[T246b1]འདུག་པར་གསུངས་སོ། །

[K253b1][D253b1]གཞུང་གཞན་ལས་ནི། དོན་དམ་པ་ལ་དོན་དམ་བདེན་པ་དངོས་དང་མཐུན་[244b6]པའི་དོན་དམ་པ་གཉིས་བཤད་དེ། བདེན་གཉིས་ལས།

> སྐྱེ་ལ་སོགས་པ་བཀག་[L265b3]པ་ཡང་། །
> ཡང་དག་པ་དང་མཐུན་པའི་ཕྱིར། །
> དོན་དམ་ཡིན་པར་ཁོ་བོ་[T246b2]འདོད། །

[K253b2][D253b2]ཅེས་དང་། དབུ་མ་སྣང་བ་ལས་ཀྱང་།

> དེ་ལྟར་ན་སྐྱེ་བ་མེད་པ་འདི་ཡང་དོན་དམ་པ་[245a1]དང་མཐུན་པའི་ཕྱིར་དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱའི་དངོས་[L265b4]སུ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། དངོས་སུ་ནི་དོན་དམ་པ་སྤྲོས་པ་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ཞེས་གསུངས་[T246b3]སོ། །

དེ་[K253b3][D253b3]ལ་སྤྲོས་པ་ནི་འདིར་རྟགས་ཀྱི་དགག་[245a2]བྱའི་སྤྲོས་པ་ཙམ་མ་ཡིན་གྱི་སྣང་བའི་སྤྲོས་པ་ཡང་ཡིན་[L265b5]ནོ། །

དེ་ལས་འདས་པའི་ཚུལ་ནི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་གཟིགས་པའི་ངོར་གཉིས་སྣང་གི་སྤྲོས་པ་ཐམས་ཅད་ནུབ་པ་ལ་བྱའི་[132]། སྣང་[T246b4]བའི་[K253b4][D253b4]སྤྲོས་པ་མེད་པ་[245a3]ལ་མི་བྱ་སྟེ་གཞན་དུ་ན་ཆོས་ཉིད་དང་ཆོས་ཅན་སྣང་བའི་[L265b6]སྤྲོས་པ་གཉིས་ཡ་མི་འབྲལ་བས་དོན་དམ་བདེན་པ་མི་སྲིད་པར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ། །

དེའི་ཕྱིར་ཕུང་པོའི་ཆོས་དང་གང་ཟག་གི་བདག་མེད་རྟགས་ཀྱི་དགག་བྱའི་[K253b5][D253b5]སྤྲོས་པ་[T246b5]བཅད་[245a4]ཙམ་ནི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཟག་[L266a1]པ་མེད་པས་རྙེད་པའི་དོན་ཡིན་ལ། དེའི་ངོར་གང་ཟག་དང་ཕུང་པོའི་གཉིས་སྣང་གི་སྤྲོས་པ་ཡང་ཞི་བ་ཡིན་པས་དོན་དམ་བདེན་པའོ། །

འོན་ཀྱང་དོན་དམ་པའི་སྐྱེ་བ་སོགས་[L266a2]ཕུང་པོ་[K253b6][D253b6]དང་གང་ཟག་[245a5]གི་[T246b6]སྟེང་དུ་བཀག་པའི་མ་ཡིན་དགག་གི་སྟོང་པ་ནི་སྟོང་གཞི་དེ་དག་མངོན་སུམ་དུ་སྣང་བའི་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མ་མིག་[133]ཤེས་ལ་སོགས་པ་ལ་སྣང་དགོས་པས། རང་མངོན་སུམ་དུ་མཐོང་བའི་[L266a3]བློའི་ངོར་གཉིས་སྣང་དང་[K254a1][D254a1]བཅས་པར་འཆར་གྱི་[245a6]གཉིས་[T247a1]སྣང་དང་བྲལ་བར་མི་འཆར་བས་དོན་དམ་བཏགས་པ་བ་ཀུན་རྫོབ་མཚན་ཉིད་པའོ། །

---

[132] D, K: བྱ་ཡི་ L, T, Z: བྱའི་

[133] D, K, L, Z: མིག་ T: མིང་

བདེན་གཉིས་རང་འགྲེལ་ལས་ཀྱང་།

> ཡང་དག་པའི་སྐྱེ་བ་[L266a4]ལ་སོགས་པ་དངོས་པོ་སྣང་[K254a2][D254a2]བ་ན་མི་སྣང་བས་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པ་བཞིན་དུ།[T247a2][245b1]ཡང་དག་པའི་སྐྱེ་བ་ལ་སོགས་པ་བཀག་པ་ཡང་དགག་གཞིའི་དངོས་པོ་སྣང་བའི་བློ་ལ་མི་སྣང་བས་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་[L266a5]ཏུ་འགྱུར་རོ་

ཞེས་པའི་ལན་དུ།

> དངོས་པོའི་ངོ་བོ་[K254a3][D254a3]དང་ཐ་མི་དད་པའི་ཕྱིར་མི་སྣང་བ་མ་ཡིན་

ཞེས་གསུངས་ཏེ། རྟགས་[245b2]ཀྱི་[T247a3]དགག་བྱ་བཅད་ཙམ་གྱི་སྤྲོས་པ་མེད་པར་དགག་པ་མིག་ལ་སོགས་པའི་ཤེས་པ་ལ་དངོས་[L266a6]སུ་མི་སྣང་བས་དེ་མིན་ཀྱི། མ་ཡིན་དགག་ནི་དགག་གཞིའི་[134][K254a4][D254a4]དངོས་པོ་གང་ལ་སྣང་བ་དེ་ལ་སྣང་བར་བཞེད་པའི་ལུགས་སོ། །

རིགས་པ་འདིས་སངས་[T247a4][245b3]རྒྱས་ཀྱི་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་དང་འཕགས་པ་འོག་[L266b1]མའི་རྗེས་ཐོབ་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་མ་ཡིན་དགག་སྒྱུ་མ་ལྟ་བུའི་དོན་འཇལ་བ་རྣམས་ཀྱི་[K254a5][D254a5]ཡུལ་རྣམས་ཀྱང་རྣམ་གྲངས་པའི་དོན་དམ་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

གང་དག་འཕགས་པའི་མཉམ་གཞག་[T247a5][245b4]གི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་སྤྲོས་[L266b2]པ་རྣམ་པར་བཅད་ཙམ་གྱི་སྤྲོས་བྲལ་རྟོགས་སོ་ཞེས་བྱས་ན་ཤིན་ཏུ་རངས་ཤིང་དགའ་ལ། སྤྲོས་པ་[K254a6][D254a6]མེད་པར་དགག་པ་འཇལ་ལོ་ཞེས་བྱས་ན་མི་བཟོད་པ་ནི། དགག་བྱ་རྣམ་པར་བཅད་པ་ཙམ་ཞིག་མེད་དགག་[L266b3]གི་དོན་[T247a6]ཡིན་[245b5]པ་མ་རྟོགས་པར་མེད་དགག་ཐམས་ཅད་རི་བོང་རྭ་དང་འདྲ་བའི་ཅང་མེད་དུ་འདོད་པའི་བློའི་སྐྱོན་ཡིན་ཏེ། [K254b1][D254b1]ཅིར་ཡང་མ་གྲུབ་ན་མེད་དགག་ཡིན་པར་འགལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

Q3 勝義諦の分類の説明

第三〔勝義諦の分類を説明すること〕は、勝義諦について詳しく分類するならば、十六空であり、中ぐらいに分類するならば、実在と非実在、それ自体と他者の存在が空性であるという四つがあり、まとめるならば、人無我と法無我の二つであると『入中論』に説かれている[135]。

〔一方、〕他のテキスト[136]では、勝義には勝義諦そのものと随順する勝義の二つがあると説明されている。すなわち、『二諦分別論』〔の註釈〕に、

> 生起などを否定したことも、
> 正しいことと相応するため、

---

[134] D, K, T, Z: གཞིའི་　L: བཞིའི་
[135] MABh, 301.17–302.2（313a3–b2）.
[136] 中観自立論証派のテキストのことをさしている。

> 勝義であると私は主張する[137]。

と〔説かれていおり、〕『中観光明論』にも、

> そのようにこの不生起もまた勝義と相応するので、勝義のものであると言われるのであって、〔勝義〕そのものではないのである。なぜならば、本当の意味では、勝義とは、あらゆる戯論から超えているからである[138]。

と説かれている

そのうち、戯論とは、ここで論証因の否定対象であるところの単なる戯論だけではなく、顕れの戯論でもある。

それより超えたあり方は、真実義を直接にご覧になっている知にとって二顕現のあらゆる戯論は消滅するということをさしているのであって、顕れの戯論が存在しないことをさしているのではないのである。なぜならば、さらに、法性と有法という顕れの戯論の二つは離れられないので、勝義諦がありえないことになってしまうからである。

それゆえに、蘊である法と人との無我を論証する論証因の否定対象であるところの戯論を完全に断じるものは無漏の如実智によって得られる対象であり、それにとって人と蘊の二つの顕れの戯論もまた寂静であるので、勝義諦である。

しかし、勝義の生起などを蘊と人の上で否定した定立否定の空なるものは、それら空の基体を直接に顕れている言説の量である眼識などに顕れる必要があるので、自己を直接に見られる知にとって二つの顕れと共に顕れるのであって、二つの顕れと離れて顕れないのである。それゆえ、仮説した勝義は真の世俗である。

『二諦分別論』自注にも、

> 正しい生起などは、事物が顕れた時に、顕れないので、誤った世俗であるのと同様に、正しい生起などの否定も否定基体の事物が顕れる知において顕れないので、誤った世俗としてなってしまうのである[139]

という答えとして、

> 〔否定は〕事物の存在と異なることではないために、顕れないということではな

---

137 SDVV, 161（6a1–2）：སྐྱེ་ལ་སོགས་པ་བཀག་པ་ཡང་། ། ཡང་དག་པ་དང་མཐུན་པའི་ཕྱིར། ། དོན་དམ་པ་ཡིན་པར་ཁོ་བོ་ཅག་འདོད་དོ། །

138 MA, 149a5. 一郷（1993, 110）参照。

139 SDVV, 160（5b7）：ཡང་དག་པར་སྐྱེ་བ་ལ་སོགས་པ་བཀག་པ་ཡང་ཅི་ག་ཡང་དག་པ་མ་ཡིན་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འགྱུར་ཏེ། དེ་ནི་དངོས་པོ་སྣང་བ་ན་ཡང་དག་པར་སྐྱེ་བ་ལ་སོགས་པ་བཞིན་དུ་མི་སྣང་ངོ་། ། ツォンカパの引用は原文そのままではない。

いのである[140]

と説かれている。すなわち、論証因の否定対象を完全に断じた戯論は存在しないという否定は、眼識などにおいて直接に顕れないので、それではないのであって、定立否定は否定基体である事物において顕れると主張する流儀である。

この理論によって仏の如量智と下位の聖者の後得智という定立否定は幻のごとき諸々の対象を量るものの諸々の対象もまた同義の勝義として知るべきである。

聖者の三昧智によって戯論を単に断じることで無戯論を理解しているとするのならば、とても喜ばしいが、〔聖者の三昧智は、〕戯論を絶対否定が量るのであるとするならば、耐えられないのは、否定対象を単に断じたことは絶対否定の意味であることと理解することなく、全ての絶対否定を兎の角と等しく何にもないのであると主張する知の過失である。なぜならば、何も成立していないのならば、絶対否定であることと矛盾しているからである。

P3 བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་གྲངས་ངེས་བསྟན་པ།

གསུམ་པ་ནི། ཀུན་[L266b4]རྫོབ་ཙམ་དང་བདེན་པའི་ཁྱད་པར་[T247b1]ཕྱེ་བ་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་[245b6]པར་མི་འདུ་བའི་ཀུན་རྫོབ་འདོད་པ་མིན་པ་དང་། གཟུགས་བརྙན་ལ་སོགས་པ་ཀུན་[K254b2][D254b2]རྫོབ་ཏུ་བརྫུན་པ་རྣམས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མིན་ནོ་ཞེས་གསུངས་པའི་[L266b5]དོན་ཡང་། ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མིན་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཡོད་པར་སྟོན་པ་མིན་པར་[T247b2]སྔར་བཤད་[246a1]ཟིན་ལ། རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པའི་འགྲེལ་པ་དང་འཇུག་འགྲེལ་ལས་སྡུག་[K254b3][D254b3]ཀུན་དང་ལམ་གྱི་བདེན་པ་གསུམ་ག་ཀུན་རྫོབ་[L266b6]བདེན་པར་བཤད་ཅིང་། ཚིག་གསལ་ལས་ཀྱང་།

> བརྗོད་བྱ་དང་རྗོད་བྱེད་དང་ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱ་[246a2]ལ་སོགས་[T247b3]པའི་ཐ་སྙད་མ་ལུས་པ་འདི་དག་ཐམས་ཅད་ནི་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་[K254b4][D254b4]ཀྱི་བདེན་པ་ཞེས་བྱའོ། །

[L267a1]ཞེས་ཐ་སྙད་པའི་དོན་ཐམས་ཅད་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་གསུངས་པས་བདེན་པ་གཉིས་སུ་ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་འདུ་བ་ཡིན་ནོ། །

དེ་[246a3]ཡང་གཞི་གང་[T247b4]ཞིག་བརྫུན་པ་སླུ་བའི་དོན་དུ་[L267a2]ཡོངས་སུ་བཅད་ན་མི་སླུ་བའི་དོན་[K254b5][D254b5]ཡིན་པ་རྣམ་པར་གཅད་དགོས་པས་སླུ་མི་སླུ་ནི་དངོས་སུ་ཕན་ཚུན་སྤངས་ཏེ་གནས་པའི་འགལ་བའོ། །

དེ་ལྟར་ཡིན་པ་དེ་ནི་ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕན་ཚུན་སྤངས་པའི་[246a4]ཚུལ་གྱིས་[L267a3]ཁྱབ་[T247b5]བྱེད་དུ་འཇུག་པས་ཕུང་པོ་གསུམ་པ་ཡང་[K254b6][D254b6]ལྡོག་པ་ཡིན་ནོ། །

དེའི་ཕྱིར་ཤེས་བྱ་ལ་བདེན་པ་གཉིས་སུ་གྲངས་ངེས་པར་ཤེས་པར་བྱའོ། །

---

[140] 同上。

དེ་ཡང་།

> དངོས་ཀུན་ཡང་དག་བརྫུན་པ་མཐོང་བ་ཡིས། །
> དངོས་[L267a4]རྙེད་ངོ་བོ་གཉིས་ནི་[246a5]འཛིན་པར་འགྱུར། །

[T247b6]ཞེས་བདེན་གཉིས་ཀྱི་མཚན་[K255a1][D255a1]ཉིད་འཇོག་ཚུལ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་གྲངས་ངེས་འགྲུབ་པ་ཡིན་ནོ། །

P3 二諦の数が決まっていること

第三〔二諦の数が確定していること〕は、唯世俗と諦の特徴を区別したことは世俗諦に含まれない世俗を主張しているのではないのである。鏡像などという諸々の世俗において虚偽であるものは世俗諦ではないのであると説かれている意味もまた、世俗諦ではない世俗が存在していると示しているのではなく、すでに述べたが、『六十頌如理論釈』[141]と『入中論釈』[142]に苦諦と集諦、道諦の三つとも世俗帯であると説明しており、『プラサンナパダー』にもまた、

> 述べられるもの、述べるもの、知るもの、知られるものなどこれら全ての言説は世間の世俗諦であると言説の対象全ては世俗諦である[143]〔。〕

と説かれているので、二諦に全ての所知は含まれるものである。

それについても、ある基体を虚偽なもので欺くものの対象として肯定するのならば、欺かないものの対象であるものを否定する必要があるので、欺くか欺かないとは直接に相互を退けて住する矛盾である。

そのようであるのならば、所知全てにおいて相互を退けているあり方によって遍充するものとして働くので、第三項目もまた排除するのである。

それもまた、

> 全ての実在は真実を見る〔知〕と偽りを見る〔知〕によって、存在が認識される。したがって、全ての事物は二つのあり方を持っていることになる[144]。

と二諦の定義の設定仕方によって数を確定することは成立しているのである。

---

[141] YṢV, 36（7b6–7）.

[142] MABh, 71.3–4（243a7）.

[143] PSPD, 493.5–6: sarva evāyam abhidhānābhidheyajñānajñeyādivyavahāro ’śeṣo lokasaṃvṛtisatyam tiy ucyate / PSPDt, 163b3–4.

[144] MAK, 6.23, 7: samyagmṛṣādarśanalabdhabhāvaṃ rūpadvayaṃ bibhrati sarvabhāvāḥ | MAKt, 205a6–7.

付論 C『菩提道次第小論』訳註

ツォンカパは 39 歳のときに、ニェルのロロでトルンパが著した『教えの階梯大論』と出会い、顕教と密教のすべての教えに間違いないという確信を得た。更に、それぞれの人の能力に応じて導くことができる「道次第」を確信したと『信仰入門』に述べられている[145]。そして、45 歳のときに、全ての仏説は矛盾することなく、一人の人を悟りへと導く道の次第として、体系化した『菩提道次第大論』を著した。それから 14 年を経た後『菩提道次第小論』を著した。すでに先行研究で提示しているように、『菩提道次第小論』の内容は最後の毘鉢舎那の章以外は『菩提道次第大論』をより簡略したものである。『菩提道次第大論』では二諦説について詳しく論じていないが、『菩提道次第小論』では『中論註：正理大海』とほぼ同様な科段を立てて、詳しく論じている[146]。『菩提道次第小論』の正式な題名は以下の通りである。

> སྐྱེས་བུ་གསུམ་གྱིས་ཉམས་སུ་བླང་བའི་བྱང་ཆུབ་ལམ་གྱི་རིམ་པ།（『三士が実践すべき菩提道次第』）

ここでは本研究と関連する毘鉢舎那の章における二諦説について、以下のテキストの箇所を抜き出して和訳する。

D	sde dge par ma, pha. Toh.5393. 192b5–207b1.
K	sku ’bum par ma, pha. 192b5–207b1.
L	bla brang par ma, pha. 208a1–222a5.
T	bkra shis lhun po par ma, pha. 192a2–206b6.
Z	zhol par ma, pha. 176a6–190a3.

[145] 付論 A 参照。

[146] ツルティム（2005, 12–14）, 福田（2018, 18–19）参照。ツォンカパにおける「道次第」の伝承についてはツルティム（2005, 7–23）に論じられている。

R3 ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་གྱི་བདེན་པ་རྣམ་པར་བཞག་པ།

གསུམ་པ་ལ་བཞི། **S1** བདེན་གཉིས་གང་ལས་འབྱེད་པའི་གཞི། **S2** ཇི་ལྟར་དུ་ཕྱེ་བའི་གྲངས། **S3** དེ་ལྟར་དུ་ཕྱེ་བའི་དོན། **S4** ཕྱེ་བ་སོ་སོའི་དོན[K192b6][D192b6]བཤད་པའོ། །[L208a2]

R3 世俗〔諦〕と勝義諦を設定する

第三、〔世俗諦と勝義諦の設定に〕四つある、**S1** 二諦をどの点から区別するかの基体となるもの、**S2** どのように分けられたのかという数、**S3** そのように分けられた意味、**S4** 分けられた〔二諦〕それぞれの意味を説明する。

S1 བདེན་གཉིས་གང་ལས་འབྱེད་པའི་གཞི།

དང་[176b1]པོ་ནི། བདེན་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་གཞི་ལ་སྔ་མ་རྣམས་ལ་འདོད་[T192a3]ཚུལ་མང་དུ་ཡོད་ཀྱང་། འདིར་ནི་བསླབ་བཏུས་ལས། །

> ཤེས་པར་བྱ་བ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་འདིར་ཟད་དོ།

ཞེས་གསུངས་པས་[K193a1][D193a1]ཤེས་བྱ་ནི་དབྱེ་གཞིའོ། །

S1 二諦をどの点から区別するかの基体となるもの

第一〔二諦をどの点から区別するかの基体となるもの〕、二諦を区別する対象については以前の学者たちにたくさんの主張の仕方があったけれども、この著作において（この帰謬論証派の箇所において）は『大乗集菩薩學論』に、

> 知られるべきことについても世俗諦と勝義諦というこれに尽きる[147]。

とお説きになっているので、所知が区別する対象である。

S2 ཇི་ལྟར་དུ་ཕྱེ་བའི་གྲངས།

གཉིས་པ་ནི། [L208a3]རྩ་ཤེ་ལས།[176b2]

---

[147] 『大乗集菩薩学論』（*Śikṣāsamuccaya*）に引用された『父子相見経（*Pitaputrasamāgamasūtra*）』の言葉である（ŚS, 236: etāvaccaitat jñeyam yaduta saṃvrtiḥ paramārthaśca /; ŚSt, 142b2; PPS, 61b4）。

> འཇིག་རྟེན་ཀུན་རྫོབ་[T192a4]བདེན་པ་དང་། །
> དམ་པའི་དོན་གྱི་བདེན་པའོ།

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་གཉིས་སུ་དབྱེའོ། །[K193a2][D193a2]

S2 分類の数 [176b1]

第二〔どのように分けられたのかという数〕は、『中論』に、

> 世間の世俗諦と勝義諦である[148]。

とお説きになっているように世俗諦と勝義諦の二つの諦に分類する。

S3 དེ་ལྟར་དུ་ཕྱེ་བའི་དོན།

གསུམ་པ་ནི། གཉིས་སུ་ཕྱེ་བ་གཉིས་ནི་ཐ་དད་པ་དགོས་པས་ཐ་དད་ཚུལ་ཇི་ལྟར་ཡིན་སྙམ་[L208a4]ན། [T192a5]འདི་ལ་སྔ་[176b3]རབས་པ་མང་པོ་བུམ་པ་དང་སྣམ་བུ་ལྟ་བུ་ངོ་བོ་ཐ་དད་པ་དང་། བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལྟ་བུ་ངོ་བོ་གཅིག་ལ་ལྡོག་པ་ཐ་[K193a3][D193a3]དད་པ་གཉིས་ནི། ཐ་དད་ཀྱུ་གཉིས་ཀ་དངོས་པོ་ཡིན་ལ། གང་རུང་གཅིག་[149]དངོས་པོར་མེད་[T192a6]པའི་ཐ་དད་ནི་[150]གཅིག་པ་བཀག་[L208a5]པའི་ཐ་དད་དེ། །[151] tha dad>[176b4]གསུམ་ཡོད་པས། བདེན་གཉིས་ནི་གཅིག་པ་བཀག་པའི་ཐ་དད་དུ་སྨྲ་ལ། ཁ་ཅིག་[K193a4][D193a4]ནི་དེ་གཉིས་ངོ་བོ་གཅིག་ལ་ལྡོག་པ་ཐ་དད་དུ་འདོད་དོ། །

དབུ་མ་སྣང་བ་ལས་བདག་[T192b1]གཅིག་པའི་འབྲེལ་བ་ནི། དངོས་པོར་མེད་པ་ལའང་མི་[L208a6]འགལ་བར་གསུངས་པ་ལྟར་[176b5]ལེགས་པས། ཐ་དད་ཀྱུ་གཉིས་ཀ་དངོས་པོར་མེད་[K193a5][D193a5]པ་དང་། གང་རུང་གཅིག་དངོས་པོར་མེད་པ་གཉིས་ཀར་[152]ལའང་དང་། ངོ་བོ་གཅིག་ལ་ལྡོག་པ་ཐ་དད་[T192b2]མི་འགལ་ལོ། །

འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རང་གི་ངོ་བོ་རྣམ་པ་[L208b1]གཉིས་ཉེ་བར་བསྟན་ཏེ། [176b6]འདི་ལྟ་སྟེ་ཀུན་རྫོབ་དང་[K193a6][D193a6]དོན་དམ་པའོ།

ཞེས་གསུངས་པས་ཆོས་ཅན་རེ་རེའི་ངོ་བོ་ལ་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའི་ངོ་[T192b3]བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་པའི་ཕྱིར་དང་། བདེན་གཉིས་ངོ་བོ་གཅིག་མིན་ན་ངོ་བོ་ཐ་དད་དུ་ཤིན་ཏུ་ཡང་མི་རིགས་[L208b2]པས་དེ་གཉིས་ལ་

---

[148] MMK, 24.8, 420: lokasaṃvṛtisatyaṃ ca satyaṃ ca paramārthataḥ ‖（諸仏は二諦に基づいて法を説いた。〔すなわち〕世間世俗諦と勝義として（paramārthataḥ）の諦である）。

[149] Z: ཅིག་ D, K, L, T: གཅིག་

[150] Z, མི་ D, K, L, T: ནི་

[151] Z: དོ། ། D, K, L, T: དེ།

[152] Z: ཆར་ D, K, L, T: ཅར་

ངོ་བོ་[K193b1][D193b1]མེད་པས་[177a1]མེད་པར་འགྱུར་ཏེ། ཡོད་པ་ལ་ངོ་བོ་གཅིག་དང་[153]དུ་མར་ཡོད་པ་གང་རུང་གིས་ཁྱབ་པའི་[T192b4]ཕྱིར་རོ། །

བྱང་ཆུབ་སེམས་འགྲེལ་ལས་ཀྱང་།

> ཀུན་རྫོབ་སྟོང་པ་ཉིད་དུ་བཤད། །
> སྟོང་ཉིད་ཁོ་ན་ཀུན་རྫོབ་ཡིན། །
> མེད་ན་མི་འབྱུང་[K193b2][L208b3][D193b2]ངེས་པའི་ཕྱིར། །[177a2]
> བྱས་དང་མི་རྟག་དག་བཞིན་ནོ།

ཞེས་གསུངས་ལ། སྒྱུ་མ་ལྟ་བུ་དེ་རང་[T192b5]གི་དོན་དམ་དང་ངོ་བོ་ཐ་དད་ཡིན་ན། དེ་རང་གི་བདེན་སྟོང་དང་ཡང་ངོ་བོ་ཐ་དད་པས། སྒྱུ་མ་བདེན་གྲུབ་ཏུ་འགྱུར་བས་ངོ་བོ་ཐ་དད་མིན་པས་ངོ་བོ་གཅིག་[K193b3][D193b3]པ་ཡིན་ནོ། །

[L208b4]སྒྱུ་མ་ནི་རང་གི་[177a3]བདེན་སྟོང་ཡིན་ཡང་[154]རང་གི་དོན་དམ་བདེན་པ་[T192b6]ནི་མིན་ནོ། །

གཞུང་འགའ་ཞིག་ལས་བདེན་གཉིས་གཅིག་དང་ཐ་དད་གང་ཡང་མིན་པར་གསུངས་པའི་ཁ་ཅིག་ནི། རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པའི་གཅིག་ཐ་དད་ལ་དགོངས་[K193b4][D193b4]ལ། ཁ་ཅིག་ནི་ངོ་བོ་ཐ་[L208b5]དད་པ་དང་ལྡོག་པ་[177a4]གཅིག་[T193a1]པ་གཉིས་ཀར་[155]མིན་པ་ལ་དགོངས་སོ། །

S3 そのように分けられた意味

第三〔そのように分けられた意味〕は、二つに分けられたという〔その〕二つは異なっているものである必要があるので、どのように異なっているかと思うのならば、この点については、〔チベットの〕以前の多くの者はたとえば、壺と布のように存在が異なっているもの、作られたものと無常なもののように存在は同一であるが、排除の仕方が異なっているものであるという〔この〕二つは、異なっているとされるべきものの両方とも事物であり、いずれか一つが事物として存在していないときの異なりというのは、同一であることを否定した異なりである。〔以上のように〕異なりは三つ存在するので、二諦は〔このうち〕同一であることを否定した異なりであると語るし、〔また、〕ある者がそれら二つは存在は一つであるけれども、排除の仕方は異なっていると主張している。

『中観光明論』に「同一体のものの結びつきとは、実在しないものにおいても矛盾しないのである」[156]と説かれている通りに考えるのが良いので、異なっているとされる

[153] D, K, T, Z: དང་ L: རང་
[154] Z: ཀྱང་ D, K, L, T: ཡང་
[155] Z: ཅར་ D, K, L, T: ཀར་
[156] MA, 221a1–2; 森山（2001, 283–306）参照。

べき二つのものが両方とも実在しないものであったり、いずれか一つが実在しないものであるという両方のいずれにおいても存在が一つで、排除は異なるというのと矛盾しないのである。

『入中論釈』に、

> 一切の事物のそれぞれのあり方は二種類であると〔諸々の仏陀によって〕示されている。すなわち、世俗のものと勝義のものである[157]

とお説きになっているので、主題となっている各々のあり方に世俗のものと勝義のものという二つずつの存在があるからであり、二諦が同一の存在でないならば、異なっている存在であるということは全く不合理であるので、それら二つには存在がないから、存在しないものになってしまうのである。なぜならば、存在するならば、必ず同一の存在であるか、異なったものとして存在しているのかのいずれかであるからである。

『菩提心釈論』[158]にも、

> 世俗は空性に他ならないと説かれている。
> 空性のみが世俗である。
> なぜならば、〔空性を〕なくして、〔世俗は〕生じ得ないと確定しているからである。
> 作られたものと無常なものなどと同様である[159]

とお説きになっている。また、例えば、芽のようなものが自らの勝義と異なった存在であるとするならば、それ〔芽〕が自らの真実空であることとも異なった存在であるので、芽は真実として成立しているものになってしまう。したがって、〔芽は、自らの空性と〕異なった存在ではなく、同一の存在である。芽というものは自らの真実として空であるけれども、自らの勝義諦ではないのである。

いくつかのテキストで二諦は同一と異なったもののいずれでもないのであるとお説きになっている。そのうち、あるものは自性によって成立しているところの同一と異なったものを意図されている。また、あるものは、異なった存在であることと排除が同一であることという両方のいずれでもないということを意図されている。

---

157 MABh, 102.14–15（253a6）.

158 『菩提心釈論（*bodhicittavivaraṇa*）』はナーガールジュナの真作ではないが、チベットではナーガールジュナの真作として仏教の論書にしばしば引用される。

159 BCVV, 204（41a1）.

S4 ཕྱེ་བ་སོ་སོའི་དོན།

བཞི་པ་ལ་གསུམ། T1 ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་དང་། T2 དོན་དམ་བདེན་པ་དང་། T3 བདེན་གཉིས་ཀྱི་གྲངས་ངེས་བསྟན་པའོ། །

S4 分けられた〔二諦〕それぞれの意味を説明する [177a4]

第四〔分けられた〔二諦〕それぞれの意味を説明する〕に三つがある。T1 世俗諦と、T2 勝義諦、T3 二諦の数の確定していることを示すことである。

T1 ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ།

དང་པོ་ལ་གསུམ། **U1** ཀུན་རྫོབ་[K193b5][D193b5]དང་བདེན་པའི་སྒྲ་དོན་བཤད་[T193a2]པ། [L208b6] **U2** ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་མཚན་[177a5]ཉིད། **U3** ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་དབྱེ་བའོ། །

T1 世俗諦

第一〔世俗諦について〕三つがある。**U1** 世俗と諦との語義を説明すること、**U2** 世俗諦の定義、**U3** 世俗の分類である。

U1 ཀུན་རྫོབ་དང་བདེན་པའི་སྒྲ་དོན་བཤད་པ།

དང་པོ་ནི། ཚིག་གསལ་ལས། ཀུན་རྫོབ་ལ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་སྒྲིབ་པ་དང་། ཕན་ཚུན་བརྟེན་པའི་དོན་དང་། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་གསུམ་བཤད་[K193b6][D193b6]ཅིང་། ཕྱི་མ་ནི་[T193a3]བརྗོད་བྱ་དང་རྗོད་བྱེད་དང་།[L209a1]ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱ་ལ་སོགས་པའི་མཚན་[177a6]ཉིད་ཅན་དུ་བཤད་པས། ཡུལ་ཅན་གྱི་ཐ་སྙད་ཤེས་བརྗོད་ཙམ་མིན་ལ། ཤེས་བྱ་དང་བརྗོད་བྱ་གང་ཡིན་ཐམས་ཅད་ཀྱང་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་མི་[K194a1][D194a1]གཟུང་ངོ་། །

[T193a4]དེ་ལ་གཟུགས་[L209a2]སོགས་རྣམས་ཤེས་པ་ཀུན་རྫོབ་པ་གང་གི་ངོར་བདེན་པར་འཇོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་[177b1]པ་ནི། གསུམ་གྱི་དང་པོ་ཡིན་ལ། དེ་ཡང་ཆོས་རྣམས་ལ་རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པའི་རང་གི་ངོ་བོ་མེད་པ་[K194a2][D194a2]ལ། ཡོད་པར་སྒྲོ་འདོགས་[T193a5]པའི་མ་རིག་པ་ཡིན་ཏེ། དོན་ལ་བདེན་[L209a3]པར་གྲུབ་པ་མི་སྲིད་པས་བདེན་པར་འཇོག་པ་ནི་བློའི་ངོར་ཡིན་ལ། བདེན་འཛིན་མེད་པའི་[177b2]བློའི་ངོར་བདེན་པར་བཞག་ཏུ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེ་ལྟར་ཡང་འཇུག་པ་ལས།

> གཏི་[K194a3][D194a3]མུག་རང་བཞིན་[T193a6]སྒྲིབ་ཕྱིར་ཀུན་རྫོབ་སྟེ། །

> དེས་[160]གང་བཅོས་མ་བདེན་པར་སྣང་དེ་[L209a4]ནི། །
> ཀུན་རྫོབ་བདེན་ཞེས་ཐུབ་པ་དེས་གསུངས་ཏེ། །
> བཅོས་མར་གྱུར་པའི་དངོས་ནི་ཀུན་རྫོབ་[177b3]ཏུའོ། །

ཞེས་སོ། །
འདིར་འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> དེ་ལྟར་རེ་ཞིག་[K194a4][D194a4]སྲིད་[T193b1]པའི་ཡན་ལག་གིས་ཡོངས་སུ་བསྡུས་པ། ཉོན་མོངས་པ་ཅན་གྱི་མ་རིག་པའི་དབང་[L209a5]གིས་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་རྣམ་པར་གཞག་[161]གོ།
> དེ་ཡང་ཉན་ཐོས་དང་རང་སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ཆུབ་[177b4]སེམས་དཔའ་ཉོན་མོངས་པ་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་[K194a5][T193b2][D194a5]སྤངས་པ། འདུ་བྱེད་གཟུགས་བརྙན་ལ་སོགས་པའི་ཡོད་པ་ཉིད་དང་འདྲ་བར་གཟིགས་པ་རྣམས་ལ་ནི་བཅོས་[L209a6]མའི་རང་བཞིན་ཡིན་གྱི། བདེན་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ་བདེན་པར་མངོན་པར་རློམ་པ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །
> [177b5]བྱིས་པ་རྣམས་ལ་ནི་[K194a6][T193b3][D194a6]སླུ་བར་བྱེད་པ་ཡིན་ལ། དེ་ལས་གཞན་པ་རྣམས་ལ་ནི་སྒྱུ་མ་ལ་སོགས་པ་ལྟར་རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་བར་འབྱུང་བ་ཉིད་ཀྱིས་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དུ་[L209b1]འགྱུར་རོ།

ཞེས་གསུངས་པས་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡོད་པར་འཇོག་པ་རྣམས་མ་རིག་[K194b1][D194b1]པས་[177b6][T193b4]ཡོད་པར་འཇོག་པ་དང་། ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་སྤངས་པའི་ཉན་རང་དང་བྱང་སེམས་ཀྱི་ངོར་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་མི་འཇོག་པར་སྟོན་པ་མིན་ནོ། །

དེ་ལ་[L209b2]དང་པོའི་རྒྱུ་མཚན་ནི་སྔར་བཤད་པ་ལྟར་ཉོན་མོངས་པ་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་[T193b5]ནི་[D194b2][K194b2]བདེན་འཛིན་ཡིན་པས། [178a1]དེས་བཟུང་བའི་དོན་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་དང་། ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན་ན་ཐ་སྙད་དུ་ཡོད་པས་ཁྱབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་ཆོས་རྣམས་ཀུན་[L209b3]རྫོབ་ཏུ་ཡོད་པར་འཇོག་པའི་འཇོག་སའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་ན་[T193b6]ནི། ཉོན་[D194b3][K194b3]མོངས་ཅན་གྱི་[178a2]མ་རིག་པ་ལ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བྱས་པ་དེ་མ་ཡིན་དགོས་སོ། །

གཉིས་པའི་རྒྱུ་མཚན་ནི་ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པའི་ཀུན་རྫོབ་སྤངས་པ་རྣམས་ལ་གང་གི་ངོར་བདེན་པར་[L209b4]འཇོག་པའི་བདེན་ཞེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་མེད་[T194a1]པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས། འདུ་[K194b4][D194b4]བྱེད་རྣམས་[178a3]དེ་དག་གི་ངོར་མི་བདེན་པར་བསྒྲུབས་ཀྱི། ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མ་ཡིན་པར་མ་བསྒྲུབས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་དེ་དག་གི་ངོར་འདུ་བྱེད་རྣམས་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དུ་གསུངས་པས་[L209b5]ནི། དེའི་ངོར་ཀུན་[T194a2]རྫོབ་དང་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་ནང་ནས་[K194b5][D194b5]བདེན་པར་གཞག་ཏུ་[178a4]མེད་པས། ཙམ་གྱི་སྒྲས་ནི་བདེན་པ་གཅོད་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མི་གཅོད་པས་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དང་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་

---

[160] D, K, T, D: དེ་ L, Z: དེས་
[161] D, K, T, Z: བཞག་ L: བཞག་

གཉིས་གསུངས་པའི་དགོངས་པ་དེ་བཞིན་དུ་ཤེས་[L209b6]པར་[T194a3]བྱའོ། །

ཚིག་གསལ་ལས། འཇིག་[K194b6][D194b6]རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པ་ནི། འཇིག་[178a5]རྟེན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་སྟེ། ཞེས་གསུངས་པ་ནི་འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> ཀུན་རྫོབ་དེས་གང་ཞིག་བདེན་པར་སྣང་ཞིང་རང་བཞིན་མེད་བཞིན་དུ་རང་བཞིན་དུ་སོ་སོར་[T194a4]སྣང་[L210a1]བ་དེ་ནི། འཇིག་རྟེན་ཕྱིན་ཅི་ལོག་[K195a1][D195a1]ཏུ་གྱུར་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པས་འཇིག་རྟེན་[178a6]གྱི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་སྟེ།

ཞེས་སྔར་བཤད་པའི་མ་རིག་པའི་ཀུན་རྫོབ་དེའི་ངོར་བདེན་པ་ལ་གསལ་བར་གསུངས་པ་ལྟར་བྱ་ཡི།[162]ཐ་སྙད་[T194a5]དུ་བདེན་[L210a2]པར་གྲུབ་[K195a2][D195a2]པ་ལ་མི་བྱ་སྟེ། གཞན་དུ་ན་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མི་སྲིད་པའི་ལུགས་དང་[178b1]འགལ་བའི་ཕྱིར་དང་། བདེན་གྲུབ་འགོག་པ་དང་བདེན་མེད་སྒྲུབ་པ་རྣམས་ཐ་སྙད་དུ་བྱེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

[T194a6]ཚུལ་འདིས་སློབ་དཔོན་[K195a3][D195a3]ཡེ་ཤེས་སྙིང་པོས་[L210a3]ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པར་གནས་པར་བཤད་པའང་ཤེས་པར་བྱའོ། །

འོ་ན་ཆོས་ཉིད་དང་བདག་གཉིས་བདེན་[178b2]འཛིན་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོར་བདེན་པས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་འགྱུར་རོ་[T194b1]སྙམ་ན། བདེན་འཛིན་ཀུན་རྫོབ་པའི་[K195a4][D195a4]ངོར་བདེན་པ་ཙམ་ཞིག་ལ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་[L210a4]པར་འཇོག་ན། དེ་ལྟར་འགྱུར་མོད་ཀྱང་དེ་ལྟར་ནི་མི་སླ་ཡི་[163]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་བདེན་པ་དེ་ཀུན་རྫོབ་[178b3]པ་གང་གི་ངོར་བདེན་པའི་ཀུན་རྫོབ་པ་དང་དེའི་[T194b2]ངོར་བདེན་ཚུལ་བཤད་པ་ཙམ་མོ། །

U1 世俗と諦との語義を説明すること

第一〔世俗と諦の語義を説明すること〕は、『プラサンナパダー』に、世俗には、真実に対して覆い隠すもの、相互に依存しているもの、世間の言説という三つの意味があると説明している。〔そのうち、〕後者（世間の言説）は述べられるものや述べるもの、知るものと知られるものなどの特質を持っているものである[164]と説明されている

[162] Z: བྱའི་ D, K, L, T: བྱ་ཡི།

[163] T, Z: སླའི་ D, K, L: སླ་ཡི།

[164] PSPD,492.10–12:samantād varaṇaṃ saṃvṛtiḥ / ajñānaṃ hi samantāt sarva padār thatat tvāvac chādanāt saṃvṛtir ity ucyate /parasmarasaṃ bhavanaṃ vā saṃvṛtir anyonyasamāśrayeṇety arthaḥ / atha vā saṃvṛtiḥ saṃketo lokavyavahāra ity arthaḥ / atha vā saṃvṛtiḥ saṃketo lokavyavahāra ity arthaḥ/ sa ābhidhānābhidheyajñānajñeyādilakṣaṇaḥ// PSPDt, 163a5–6: ཀུན་ནས་སྒྲིབ་པས་ན་ཀུན་རྫོབ་སྟེ། མི་ཤེས་པ་ནི་དངོས་པོའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་ཀུན་ནས་འགེབས་པར་བྱེད་པའི་ཕྱིར་ཀུན་རྫོབ་ཅེས་བྱའོ། ། ཡང་ན་ཕན་ཚུན་བརྟེན་པས་ན་ཀུན་རྫོབ་སྟེ། ཕན་ཚུན་བརྟེན་པ་ཉིད་ཀྱིས་ན་ཞེས་བྱ་བའི་དོན་ཏོ། ། ཡང་ན་ཀུན་རྫོབ་ནི་བརྡ་སྟེ། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཅེས་བྱ་བའི་ཐ་ཚིག་གོ །དེ་ཡང་བརྗོད་པ་དང་། བརྗོད་བྱ་དང་། ཤེས་པ་དང་ཤེས་བྱ་ལ་སོགས་པའི་མཚན་ཉིད་ཅན་ནོ། །覆い隠している〔ので〕、世俗である。

ので、対象を持つものの言説とは、知るものと述べるものだけではなく、知られるものと述べられるもののいずれか全てもまた世俗諦であると把握しないのである。そのうち、色などが世俗の如何なる知にとって諦であると設定するような世俗は三つのうちの最初のものであり、〔色などが世俗である如何なる知にとって諦であると設定する世俗なるもの〕それについても、諸法において自性によって成立しているそれ自身がないものに対して、存在していると増益するところの無明である。なぜならば、対象において真実として成立しているものはあり得ないので、真実であると設定するものは知にとってであり、真実執着ではない知にとっては真実であると設定することがないからである。

同様に『入中論』に、

> 愚痴は自性 (法性) を覆い隠すので、世俗である。
> すなわち、その〔愚痴〕によって作られたものが真実なものとして顕れる。
> その〔現われている〕ものは、世俗諦であると牟尼はお説きになっている。
> 作りものとなっているところの実在は世俗においてである[165]。

と説かれている。

それについて、『入中論釈』に、

> 以上のように、輪廻の〔十二〕支分によって完全にまとまっている有染汚の無明の力によって世俗諦を設定しているのである。
> それについてもさらに、有染汚の無明を断じた声聞と独覚、菩薩たちは行である鏡像などが存在しているようにご覧になっている者たちにとっては、作られたものの自性であって、真実ではないのである。なぜならば、真実なものであると思い込むことがないからである。
> 〔行である鏡像などが〕凡夫などにとって欺くものであるが、それ以外の者たちにとっては、幻などの如き、縁起しているがゆえに世俗のみとしてあることになっている[166]。

すなわち、無知（＝無明）は、事物の真実を、完全に妨げているが故に、「世俗」と言われる。あるいは、相互に依存している〔ので〕、世俗である。すなわち、相互に依存しあうので、という意味である。あるいは、世俗とは言語協約（saṃketa, བརྡ།）である。すなわち、世間の言説という意味である。それについても、述べるものと述べられるもの、知るものと知られるものなどの特質を持っているものである）

[165] MAK,6.28,7:mohaḥ svabhāvāvaraṇād dhi saṃvṛtiḥ satyaṃ tayā khyāti yad eva kṛtrimam | jagāda tat saṃvṛtisatyam ity asau muniḥ padārthaṃ kṛtakañ ca saṃvṛtiḥ|| MAKt, 205b2–3.

[166] MABh, 107.17–108.6（255a1–3）.

とお説きになっているので、世俗諦が存在すると設定する者たちは無明によって存在すると設定される〔と示しているわけではなく〕、有染汚の無明を断じた声聞、独覚、菩薩の知にとって世俗諦は設定することができないのであると示しているわけではないのである。

そのうち、第一 (世俗諦が存在すると設定する者たちは無明によって存在すると設定される〔と示しているわけではない〕) の理由は、前に説明した通りに、有染汚の無明は真実執着であるので、それ〔真実執着〕によって捉えられる対象は言説においてさえ存在しないからであり、世俗諦であるのならば、必ず言説として存在しているからである。

したがって、諸法が世俗有であると設定するときの設定する対象の世俗である（言説有）ならば、有染汚の無明をさして、世俗である（無明) と言ったときのその世俗でなければならない。

第二の理由（有染汚の無明を断じた声聞、独覚、菩薩の知にとって世俗諦は設定することができないのであると示しているのではない）は、有染汚の無明という世俗を断じた者たちにとって、その知にとって諦として設定するところの真実であると思い込むという世俗が存在しないという理由によって諸々の行は、彼ら（有染汚の無明である世俗を断じた者たち）にとって真実ではないと確立されているのであって、世俗諦ではないと確立されているのではないからである。

したがって、彼らの知にとって諸々の行は唯世俗であるとお説きになっているので、彼らの知にとって世俗と真実という二つのうちの真実であると設定することはないので、「唯」という言葉によって真実であることを否定しているのであって、世俗諦であることを否定しているわけではないので、唯世俗と世俗諦の両方をお説きになっている真意を以上の通りに知るべきである。

『プラサンナパダー』に、

> 世間の世俗にとって真実であるというのは、世間世俗諦である[167]。

とおっしゃっているのは、『入中論釈』に、

> その世俗によってあるものが真実として顕れ、それが自性がないものでありながら、それぞれのものが自性として顕れているものそれが、顛倒したものとなっ

[167] PSPD,493.5:lokasaṃvṛtyā satyaṃ lokasaṃvṛtisatyaṃ / PSPDt, 163b2: འཇིག་རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པ་ནི། ། འཇིག་རྟེན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་སྟེ་（世間の世俗諦とは、世間〔の〕世俗諦である。すなわち…)

ている世間の世俗にとって真実であるので、世間の世俗諦である[168]。

と説かれ、前に説明した無明である世俗の知にとって真実であるものをさしているとはっきりとお説きになっている通りに考えるべきであって、言説において真実なものとして成立しているものをさしていると考えるべきではないのである。なぜならば、もしそうでないならば、自らの特質によって成立しているものは言説においてさえも存在し得ないという学説と矛盾するからであり、真実として成立しているものを否定する。また、真実として存在しないことを論証することなどは言説において行っているからである。

以上に述べた内容によって阿闍梨イェシェー・ニンポが世俗において真実なものとして存在している[169]と説明していることもまた知るべきである。

それならば、法性と二我は真実執着である世俗の知にとって真実であるので、世俗諦であることになってしまうのであると考えるならば、真実執着である世俗の知にとって単なる真実であるものすべてを世俗諦であると設定するならば、そのようになってしまうのであるが、そのように主張するべきではなく、世俗諦というときのその諦はその世俗にとって真実であるというときの世俗の知と、その知にとって真実であるあり方を単に説明しているだけであるからである。

U2 ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད།

གཉིས་[K195a5][D195a5]པ་ནི། ཕྱི་ནང་གི་དངོས་པོ་འདི་རྣམས་རེ་རེ་ལ་ཡང་[L210a5]དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོ་བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་དེ། དེ་ཡང་མྱུ་གུ་ལྟ་བུ་ཞིག་ལ་མཚོན་ན། [178b4]ཤེས་བྱ་ཡང་དག་པ་དེ་ཁོ་ནའི་དོན་གཟིགས་[T194b3]པའི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་པའི་[K195a6][D195a6]མྱུ་གུའི་ངོ་བོ་དང་། ཤེས་བྱ་རྫུན་[170]པ་སླུ་བའི་དོན་འཛལ་བའི་ཐ་[L210a6]སྙད་པའི་ཤེས་པས་རྙེད་པའི་མྱུ་གུའི་ངོ་བོའོ། །

དེའི་སྔ་མ་ནི་མྱུ་གུའི་དོན་དམ་བདེན་པའི་ངོ་བོ་ཡིན་[178b5]ལ། ཕྱི་མ་ནི་མྱུ་གུའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་[T194b4]པའི་ངོ་བོའོ། །

དེ་ལྟར་[K195b1][D195b1]ཡང་འཇུག་པ་ལས།

> དངོས་ཀུན་ཡང་དག་རྫུན་པ་མཐོང་བ་ཡིས། །
> དངོས་རྙེད་[L210b1]ངོ་བོ་གཉིས་ནི་འཛིན་པར་འགྱུར། །
> ཡང་དག་མཐོང་ཡུལ་གང་དེ་དེ་ཉིད་དེ། །
> མཐོང་བ་རྫུན་[171][178b6]པ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་གསུངས། །[T194b5]

---

[168] MABh, 107.8–10（254b65–6）.

[169] SDVV, 85–86（9a3–4）.

[170] Z: བརྫུན་　D, K, L, T: རྫུན་

[171] Z: བརྫུན་　;D, K, L, T: རྫུན་

ཞེས་སོ། །

འདིས་ནི་[K195b2][D195b2]སྒྱུ་མའི་ངོ་བོ་ལ་བདེན་གཉིས་ཀྱི་ངོ་བོ་གཉིས་ཡོད་པའི་དོན་དམ་ནི། ཤེས་པ་ཐ་མ་དང་། ཀུན་རྫོབ་[L210b2]ནི་ཤེས་པ་ཕྱི་མས་རྙེད་པར་སྟོན་གྱི། སྒྱུ་མའི་ངོ་བོ་གཅིག་ཉིད་ཤེས་པ་སྔ་ཕྱི་གཉིས་[179a1]ལ་ལྟོས་ནས་བདེན་པ་[T194b6]གཉིས་སུ་སྟོན་པ་མིན་ཏེ།[172] འཇུག་[K195b3][D195b3]འགྲེལ་ལས།

> དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རང་གི་ངོ་བོ་རྣམ་པ་གཉིས་ཉེ་བར་བསྟན་ཏེ། འདི་ལྟ་སྟེ་ཀུན་རྫོབ་[L210b3]དང་དོན་དམ་པའོ། །

ཞེས་དངོས་པོ་རེ་རེའི་ངོ་བོ་ལ་གཉིས་གཉིས་སུ་[179a2]ཕྱེ་ནས་དོན་[T195a1]དམ་པ་ནི་ཡང་དག་པའི་དོན་གཟིགས་པའི་ཤེས་[K195b4][D195b4]པ་དང་། ཀུན་རྫོབ་ནི་རྫུན་[173]པ་མཐོང་བའི་ཤེས་པས་རྙེད་པར་གསུངས་སོ། །

ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ནི་དོན་ལ་མི་བདེན་ཀྱི། [L210b4]བདེན་འཛིན་གྱི་ངོ་ཙམ་དུ་བདེན་པ་ཡིན་པས། དེའི་[T195a2]དོན་ལྡོག་ངེས་པ་ལ་[179a3]རྫུན་[174]པར་ངེས་དགོས་སོ། །

མཚན་གཞི་བུམ་པ་[K195b5][D195b5]ལྟ་བུ་ཞིག་ཤེས་བྱ་རྫུན་པ་སླུ་བའི་དོན་དུ་ངེས་པ་ལ། གཞི་དེ་ལ་བདེན་པར་འཛིན་པའི་ཞེན་ཡུལ་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་སུན་ཕྱུང་བའི་[L210b5]ལྟ་བ་རྙེད་དགོས་ཏེ། བདེན་[T195a3]པ་རིགས་པས་མ་ཁེགས་[175]པར་བརྫུན་[176]པ་[179a4]ཚད་མས་མི་འགྲུབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

[K195b6][D195b6]བུམ་སྣམ་ལ་སོགས་པ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན་ཡང་[177]དེ་དག་བློས་གྲུབ་པ་ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་དོན་བློས་འགྲུབ་[178]མི་དགོས་ཏེ། བུམ་སྣམ་སོགས་རང་[L210b6]བཞིན་[T195a4]མེད་བཞིན་དུ་སྣང་བའི་སྒྱུ་མ་ལྟ་བུ་ཡིན་ཡང་[179]། དེ་དག་གྲུབ་[179a5]པའི་བློས་སྒྱུ་མ་ལྟ་[K196a1][D196a1]བུའི་དོན་འགྲུབ་[180]མི་དགོས་པ་བཞིན་ནོ། །

དེའི་ཕྱིར་དབུ་མའི་ལྟ་བ་མེད་པའི་སོ་སྐྱེའི་ཤེས་ངོ་ལ་ལྟོས་ཏེ་བུམ་སྣམ་སོགས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་དང་། འཕགས་[T195a5]པ་ལ་ལྟོས་ཏེ་[L211a1]དོན་དམ་བདེན་པར་འཇོག་པ་འདིའི་ལུགས་[K196a2][D196a2]སུ་སླ་བ་ནི་རིགས་[179a6]པ་མིན་ཏེ། འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> དེ་ལ་སོ་སོའི་སྐྱེ་བོ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ཉིད། འཕགས་པ་སྣང་བ་དང་བཅས་པའི་སྤྱོད་ཡུལ་ཅན་[T195a6]རྣམས་ཀྱི། ཀུན་རྫོབ་ཙམ་ཡིན་ལ། དེའི་རང་བཞིན་སྟོང་བ་ཉིད་གང་ཡིན་[K196a3][D196a3]པ་དེ་ནི། དེ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་པའོ་[179b1]

---

[172] Z: སྟེ། D, K, L, T: ཏེ།
[173] Z: བརྫུན་ D, K, L, T: རྫུན་
[174] Z: བརྫུན་ D, K, L, T: རྫུན་
[175] L:ཁྲེགས་ D, K, T, Z: ཁེགས་
[176] Z: བརྫུན་ D, K, L, T: རྫུན་
[177] Z: ཀྱང་ D, K, L, T: ཡང་།
[178] D, K, L, T, Z: གྲུབ་
[179] Z: ཀྱང་ D, K, L, T: ཡང་
[180] Z: འགྲུབ་ D, K, L, T: གྲུབ་

ཞེས་གསུངས་པ་ལས་བཟློག་ནས་སྨྲ་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

སོ་སོ་སྐྱེ་བོ་རྣམས་ཀྱིས་ནི་བུམ་པ་སོགས་ལ་བདེན་པར་[T195b1]འཛིན་ལ། དེ་ཉིད་དོན་དམ་པར་ཡོད་པར་འཛིན་པ་ཡང་ཡིན་པས། དེ་དག་གི་ཤེས་ངོ་དེ་[K196a4][D196a4]ལ་ལྟོས་ཏེ་བུམ་སོགས་རྣམས་དོན་དམ་པར་[179b2]གྲུབ་པ་ཡིན་གྱི། ཀུན་རྫོབ་པའི་དོན་མིན་ནོ། །

དེ་དག་གི་ངོར་དོན་དམ་པར་གྲུབ་པའི་གཞི་བུམ་སོགས་[T195b2]རྣམས་འཕགས་པའི་རྒྱུད་ཀྱི་སྣང་བ་སྒྱུ་མ་ལྟ་བུ་འཇལ་བའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་གཟིགས་པ་ལ་ལྟོས་[K196a5][D196a5]ནས་ཀུན་རྫོབ་པ་ཡིན་ནོ། །

ཤེས་པ་དེ་ལ་ལྟོས་ན་བདེན་[179b3]པར་གཞག་ཏུ་མེད་པས་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་ཞེས་གསུངས་སོ། །

དེ་ལྟ་ནའང་[181]དེ་[182]དག་[T195b3]གི་རང་བཞིན་དོན་དམ་བདེན་པར་གསུངས་པས་བུམ་སོགས་ཀུན་རྫོབ་དང་། དེ་དག་གི་རང་བཞིན་[K196a6][D196a6]འཕགས་པའི་དོན་དམ་མོ་ཞེས་ཕྱེ་ནས་བརྗོད་པར་བྱ་ཡི།[183]བུམ་སོགས་འཕགས་[179b4]པ་ལ་དོན་དམ་མོ་ཞེས་སྨྲ་བར་མི་བྱ་སྟེ། དེའི་ཡང་[T195b4]དག་པའི་དོན་མཐོང་བའི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་བུམ་སོགས་མ་རྙེད་པའི་ཕྱིར་དང་། ཡང་དག་པའི་དོན་[K196b1][D196b1]མཐོང་བའི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་པ་དོན་དམ་བདེན་པའི་དོན་དུ་གསུངས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

U2 世俗諦の定義 [178b3]

第二〔世俗諦の定義〕は、これら内外の実在のいずれにも、世俗のもののあり方と勝義のもののあり方という二つずつのあり方がある。それについて芽のようなものを例にして言うならば、正しい所知、すなわち真実義の対象をご覧になる正理知によって得られる（＝認識される）芽のあり方と、虚偽なる所知、すなわち欺く対象を量る言説知によって得られる芽のあり方とである。

このうち前者は、芽の勝義諦のあり方であり、後者は、芽の世俗諦のあり方である。

それと同様に、また『入中論』に、

> 全ての事物は真実を見る〔知〕と虚偽なものを見る〔知〕によって、存在が認識される。
> したがって、すべての実在は二つの存在を持っていることになる。
> 正しい認識の対象であるもの〔それ〕は真実（tattva）であり、
> 虚偽の認識の対象は世俗諦であると〔世尊が〕お説きになった[184]。

と言われている。

---

181 Z, K, L, T: ནའང་ D: ན་

182 Z, K, L, T: དེ་ D:འདི་

183 Z: བྱའི། D, K, T: བྱ་ཡི།

184 MAK,6.23,7:samyagmṛṣādarśanalabdhabhāvaṃ rūpadvayaṃ22 bibhrati sarvabhāvāḥ | samyagdṛśāṃ yo viṣayaḥ23 sa tattvaṃ mṛṣādṛśāṃ saṃvṛtisatyam uktam || MAKt, 205a5–6.

これは芽というあり方に二諦という二つのあり方があるというときの勝義のあり方とは、前者の知によって得られるものであり、世俗のものは後者の知によって得られるものであると示しているのであって、芽という一つの存在に前後の知に基づいて二つの真実があると示しているのわけではないのである。すなわち、『入中論釈』に、

> 一切の実在のそれ自身の存在は二種類のものがあると示されている。すなわち、世俗のものと勝義のものである[185]。

と言い、事物それぞれのあり方を二つずつに分けて勝義のものは正しい対象をご覧になる知〔によって得られるものであり〕、世俗は虚偽なものをご覧になる知によって得られるものであるとお説きになっているのである。

世俗諦は対象について真実でないのであるが、真実執着だけにとって真実であるので、その対象を確定するために、その対象は虚偽なものであることを確定する必要がある。

述定するときの主語であるもの、例えば、壺のようなものは虚偽なる所知、すなわち欺く対象であると確定するために、その〔壺〕基体に対して真実であると捉える〔知〕の思念対象は正理知によって否定されるという見解を得ている必要がある。なぜならば、真実なものが正理によって否定されずに虚偽なものは量によって確立されることがないからである。

壺と布などは世俗諦であるけれども、それらが知によって成立するときに、世俗諦の意味は知によって成立されている必要はないのである。すなわち、壺や布などが無自性でありながら、顕れている幻のごときものであるけれども、それら〔幻のごときもの〕が成立している知によって〔それらが〕幻のごときものであるという意味は成立する必要はないのと同様である。

したがって、中観の見解を持っていない凡夫の知にとって壺や布などは世俗諦であって、聖者にとっては勝義諦であると設定することがこの帰謬派の説であると主張するのは正しくないのである。なぜならば、『入中論釈』に、

> そのうち、凡夫たちにとっての勝義であるもの、その同じものが、顕れを持っている活動対象を有するところの聖者たちにとっては唯世俗であり、その同じもの〔唯世俗〕の自性という空性であるところのものが、それら〔諸々の聖者にとって〕の勝義のものである[186]。

とお説き二なっているテキストの真意を逆転して主張しているものであるからで

185 MABh, 102.14–15（253a6）.
186 MABh, 108.13–16（255a5）.

ある。

凡夫たちが壺などに対して真実であると捉えるが、それ〔壺〕が勝義として存在していると捉えていることでもあるので、彼らの知にとって壺などは勝義として成立しているものであって、世俗の対象ではないのである。

彼ら「凡夫たち」の知にとって勝義なものとして成立している基体である壺などは聖者の心〔相続〕に顕れている幻のごときものを量る智慧にとっては世俗のものである。

その〔聖者の〕知にとって真実であると設定されることがないので、唯世俗であるとおっしゃっているのである。

そうであっても、それら〔壺と布〕の自性は勝義諦であるとおっしゃっているので、壺などは世俗であり、それらの自性は聖者にとっての勝義であると分けて述べるべきであって、壺などは聖者にとって勝義であると述べるべきではないのである。なぜならば、その〔聖者〕の正しい対象を見ている正理知によって壺などは得られないからであり、正しい対象を見ている正理知によって得られるものが勝義諦の意味であるとおっしゃっているからである。

U3 ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་དབྱེ་བ།

གསུམ་པ་ནི།[179b5]དབུ་མ་རང་རྒྱུད་པ་དག་ཤེས་པ་རང་[T195b5]གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་སྣང་བ་ནི། སྣང་བ་ལྟར་དུ་ཡོད་པར་ངེས་པས། ཡུལ་ཅན་ལ་ཡང་ལོག་[K196b2][D196b2]གཉིས་མི་འབྱེད་པར་ཡུལ་དུ་སྣང་བ་ལ་ཇི་ལྟར་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་ཡོད་མེད་འབྱེད་པ་[179b6]རྣམས་ནི། བདེན་གཉིས་[T195b6]ལས།

> སྣང་དུ་འདྲ་ཡང་དོན་བྱེད་དག།[195b6]
> ནུས་པའི་ཕྱིར་དང་མི་ནུས་ཕྱིར། །
> ཡང་དག་ཡང་དག་མ་ཡིན་[K196b3][D196b3]པའི། །
> ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ནི་དབྱེ་བ་བྱས། །

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་བཞེད་དོ། །

ལུགས་འདི་ནི་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་ལ་རང་གི་མཚན་[180a1][T196a1]ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་གང་སྣང་བ་ཐམས་ཅད། ཤེས་པ་དེ་མ་རིག་པས་བསླད་པའི་སྣང་བར་བཞེད་པས། ཀུན་[K196b4][D196b4]རྫོབ་པའི་དོན་ལ་ཡང་ལོག་གཉིས་སུ་མི་འབྱེད་དོ། །

འདིར་འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> གང་ཞིག་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་[T196a2]རྫུན་[187][180a2]པ་དེ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

---

[187] Z: བརྫུན་ D, K, T: རྫུན་

ཞེས་གསུངས་པ་ནི་བརྡ་ལ་བྱང་བའི་འཇིག་རྟེན་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར་བྱད་བཞིན་གྱི་[K196b5]གཟུགས་བརྙན་ལྟ་བུ་དེ་བྱད་བཞིན་དུ་མི་བདེན་པས། དེ་ལ་ལྟོས་པའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མིན་[T196a3]ནོ། །

དེ་ལྟ་ནའང་[180a3]ཤེས་བྱ་རྟེན་[188]པ་སླུ་བའི་དོན་མཐོང་བས་རྙེད་པའི་དོན་ནི་ཡིན་པས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའོ། །

གཟུགས་བརྙན་སྣང་བའི་ཤེས་པ་སྣང་ཡུལ་ལ་[K196b6][D196b6]འཁྲུལ་བ་བཞིན་དུ། མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་སྔོན་པོ་ལ་སོགས་པ་[189]རང་[T196a4]གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་[180a4]གྲུབ་པར་སྣང་བ་ཡང་སྣང་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བར་མཚུངས་སོ། །

གཞལ་བྱ་བདེན་པ་འཇོག་ན་དེ་ལྟར་འཁྲུལ་བ་དེས་འཇོག་པ་འགལ་ཡང་། [K197a1][D197a1]གཞལ་བྱ་རྟེན་[190]པ་འཇོག་པ་ལ་དེ་ཉིད་གྲོགས་སུ་འགྲོ་བ་ཡིན་ནོ། །

དེ་ལྟར་[191]མ་ཡིན་[T196a5]ན་ཐ་སྙད་དུ་བདེན་པར་མ་གྲུབ་ན། [180a5]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་འཇོག་མི་ནུས་པས་[192]སྒྱུ་མ་ལྟ་བུའི་རྟེན་[193]པ་རྣམས་ཐ་སྙད་དུ་འཇོག་ན། [K197a2][D197a2]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་གཞག་མི་ནུས་པར་འགྱུར་རོ། །

ཐལ་འགྱུར་བའི་ལུགས་ཀྱིས་ནི།འཕྲལ་གྱི་འཁྲུལ་[T196a6]རྒྱུ་མ་བསླད་པའི་ཤེས་པ་དྲུག་དང་། དེ་ལས་བཟློག་པའི་[180a6]ཤེས་པ་དྲུག་དང་། ཤེས་པ་སྔ་མ་དྲུག་གིས་བཟུང་བའི་ཡུལ་དྲུག་དང་། ཕྱི་[K197a3][D197a3]མ་དྲུག་གིས་བཟུང་བའི་ཡུལ་དྲུག་སྟེ། ལོག་པའི་ཡུལ་ཡུལ་ཅན་དྲུག་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་[T196b1]དང་། མ་ལོག་པའི་ཡུལ་ཡུལ་ཅན་དྲུག་ཡང་དག་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འཇོག་ལ། དེ་ཡང་འཇིག་[180b1]རྟེན་པའམ་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མ་ཉིད་ལ་ལྟོས་ནས་ཡང་དག་[K197a4][D197a4]དང་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འཇོག་གི་འཕགས་པའི་གཟིགས་པའི་རྗེས་སུ་འབྲང་[T196b2]བའི་རིགས་ཤེས་ལ་ལྟོས་ནས་མིན་པས། དབུ་མ་པ་རང་གི་ལུགས་ལ་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་ལ་གཟུགས་བརྙན་སོགས་[180b2]དང་། སྔོ་སོགས་སྣང་བ་གཉིས་[K197a5][D197a5]ལ་སྣང་ཡུལ་ལ་ལྟོས་ཏེ་འཁྲུལ་མ་འཁྲུལ་གཉིས་མེད་པའི་ཕྱིར། ཡང་དག་[T196b3]དང་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་གཉིས་སུ་མི་བྱེད་དེ། འཇུག་པ་ལས།

གནོད་པ་མེད་པའི་དབང་པོ་དྲུག་རྣམས་ཀྱིས། །
བཟུང་བ་གང་ཞིག་འཇིག་རྟེན་གྱིས་[180b3]རྟོགས་[K197a6][D197a6]ཏེ། །
འཇིག་རྟེན་ཉིད་ལས་བདེན་ཡིན་ལྷག་མ་ནི། །
འཇིག་རྟེན་ཉིད་[T196b4]ལས་ལོག་པར་རྣམ་པར་བཞག།

ཅེས་སོ། །

གང་ཟག་དང་ཆོས་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་འཛིན་པ་ལ་གཉིས་ཡོད་པའི་རང་གི་གྲུབ་མཐའ་ངན་

---

188 Z: བརྟེན་ D, K, T: རྟེན་
189 D, K, T, Z: པའི་
190 Z: བརྟེན་ D, K, T:རྟེན་
191 Z: ལྟར་ D, K, T: ལྟ་
192 Z: པར་ D, K, T: པས།
193 Z: བརྟེན་ D, K, T: རྟེན་

པས་[K197b1][D197b1]འཕྲུལ་དུ་ཡིད་བསླད་པ་[180b4]ལས་བྱུང་བ་ལྟ་བུའི་འཛིན་སྟངས་ཀྱི་བཟློག་[T196b5]ཕྱོགས་ནི། ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་མི་འགྲུབ་པས་དམིགས་བསལ་ལོ། །

གཞན་ཡང་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་སློད་[194]པའི་རྒྱུ་མཐའ་དག་དང་བྲལ་བའི་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་[K197b2][D197b2]པའི་ཡེ་ཤེས་ལ་གཉིས་སུ་སྣང་བ་ཤར་བ་ཡང་།[180b4]སྣང་ཡུལ་[T196b6]ལ་འཁྲུལ་བ་ནི་མིན་ཏེ། རྒྱུ་མཚན་ནི་གཞན་དུ་བཤད་ཟིན་ཏོ། །

U3 世俗の分類

第三〔世俗の分類〕は、中観自立派の者たちは、自らの特質によって成立しているものとして顕れているところの知は、顕れている通りに存在していると確定するので、対象を持つ者の知においてもまた正しい〔知〕と誤った〔知〕との二つに区別することなく、対象として顕れているものに顕れている通りに自らの特質によって存在するか存在しないかという諸々の区別がある。〔区別があることについて〕は、『二諦分別論』に、

> 顕れていることにおいて等しいけれども、効果的作用の能力が、あるがゆえに、
> また、ないがゆえに、
> 正しいものと誤ったものという、
> 世俗の分類をされた[195]

と説かれている通りにご主張なさっているのである。

この派〔帰謬派の立場では〕は、無明を持っている者において自らの特質によって成立しているものとして顕れているもの全ては、その知が無明によって汚された顕れであると主張なさっているので、世俗の対象において正しいものと誤ったものという二つに区別しないのである。

この点については、『入中論釈』に、

> 世俗においてさえ虚偽なものはなんであれ、それは世俗諦ではないのである[196]。

とお説きになっているのは、名前について学んだ世間の世俗の知にとって、例えば、顔の鏡像は、顔としては真実ではないので、その世俗の知にとっての世俗諦ではないのである。

そうであっても、虚偽なる所知、〔すなわち〕欺く対象を認識する知によって得られ

---

[194] D, Z: སླད་ K, T: སློད་
[195] SDV, 163（2a4–5）.
[196] MABh, 107.16–17（254b7–255a1）.

た対象ではあるので、世俗諦である。

鏡像が顕れている知は顕れる対象において迷乱しているのと同様に、無明を持っている者たちにとって青などの自らの特質によって成立しているものとして顕れているものもまた、〔自らの特質によって成立しているものとして〕顕れている対象については、迷乱しているのと等しいのである。

真実なる所量を〔例として〕設定するならば、以上のように迷乱しているものそれによって設定することは矛盾するけれども、〔世俗の知にとって〕虚偽なる所量を設定することにおいてはそれが助けになる。

〔もし〕そうでないならば、言説において真実として成立していないならば、世俗諦であると設定することができないので、幻のような虚偽なものなどを言説において設定するならば、世俗諦を設定することがありえないことになってしまうのである。

中観帰謬派の説では、一時的な迷乱の原因によって汚されていない六つの〔感官〕知と、それとは逆の〔一時的な迷乱の原因によって汚された〕六つの〔感官〕知と、前者の六つの知によって把握される六つの対象と、後者の六つの知によって把握される六つの対象、すなわち、誤った対象とそれを対象とする〔誤った知〕は誤った世俗であり、正しい対象とそれを対象とする〔正しい知〕は正しい世俗であると設定される。それについても、世間あるいは言説の量に照らして、正しい世俗〔である、あるいは〕誤った世俗であると設定するのであって、聖者の認識に随順する正理知に照らして〔そのように設定するの〕ではない。したがって、中観派自身の説においては、無明を有している者に対して鏡像などと青などの二つの顕れには、顕れている対象に関して迷乱している、迷乱していないという二つ〔の違い〕はないので、正しい世俗と誤った世俗の二つに〔分けることは〕ない。

すなわち、『入中論』に、

> 障害がない六つの感覚器官によって、
> 把握されているものは、世間によって認識され、
> 〔そのようなものは〕世間自身の観点から真実であり、
> 残りは、世間自身の観点から誤ったものであると設定される[197]。

と説かれている。

人と法が自らの特質によって成立していると把握するという二つがあり、〔そのうち、〕誤った自己の学説によって、一時的に、意という感覚器官が汚されていることから生じたような〔知の〕把握し方と逆のものは、言説の量によって成立することがな

[197] MAK, 6.25, 7: vinopaghātena yad indriyāṇāṃ ṣaṇṇām api grāhyam avaiti lokaḥ | satyaṃ hi tal lokata eva śeṣaṃ vikalpitaṃ lokata eva mithyā || MAKt, 205a7.

いので、特別なものである。

さらに、無明の習気によって汚されたすべての因と離れたところの如量智に二つとしての顕れが昇ってきているものもまた、顕れている対象に対して迷乱しているわけではないのである。理由は別の箇所ですでに説明した。

T2 དོན་དམ་དང་བདེན་པ།

གཉིས་པ་ལ་གསུམ། U1 དོན་དམ་དང་བདེན་པའི་དོན་བཤད་པ། U2 དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་བཤད་པ། U3 དོན་[K197b3][D197b3]དམ་པའི་དབྱེ་བ་བཤད་པའོ། །

T2 勝義諦 [180b5]

第二、〔勝義諦〕には三つ、**U1** 勝義と諦の意味を説明する、**U2** 勝義諦の定義を説明する、**U3** 勝義の分類を説明する。

U1 དོན་དམ་དང་བདེན་པའི་དོན་བཤད་པ།

དང་པོ་ནི། ཚིག་[T197a1]གསལ་ལས།

> དོན་ཡང་དེ་[180b6]ཡིན་ལ་དམ་པ་ཡང་ཡིན་པས་ན་དོན་དམ་པའོ། ། དེ་ཉིད་བདེན་པ་ཡིན་པས་དོན་དམ་བདེན་པའོ།

ཞེས་གསུངས་པས་དོན་དང་དམ་པ་གཉིས་ཀ་དོན་དམ་བདེན་པ་[K197b4][D197b4]ཉིད་ལ་བཞེད་དོ། །

དོན་[T197a2]དམ་བདེན་པའི་བདེན་ཚུལ་ནི་མི་སླུ་བ་ཡིན་ལ། དེ་ཡང་གནས་ཚུལ་[181a1]གཞན་དུ་གནས་ཤིང་སྣང་ཚུལ་གཞན་དུ་སྣང་ནས་འཇིག་རྟེན་ལ་མི་སླུ་བའི་ཕྱིར། དོན་དམ་བདེན་པར་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་[K197b5][D197b5]ཡོད་པར་བཞག་[T197a3]པ་ཙམ་ཡིན་པར་རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པའི་འགྲེལ་བ་ལས་གསུངས་སོ། །

[181a2]དེས་ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་བདེན་པ་ནི་བདེན་འཛིན་གྱི་ངོར་བདེན་པ་དང་། དོན་དམ་བདེན་པ་གཉིས་སྒྲ་དོན་མི་འདྲའོ། །

U1 勝義と諦の意味を説明する [180b5]

第一、〔勝義と諦の意味を説明する〕は、『プラサンナパダー』に、

> 「義もそれであり、勝れたものもそれであるので勝義である。その同じものが諦であるので、勝義諦である[198]。

[198] PSPD, 494.1: paramaś cāsāv arthaś ceti paramārthaḥ / tad eva satyaṃ paramārthasatyaṃ //

とお説きになっているので、義と勝のいずれも勝義諦をさしてご主張なさっているのである。

勝義諦の諦のあり方というのは、欺かないことである。それについても、存在しているあり方は別のあり方で顕れて世間を欺かない。それゆえに、勝義諦であると世間の言説の力によって存在していると設定されているにすぎないと『六十如理論頌の釈』[199]にお説きになっている。

したがって、世俗諦の諦は真実執着にとって真実であるのと、勝義諦の〔諦という〕二つの語義は異なっているのである。

U2 དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་བཤད་པ།

གཉིས་པ་ལ་[K197b6][D197b6]གཉིས། V1 དངོས་ཀྱི་[T197a4]དོན་དང་། V2 རྩོད་པ་སྤང་བའོ། །

U2 勝義諦の定義を説明する

第二、〔勝義諦の定義〕に二つがある、**V1** 本論と、**V2**〔それに対する〕批難を退ける。

V1 དངོས་ཀྱི་དོན།

དང་པོ་ནི། དོན་དམ་བདེན་པའི་མཚན་ཉིད་ནི་འཇུག་པ་ལས། [181a3]ཤེས་བྱ་ཡང་དག་པའི་དོན་མཐོང་བས་རྙེད་པ་ལ་གསུངས་པ་སྔར་བཤད་པ་ལྟར་ཡིན་ལ། དེའི་འགྲེལ་བ་ལས།

> དེ་ལ་[K198a1][D198a1]དོན་དམ་པ་ནི་ཡང་[T197a5]དག་པ་གཟིགས་པ་རྣམས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་པར་གྱི་ཡུལ་ཉིད་ཀྱིས། བདག་གི་རང་གི་ངོ་བོ་རྙེད་པ་ཡིན་གྱི། རང་[181a4]གི་བདག་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། འདི་ནི་ངོ་བོ་གཅིག་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་[K198a2][D198a2]དེ་ཁོ་ན་ཉིད་འཇལ་བའི་ཟག་མེད་[T197a6]ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་ལ། རང་གི་ངོ་བོས་མ་གྲུབ་པར་གསུངས་པས། མཉམ་གཞག་ཟག་མེད་ཀྱིས་རྙེད་རྒྱུ་ཞིག[200]བྱུང་ན། བདེན་པར་གྲུབ་པ་[L213a1]ཡིན་ནོ། ཞེས་[181a5]སླ་བ་བཀག་པ་ཡིན་ནོ། །

ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་[K198a3][D198a3]པར་ཞེས་གསུངས་པས་ནི་འཕགས་[T197b1]པ་རྣམས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་གང་

PSPDt, 163b5–6.

199 YṢV, 36（7b6）. 付論 B「勝義と諦の意味を説明する」参照。

200 Z, L: ཅིག་ D, K, T: ཞིག་

ཡིན་གྱིས་རྟེན་པས་མི་རྟོག་གི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་པར་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་རྟེན་[L213a2]པ་ཞིག་[201]དོན་དམ་བདེན་པར་སྟོན་པའོ། །

རྟེན་པའི་དོན་[181a6]ནི་ཤེས་པ་དེས་[K198a4][D198a4]དེ་ལྟར་གྲུབ་པའི་དོན་ཡིན་ཏེ། ཀུན་རྫོབ་ལ་[T197b2]ཡང་འདྲའོ། །

ཡང་དེས་ཇི་ལྟར་རྟེན་པའི་ཚུལ་ནི། རབ་རིབ་ཅན་གྱི་མིག་གིས་བར་སྣང་གི་གཞིར་སྐྲ་ཤད་འཛག་པར་མཐོང་བ་ན། [L213a3]རབ་རིབ་མེད་བའི་མིག་གིས་གཞི་དེར་སྐྲ་ཤད་འཛག་པའི་[K198a5][D198a5]སྣང་བ་[181b1]ཙམ་ཡང་མ་མཐོང་བ་བཞིན་དུ། མ་རིག་[T197b3]པའི་རབ་རིབ་ཀྱིས་གནོད་པ་བྱས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ཕུང་པོ་ལ་སོགས་པའི་རང་གི་ངོ་བོ་དམིགས་པ་དེ་ཉིད། མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་མ་ལུས་པར་[L213a4]ཟད་པ་དང་། འཕགས་པ་སློབ་པའི་[K198a6][D198a6]མཉམ་གཞག་ཟག་མེད་ཀྱི་ཡེ་[181b2]ཤེས་ཀྱིས། དེ་ཁོ་ན་[T197b4]ཉིད་གཟིགས་ཚུལ་གྱི་དབང་དུ་བྱས་ན། རབ་རིབ་མེད་པའི་མིག་བཞིན་དུ། གཉིས་སྣང་ཕྲ་མོ་ཡང་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་རང་བཞིན་གང་གིས་གཟིགས་[L213a5]པ་ནི་དོན་དམ་བདེན་པ་སྟེ། [K198b1][D198b1]འཇུག་པ་ལས།

> རབ་རིབ་མཐུ་ཡིས་སྐྲ་[T197b5]ཤད་[181b3]ལ་སོགས་པ། །[202]
> [197b5]ངོ་བོ་ལོག་པ་གང་ཞིག་རྣམ་བརྟགས་པ། །
> དེ་ཉིད་བདག་ཉིད་གང་དུ་མིག་དག་པས། །
> མཐོང་སྟེ་དེ་ཉིད་དེ་བཞིན་འདིར་ཤེས་ཀྱིས། །[203]

ཞེས་གསུངས་ཤིང་[L213a6]དེའི་འགྲེལ་བ་ལས་[K198b2][D198b2]ཀྱང་།

> ཕུང་པོ་ལ་སོགས་པ་དེ་[T197b6]དག་ཉིད་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་[181b4]དང་བྲལ་བ་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་རྣམས་ཀྱིས། རབ་རིབ་ཅན་མ་ཡིན་པས་སྐྲ་ཤད་མཐོང་བའི་ཚུལ་དུ། རང་བཞིན་གང་གིས་གཟིགས་པ་དེ་ནི་དེ་དག་གི་དོན་[L213b1]དམ་པའི་བདེན་[K198b3][D198b3]པའོ། [197b6]

ཞེས་[T198a1]གསུངས་སོ། །

དེ་ལྟར་གཟིགས་པའི་དོན་དམ་པ་ནི། ཆོས་ཅན་རེ་རེ་[181b5]ལ་ངོ་བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་པའི་དོན་དམ་གྱི་ངོ་བོ་ཡིན་ལ། དེ་ཡང་ཆོས་ཅན་རྣམས་རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པས་སྟོང་[204]བའི་རང་བཞིན་[T198a2]རྣམ་དག་གི་[L213b2]སྐྱུང་[K198b4][D198b4]འདས་དང་། དེ་ཉིད་དྲི་མའི་ས་བོན་ཅི་རིགས་པ་དང་བྲལ་བའི་འགོག་བདེན་གྱི་སྐྱུང་འདས་གཉིས་ཡིན་པས། རིགས་[181b6]པ་དྲུག་ཅུ་པའི་འགྲེལ་པ་ལས།

> ཅི་སྐྱུ་ངན་ལས་འདས་པ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན་ནམ་ཞེ་ན།[T198a3]འདི་ནི་དེ་བཞིན་ཏེ།

---

[201] Z: ཅིག་ D, K, L, T: ཞིག་

[202] D, K, T, Z:པ། ། L: པའི། །

[203] D, K, T, Z: གྱིས། ། L: ཀྱིས། །

[204] L:སྟོངས་ D, K, T, Z: སྟོང་

[K198b5][D198b5]

ཞེས་དང་།[L213b3]

དེའི་ཕྱིར་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པར་ཡོངས་སུ་བརྟགས་པ་ཁོ་ན་ཡིན་ནོ།

ཞེས་གསུངས་པའི་དོན་ནི། མྱང་[182a1]འདས་དོན་དམ་བདེན་པ་ཡོད་པར་འཇོག་པ་ཡང་། ཀུན་རྫོབ་བདེན་[T198a4]པ་ཐ་སྙད་པའི་ཤེས་ངོར་ཡོད་པ་[K198b6][D198b6]ཙམ་དུ་འཇོག་[205]གི། ལུགས་[L213b4]འདིས་མྱང་འདས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་བཞེད་པ་མིན་ཏེ། འགྲེལ་བ་དེ་ཉིད་ལས་ཀྱང་། བདེན་པ་གསུམ་[182a2]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་དང་། མྱང་འདས་དོན་དམ་བདེན་པར་བཤད་[T198a5]ཅིང་། འཇུག་འགྲེལ་ལས་ཀྱང་། [K199a1][D199a1]བདེན་པ་གཞན་གསུམ་ཀུན་རྫོབ་དང་། [L213b5]འགོག་བདེན་དོན་དམ་བདེན་པར་གསུངས་པའི་ཕྱིར་དང་། མྱང་འདས་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡོད་པར་འཇོག་ན། དོན་དམ་[182a3]བདེན་པར་གསུངས་པ་དང་འགལ་[T198a6]བར་[K199a2][D199a2]བརྩད་པའི་ལན་དུ། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཁོ་ནས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པར་གསུངས་སོ། ཞེས་[L213b6]གསུངས་པའི་ཕྱིར་རོ། །
དེའི་ཕྱིར་ཡོད་པར་འཇོག་པ་ཐམས་ཅད་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་འཇོག་སྟེ། ཤེར་[182a4]ཕྱིན་[K199a3][T198b1][D199a3]འབུམ་པ་ལས།

ཆོས་འདི་ཐམས་ཅད་ནི་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ལ་བརྟེན་ནས་བཏགས་[206]ཀྱི་དོན་དམ་པར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་གསུངས་ཤིང་། [L214a1]སྟོང་ཉིད་བདུན་ཅུ་པ་ལས་ཀྱང་།

གནས་པའམ་སྐྱེ་འཇིག་ཡོད་མེད་དམ། །
དམན་པའམ་[K199a4][T198b2][D199a4]མཉམ་པའམ་[182a5]ཁྱད་པར་ཅན།
སངས་རྒྱས་འཇིག་རྟེན་སྙད་དབང་གིས། །
གསུངས་ཀྱི་ཡང་དག་དབང་གིས་མིན།

ཞེས་སྐྱེ་འཇིག་གནས་[L214a2]གསུམ་དང་། དམན་མཆོག་འབྲིང་གསུམ་དང་། འདི་ཡོད་འདི་མེད་ཀྱི་རྣམ་གཞག་ཇི་[K199a5][D199a5]སྙེད་[T198b3]ཅིག་གསུངས་པ་ཐམས་ཅད། རྒྱལ་[182a6]བས་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་བཞག་པ་ཙམ་དུ་གསུངས་ཀྱི། ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་བཞག་པ་ཙམ་མིན་པའི་[L214a3]ཡང་དག་པའི་གནས་ཚོད་ཀྱི་དབང་གིས་བཞག་པ་མིན་པར་གསུངས་སོ། །
[K199a6][T198b4][D199a6]སློབ་དཔོན་ཡེ་ཤེས་སྙིང་པོས་དོན་དམ་པར་བདེན་པས་[182b1]དོན་དམ་བདེན་པའོ། ཞེས་བཤད་པ་ཡང་། དེས་རིགས་ཤེས་ཀྱང་དོན་དམ་དུ་བཤད་པས། དེའི་ངོར་[207][L214a4]མི་སླུ་བ་ལ་བདེན་པར་གསུངས་བ་ཡིན་གྱི། དཔྱད་བཟོད་ཀྱི་བདེན་གྲུབ་[K199b1][D199b1]ལ་དགོངས་པ་མིན་ཏེ།[T198b5]གཞུང་དེར་ཆོས་ཐམས་ཅད་བདེན་པར་གྲུབ་པ་[182b2]བཀག་པའི་ཕྱིར་རོ། །

---

[205] Z: འཇུག་ D, K, L, T: འཇོག་
[206] L:བརྟགས་ D, K, T, Z: བཏགས་
[207] Z: དོན་ D, K, T: ངོར་, L:དོར་

དེའི་ཕྱིར་དོན་དམ་དོན་དམ་དུ་མི་བདེན་ན། ཀུན་རྫོབ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་མི་[L214a5]བདེན་ནོ་ཞེས་སྨྲ་བ་ནི། འདོད་པ་ཡིན་ལ། ཐ་མ་ཐ་མར་མ་གྲུབ་ན་ཕྱི་མ་ཕྱི་[K199b2][D199b2]མར་མ་གྲུབ་བོ་ཞེས་[T198b6]སྨྲ་ན་ནི། བདེན་པ་བཀག་པ་བདེན་པར་མ་གྲུབ་ན། དགག་[182b3]གཞི་ཆོས་ཅན་རྣམས་བདེན་གྲུབ་ཏུ་འགྱུར་རོ་ཞེས་པར་འགྱུར་ཏེ། དོན་[L214a6]དམ་བདེན་པ་ནི་དགག་གཞི་ཆོས་ཅན་ལ་བདེན་པ་བཀག་པ་ཙམ་ལ་འཇོག་པའི་[K199b3][D199b3]ཕྱིར་དང་། ཆོས་[T199a1]ཅན་རྣམས་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་མ་གྲུབ་པར་འཕེན་པ་ནི། བརྫུན་[208]པར་མ་གྲུབ་པར་འཕེན་[182b4]པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེ་ལྟ་ན་ནི་ཤིན་ཏུ་ཡང་མ་འབྲེལ་བར་འགྱུར་ཏེ། [L214b1]ཆོས་ཅན་སྣང་བ་རྣམས་བདེན་གྲུབ་ཏུ་མེད་པ་བདེན་པར་མ་གྲུབ་པ་ཉིད་[T199a2]ཀྱིས། དགག་[K199b4][D199b4]གཞི་རྣམས་རྫུན་[209]པར་འགྲུབ་[210]དགོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་ཐ་སྙད་དུ་ཡོད་པར་འཇོག་པ་ལ་དེ་ཁོ་[182b5]ན་ཉིད་ཀྱི་རིགས་ཤེས་ཀྱིས་འགྲུབ་མི་དགོས་ཀྱང་། ཐ་[L214b2]སྙད་པ་དང་རིགས་ཤེས་ཀྱི་ཚད་མ་གང་གིས་ཀྱང་མི་གནོད་པ་ཞིག་[211][T199a3]དགོས་ཏེ། རིགས་པ་[K199b5][D199b5]དྲུག་ཅུ་པའི་འགྲེལ་བ་ལས། ཉེར་ལེན་གྱི་ཕུང་པོ་མི་རྟག་སོགས་བཞིན་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་གནས་པས། དེ་བཞིན་[182b6]འཛིན་པ་དེ་ལ་ལྟོས་ཏེ་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་[L214b3]དང་། ཕུང་པོ་རྟག་སོགས་བཞིན་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་གནས་པ་མེད་[T199a4]པས། དེ་བཞིན་འཛིན་པ་དེ་[K199b6][D199b6]ལ་ལྟོས་ཏེ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཏུ་བཤད་ཅིང་། འཇུག་པ་ལས།

> མི་ཤེས་གཉིད་ཀྱིས་རབ་བསྐྱོད་མུ་སྟེགས་ཅན། ། རྣམས་ཀྱིས་[183a1]བདག་[L214b4]ཉིད་ཇི་བཞིན་བཏགས་[212]པ་དང་། ། སྒྱུ་མ་སྨིག་རྒྱུ་སོགས་ལ་བཏགས་[213]པ་གང་། །[T199a5]དེ་དག་འཇིག་རྟེན་ལས་ཀྱང་[K200a1][D200a1]ཡོད་མིན་ཉིད།

ཅེས་མུ་སྟེགས་ཀྱིས་ཀུན་བཏགས་པའི་བདག་དང་གཙོ་བོ་སོགས་དང་། སྒྱུ་མའི་[183a2]རྟ་གླང་སོགས་སུ་ཞེན་པའི་[L214b5]ཡུལ་རྣམས་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་པར་གསུངས་པས། བློ་འཁྲུལ་བ་ཞིག་[214]གི་[T199a6]ངོར་ཡོད་[K200a2][D200a2]ཙམ་ལ། ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡོད་པར་འཇོག་པ་ཐལ་འགྱུར་བའི་ལུགས་སུ་སྨྲ་བ་ནི། སྙིང་པོ་མེད་པའི་གཏམ་ཡིན་ལ། དབུ་མ་བ་ཆེན་པོ་གཞན་[183a3]སུས་ཀྱང་མི་འདོད་དོ། །

[L214b6]འཇུག་པ་ལས་ཡུལ་ཡུལ་ཅན་ལ་ཡོད་མེད་མགོ་[215]མཚུངས་[T199b1]མཛད་པ་ཡང་། སྤྱིར་ཡོད་[K200a3][D200a3]མེད་ཙམ་མིན་གྱི། དེ་གཉིས་རང་བཞིན་གྱིས་ཡོད་མེད་ལ་དེ་ལྟར་མཛད་པའོ། །

དེས་ན་ཐ་སྙད་དུ་ཡོད་པར་འཇོག་པ་རྣམས་མིང་གི་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་[L215a1]ཡོད་[183a4]པར་

---

208 D, K, L, T: རྫུན་
209 Z: བརྫུན་ D, K, L, T: རྫུན་
210 Z: འགྲོ་ D, K, L, T: འགྲུབ་
211 Z: ཅིག་ D, K, L, T: ཞིག་
212 Z: བརྟགས་ D, K, L, T: བཏགས་
213 Z: བརྟགས་ D, K, L, T: བཏགས་
214 Z: པ་ཅིག་ D, K, L, T: པ་ཞིག་
215 D, K: འགོ་ L, T, Z: མགོ་

བཞག་པ་ཡིན་ཡང་[216]། དེའི་དབང་གིས་གང་[T199b2]བཞག་ཐམས་ཅད་ཐ་སྙད་དུ་ཡོད་པར་[K200a4][D200a4]མི་འདོད་ལ། ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་བཞག་པ་ཙམ་དུ་འདོད་ཀྱང་། ཙམ་གྱི་སྒྲས་ནི་ཡུལ་ཅན་གྱི་ཐ་སྙད་མིན་པའི་དོན་[L215a2]ཡིན་པ་གཅོད་པ་དང་། འཇོག་པའི་དོན་དེ་ཚད་མས་གྲུབ་[183a5]པ་གཅོད་པ་[T199b3]གཏན་མིན་[217]ཏེ། འདི་ལྟར་ཐ་སྙད་བཏགས་པའི་དབང་[K200a5][D200a5]གིས་འཇོག་པས་མ་ཚིམ་པར། དེ་ཙམ་མིན་པའི་བཏགས་དོན་དོན་ལ་ཇི་ལྟར་ཡོད་བཙལ་ནས་རྙེད་ན་[L215a3]ཡོད་པར་འཇོག་ལ། མ་རྙེད་ན་མེད་པར་འཇོག་པ་ལྟར་ལུགས་འདིས་མི་བྱེད་[T199b4]ཀྱི། ཚོལ་ལུགས་[183a6]དེས་བཙལ་ནས་རྙེད་རྒྱུ་བྱུང་ན། བདེན་གྲུབ་[K200a6][D200a6]ཏུ་འགྱུར་བར་བཞེད་པས།དེ་འདྲ་བའི་[218]དཔྱད་ནས་ཡོད་པར་རྙེད་པ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མི་འདོད་[L215a4]ལ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་དཔྱད་མ་དཔྱད་ཀྱི་ས་མཚམས་ཀྱང་དེ་ནས་འཇོག་པས།[T199b5]རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ཡོད་ན། ཡུལ་[183b1]ཅན་གྱི་ཐ་སྙད་ཀྱི་དབང་གིས་[K200b1][D200b1]བཞག་པ་ཙམ་མིན་པའི་དོན་རང་གི་ངོ་བོས་ཡོད་པར་འགྱུར་བར་གཟིགས་ནས་[L215a5]རང་བཞིན་གྱིས་སམ། རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་སམ། རང་གི་ངོ་བོ་ཉིད་[T199b6]ཀྱིས་ཡོད་པ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མི་བཞེད་དེ། རྒྱས་པར་གཞན་དུ་བཤད་ཟིན་ཏོ། །

V1 本論 [181a2]

第一、〔本論〕は、勝義諦の定義というのは『入中論』に正しい所知である対象を見る知によって得られるものをさして〔勝義諦である〕お説きになっていることは前に説明した通りであり、その〔『入中論』の〕註釈に、

> そのうち、勝義のものとは、正しいものをご覧になっている者たちの特別の智慧の対象に〔なることに〕よってそれ自体を得ているものであって、それ自体によって成立しているものではないのである。すなわち、これが〔二つの存在のうちの〕一つの存在である[219]。

と、真実を量る無漏の智慧によって得られるのであって、それ自体で成立しているものではないのであるとおっしゃっているので、無漏の三昧智によって何か得られるべきものが生じたならば、〔それは、〕真実として成立しているものであるという主張を否定しているのである。

特別の智慧と説かれているので、聖者たちの智慧のいずれかよって得られることでは十分ではなく、特別な智慧という如実知の智慧によって得られたようなものが勝義諦であると示されている。

---

[216] Z: ཀྱང་ D, K, L, T: ཡང་
[217] D, K, L, Z: མིན་ T: མན་
[218] L, T, Z: བའི་ D, K: པས་
[219] MABh, 102.16–18（253a6–7）.

得られた対象というのは、その知によって〔得られる〕その通りに成立している対象である。すなわち、世俗についても同様である。

また、その〔三昧の無漏の〕智慧によってどのように得られるかという得られ方は、眼病を持っている者の目によって空間に毛髪が垂れているように見えているときに、眼病にかかっていない者の目ではその空間に毛髪が垂れていることは顕れることさえも見えないの同様に、無明の眼病によって拒斥された者たちが蘊などの自らの存在を見ているもの、その同じものを、無明の習気が完全に尽きた者と、有学の無漏の三昧智によって真実をご覧になる仕方については、眼病にかかっていない者の目と同様に微細な二つの顕れもまたご覧にならないという仕方よって、ある自性としてご覧になっている〔ところのそ〕の〔自性〕が勝義諦である。すなわち、『入中論』に、

> 眼病の力によって毛髪などの、
> 誤った存在が〔眼病の力によって〕妄分別される。
> その同じものを清浄な目によってある本質のものとして見えているのである。
> すなわち、それが真実であるのと同様にここで知るべきである[220]。

とお説きになっており、それの註釈でも、

> 蘊などそれらを、無明の習気〔である所知障〕と離れた仏世尊たちは、眼病にかかっていない者が髪の毛を見る仕方と〔同様に、〕ある自性としてご覧になるのが諸仏の勝義諦である[221]。

とお説きになっている。

以上のようにご覧になっている勝義のものとは、各々の有法に二つずつの存在がある〔うちの〕勝義の存在であり、それについてもまた、諸々の有法が自性によって成立しているものに関して空であるという清浄なる自性の涅槃と、その同じものが汚れの種子一切と離れた滅諦であるところの涅槃の二つであるので、『六十頌如理論釈』に、

> 涅槃もまた世俗諦であるのかと問うならば、それはその通りである[222]。

といい、

> したがって、涅槃というのは世俗諦として仮設されただけのものである[223]。

---

[220] MAK, 6.29, 7： vikalpitaṃ yat timiraprabhāvāt keśādirūpaṃ vitathaṃ tad eva | yenātmanā paśyati śuddhadṛṣṭis tat tattvam ity evam ihāpy avaihi || MAKt, 205b3.

[221] MABh, 110.8–11（255b5–6）.

[222] YṢV, 35（7b3）次の註を参照。

[223] YṢV, 35–36（7b3–5）:ཅི་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཡིན་ནམ། དེ་དེ་བཞིན་ཏེ།འཁོར་

と説かれている意味は、涅槃という勝義諦が存在すると設定しているのもまた、世俗諦が言説知にとって存在しているだけの世俗諦であることを意味しているのであって、この学説が涅槃は世俗諦であるとお考えになっているわけではないのである。なぜならば、その同じ〔『六十頌如理論釈』〕にも、三つの諦は世俗諦であり、涅槃は勝義諦である[224]と説明している。また、『入中論釈』にも、〔滅諦〕以外の三つの諦は世俗諦であり、滅諦は勝義諦である[225]とお説きになっているからであり、また、〔『六十如理論釈』に〕涅槃が世俗として存在していると設定するならば、勝義諦であるとお説きになっていることと矛盾するという論難の答えとして、世間の言説のみの観点から勝義諦であると〔仏世尊は、〕お説きになっている[226]、とお説きになっているからである。

それゆえに、存在していると設定されるもの全ては、世間の言説の力によって設定される。なぜならば、『十万頌般若』に、

> この全ての法は世間の言説によって仮設されたものであって、勝義において〔存在するもの〕ではないのである[227]。

とお説きになっており、『空七十論』にも、

> 住することや生滅、あるとかないとか、劣ったとか等しいとか、特徴を持っているとか〔言っているのは、〕仏陀は世間の言説の力によって〔存在していると〕お説きになったのであって、正しい知の力によって〔存在しているわけ〕ではないのである[228]。

བར་ཡོངས་སུ་རྟོག་པ་ཡོད་ན་མྱ་ངན་ལས་འདས་པར་ཡོངས་སུ་རྟོག་སྟེ། དེ་གཉི་ག་ཡང་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། ། [⋯] དེ་བས་ན་མྱ་ངན་ལས་འདས་པ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པར་ཡོངས་སུ་བརྟགས་པ་ཡིན་ནོ། ། (何故涅槃もまた世俗諦であるのかと問うならば、それはその通りである。なぜならば、輪廻であると仮設されることが存在したときに、涅槃であると仮設される。それら二つもまた世間の言説であるからである。[⋯] したがって、涅槃もまた世俗諦であると仮設されたものである)。

224 YṢV, 36. 付論 B「勝義と諦の意味を説明する」参照。

225 MABh, 71.3–5（243a6–b1）: དེ་ལ་སྡུག་བསྔལ་དང་ཀུན་འབྱུང་དང་ལམ་གྱི་བདེན་པ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པའི་ཁོངས་སུ་གཏོགས་སོ། ། འགོག་པའི་བདེན་པ་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའི་རང་གི་ངོ་བོའོ། ། (そのうち、苦諦と集諦、道諦が世俗諦の中に属す。滅諦は勝義諦それ自体の存在である)。

226 YṢV, 36（7b6）.

227 ŚSP, 390a1: དེ་ཡང་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཐ་སྙད་དུ་བརྗོད་ཀྱི། དོན་དམ་པར་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། (したがって、如来が世間の言説として語っているのであって、勝義として〔語っているの〕ではないのである）という言葉がある。

228 ŚSK, 34（24a6–7）.

と、生、滅、住の三つと、下、上、中の三つと、これがあるとか、これが無いというあらゆる設定を説かれている全ては、勝者が世間の言説の力によって設定されただけのものとしてお説きになっているのであって、言説の力によって設定されただけのものではない、正しい存在の仕方の力によって設定されたものではないのであるとお説きになっている。

阿闍梨イェシェーニンポが〔『二諦分別論の註釈』に〕「勝義において諦であるので、勝義諦である[229]と説明していることも、彼は正理知も勝義であると説明しているので、その意味は、欺かないものをさして真実であるとお説きになっているのであって、考察に耐えるという真実として成立しているものをさして真実であるとお考えになっているのではないのである。なぜならば、そのテキストに全ての法は真実として成立していることは否定されているからである。

したがって、勝義が勝義として真実でないならば、世俗は世俗として真実でないと主張することは、認められるが、前者が前者として成立していないならば、後者は後者として成立していないと主張するならば、真実を否定することが真実として成立していないならば、否定の基体である諸々の有法は真実として成立したものになってしまうだろうということになる。なぜならば、勝義諦は否定の基体である有法において真実であることを否定しただけのことをさして、設定されているからであり、諸々の有法は世俗として成立していないのであると提示することは、虚偽なものとして成立していないと提示するからである。

そうであるならば、全く無関係となってしまうのである。なぜならば、顕れる諸々の有法は真実成立として存在しないということが真実として成立していないというそのことによって、諸々の否定基体が虚偽なものにならなければならないからである。

したがって、言説において存在していると設定するために、真実を考察する正理知によって成立する必要はないけれども、言説知と正理知の量のいずれによってもまた否定されないようなことが必要である。すなわち、『六十頌如理論釈』に取蘊は無常などの四つのものとして世俗として存在しているので、その四つとして捉える知に関して顛倒していないものであり、取蘊は常などの〔逆の〕四つとして世俗においてさえも存在していないので、その四つとして捉える知に関して顛倒している[230]と説明して

---

229 SDVV, 156（4a4））.

230 YṢV, 35（7b1）：གང་ལ་དམིགས་པ་ཡོད་པ་ཡང་དམིགས་པ་དེ་ནི་རྣམ་པ་གཉིས་ཏེ། དེ་ལ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་དང་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པའོ། ། དེ་ལ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ནི་བདེ་བ་ལ་སོགས་པར་འཛིན་པ་སྟེ། ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་དེའི་བདག་ཉིད་དུ་དངོས་པོ་རྣམ་པར་མི་གནས་པའི་ཕྱིར་རོ། ། ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་ནི་སྡུག་བསྔལ་བ་ལ་སོགས་པ་སྟེ། དངོས་པོ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་དེའི་བདག་ཉིད་དུ་དངོས་པོ་རྣམ་པར་མི་གནས་པའི་ཕྱིར་རོ། ། ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་ནི་སྡུག་བསྔལ་བ་ལ་སོགས་པ་སྟེ། དངོས་པོ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་དེའི་བདག་ཉིད་དུ་ཡོད་པའི་ཕྱིར་རོ། །（知覚があるというのもその知覚には

いる。また、『入中論』に、

> 無知の眠りによって昏睡している外道たちが、
> それぞれに考えていることと、
> 幻、陽炎において仮設されているもの、
> それらは世間の観点からしても存在しないのである[231]。

というように、外道によって遍計所執された我や根本なるものなどと、幻の馬と象などであると執着する対象は、言説においてさえもまた存在しないのであるとお説きになっているので、何らかの迷乱した知にとって存在しているすべてのものをさして、世俗において存在していると設定することが帰謬派の学説であると主張することは無意味の言葉であり、偉大なる大中観派の他の誰によっても主張しないのである。

『入中論』に対象と対象を持つものが存在するか存在しないかは同じことになるとお説きになっていることについてもまた、〔何に限定もなしに〕一般的に単に存在する存在しないとお説きになっているのではなく、その二つが自性によって存在するか存在しないかをさして、〔そのように存在する存在しないは同じであると〕以上のようにお説きになっているのである。

したがって、言説において存在していると設定している諸々のものは、名称の言説の力によって存在していると設定されるけれども、その力によって設定された全てのものが言説において存在していると主張しているのではないのである。また、言説の力によって単に設定されただけのものと主張しているけれども、「だけ」という言葉が対象を持つものの言説ではないという対象であるものを断じたるの〔では決してない、〕また、設定されたその対象が量によって成立していることを断じるのでは決してないのである。

すなわち、このように言説による仮設の力によって設定されたということで満足せずに、単にそれだけではない仮設された対象が、対象においてどのように存在しているかを探して得られたならば、存在していると設定することできるけれども、得られないならば、存在しないと設定するというように、この〔帰謬派の〕学説がしないの

二つの形象がある。すなわち顛倒しているものと顛倒していないものである。そのうち、顛倒しているというのは楽などとして捉えることである。なぜならば、世俗においてもそれ自身として実在は存在しないからである。顛倒していないというのは、苦などである。なぜならば、実在である世俗においてもそれ自身として実在は存在しないからである。顛倒していないというのは、苦などである。なぜならば、実在である世俗においてそれ自身として存在しているからである）。

[231] MAK,6.26,7:ajñānanidrāpracalāyamānais tīrthair yathāsvaṃ parikalpitā ye | māyāmarīcyādiṣu kalpitāś ca teṣām atattvaṃ khalu lokato ’pi || MAKt, 205b1.

である。その探し方によって求めて得られるものが生じたならば、真実成立となってしまうとご主張なさっているので、以上のように考察して存在していると得られるものは言説においてさえもまた認めず、真実義に対して考察するか考察しないの違いの境界線もまたその点から設定しているので、自相によって成立しているものが存在しているならば、対象を持つものの言説の力によって設定されただけではない対象は自性によって存在していることになってしまうことをご覧になって、自性によって、あるいは、自相によって、自らの在り方によって存在しているものは言説においてさえもまた認めていないのである。詳しくはすでに他の箇所で説明した。

V2　རྗོད་པ་སྦྱང་བ།

གཉིས་[183b2]པ་ནི།　[D200b2][K200b2]གལ་ཏེ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་དོན་དམ་པའི་[L215a6]བདེན་པ་རྙེད་[232]ན།　འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> གལ་ཏེ་རྣམ་པ་དེ་ལྟ་བུའི་[T200a1]རང་བཞིན་མཐོང་བ་མེད་པ་ཉིད་མ་ཡིན་ནམ།　དེའི་[233]ཕྱིར་ཇི་ལྟར་དེ་དག་གིས་གཟིགས་ཤེ་ན།[234][D200b3][K200b3]བདེན་མོད་ཀྱི་འོན་[183b3]ཀྱང་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས།　དེ་དག་གིས་གཟིགས་སོ་[L215b1]ཞེས་བརྗོད་དོ། །

ཞེས་ཅི་ཡང་མ་གཟིགས་པ་[T200a2]ལ་དེ་ཁོ་ན་གཟིགས་པར་བཤད་ཅིང་།　དེའི་ཤེས་བྱེད་དུ་དོན་དམ་བདེན་པ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་[D200b4][K200b4]ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་ལས་ཀྱང་འདས་པར་བཤད་པ་[183b4]དྲངས་པ་དང་།　སངས་རྒྱས་ཀྱི་ས་ལ་[L215b2]སེམས་སེམས་བྱུང་གི་རྒྱུ་བ་གཏན་ལོག་[T200a3]པར་བཤད་པ་དང་།　སངས་རྒྱས་ཀྱིས་ཕུང་སོགས་མ་གཟིགས་ན།　སྟོབས་བཅུའི་སྐབས་སུ་ཆོས་ཐམས་[D200b5][K200b5]ཅད་མཁྱེན་པར་བཤད་པ་ཇི་ལྟར་མི་འགལ་ཞེ་ན།　མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་[183b5]གྱིས་[L215b3]གཟིགས་ཞེས་པ་ནི།　ཡུལ་གང་ཡིན་[T200a4]ཐམས་ཅད་མ་མཐོང་བ་ལ་མི་བྱེད་ཀྱི།　མ་རིག་པའི་རབ་རིབ་ཀྱི་མཐུས་དམིགས་པ་འདི་རྣམས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་དུ་ཡོད་[D200b6][K200b6]ན།　འཕགས་པའི་མཉམ་གཞག་ཟག་པ་མེད་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་དམིགས་དགོས་པ་[L215b4]ལས་དེ་རྣམས་[183b6]ཅི་ཡང་མ་[T200a5]གཟིགས་པའི་སྒོ་ནས།　དེ་དག་གི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཟིགས་པར་སྟོན་པ་ཡིན་ཏེ།　དགག་བྱ་ཡོད་ན་དམིགས་སུ་རུང་བ་ལས་མ་[D201a1][K201a1]དམིགས་པ་ཉིད་ལས་དགག་བྱ་བཀག་པ་རྟོགས་པར་འཇོག་པའི་ཕྱིར་རོ། །

མཐོང་བ་མེད་པ་[L215b5]ནི་མཐོང་བ་དམ་[T200a6]པའོ།　ཞེས་[184a1]གསུངས་པའི་དོན་ཡང་དེ་བཞིན་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

དེ་ལྟར་ཡང་སྟུད་པ་ལས།

---

[232] D, K, T, Z: རྙེད་　L:རྙད་

[233] K:དའི་　D, L, T, Z: དེའི་

[234] Z: ཞེ་ན་　D, K, T: ཤེ་ན་

> [D201a2][K201a2]གཟུགས་རྣམས་མི་མཐོང་ཚོར་བ་དག་ཀྱང་མི་མཐོང་ཞིང་། །
> འདུ་ཤེས་མཐོང་བ་མེད་ལ་སེམས་པ་མི་མཐོང་ཞིང་། །
> གང་ལ་[L215b6]རྣམ་པར་[T200b1]ཤེས་[184a2]དང་སེམས་ཡིད་མཐོང་མེད་པ། །
> [200b1]འདི་ནི་ཆོས་མཐོང་ཡིན་ཞེས་དེ་བཞིན་གཤེགས་[235]པས་བསྟན། །
> [D201a3][K201a3]ནམ་མཁའ་མཐོང་ཞེས་སེམས་ཅན་ཚིག་ཏུ་རབ་བརྗོད་པ། །
> ནམ་མཁའ་ཇི་ལྟར་མཐོང་སྟེ་དེས་འདི་བརྟག་པར་གྱིས། །
> དེ་ལྟར་[L216a1][T200b2]ཆོས་མཐོང་བ་ཡང་དེ་[184a3]བཞིན་གཤེགས་པས་བསྟན། །
> མཐོང་བ་དཔེ་གཞན་གྱིས་ནི་བསྟད་པར་ནུས་མ་ཡིན།[D201a4][K201a4]

ཞེས་མི་མཐོང་བ་ཕུང་པོ་ལྔ་དང་། མཐོང་བ་ནི་ཆོས་ཞེས་གསུངས་ལ། དེ་ནི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་ཏེ། [L216a2]སྡུས་རྟེན་འབྲེལ་མཐོང་བ་[T200b3]དེས་ཆོས་མཐོང་ངོ་། ཞེས་གསུངས་[184a4]པ་བཞིན་ནོ། །
དེ་ཡང་དཔེར་ན་ནམ་མཁའ་ནི་ཐོགས་པའི་རེག་བྱ་བཅད་ཙམ་[D201a5][K201a5]ཡིན་ལ། དེ་མཐོང་ངམ་རྟོགས་པ་ནི་དགག་བྱ་སྒྲིབ་ཐོགས་ཡོད་ན། དམིགས་སུ་རུང་བ་ལས་མ་[L216a3]མཐོང་བ་ལ་བྱེད་པ་དང་[T200b4]འདྲ་སྟེ། དེར་ཡང་མཐོང་བ་ནི་ནམ་མཁའ་དང་། མ་[184a5]མཐོང་བ་ནི་སྒྲིབ་ཐོགས་སོ། །
དཔེ་དེ་བཞིན་དུ་མཐོང་བ་མིན་པར་སྟོན་[D201a6][K201a6]པོ་མཐོང་བ་བཞིན་དུ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མཐོང་བ་ནི་ཀྲང་པ་ཐ་མ་གཉིས་ཀྱིས་བཀག་[236]གོ།
ཕུང་[L216a4]པོ་ལྔ་མི་མཐོང་བར་གསུངས་[T200b5]པས་ནི། ཟག་མེད་ཀྱི་མཉམ་གཞག་གིས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཟིགས་[184a6]པའི་ངོར་ཆོས་ཅན་མཐོང་བ་མིན་[237]པར་བསྟན་ཏོ། ། [D201b1][K201b1]བདེན་པ་གཉིས་ལ་འཇུག་པ་ལས།

> ལྷའི་བུ་དག་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་[L216a5]ཅད་ཀྱི་མཆོག་དང་[T200b6]ལྡན་པ། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་བར་ལས་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། [184b1]ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ་ཞེས་བརྗོད་[D201b2][K201b2]པ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ།

ཞེས་དོན་དམ་བདེན་པའོ་ཞེས་བརྗོད་པའི་ཚེ་ན། བློ་ལ་ཡུལ་ཡུལ་ཅན་[L216a6]གཉིས་སོ་[T201a1]སོར་སྣང་བ་ལྟར་མི་མཐོང་བ་ལ་བཤད་པས་[184b2]གཉིས་སྣང་ལོག་པའི་ཁུངས་ཡིན་གྱི། [201a1]སངས་རྒྱས་ཀྱིས་དོན་དམ་མ་རྟོགས་པའི་[D201b3][K201b3]ཁུངས་མིན་ནོ། །
འཇུག་འགྲེལ་ལས་ཀྱང་།

> དངོས་པོ་བྱས་པ་ཅན་ལ་མ་རེག་པར་རང་[T201a2]བཞིན་འབའ་[L216b1]ཞིག་མངོན་སུམ་དུ་མཛད་པས། དེ་ཉིད་ཐུགས་སུ་ཆུད་པའི་ཕྱིར་སངས་[184b3]རྒྱས་ཞེས་བརྗོད་དོ།

ཞེས་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་[D201b4][K201b4]ཤེས་ཀྱིས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཟིགས་པའི་ངོར་

---

[235] D, L, T, Z: གཤེགས་ K: གཤགས་
[236] L, Z: བཞག་ D, K, T: བཀག་
[237] D, K, T, Z: མིན་ L: ཡིན་

གཞན་དབང་ལ་མ་རིག་པར་ཆོས་ཉིད་[T201a3]འབའ་ཞིག་ཐུགས་[L216b2]སུ་ཆུད་པར་གསུངས་སོ། །

སེམས་སེམས་བྱུང་གི་རྒྱུ་བ་ལོག་པ་ནི། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་[184b4]དུ་གྱུར་པའི་ཚེ་རྣམ་རྟོག་གི་རྒྱུ་བ་ལོག་པའི་དོན་ཡིན་[D201b5][K201b5]གྱི། སེམས་དང་སེམས་བྱུང་མེད་པར་སྟོན་པ་མིན་ཏེ། ཚིག་གསལ་[T201a4]ལས།

> རྣམ་པར་རྟོག་པ་[L216b3]ནི་སེམས་ཀྱི་རྒྱུ་བ་ཡིན་ན། དེ་དང་བྲལ་བའི་ཕྱིར། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་དེ་ནི་རྣམ་པར་རྟོག་པ་མེད་པ་ཡིན་ནོ། །
> ཇི་[184b5]སྐད་དུ་མདོ་ལས། དོན་དམ་པའི་[D201b6][K201b6]བདེན་པ་གང་ཞེ་ན། གང་ལ་སེམས་ཀྱི་རྒྱུ་བ་ཡང་མེད་ན་ཡི་གེ་[T201a5]རྣམས་ལྟ་སྨོས་ཀྱང་[L216b4]ཅི་དགོས། ཞེས་གསུངས་སོ།

ཞེས་སེམས་ཀྱི་རྒྱུ་བ་མེད་པར་གསུངས་པའི་དོན། རྣམ་རྟོག་གི་རྒྱུ་བ་མེད་པ་ལ་བཤད་དོ། །

དེ་ཡང་འཕགས་[184b6]པ་སློབ་པའི་[D202a1][K202a1]མཉམ་གཞག་གི་དུས་སུ་གཏན་ལོག་པ་མིན་གྱི།[238]སངས་[T201a6]རྒྱས་པའི་[L216b5]དུས་སུ་གཏན་ལོག་པར་འཇུག་འགྲེལ་ལས་གསུངས་སོ། །[201a6]

གཞན་ཡང་འཇུག་འགྲེལ་ལས། རང་བཞིན་དེ་ཡོད་པ་མིན་ན་དེ་རྟོགས་[D202a2][K202a2]པའི་ཕྱིར་དུ། བྱང་སེམས་རྣམས་[185a1]དཀའ་བ་སྤྱོད་པ་དོན་མེད་པར་ཤེས་བྱེད་དང་བཅས་པས་[T201b1]བརྒལ་བས་ཏེ།

> [L216b6]ཇི་སྐད་དུ་དེ་དག་གི་རང་བཞིན་ཡང་གང་ཞིག་ཅེ་ན། དེ་དག་གི་བཅོས་མ་མ་ཡིན་པ་དང་། གཞན་ལ་ལྟོས་པ་མེད་པ་གང་[D202a3][K202a3]ཡིན་པ་སྟེ། མ་རིག་པའི་རབ་རིབ་[185a2]དང་བྲལ་བའི་ཤེས་པས་རྟོགས་པར་བྱ་བའི་རང་གི་ངོ་བོའོ། །
> ཅི་དེ་[239][T201b2]ཡོད་[L217a1]དམ་མེད་དོ་ཞེས་དེ་སྐད་དུ་སུ་སྨྲ། གལ་ཏེ་མེད་ན་ནི་ཅིའི་དོན་དུ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན་པའི་ལམ་[D202a4][K202a4]སྒོམ་པར་འགྱུར་ཏེ། གང་གི་ཕྱིར་ཆོས་ཉིད་དེ་རྟོགས་པར་[185a3]བྱ་བའི་ཕྱིར་བྱང་ཆུབ་[L217a2]སེམས་དཔའ་རྣམས་དེ་ལྟར་[T201b3]དཀའ་བ་བརྒྱ་ཕྲག་རྩོམ་པ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་གསུངས་ཤིང་། དེའི་ཤེས་བྱེད་དུ།

> རིགས་ཀྱི་བུ་གལ་ཏེ་དོན་དམ་པ་ཡོད་[D202a5][K202a5]པར་མ་གྱུར་ན་ནི། ཚངས་པར་སྤྱོད་པ་དོན་མེད་པར་འགྱུར་ཞིང་། དེ་བཞིན་[185a4]གཤེགས་[L217a3]པ་རྣམས་འབྱུང་བ་དོན་མེད་པར་འགྱུར་[T201b4]རོ། །
> གང་གི་ཕྱིར་དོན་དམ་པ་ཡོད་པ་དེའི་ཕྱིར་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་དོན་དམ་པ་ལ་མཁས་པ་[D202a6][K202a6]ཞེས་བྱའོ།[201b4]

ཞེས་དོན་དམ་བདེན་པ་ཡོད་པ་མིན་ན། མཐར་ཐུག་གི་མྱང་འདས་ཀྱི་ཚངས་[185a5][L217a4]པའི་དོན་

[238] D, K, T, Z: གྱི། L: ཀྱི།
[239] D, K, L, Z: དེ་ T: ད་

ཏུ། སྤྱད་པ་སྤྱོད་པ་དོན་མེད་པ་དང་། གདུལ་[T201b5]བྱས་དེ་རྟོགས་པ་མི་སྲིད་པས། དེས་དེ་རྟོགས་པར་བྱ་བའི་དོན་དུ་སངས་རྒྱས་འཇིག་རྟེན་དུ་[D202b1][K202b1]བྱོན་པ་དོན་མེད་པ་དང་། རྒྱལ་སྲས་ཆེན་པོ་རྣམས་དོན་དམ་བདེན་པ་ལ་མཁས་པ་མིན་[L217a5]པར་འགྱུར་བས། [185a6]དོན་དམ་བདེན་པ་ཡོད་པར་བསྒྲུབས་པའི་[T201b6]མདོ་སྡེ་དྲངས་པས་ན། སློབ་དཔོན་ཆེན་པོ་འདིའི་ལུགས་ཀྱིས་དོན་དམ་བདེན་པ་ཤེས་བྱ་[D202b2][K202b2]མིན་པ་དང་། འཕགས་པའི་མཉམ་གཞག་ན་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་རྟོགས་པའི་ཡེ་ཤེས་མེད་[L217a6]པར་སྨྲ་བ་ནི་ལོག་པར་[185b1]སྨྲ་བ་ཁོ་ན་ཡིན་ནོ།

གཞན་ཡང་འཇུག་[T202a1]འགྲེལ་ལས།

> དེའི་ཕྱིར་བཏགས་པ་ལས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་རྟོགས་སོ་ཞེས་རྣམ་པར་བཞག་གི །[D202b3][K202b3]དངོས་སུ་ནི་འགའ་ཞིག་[240]འགའ་ཞིག་གིས་ཤེས་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། ཤེས་པ་[L217b1]དང་ཤེས་བྱ་གཉིས་ཀ་[241]ཡང་མ་སྐྱེས་པ་ཉིད་ཀྱི་[T202a2]ཕྱིར་[185b2]རོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་དང་པོའི་དོན་ནི་ཡེ་ཤེས་དང་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཉིས་ཡུལ་ཡུལ་ཅན་སོ་སོ་བ་གཉིས་སུ་བྱས་[D202b4][K202b4]ནས། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་རྟོགས་པར་འཇོག་པ་ནི། ཐ་སྙད་པའི་ཤེས་ངོ་ཙམ་དུ་[L217b2]འཇོག་གི །ཡེ་ཤེས་དེའི་ངོར་མི་འཇོག་པའི་[T202a3]དོན་ཡིན་ལ། ཤེས་པ་མ་[185b3]སྐྱེས་ཞེས་པ་ནི་རང་བཞིན་གྱིས་མ་སྐྱེས་པའི་དོན་ལ་ཆུ་ལ་ཆུ་བཞག་པ་བཞིན་དུ་གྱུར་ཅེས་པའོ། །

[D202b5][K202b5]ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་སེམས་སེམས་བྱུང་མི་[L217b3]འཇུག་པས། སྐུ་ཁོ་ནས་མངོན་སུམ་དུ་[T202a4]མཛད། ཅེས་གསུངས་པ་ནི།[202a4]མངོན་དུ་བྱ་རྒྱུའི་ལས་སུ་བྱ་བ་ནི་དེ་[185b4]ཁོ་ན་ཉིད་དང་། ཡུལ་ཅན་གྱི་ཡེ་ཤེས་ནི་དེ་མངོན་དུ་བྱེད་པའི་བྱེད་པ་དང་། [D202b6][K202b6]ལོངས་སྤྱོད་རྫོགས་པའི་སྐུ་ནི་དེ་མངོན་[L217b4]དུ་བྱེད་པའི་བྱེད་པ་པོ་སྟེ། མཁྱེན་པ་པོའོ། །

དེས་དེ་མངོན་[T202a5]དུ་བྱེད་ཚུལ་ནི། སྔར་བཤད་པ་ལྟར་སེམས་སེམས་བྱུང་གི་ཀུན་རྟོག་གི་རྒྱུ་བ་ལོག་[185b5]པའི་ཚུལ་གྱིས་ཡིན་ཏེ། འགྲེལ་བ་ལས། སྐུ་གང་གིས་[D203a1][K203a1]དེ་ཉིད་མངོན་དུ་མཛད་པའི་[L217b5]སྐུ་དེ་སེམས་སེམས་བྱུང་དང་བྲལ་བས་ཞི་བའི་རང་བཞིན་ཅན་དུ་བཤད་པས་[T202a6]ཤེས་སོ། །[202a6]སངས་རྒྱས་ཀྱིས་ཕུང་སོགས་མ་གཟིགས་ན་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པ་དང་། ཇི་སྙེད་པའི་[D203a2][K203a2]དོན་[185b6]ཐམས་ཅད་ལ་སྐུར་བ་འདེབས་པར་འགྱུར་ཏེ། [L217b6]ཡོད་པ་དང་སངས་རྒྱས་ཀྱིས་མི་མཁྱེན་པ་གཉིས་འགལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་[T202b1]ན་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པ་ལ་ཇི་སྙེད་པའི་དོན་རྣམས་སྣང་དགོས་ཤིང་། རྣམ་མེད་དུ་མཁྱེན་པ་འདི་བའི་ལུགས་མིན་[D203a3][K203a3]པས་རྣམ་པ་[242]ཤར་[186a1]ནས་སོ། །

སྣང་ཡུལ་[L218a1]ཇི་སྙེད་པ་ཡང་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་མ་བསླད་པའི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་མཚན་[T202b2]དཔེ་སོགས་དང་། མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་བསླད་པའི་མ་དག་པའི་སྣོད་བཅུད་ལ་སོགས་པ་

---

240 Z: འགའ་ཞིག་は抜けている。 D, K, L, T: འགའ་ཞིག་འགའ་ཞིག་
241 D, K, L, Z: ཀ་ T: ག་
242 Z, L: པར་ D, K, T: པ་

གཉིས་སོ། །

དེའི་[D203a4][K203a4]དང་པོ་[L218a2][186a2]ནི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་སར་ལྡོག་པའི་དོན་མེད་ལ། གཉིས་པ་ནི་ས་དེར་རྒྱུ་ལོག་པས་ལྡོག་པ་ཡིན་ནོ། །

སྣང་ཚུལ་ནི་[T202b3]སངས་རྒྱས་ཀྱི་མཚན་དཔེ་མ་རིག་པ་མ་སྤངས་པའི་གང་ཟག་ལ་སྣང་བ་ན། རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་[D203a5][K203a5][L218a3]དེར་སྣང་བ་ནི། ཡུལ་[186a3]དེ་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱི་དབང་གིས་བྱུང་བའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་མིན་གྱི། ཡུལ་ཅན་དེ་མ་རིག་པའི་བག་[T202b4]ཆགས་ཀྱིས་བསླད་པའི་དབང་གིས་སྣང་བ་ཡིན་ཏེ། དེ་ནི་གང་ཟག་གཞན་ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བ་ཙམ་[L218a4]གྱི་ངོས་[D203a6][K203a6]ནས་ཡུལ་ཅན་དེ་ལ་སྣང་བ་མིན་[186a4]པར་རང་ངོས་ནས་དེ་ལྟར་སྣང་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ལ། མ་[T202b5]རིག་པ་མ་སྤངས་པའི་ངོར་གཟུགས་སྒྲ་སོགས་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་མ་གྲུབ་[L218a5]བཞིན་[D203b1][K203b1]དུ། དེར་སྣང་བའི་དོན་རྣམས་སྣང་བ་ནི། མ་རིག་པའི་[186a5]བསླད་པ་ཡོད་པའི་གང་ཟག་ལ་དེ་དག་སྣང་བ་ཁོ་ནའི་སྒོ་ནས་སངས་རྒྱས་ལ་སྣང་བ་ཡིན་གྱི། གཞན་[T202b6]ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བ་ལ་མ་ལྟོས་པར་སངས་རྒྱས་ཀྱི་རང་ངོས་ནས་སྣང་བ་[L218a6]མིན་[D203b2][K203b2]ནོ། །

དེའི་ཕྱིར་གཟུགས་སོགས་རང་བཞིན་གྱིས་མ་གྲུབ་བཞིན་དུ་དེར་སྣང་[186a6]བ་སངས་རྒྱས་ཀྱིས་མཁྱེན་པ་ཡང་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བའི་ངོས་ནས་[T203a1]ཡིན་གྱི། གང་ཟག་དེ་ལ་དེར་སྣང་བ་ལ་མ་ལྟོས་པར་སངས་རྒྱས་[D203b3][K203b3][L218b1]རང་གི་ངོས་ནས། དེ་ལྟར་སྣང་བའི་ཚུལ་གྱིས་མཁྱེན་པ་མིན་པས། དེར་སྣང་བས་འཁྲུལ་བར་འགྱུར་[186b1]བའི་དོན་མེད་དེ། དེ་ནི་ཡེ་ཤེས་ལ་བསླད་པ་ཡོད་ནས་སྣང་[T203a2]བ་མིན་ཡང་ཡེ་ཤེས་དེས། ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་དགོས་པའི་གནད་ཀྱིས་[D203b4][K203b4][L218b2]ཡིན་པས་སོ། །

དེ་ལྟར་ན་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་རང་ངོས་ནས་ནི། དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་བདག་མེད་པ་དང་རང་བཞིན་[186b2]གྱིས་མེད་པའི་ངོ་བོར་སྣང་བས་རྫུན་[243]པ་སྒྱུ་མ་[T203a3]བཞིན་དུ་སྣང་གི་བདེན་པར་མི་སྣང་ལ། མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་[D203b5][K203b5]ལ་སྣང་[L218b3]བའི་ཆ་ནས་ཡེ་ཤེས་དེ་ལ་སྣང་བ་ན། གང་ཟག་གཞན་དེ་ལ་བདེན་པར་སྣང་བར་ཤར་བ་[244]ཙམ་མོ། །

རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པ་ལས་[186b3]ཀྱང་།

> དངོས་ལ་མཁས་པ་[T203a4]རྣམས་ཀྱིས་ནི། །
> དངོས་པོ་མི་རྟག་སླུ་བའི་ཆོས། །
> གསོག་དང་སྟོང་བ་བདག་[D203b6][K203b6]མེད་པ། །[L218b4]
> རྣམ་པར་དབེན་ཞེས་བྱ་བར་མཐོང་།

ཞེས་གསུངས་ལ། དེའི་འགྲེལ་བར་ཡང་མཛད་པ་མཐར་ཕྱིན་པས་དེ་ལྟར་གཟིགས་པར་[186b4]གསུངས་སོ། །

---

[243] Z: བརྫུན་ D, K, L, T: རྫུན་
[244] D, K, L, T, Z: པ་

དེ་[T203a5]ལྟར་ན་བདེན་གཉིས་ལས།

བརྟགས་པའི་ངོ་བོས་དབེན་པ་ཡི། །
ཇི་[D204a1][K204a1]ལྟར་སྣང་བ་འདི་ཕོ་ན། །[L218b5]
བརྟེན་[245]ཏེ་སྐྱེས་པ་ཐམས་ཅད་ནི། །
ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པས་མངོན་སུམ་གཟིགས།

ཞེས་ཇི་སྙེད་པ་ཐམས་ཅད་མངོན་སུམ་དུ་ས་ལེར་[246]གཟིགས་པ་[T203a6]དང་། [186b5]

གང་ཚེ་ཤེས་དང་ཤེས་བྱ་དང་། །
བདག་ཉིད་རྗེས་[D204a2][K204a2]སུ་མི་མཐོང་བ། །
དེ་ནི་མཚན་མ་མི་[L218b6]འབྱུང་བས། །
གནས་པ་བརྟན་ཕྱིར་མི་བཞེངས་སོ།

ཞེས་གཉིས་སྣང་ཉེ་བར་ཞི་བའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་ལས་དུས་ནམ་ཡང་མི་བཞེངས་པར་བཤད་པ་གཉིས་[T203b1]ཀའི་ཚུལ་[186b6]གསུངས་པ་རྣམས་ཀྱང་། ཇི་བཞིན་དུ་མ་གོ་བ་ལ་དེ་[D204a3][K204a3]གཉིས་གང་རུང་གཅིག་མ་[L219a1]གཏོགས་པ། གཉིས་ཀ་ཁས་ལེན་པ་འགལ་བར་སྣང་ཡང་འགལ་བ་ནི་མེད་དེ། དེ་ཕོ་ན་ཉིད་གཟིགས་པ་དང་། ཇི་སྙེད་པ་གཟིགས་པའི་ཡེ་ཤེས་གཉིས་[T203b2]ངོ་བོ་གཅིག་ཡིན་ཡང་[247]། [187a1][203b2]ཡུལ་སོ་སོ་ལ་ལྟོས་ཏེ་རིགས་[D204a4][K204a4][L219a2]ཤེས་དང་། ཐ་སྙད་པའི་ཤེས་པ་གཉིས་སུ་འགྲོ་བ་ཙུང་ཟད་ཀྱང་མི་འགལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

འདི་ཡང་གཞིའི་ལྟ་བའི་སྐབས་སུ་ཆོས་ཅན་གཅིག་གི་སྟེང་ནས་རིགས་ཤེས་དང་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་[T203b3]མ་[187a2]གཉིས་ཀྱིས་རྙེད་ཚུལ་མི་འདྲ་བ་གཉིས་འོང་[L219a3]ཡང་། [203b3][D204a5][K204a5]འགལ་བ་ཙུང་ཟད་ཀྱང་མེད་པ་ལེགས་པར་ཤེས་པ་ལ་རག་ལས་སོ། །

འབྲས་བུའི་སྐབས་སུ་ཡེ་ཤེས་གཉིས་ཀྱིས་ཡུལ་འཇལ་བ་ན། དེ་ཙམ་དུ་མ་ཟད་ཡུལ་དེ་ལ་ཚད་མ་[T203b4]གཉིས་གང་དུ་སོང་ལེགས་[187a3]པར་ཤེས་ན། ཡུལ་སོ་སོར་[L219a4]མ་ངེས་ཀྱང་[D204a6][K204a6]ཡུལ་ཅན་གཉིས་གཞི་མཐུན་དུ་མི་འོང་བ་ཡང་ཤེས་པར་ནུས་ཏེ། འདིས་ནི་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་མཚན་ཉིད་ཀྱི་ཞིབ་ཆའང་ཤེས་པར་བྱའོ། །

V2 批難を退ける

第二〔批難を退ける〕は、もし〔対論者が、〕仏の如実智によって勝義諦を得るというならば、『入中論釈』に、

[245] Z: རྟེན་ D, K, T: བརྟེན་ L: བརྟོན་
[246] Z: ལེར་ D, K, L, T: ལེ་
[247] Z: ཀྱང་ D, K, L, T: ཡང་

もしそのような自性を見るということはないのではないか。それゆえ、どのようにそれらがご覧になるのかと問うならば、〔自らの特質によって成立している自性を見ることはないというのは〕その通りではあるけれども、しかしながら、ご覧にならない仕方でそれらはご覧になるのであると述べられている。[248]。

と言い、何もご覧にならないことをさして真実義をご覧になっていると説明し、その典拠として勝義諦は一切智者の智慧の対象をも超えていると説明しているものを引用していることと、仏地においては心と心所の動きというのは完全に退けられていると説明していることと、仏陀が〔五〕蘊などをご覧になられないとするならば、十力の箇所に一切智者であると説明していることとどうして矛盾しないのかと問うならば、ご覧にならない仕方によってご覧になっているというのは、対象であるすべてを見ないことをさして〔ご覧にならない仕方によってご覧になる〕と言っているのではなく、無明の眼病の力によって認識されているこれらのものが、真実なものとして存在するならば、聖者の無漏の三昧智によって認識されるはずなのに、それらを何もご覧にならないことを通して、それらの真実義をご覧になっていると示しているのである。なぜならば、否定対象が存在するならば、知覚されるはずであるのに、知覚されないということによって否定対象の否定が認識されると設定するからである。

見えているものがないということが勝れた見である[249]とお説きになっている意味もまた上に述べた通りに理解すべきである。

以上のように、『〔聖般若波羅蜜〕摂頌』に、

諸々の色を見ることなく、受なども見ることもない、
想を見ることなく、思も見ることもない、
識、心、意を見ることがない、その〔人〕が法を見るものであると如来は示した。

---

[248] MABh, 110.12–14（255b6–7）.

[249] Bhk, 522: tathaā coktam sūtre / "katamam paramārthadarśanam / sarbadharmāṇām abarśanam" iti / atredṛśam evādarśanam abhipretam / na tu nimīlitākṣajātyandhānām iva pratyayavaikalyād amanasikārato vā yad adarśanam tato; 571（34b6–7）: དེ་སྐད་མདོ་ལས་ཀྱང་གསུངས་ཏེ། དོན་དམ་པ་མཐོང་བ་གང་ཞེ་ན། ཆོས་ཐམས་ཅད་མཐོང་བ་མེད་པ་གང་ཡིན་པའོ་ཞེས་འབྱུང་ངོ་།། འདིར་དེ་ལྟ་བུའི་མཐོང་བ་མེད་པ་ལ་དགོངས་ཏེ། མི་མཐོང་བ་ཞེས་བཀའ་སྩལ་གྱི་མིག་བཙུམས་པ་དང་། དམུས་ལོང་ལ་སོགས་པ་ལྟ་བུ་རྐྱེན་མ་ཚང་བ་དང་། ཡིད་ལ་མི་བྱེད་པས་མི་མཐོང་བ་ནི་མ་ཡིན་ནོ།།（そのように経典の中にもお説きになっている。すなわち、勝義のものを見えているというのは何であるというならば、すべての法を見えていないということであると〔経典に〕出ている。ここでは、以上のような見えているものがないということを真意なさって、見えていないものであると教えているのであって、見を閉じることと、盲目などのような条件が揃っていないこと、意において働かないので、見えていないというのではないのである）。

> 虚空を見ると有情は言葉で表現する。
> 虚空をどのように見るのか。このことによって以下のことを考察しなさい。
> 同様に法を見るということも〔それと同様であると〕如来が示した。
> 法を見ることは他の比喩によっては説明することができないのである[250]。

と言い、見ていないのは五蘊であり、見ているのは法であるとお説きになり、それ〔法〕は真実義を意味している。すなわち、縁起を見る者が法を見るとお説きになった通りである[251]。

それについても〔さらに説明するならば〕、例えば、虚空は妨げるものである触を排除されただけのものであるけれども、それを見るあるいは理解するというのは、否定対象である妨げるものが存在するならば、知覚されるはずなのに、見られないことをさして、〔虚空を理解すると言っているの〕と同じである。その場合にも見えているというのは虚空であり、見えていないのは妨げるものである。

その比喩のように見るのではなく、青を見るように、真実義を見ることは最後の二句によって否定されいる。

五蘊を見ないとお説きになっている〔言葉〕によって、無漏の三昧によって真実義をご覧になっている智にとって、有法を見ることがないと示されているのである。

『入二諦経』に、

> 天子たちよ。勝義諦は一切の種類のものの最上のものを有している。一切智者の智慧の対象に至るまでも超えているのである。すなわち、勝義諦であると述べられるようなものではない[252]。

---

[250] PPSG, 52 : rūpasya darśanu adarśanu vedanāye saṃjñāya darśanu adarśanu cetanāye / vijñāna-citta-manu-darśanu yatra nāsti aya dharma-darśanu nidiṣṭu tathāgatena // ākāśa dṛṣṭu iti sattva pravyāharanti kha nidarśanaṃ kutu vimṛṣyatha etam arthaṃ / tatha dharma-darśanu nidiṣṭa tathāgatena na hi darśanaṃ bhaṇitu śakya nidarśanena// PPSGt, 171（8b2–4）..

[251] ŚL, 1: yo bhikṣavaḥ pratītyasamutpādaṃ paśyati, sa dharmaṃ paśyati | yo dharmaṃ paśyati, sa buddhaṃ paśyati | ityuktvā; 44（116a4）: དགེ་སློང་དག་སུས་རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་བ་མཐོང་བ་དེས་ཆོས་མཐོང་ངོ་། ། སུས་ཆོས་མཐོང་བ་དེས་སངས་རྒྱས་མཐོང་ངོ་ཞེས་དེ་སྐད་བཀའ་སྩལ་ནས།（比丘たちよ。縁起を見る者が法を見る。法を見る者がブッダを見るというように教えられた）。

[252]『世俗諦と勝義諦を示した経』という経典の中に以下のように書いている。SPN, 247a5–7: ལྷའི་བུ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཆོག་དང་ལྡན་པ་དང་། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་བར་ལས་ཡང་དག་པར་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ལྷའི་བུ་དེ་ལ་རྟོག་པ་དང་རྣམ་པར་རྟོག་པ་ཐམས་ཅད་འཇུག་པའང་མེད། ཕྱོག་པའང་མེད་དོ། ། དོན་དམ་པར་ན་དེ་ལ་ཕ་རོལ་ཡང་མེད།ཚུར་རོལ་ཡང་མེད། དབུས་ཀྱང་མེད་དེ།ལྷའི་བུ་འདི་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་སྒྲ་བཏགས་ཏེ་བརྗོད་མོད་ཀྱི། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ་ཞེས་བྱ་བ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །（天子たちよ。勝義諦は一切の種類のものの最上のものを有している。一切智者の智慧の対象に至るまでも超えているのである。すなわち、天子よ。それ〔勝義

と、勝義諦であると述べたときに、知に対象と対象を持つものの二つが別々に顕れているのと同様に見ないということをさして〔勝義諦を〕説明しているので、二つの顕れは誤りの典拠であって、仏陀が勝義を理解していないということの典拠ではないのである。

『入中論釈』に、

> 作られた実在に触れずに自性〔法性〕だけを直接ご覧になることによって、真実をご理解なさっているので、「仏陀（悟った者)」と述べられるのである[253]。

と、仏陀の如実智によって真実義をご覧になる智にとって、依他起に触れることなく法性のみをご理解なさっているとお説きになっている。

心と心所の動きが消滅しているというのは、真実義を目のあたりにしているときに、妄分別の動きが消滅しているという意味であって、心と心所がない〔という〕ことを示しているのではないのである。すなわち、『プラサンナパダー』に、

> 妄分別は心の動きであり、それと離れているので、その真実義というのは無分別である。
>
> 経典〔『無尽慧所問経』〕に、勝義諦とは何であるかと問うならば、それについて心の動きもないならば、文字などは言うまでもないとお説きになっている[254]

と言い、心の動きがないとお説きになった意味は、妄分別の動きがないということをさしていると説明している。

それについてさらに〔説明すると〕、有学の聖者が三昧に入っているときに、〔妄分別の動きが〕完全に退けられいるではなく、悟ったときに完全に退けられたと『入中論釈』に説かれている[255]。さらにまた『入中論釈』に、その自性が存在しないならば、それを理解するために、菩薩たちが苦行することは無意味になってしまうという〔ことについてを〕典拠と共に論証している。

諦〕においてすべての分別と妄分別が生じることもなく、退けられることもないのである。勝義というならば、それには彼岸なく、此岸もない。中もまたないのである。天子よ。これは勝義諦であると増益して述べるけれども、勝義諦であると述べられるようなものではないのである)。ツォンカパはこの文章を省略して引用したと思われる。

[253] MABh, 201.17–19（283a2）.

[254] PSPD, 374.1–2: vikalpaś cittapracāraḥ tadrahitatvāt tattattvaṃ nirvikalpaṃ // yathoktaṃ sūtre / paramārthasatyaṃ katamat / yatra jñānasyāpy apracāraḥ kaḥ punar vādo 'kṣarāṇām iti / PSPDt, 120a3–4; AKN, 123b2.

[255] 付論 D「唯世俗が三〔種の〕プドガラにとって顕れるか顕れないかのあり方について」参照。

> すなわち、それらの自性というのはいかなるものであるかと問うならば、それらが作りものではないことと他のものに依らないことである。無明の眼病と離れた知によって理解すべき自性である。
> それは存在するのかと言うならば、存在しないとそのように誰が主張するのか。もし存在しないならば、何のために菩薩たちは波羅蜜の道を修習しようとするのか。すなわち、その法性を悟るために、菩薩たちはそのように百の苦行にとりかかるのであるか[256]。

とお説きになっており、その典拠として、

> 天子よ、もし勝義が存在していないとしたならば、梵行は無意味になり、諸々の如来が出現することは無意味になってしまうのであろう。
> 勝義が存在するので、諸々の菩薩をさして勝義諦に通暁しているものであると述べるべきである[257]。

と言い、勝義諦は存在しないのならば、究竟の涅槃を完成するために、行を行じることは意味がないこととなり、所化がその〔究極の涅槃を悟ることが〕あり得ないことになるので、その〔所化〕がそれを悟るために仏陀が世間に顕れたことは意味がなくなってしまうのである。また、偉大なる菩薩たちが勝義諦に通暁できないことになるので、勝義諦は存在すると論証する経典を引用したので、この偉大なる阿闍梨の説では、勝義諦が所知ではないとか、聖者の三昧において真実義を理解する智慧がないと主張するのは全く誤った主張である。

さらに『入中論釈』に、

> したがって、仮設することで真実義を理解すると設定するのであって、実際に誰かが〔真実義を〕知るわけではないのである。なぜならば、知るものと知られるものとの二つもまた生じたことがないからである[258]。

とお説きになっている最初の意味は、智慧と真実義の両方は対象と対象を持つものという二つの異なったものに分けて、真実義を悟ると設定するのは、言説の知にとってのみ設定するのであって、その智慧にとって設定するのではないという意味であり、知るものはまだ生じたことがないというのは、自性によって生じたことはないという意味であり、例えば、水に水を注いだようなものになるということである。

---

[256] MABh, 306.5–12（314a6–b1）.
[257] MABh, 307.4–7（314b4–5）; RM, 99a6–7.
[258] MABh, 358.15–17（330b6–7）.

智慧の対象である真実義に対して心と心所は働くことはないので、〔仏の〕お体のみがそれを目の当たりになさるのである[259]とお説きになっているのは、実現すべき対象は、真実義であり、それを対象とする智慧は、それ〔真実義〕を実現する行為であり、報身はそれを実現する行為主体である。すなわち、認識なさるものである。

それ〔報身〕が真実義を目の当たりになさる仕方は、前に説明した通りに、心心所の妄分別の動きを退けるという仕方で〔直接体験〕なさる。すなわち、『入中論釈』に真実義を直接体験なさるそのお体というのは、心心所と離れているので、寂滅を自性としている[260]と説かれていることによって理解される。仏が蘊などをご覧にならないならば、如量智と如量の対象一切を損減することになる。なぜならば、存在しているということと仏がお知りにならないということの二つは矛盾しているからである。

したがって、如量智に如量の対象が顕れなければならないのである。また、形象なくしてお知りになるということはこの〔帰謬派の〕説ではないので、形象が〔知に〕昇ってきてから〔お知りになるの〕である。

顕れている対象全てもまた、無明の習気によって汚されていない仏の相好などと、無明の習気によって汚されている不浄の有情〔世間〕と器〔世間〕などとの二つである。

そのうち、前者〔仏の相好など〕が、仏地において退けられる意味がないけれども、後者が、その地において〔心と心所の妄分別の〕動きを退けることによって退けられるのである。

顕れの仕方については、仏陀の相好が無明を断じていないプドガラに顕れるとき、自らの特質によって成立していないながら、そのように〔自らの特質によって成立しているかのように〕顕れるのは、その対象が無明の習気の力によって生じているという理由によってではなく、対象を持つ者が無明の習気によって汚された力によって顕れるのである。なぜならば、それは、他の人において単にそのように顕れていることからその対象を持つ者に顕れているのではなく、〔対象〕自らの側からそのように顕れているからである。

---

259 MABh, 362.6–8（332a1–2）：དེ་ལྟ་ན་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་དུ་དེའི་ཡུལ་ཅན་སེམས་དང་སེམས་ལས་བྱུང་བ་རྣམས་མི་འཇུག་པས་སྐུ་ཁོ་ནས་མངོན་སུམ་དུ་མཛད་པར་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་རྣམ་པར་གཞག་གོ། །（したがって、智慧の対象である真実義に対してあらゆる形象としてその対象を持つもの（知）という心と心所などは働くことはないので、〔仏の〕お体のみがそれを目の当たりになさるのであると世俗として設定する）ツォンカパは原文を省略して引用している。

260 MABh, 362.14–16（332a3）：སྐུ་གང་གིས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་འདི་མངོན་སུམ་དུ་མཛད་པར་བཤད་པ་དེ་ནི་ཞི་བའི་རང་བཞིན་ཅན་དུ་འདོད་དེ། སེམས་དང་སེམས་ལས་བྱུང་བ་དང་བྲལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །（お体によって真実義を目の当たりになさるのであると説かれているということは、寂滅という特質を持つものであると主張されているのである。なぜならば、心心所と離れているからである）。

仏の如量智において無明を断じていない〔人の〕知に色、声など、自らの特質によって成立していないものでありながら、それ（自らの特質によって成立しているもの）として顕れている〔色・声などの〕諸々の対象が〔仏の如量智に顕れるのは、〕無明によって汚された人〔の知〕にそれらが顕れることによってのみ仏に顕れるのであって、他〔の人の知〕にそのように顕れることに基づくことなく仏自身の側で顕れるわけではない。

したがって、色などが自性によって成立していないのに、自性によって成立しているものとして顕れるものを仏がご理解になさるのも、無明を持つ者にそのように顕れている側からであって、その人にそのように〔自性によって成立しているものとして〕顕現することに基づくことなく、仏自身からそのように顕れるという仕方によってご理解なさっているのではないので、それ〔自性によって成立しているものとして〕顕れることによって、その智が迷乱することになってしまうという意味はないのである。なぜならば、それは智慧に汚れが存在することによって顕れるのではないけれども、その智慧がすべての所知をご存知でなければならないという本質によって〔自性によって成立しているものが顕れる〕からである。

そうであるならば、如量智自身の側では、全ての事物は無我であり自性が存在しないものとして顕れるので、虚偽である幻のようなものとして顕れるのであって、真実なるものとして顕れることはあり得ない。しかし、無明を有している人たちに顕れたものを通じて、その〔如量〕智に顕れるときには、他の人（無明を有している人）に真実なものとして顕れたもの〔が、そのようなもの〕として〔仏智に〕昇ったにすぎない。

『六十頌如理論』でも、

> 事物に通達している者たちは、
> 事物は無常であり、欺く法であり、
> 空虚であり、空であり、無我であり、
> 寂静であるものを見る[261]。

とお説きになっており、その註釈にも行いが究極に至った者は、そのようにご覧になるとお説きになっている[262]。

以上のように、『二諦分別論頌』に、

> 分別されたあり方に関して空であるものが、

[261] YṢ, 12（21a7）; 瓜生津（1985, 77）参照。
[262] YṢV, 64（18a7）.

顕れている通りのもののみに、
基づいて生じた一切のものは、
一切をご理解なさっている智によって直接知覚によってご覧になる[263]。

と、ある限りの全てのものを直接知覚において〔すなわち〕そのままご覧になることと、

知るものと知られるものと
自性を見ることのない者は、
相が生じないという境地（相不生）に、
堅固に住しているので、〔そこから〕立ち上がることはない[264]

と、二つの顕れが寂滅した三昧からいかなるときも立ちがることがないと説明している二つのあり方をお説きになっていることも、ありのままに理解していない者にその二つのいずれか一方以外に、両方を承認することは矛盾しているように思われるけれども、矛盾はないのである。なぜならば、真実義をご覧になる智慧とある限りのものをご覧になる智慧の二つは同じ一つのものであるけれども、それぞれの対象に依拠して正理知と言説知の二つになることは少しも矛盾することはないからである。

このことについても、土台である見解の箇所で、一つの主題の上に正理知と言説の量の二つによって得られるという、二つの異なった得られ方があるけれども、矛盾は少しもないということを正しく知ることに依拠しているのである。

〔仏〕果の段階において二つの智慧によって対象を量るときに、〔対象を量る〕それだけにとどまらず、その対象に対して二つの量のいずれになるのかを正しく知るならば、対象を個別に確定できなくても、二つの対象を持つものが〔その対象において〕共通の基体は存在しないということも知ることができるのである。すなわち、これによって二諦の定義の詳細もまた知るべきである。

U3 དོན་དམ་པའི་དབྱེ་བ།

གསུམ་པ་ནི། དོན་དམ་བདེན་[T203b5]པ་ལ་དབྱེ་ན། འཇུག་འགྲེལ་ལས། སྟོང་[187a4]པ་ཉིད་ལ་རྒྱས་[D204b1][K204b1]པར་[L219a5]ཕྱེ་ན། སྟོང་པ་ཉིད་བཅུ་དྲུག་དང་། འབྲིང་དུ་ཕྱེ་ན་དངོས་པོ་དང་། དངོས་མེད་དང་། རང་དང་། གཞན་གྱི་ངོ་བོ་སྟོང་པ་ཉིད་དེ་བཞི་དང་། བསྡུས་ན་གང་ཟག་དང་། ཆོས་ཀྱི་[T203b6]བདག་མེད་གཉིས་སུ་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

[263] SDV, 186（3a4–5）.
[264] SDV, 187（3a5–6）.

གཞུང་གཞན་[D204b2][K204b2]ལས་ནི་[187a5]དོན་[L219a6]དམ་པ་དངོས་དང་། མཐུན་[265]པའི་དོན་དམ་གཉིས་གསུངས་ཏེ། དབུ་མ་སྣང་བ་ལས།

སྐྱེ་བ་མེད་པ་འདི་ཡང་དོན་དམ་པ་དང་མཐུན་པའི་ཕྱིར་དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱ་ཡི།[266][T204a1] དངོས་སུ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། དངོས་སུ་ན་དོན་དམ་པ་སྤྲོས་པ་[D204b3][K204b3]ཐམས་ཅད་ལས་[187a6]འདས་པའི་[L219b1]ཕྱིར་རོ།

ཞེས་དང་། དབུ་མ་རྒྱན་ལས་ཀྱང་།

དམ་པའི་དོན་དང་མཐུན་པའི་ཕྱིར། །
འདི་ནི་དམ་པའི་དོན་ཞེས་བྱ། །
ཡང་དག་ཏུ་ན་སྤྲོས་[T204a2]པ་ཡི། །
ཚོགས་རྣམས་ཀུན་ལས་དེ་གྲོལ་ཡིན།

ཞེས་དང་། བདེན་[D204b4][K204b4]གཉིས་ལས་ཀྱང་དེ་[187b1]བཞིན་དུ་[L219b2]གསུངས་ཤིང་། བདེན་གཉིས་རང་འགྲེལ་དང་། རྒྱན་ལས་དོན་དམ་པར་སྐྱེ་སོགས་བཀག་པ་ཀུན་རྫོབ་པར་བཤད་དོ། །

དེ་རྣམས་[T204a3]ཀྱི་དོན་ནི་སྔོན་གྱི་མང་པོས་རྣམ་གྲངས་པ་ཡིན་མིན་གྱི་དོན་དམ་བདེན་པ་གཉིས་[D204b5][K204b5]བྱས་ནས། གཟུགས་སོགས་[187b2][L219b3]ལ་དོན་དམ་པར་སྐྱེ་སོགས་བཀག་པའི་སྟོང་ཉིད་ནི་ཕྱི་མ་ཡིན་ཞིང་། དེ་དོན་དམ་བདེན་པ་བཏགས་པ་བ། ཀུན་རྫོབ་བདེན་[T204a4]པ་མཚན་ཉིད་པ་དང་། [204a4]ཕྱི་མ་ནི་བློ་གང་གིས་ཀྱང་ཡུལ་དུ་བྱ་མི་ནུས་པས་ཤེས་བྱ་མིན་[D204b6][K204b6]པར་འདོད་དོ། །

དེ་ནི་དེ་རྣམས་ཀྱི་[L219b4]དོན་[187b3]མིན་པས་འདི་ལྟར་བཤད་དེ། ཡུལ་ཆོས་ཉིད་ལ་དོན་དམ་པར་བྱ་དགོས་མོད་ཀྱང་ཡུལ་ཅན་རིགས་ཤེས་ལ་[T204a5]ཡང་དེར་བཤད་པ་མང་སྟེ། བདེན་གཉིས་ལས།

སྐྱེ་[267]བ་མེད་པས་རིགས་པ་ནི། །
དོན་དམ་[D205a1][K205a1]ཡིན་ཏེ།

ཞེས་དང་། དབུ་མ་སྣང་བ་[L219b5]ལས་ཀྱང་།

[187b4]གང་ཡང་དོན་དམ་པར་སྐྱེ་བ་མེད་ཅེས་བྱ་བ་ལ་སོགས་པ་སྨྲས་པ་དེ་ལ་ཡང་དོན་ནི་འདི་ཡིན་པར་[T204a6]འདོད་དེ། ཡང་དག་པའི་ཐོས་པ་དང་བསམ་པ་དང་བསྒོམས་པ་ལས་[D205a2][K205a2]བྱུང་བའི་ཤེས་པ་ཐམས་ཅད་ནི། ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པའི་ཡུལ་ཅན་[L219b6]ཡིན་པའི་ཕྱིར། [187b5]དོན་དམ་པ་ཞེས་བྱ་སྟེ། འདིའི་དོན་དམ་པ་ཡིན་པའི་ཕྱིར།

ཞེས་གསུངས་པ་[T204b1]ལྟར་རོ། །

265 Z: འཐུན་ D, K, L, T: མཐུན་ 以後 Z は འཐུན と綴られ、D, K, L, T は མཐུན と綴られる。
266 Z: བྱའི། D, K, L, T: བྱ་ཡི།
267 D, K: བསྐྱེ་ L, T, Z: སྐྱེ་

རིགས་ཤེས་ལ་གཉིས་ལས་འཕགས་པའི་མཉམ་གཞག་མི་རྟོག་ཡེ་[D205a3][K205a3]ཤེས་རྟོག་མེད་དང་། རྟགས་ལ་བརྟེན་ནས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་འཇལ་[L220a1]བའི་རིགས་ཤེས་རྟོག་[187b6]བཅས་ལ་སོགས་པའོ། །

རྟོག་གེ་འབར་བ་ལས། དོན་དམ་ལ་མི་རྟོག་[T204b2]ཡེ་ཤེས་དང་། དེ་དང་རྗེས་སུ་མཐུན་པའི་ཤེས་རབ་གཉིས་བཤད་པའི་དགོངས་[D205a4][K205a4]པ་དང་། དབུ་མ་སྣང་བ་ལས་དོན་དམ་གཉིས་[L220a2]བཤད་པ་གཉིས་ནི་དགོངས་པ་གཅིག་ཡིན་[188a1]པས། དོན་དམ་གཉིས་བཤད་པ་ནི་ཡུལ་ཅན་ལ་མི་བྱེད་པར་ཡུལ་གྱི་[T204b3]དོན་དམ་ཁོ་ན་ལ་བྱེད་པ་ནི་གཞུང་གི་དོན་མིན་ནོ། །

དེ་ལ་དང་པོ་ནི་དེ་ཁོ་ན་[D205a5][K205a5]ཉིད་ལ་འཇུག་པ་ནི།[268]བདེན་པ་དང་གཉིས་སྣང་གི་སྤྲོས་པ་[L220a3]ཅིག་ཅར་[269]རང་གི་[188a2]ཡུལ་དུ་གཅོད་ནུས་པས་དོན་དམ་པ་དངོས་ཡིན་ཏེ། སྤྲོས་པ་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་ཞེས་[T204b4]པའི་དོན་ཡང་དེའོ། །

གཉིས་པས་ནི་རང་གི་ཡུལ་དུ་བདེན་པའི་[D205a6][K205a6]སྤྲོས་པ་འགོག་ནུས་ཀྱང་། གཉིས་སྣང་གི་སྤྲོས་པ་གཅོད་མི་[L220a4]ནུས་པས་འཇིག་རྟེན་ལས་འདས་པའི་[188a3]དོན་དམ་དང་། རྣམ་པ་རྗེས་སུ་མཐུན་པས་མཐུན་པའི་དོན་དམ་མོ། །

གཟུགས་[T204b5]སོགས་ལ་དོན་དམ་པར་སྐྱེ་སོགས་བཀག་པའི་ཡུལ་[D205b1][K205b1]གྱི་དོན་དམ་ལ་ཡང་ཚུལ་གཉིས་བཤད་དགོས་ལ། དེ་ལ་ནི་ཡུལ་གྱི་[L220a5]སྟོང་ཉིད་དེ་རིགས་ཤེས་རྟོག་མེད་ཀྱི་ངོར་ནི་[188a4]སྤྲོས་པ་གཉིས་ཅར་[270]དང་བྲལ་བའི་དོན་དམ་དངོས་ཡིན་ལ། རིགས་ཤེས་[T204b6]རྟོག་བཅས་ཀྱི་ངོར་ནི་སྤྲོས་པ་ཕྱོགས་གཅིག་ཙམ་[D205b2][K205b2]དང་བྲལ་བས་[204b6]སྤྲོས་པ་གཉིས་ཀར་དང་བྲལ་བའི་དོན་དམ་དངོས་མིན་[L220a6]གྱི། སྤྱིར་དོན་དམ་བདེན་པ་དངོས་མིན་ཟེར་བ་མིན་ནོ། །[188a5]

དེས་ན་བློ་འགའ་ཞིག་གི་ངོར་གཉིས་སྣང་གི་སྤྲོས་པ་[T205a1]ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ་མ་གཏོགས་པ། བདེན་སྟོང་[D205b3][K205b3]དེ་སྣང་བའི་སྤྲོས་པ་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བ་མི་སྲིད་པས། དོན་དམ་བདེན་པ་ཡིན་ན་[L220b1]གཉིས་སྣང་གི་སྤྲོས་པ་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་དགོས་པ་ནི་[188a6]གཞུང་གི་དོན་མིན་[T205a2]ནོ། །

དེས་ན་སྒྱུ་མ་རིགས་གྲུབ་པས་གཞི་ཕུང་པོ་ལྟ་བུ་དང་། བདེན་སྟོང་གི་སྣང་བ་གཉིས་[D205b4][K205b4]ཚོགས་པ་རིགས་ཤེས་རྗེས་དཔག་གིས་གྲུབ་པའི་དོན་ཙམ་དོན་དམ་བདེན་པར་[L220b2]འདོད་པ་ནི། མཐུན་པའི་དོན་དམ་དུ་འགྱུར་གྱི་དོན་དམ་བདེན་[188b1][T205a3]པ་མིན་ནོ། །

[205a3]བདེན་པའི་གཅིག་དང་དུ་བྲལ་གྱི་སྣང་བས་སྨྱུ་གུ་སོགས་བདེན་མེད་ཀྱི་སྣང་བར་སྒྲུབ་[D205b5][K205b5]པ་ཡང་། གཞི་དེ་བདེན་པར་ཡོད་མེད་ཐེ་ཚོམ་མ་ཆོད་པའི་གང་ཟག་རྟོགས་[L220b3]ལྡན་ལ་ནི། དེ་ལྟར་སྒྲུབ་པའི་དོན་མེད་ལ། ཐེ་ཚོམ་ཆོད་པ་[T205a4]ལ་ནི་རྟགས་དེ་རྟགས་[188b2]ཡང་དག་ཏུ་མི་འགྱུར་བ་དང་། དབུ་མ་སྣང་བ་ལས་གཅིག་དུ་བྲལ་གྱི་རྟགས་[D205b6][K205b6]ཆོས་གཉིས་ཀ་རྣམ་བཅད་ཙམ་དུ་གསུངས་ཤིང་། གཅིག་དང་དུ་མ་མིན་པ་[L220b4]དང་། དེ་གཉིས་སུ་མེད་པ་གང་རྟགས་སུ་བྱས་ཀྱང་འདྲ་བར་[T205a5]གསུངས་པ་ནི། མ་ཡིན་དགག་ལ་མི་[188b3]བྱེད་པར་དེ་ཉིད་ཀྱི་དཔེར་བརྗོད་ལས་ཤེས་པས། སློབ་[D206a1][K206a1]དཔོན་ཞི་བ་འཚོ་ཡབ་སྲས་དང་། སློབ་དཔོན་སེང་གེ་བཟང་པོའི་བཞེད་པ་གཏན་[L220b5]མིན་ནོ། །

268 K, L, T, Z: ནི། D:ན།

269 Z: ཆར་ D, K, L, T: ཅར་ 以後 Z は ཆར と綴られ、D, K, L, T は ཅར 綴られる。

270 Z: ཆར་ D, K, L, T: ཅར་

སྣང་བ་ལ་དགག་བྱའི་སྤྲོས་པ་རྣམ་པར་བཅད་པ་[T205a6]ལ་རྣམ་བཅད་དང་ཡོངས་གཅོད་གཉིས་སུ་བྱས་པའི་ཕྱི་མ་[D206a2][188b4][K206a2]རྗེས་དཔག་གིས་གཞལ་བའི་དོན་ཙམ་དོན་དམ་བདེན་པར་འདོད་པ་ཡང་། དབུ་མ་པ་ཆེན་པོ་སུ་ཡང་མི་བཞེད་དོ། །

ཚུལ་འདིས་[L220b6]ལམ་རིམ་རྒྱས་པར་འདི་དག་གི་རྣམ་[T205b1]གཞག་བཤད་པ་ཡང་ཞིབ་ཏུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

[205b1]སྐྱེ་སོགས་བཀག་པ་[D206a3][K206a3]མཐུན་[188b5]པའི་དོན་དམ་དུ་བཤད་པའི་འཕྲོ་ལ་བདེན་གཉིས་རང་འགྲེལ་ལས།

> གཞན་དག་ནི་ཡང་དག་པ་ཁོ་ནར་འཛིན་པས། ཡང་ཞེས་བྱ་[L221a1]བ་[271]བསྡུ་བའི་དོན་ནོ། །
> དེ་ཡང་[T205b2]རིགས་པས་དཔྱད་ན་ཀུན་རྫོབ་ཁོ་ན་སྟེ། ཅིའི་ཕྱིར་ཞེ་ན། དགག་[D206a4][K206a4]བྱ་ཡོད་པ་མ་ཡིན་[188b6]པས། །ཡང་དག་ཏུ་ན་བཀག་མེད་གསལ།

ཞེས་གཞན་དག་སེམས་ཙམ་པ་[272]དགག་གཞི་ལ།[L221a2]ཆོས་བདག་བཀག་པའི་དགག་པའི་སྟོང་ཉིད་ཡང་དག་ཏུ་གྲུབ་[T205b3]པར་འདོད་པ་དང་རང་ལུགས་ཀྱིས་དགག་བྱ་ཆོས་བདག་མེད་[D206a5][K206a5]པས་དེ་བཀག་པའི་དགག་པ་[189a1]ཡང་དག་པར་མ་གྲུབ། ཅེས་གསུངས་པས། དོན་དམ་པར་སྐྱེ་སོགས་བཀག་པ་[L221a3]ཀུན་རྫོབ་པར་བཤད་པ་ནི། ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡོད་པའི་དོན་ཡིན་[T205b4]གྱི། ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པར་སྟོན་པ་མིན་ནོ། །

ཡང་དེ་ཉིད་ལས།[D206a6][K206a6]

> ཡང་དག་པའི་སྐྱེ་[189a2]སོགས་དངོས་པོ་སྣང་བ་ན་མི་སྣང་བས། ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པ་བཞིན་དུ། ཡང་དག་པར་སྐྱེ་[L221a4]སོགས་བཀག་པ་ཡང་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་[T205b5]འགྱུར་ཏེ། དེ་ནི་དགག་གཞིའི་དངོས་པོ་སྣང་བ་ན་མི་སྣང་ངོ་། [D206b1][K206b1]

ཞེས་པའི་ལན་དུ་

> མི་སྣང་བ་མ་ཡིན་[189a3]ཏེ། དངོས་པོའི་ངོ་བོ་དང་ཐ་མི་དད་པའི་ཕྱིར་རོ།

ཞེས་སྔོན་པོ་ལྟ་བུ་སྣང་བ་ན། དེའི་བདེན་[L221a5]སྟོང་སྣང་བར་བཤད་པ་ནི། བདེན་པར་ཡོད་པ་[T205b6]པར་[273]བཀག་པའི་རྣམ་བཅད་ཙམ་མིག་ཤེས་སོགས་ལ་སྣང་བ་མིན་[D206b2][K206b2]གྱི། [205b6]མ་ཡིན་དགག་ལ་དགོངས་[189a4]པས། དེ་འདྲ་དེ་ཀུན་རྫོབ་མཚན་ཉིད་པ་ཡིན་ཡང་།[274]བདེན་པ་བཅད་ཙམ་གྱི་སྟོང་བ་དོན་[L221a6]དམ་བདེན་པར་མི་འགལ་ལོ། །

དབུ་མ་རྒྱན་[T206a1]ལས། དོན་དམ་པར་སྐྱེ་བ་སོགས་བཀག་པ་ཡང་དག་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་གཏོགས་[D206b3][K206b3]པ་ཡིན་ཡང་དོན་དམ་པ་[189a5]དང་མཐུན་པས་དེར་བཤད་ལ། དོན་དམ་པ་ནི་དངོས་

---

[271] D, K, T, Z: བ་ L: བ་ནི་

[272] K, T, Z: པ་ D, L: པ་དག་

[273] D: བདེན་པར་ཡོད་པ་ K, T, Z: བདེན་པ་མེད་པར་; L: བདེན་པ་ཡོད་པ་

[274] D, K, L, T, Z: ཀྱང་

པོ་ཡོད་མེད་སོགས་ཀྱི་སྤྲོས་པའི་དྲ་བ་མཐའ་དག་[L221b1]སྤངས་[T206a2]པར་གསུངས་པའི་སྤྲོས་པའི་དྲ་བ་ནི། བདེན་གཉིས་རང་འགྲེལ་ལས།

> དེ་ཉིད་ཕྱིར་ན་དེ་སྟོང་མིན། །
> མི་[D206b4][K206b4]སྟོང་མ་ཡིན་ཡོད་[189a6]མེད་མིན། །
> མི་སྐྱེ་མ་ཡིན་སྐྱེ་མིན་ཞེས། །
> དེ་ལ་སོགས་པ་བཅོམ་ལྡན་གསུངས།

ཞེས་དང་།

> དེ་ཅིའི་ཕྱིར་[T206a3]ཞེ་ན། [L221b2]དེ་ནི་སྤྲོས་པ་མེད་པ་ཡིན། །
> དེ་ཁོ་ན་ནི་རྟོག་པའི་དྲ་བ་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བའོ།

ཞེས་རྟོག་པའི་དྲ་བ་ལ་སྤྲོས་[D206b5][K206b5]པའི་དྲ་བར་[189b1]བཤད་པ་ལྟར་ཡིན་ལ། དེ་ཡང་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་རྟོགས་པའི་ངོར་ལྡོག་[275]པས། དེ་ནི་དོན་[T206a4]དམ་དངོས་དང་། དེ་[L221b3]ལྟར་མ་གྱུར་པའི་རིགས་ཤེས་ཡུལ་བཅས་ནི་སྔ་མའི་རྗེས་མཐུན་[276]པ་ཡིན་པ་སོགས་ནི་སྔར་བཞིན་ནོ། །

[D206b6][K206b6]ཡང་དག་པའི་སྐྱེ་[189b2]སོགས་བཀག་པ་ལ་ཡང་། འདིས་བཀག་པའི་རིགས་ཤེས་དང་། དེའི་གཞལ་བྱ་[T206a2]གཉིས་ཡོད་པས། ཡང་དག་པའི་[L221b4]ཀུན་རྫོབ་ཏུ་གདོགས་ཚུལ་ཡང་དེའི་སྟེང་ནས་ཤེས་པར་བྱའོ། །

བདེན་གཉིས་ཀྱི་སྤྲོས་པ་ཡིན་ནོ་ཅོག་[D207a1][K207a1]གི་དྲ་བ་དང་བྲལ་[189b3]བར་བཤད་ཚུལ་དེ་ནི། སྐབས་མང་པོ་ཞིག་ཏུ་ཉེ་བར་མཁོའོ། །

U3 勝義の分類を説明する

第三〔勝義の分類を説明するには〕、勝義諦を分類するならば、『入中論釈』に、「空性を詳しく分類するならば、十六空であり、中ぐらいに分類するならば、事物と非事物、それ自体と他者の在り方が空性であるという四つであり、まとめるならば、人無我と法無我の二つである」[277]と説かれている通りである。

他のテキスト[278]では、勝義そのものと随順する勝義との二つを説かれている。すなわち、『中観光明論』に、

> 生起することはないというこのこともまた勝義と随順するがゆえに勝義であると言われるものであって、真の勝義ではないのである。なぜならば、真の勝義

[275] Z: ལྡོག་ D, K, L, T: བློག་
[276] Z: འཐུན་ D, K, L, T: མཐུན་
[277] MABh, 301.17–302.2（313a3–b2）.
[278] 中観自立論証派のテキストのことをさしている。

というのは一切の戯論を超えたものであるからである[279]。

と説かれ、『中観荘厳論』にもまた、

勝義と随順するがゆえに、
これは勝義と言われる。
本当の意味で〔の勝義は〕戯論の集まり一切からそれは離れたものである[280]

。

とあり、『二諦分別論』[281]にもまた、同様に説かれており、『二諦分別自註』と『中観荘厳論』に、「勝義において生起することなどを否定するのは世俗なものである」と説かれている[282]。

それらの意味は、以前のチベットの多くの者は異名であるかないかという二つの勝義諦であることにし、色などについて勝義において生起することなどが否定された空性は前者であり、それは仮設された勝義諦であり、真の世俗諦である。後者はいかなる知によっても対象となることありえないので、所知ではないと主張する。

それは以上のテキストの意味ではないので、以下のように説明する。対象である法性をさして勝義というべきであるけれども、〔認識する知である〕対象持つものの正理知をさしてもまた勝義であるというように説明する〔テキスト〕が多くある。すなわち、『二諦分別論頌』に、

欺くことがないので、正理は勝義なものである[283]。

と説かれ、『中観光明論』にもまた、

いかなるものも勝義において生起することはないなどという主張についても、その意味は以下のように主張する。すなわち、正しい聞思修から生じたすべての知は不顛倒の対象を持つものであるので、勝義のものであると言われている。なぜならば、これ〔正しい聞思修から生じたすべての知〕の対象は勝れたものであるからである[284]。

とお説きになっている通りである。

[279] MA, 149a5; 一郷（1993, 110）参照。
[280] MAL, 55b2; 一郷（1985, 168）参照。
[281] SDV, 15（64a4）.
[282] 本文 188b1–189a5 参照。
[283] SDV, 156（4a4）.
[284] MA, 229b1–2.

正理知に二つあるうち、聖者が三昧に入った無分別の智慧と論証因によって真実義を量る有分別の正理知などである。

『思択炎』に、「勝義には無分別の智慧と、それに随順している般若の智慧の二つがある」[285]と説明していることの真意と、『中観光明論』に二つの勝義を説いていることの二つは同じお考えであるので、二つの勝義を説明しているのは、対象を持つものという知の方をさしているのではなく、対象の勝義のみをさして〔二つの勝義を説明しているのは、〕テキストの意味ではないのである。

そのうち、第一〔無分別の智慧〕が真実に対して働くというのは、真実〔であるという戯論〕と二つの顕れの戯論を一緒に自らの対象として退けることができるので、真の勝義であり、一切の戯論を離れているという意味もまたそのことである。

第二〔それに随順している般若の智慧〕によって、自らの対象として真実である戯論を否定することができるけれども、二つの顕れの戯論を退けることはできないので、世間を超えた勝義と内容が随順しているので、随順勝義である。

色などについて勝義において生起することなどが否定されるところの対象の勝義についてもまた二つの在り方があると説明すべきである。そのうち、対象の空性というのは無分別の正理知にとっては、二つの戯論が両方とも離れている真の勝義である。有分別の正理知にとっては一方の戯論だけを離れているので、二つの戯論両方とも離れている真の勝義ではないけれども、一般的に〔以上のような限定なしに〕真の勝義諦ではないと言っているわけではないのである。

したがって、ある種の知（無分別の正理知）にとって二つの顕れの戯論一切と離れていることを除いて、真実に関して空であるものは顕れの戯論一切と離れていることはあり得ないので、勝義諦であるならば、二つの顕れの戯論一切と離れていなければならないというのは、テキストの意味ではないのである。

したがって、幻理成就派の者が、基体である蘊などと真実に関して空であるという二つの顕れが合わさったものは比量の正理知によって成立している意味のみが勝義諦であると主張するのは、随順勝義になるのであって、〔一般の〕勝義諦ではないのである。

真実なる一と多を離れている顕れによって芽などが真実として存在しない顕れであると論証することもまた、その基体は真実として存在するかしないかについての疑いを断じていない智慧ある人にとっては、そのように〔真実として存在しないものの顕れとして〕論証する意味がなく、疑いを断じた人にとってはその論証因は正しい論証因にはなりえないのである。また、『中観光明論』に離一多性の論証因と所証の法の両

[285] TJ, 60b4–52.『思択炎』の著作問題については江島（1980）, 斎藤（2005）, 安間（2008）参照。

方は〔否定対象の〕否定だけである[286]とお説きになっており、一と多でもない、その二つのいずれとしても存在しないことのいずれも論証因として同じであるとお説きになっているのは、定立的否定のことをさしているのではなく、その同じものの比喩として述べられていることから知るので、〔瑜伽行自立論証派の〕軌範師シャーンタラクシタと〔カマラシーラ〕父子と軌範師ハリバドラのご主張では決してないのである。

顕れにおいて否定対象の戯論を否定する場合に否定されるものと肯定されるものの二つに分けたものの比量によって量られる対象であるだけのものである後者が、勝義諦であると主張することについてもまた偉大なる中観派の誰もお認めにならないのである。

以上の議論によって、ラムリンチェンモにこれらの設定を説明していることもまた詳しく知るべきである。

生起などの否定は随順勝義であると説明した後に『二諦分別論の自註』に、

> 他の者たちは全く正しいものであると捉えているので、「また」という語はまとめる意味である。
> それについても、正理によって考察するならば、世俗だけのものである。なぜかと問うならば、否定対象は存在しないので、正しく言うなら否定はないことは明らかである[287]

と他の者たちである唯識派は否定の基体において法我を否定したところの否定された空性は真実において成立していると主張することと、自説（帰謬派）によって否定対象である法我が存在しないので、それを否定した否定というものは真実において成立しないとお説きになっているので、勝義において生起などが否定されるのは世俗のものであると説明しているのは、世俗において存在しているということであって、世俗であると説いているのではないのである。

また、同書〔『二諦分別論』自註〕に、

> 真実の生起などは、事物が顕れているときには顕れないので、誤った世俗であるのと同様に、真実において生起などが否定されたこともまた誤った世俗になる。なぜならば、それは否定の基体である事物が顕れるならば、顕れないのである[288]

という答えとして、

---

[286] MA, 217b2–3.
[287] SDVV, 161（6a2–3）.
[288] SDVV, 160–161（5b7–6a1）.

顕れないわけではないのである。なぜならば、実在の存在と個別ではないからである。

と説かれている。例えば、青が顕れているときに、それの真実空は顕れていると説明しているのは、真実として存在しないという否定のみが眼識などに顕れないのであって、定立的な否定を意図しているので、そのようなものは真の世俗であるけれども、真実が否定されただけの空性は勝義諦であることと矛盾しないのである。

『中観荘厳論』に、勝義において生起などを否定したことは正しい世俗に属しているけれども、勝義と随順しているので、そうのように説明しているが、勝義は実在の有無などの戯論の網一切を断じたものである[289]とお説きになっているときの戯論の網というのは、『二諦分別論』自註に、

真実であるがゆえにそれは空ではない、
不空ではなく、有無ではない、
不生起ではなく、生じることがないと、
それらを仏世尊がお説きになっている[290]

と言い、

それはどうしてであるかと問うならば、それは無戯論であり、
真実義はすべての分別の網と離れたものである[291]

と言い、分別の網を戯論の網と説明している通りである。それについても、真実義を直接に認識している知にとって退けるので、それは真の勝義であり、以上のようになっていない正理知及び対象などは前者に随順するものであることなどは前〔に説明した〕通りである。

真実の生起などを否定することについても、これによって否定される正理知とそれの所量の二つがあるので、正しい世俗に属しているあり方についてもその上で知るべきである。

---

289 MAl, 55b2–3.

290 SDVV, 162（6a6）.

291 同上、しかし、原文そのままではない。SDVV, 162（6a6）: ཅིའི་ཕྱིར་ཡང་དག་པར་ན་གཉིས་མེད་ཅེ་ན། དེ་ནི་སྤྲོས་པ་མེད་པ་ཡིན། ། ཞེས་བྱ་བ་སྨོས་ཏེ། དེ་ཁོ་ན་ཞེས་བྱ་བ་ལྷག་མའོ། ། དེ་ནི་དེ་ཁོ་ན་ནི་རྟོག་པའི་དྲ་བ་ཐམས་ཅད་དང་བྲལ་བའོ་ཞེས་བྱ་བས་རྣམ་པར་འགྲེལ་ཏོ། །（どうして正しいものであるならば、２つはないのであるかと問うならば、それは無戯論であると言うことを述べるのである。なぜならば、真実義というのは余分である。真実義はすべての分別の網と離れたものであると述べることによって註釈するのである）

この二諦のあらゆる戯論の網と離れていると説明しているあり方は、多くの場合に必要である。

T3 བདེན་གཉིས་ཀྱི་གྲངས་ངེས་བསྟན་པ།

གསུམ་པ་ནི། གཞི་[T206a6]གང་ཞིག་རྫུན་[292]པ་སླུ་བའི་དོན་དུ་ཡོངས་སུ་བཅད་[L221b5]ན། མི་སླུ་བའི་དོན་ཡིན་པ་རྣམ་པར་བཅད་དགོས་པས། སླུ་མི་[D207a2][K207a2]སླུ་ནི་ཕན་ཚུན་སྤངས་ཏེ་གནས་པའི་འགལ་[189b4]བའོ། །

དེ་ནི་ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕན་ཚུན་སྤངས་པའི་ཚུལ་གྱིས་ཁྱབ་[T206b1]བྱེད་དུ་འདུག་པས་ཕུང་པོ་གསུམ་པ་ཡང་ཟློག་[293]གོ། དེའི་ཕྱིར་ཤེས་བྱ་ལ་[L221b6]བདེན་གཉིས་སུ་གྲངས་ངེས་པར་ཤེས་པར་བྱའོ། །

[D207a3][K207a3]ཡབ་སྲས་མཇལ་བ་ལས་ཀྱང་། འདི་ལྟར་[189b5]དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པ་[294]གཉིས་[T206b2]ཐུགས་སུ་ཆུད་དེ། ཤེས་པར་བྱ་བ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་[L222a1]འདིར་ཟད་དོ། ཞེས་ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་བདེན་པ་[D207a4][K207a4]གཉིས་སུ་ཟད་པར་གསུངས་ལ། འཕགས་པ་དེ་[189b6]ཁོ་ན་ཉིད་ངེས་པར་བསྟན་[295]པའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་ལས་ཀྱང་། [T206b3]གང་ཞིག་ཀུན་རྫོབ་དེ་བཞིན་དོན་དམ་སྟེ། ། བདེན་པ་གསུམ་པ་གང་ཡང་མ་[L222a2]མཆིས་སོ། ཞེས་བདེན་གཉིས་སུ་གྲངས་ངེས་པར་གསལ་[D207a5][K207a5]བར་གསུངས་སོ། །

བདེན་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་[190a1]དབྱེ་ཤེས་ན་ཐུབ་པའི་བཀའ་ལ་མི་རྨོངས་པ་དང་། མི་ཤེས་ན་[T206b4]ནི་བསྟན་པའི་[296]དེ་ཉིད་མི་ཤེས་པར་གསུངས་ལ། དེ་ཡང་མགོན་པོ་ཀླུ་སྒྲུབ་ཀྱིས་ཇི་ལྟར་[L222a3]གཏན་ལ་ཕབ་པ་ལྟར་ཤེས་དགོས་ཏེ། འཇུག་[D207a6][K207a6]པ་ལས།

> སློབ་དཔོན་ཀླུ་སྒྲུབ་[190a2]ཞབས་ཀྱི་ལམ་ལས་ནི། །
> ཕྱི་རོལ་གྱུར་ལ་ཞི་བའི་ཐབས་མེད་དོ། །
> དེ་དག་[T206b5]ཀུན་རྫོབ་དེ་ཉིད་བདེན་[297]ལས་ཉམས། །
> དེ་ལས་ཉམས་པས་ཐར་བ་གྲུབ་ཡོད་མིན། །
> ཐ་སྙད་[L222a4]བདེན་པ་ཐབས་སུ་གྱུར་པ་དང་། །
> དོན་[D207b1][K207b1]དམ་བདེན་པ་ཐབས་བྱུང་གྱུར་པ་སྟེ། །
> དེ་གཉིས་[190a3]རྣམ་དབྱེ་གང་གིས་མི་ཤེས་པ། །
> དེ་ནི་རྣམ་རྟོག་ལོག་པས་[T206b6]ལམ་ངན་ཞུགས།

[292] Z: རྫུན་ D, K, L, T: རྫུན་
[293] D, Z: ལྷོག་ K, T, L: ཟློག་
[294] Z: དོན་དམ་པ་ D, K, L, T: དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་
[295] Z, L: བསྟན་ D, K, T: བཏན་
[296] D, L, Z: པའི་ K, T: པ་
[297] D, K, L, Z:བདེན་ T:བདན་

ཞེས་གསུངས་པས་ཐར་པ་འདོད་པ་རྣམས་ཀྱིས་བདེན་གཉིས་ལ་[L222a5]མཁས་པར་བྱ་བ་ཤིན་ཏུ་གལ་ཆེའོ། །

T3 二諦の数を確定すること

第三〔二諦の数を確定すること〕は、ある基体を虚偽なものすなわち欺く対象として肯定したとき、欺かない対象であることを否定しなければならないので、欺く、欺かないは〔直接に〕相互を退けているものである。

それはすべての所知において相互を退けている仕方によって遍充するものとして働くので、第三項目もまた退けるのである。それゆえに、所知には二諦として数を確定することを知るべきである。

『父子相見経』にも、

> このように、如来が世俗と勝義との二つをご理解されている。所知にまた世俗〔諦〕と勝義諦というこの〔二つに〕尽きるのである[298]。

と、所知すべては二諦に尽きているとお説きになっている。また、『聖真実決定説示三昧経』にも、世俗と同様に勝義である。第三の諦は何もないのである[299]と二諦に数は確定しているとはっきり説かれている。

二諦の分類を知ったならば、牟尼の教えに迷わない。〔二諦の分類を〕知らないならば、教えの真実は知らないとお説きになっており[300]、それもまた、保護者であるナーガールジュナが確定している通りに知るべきである。すなわち、『入中論』に、

> 阿闍梨ナーガールジュナ御前の道から逸脱している者には寂静の方便はない。彼らは世俗と真実の諦から劣っていており、それを劣っているので、解脱が成就することがないのである。言説諦は〔勝義諦を理解するための〕方法と成っており、勝義諦はその方法から生じたものである。その二つの分類を誰が知ら

---

[298] PPS, 60b4.

[299] 『父子相見経』に次のような言葉がある。PPS, 61b5–6: འཇིག་རྟེན་མཁས་པའི་བདེན་པ་གཉིས་ཡིན་ཏེ། ཁྱོད་ཀྱིས་གཞན་ལས་མ་གཟན་རང་གིས་གཟིགས། དེ་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་དང་དོན་དམ་སྟེ། བདེན་པ་གསུམ་པ་གང་ཡང་མ་མཆིས་སོ། །（世間の学者の真実は二つである。すなわち、あなたが他の者から聴聞することなく、自らによってご覧らになっている。それは、世俗諦と勝義〔諦〕である。第三の諦は何もないのである）

[300] MMK, 24.9, 420: ye’ nayor na vijānanti vibhāgaṃ satyayor dvayoḥ | te tattvaṃ na vijānanti gambhīre buddhaśāsane || གང་དག་བདེན་པ་དེ་གཉིས་ཀྱི། ། རྣམ་དབྱེ་རྣམ་པར་མི་ཤེས་པ། ། དེ་དག་སངས་རྒྱས་བསྟན་པ་ནི། ། ཟབ་མོའི་དེ་ཉིད་རྣམ་མི་ཤེས། །（この二諦の区別を知らない人々は、甚深なる仏の教えにおける真実義（tattva）を知らない）

ない者は、誤った分別によって悪道に入るのである[301]。

と説かれているので、解脱を求めている者たちが二諦に通暁することが大変重要である。

[301] MAK, 174.15–19（208a1–3）。

付論 D『入中論釈：密意解明』訳註

周知のように『入中論』はチャンドラキールティの著作で、329 偈頌からなり、著者の自註がある。その構成は『十地経』にしたがって、菩薩の発心を十の階梯に分けて 10 章とし、順番に十波羅蜜の修習を説く。さらに、菩薩地の功徳と仏地の功徳を説く 2 章を加えて、全 12 章になっている。現在『入中論』およびその自註のサンスクリット語の写本が見つかっている。そのうち、第一地から第五地までの偈と自註および、第六章の偈のみの校訂テキストが刊行されている[302]。『入中論釈：密意解明』はツォンカパによる『入中論』の註釈書であり、『入中論』の構成にしたがって、菩薩の十地と仏果である仏地を順次に説明しており、『入中論』と同様に第六地に関して最も詳しく説明を行っている。また、第 6 章では、二諦説の詳しい説明している。後代のゲルク派では、中観の学説を学ぶとき、このツォンカパの『入中論釈：密意解明』を基本的なテキストとして学習する[303]。『入中論釈：密意解明』の正式な題名は以下の通りである。

དབུ་མ་ལ་འཇུག་པའི་རྣམ་བཤད་དགོངས་པ་རབ་གསལ། （『入中論釈：密意解明』）

ここでは、本研究の原テキストとなる以下の二諦説の箇所を抜き出して和訳する。

D　sde dge par ma, ba, ma. Toh.5408. 111b4–133b4.

K　sku ’bum par ma, ma. Toh.5408. 111b4–133b4.

L　bla brang par ma, ma. Toh.5408. 103a1–122a5.

T　bkra shis lhun po par ma, ma. Toh.5408. 207a5–127b1.

Z　zhol par ma, ma. Toh.5408. 95b3-a6–113a3.

---

[302] Li（2015）は第六章の偈のみの校訂テキストを刊行している。

[303] 『入中論』チベット語訳の成立事情、ツォンカパ以前のチベットにおける『入中論』註釈の歴史、『密意解明』の内容構成、『密意解明』に関連するツォンカパ以後の文献については根本（2010）の付論 B 参照。また、『密意解明』の著作年代については本稿の付論 A 参照。

S1 བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་སྤྱིའི་རྣམ་གཞག།

དང་པོ་(བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་སྤྱིའི་རྣམ་གཞག་)ལ་བཞི། T1 བདེན་གཉིས་སུ་དབྱེ་བས་ཆོས་རྣམས་ལ་ངོ་བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་པར་བརྗོད་པ།T2 བདེན་[L103a2]གཉིས་ཀྱི་རྣམ་[95b4]གཞག་གཞན་བསྟན་པ། T3 འཇིག་རྟེན་[D111b5][K111b5]ལ་ལྟོས་[304]ཏེ་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་དབྱེ་བ་བཤད་པ། T4 ཞེན་[T207a6]ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བའི་ཞེན་ཡུལ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་པར་བསྟན་པའོ། །

T1 བདེན་གཉིས་སུ་དབྱེ་བས་ཆོས་རྣམས་ལ་ངོ་བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་པར་བརྗོད་པ།

དང་པོ་(བདེན་གཉིས་སུ་དབྱེ་བས་ཆོས་རྣམས་ལ་ངོ་བོ་གཉིས་གཉིས་ཡོད་པར་བརྗོད་པ་)ནི། འདི་ན་བདེན་གཉིས་ཀྱི་རང་གི་ངོ་བོ་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་[L103a3]མཁྱེན་པའི་བཅོམ་ལྡན་འདས་[D111b6][K111b6]རྣམས་[95b5]ཀྱིས་འདུ་བྱེད་སེམས་པ་སོགས་ནང་དང་སྨྱུ་[T107b1]གུ་སོགས་ཕྱི་རོལ་གྱི་དངོས་པོ་ཀུན་ཏེ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རང་གི་ངོ་བོ་རྣམ་པ་གཉིས་ནི་འཛིན་པར་འགྱུར་བར་ཉེ་བར་བསྟན་[305]ཏེ། དེ་གང་ཞེ་ན། ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་[L103a4]ངོ་[D12a1][K112a1]བོ་དང་དོན་དམ་བདེན་པའི་[306]ངོ་བོའོ། །

འདིས་ནི་མྱུ་གུ་[95b6]ལྟ་བུ་གཅིག་གི་ངོ་བོ་[T107b2]ལ་ཡང་མྱེ་ན་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པ་དང་། དོན་དམ་པ་ཡིན་པའི་[307]ངོ་བོ་གཉིས་ཡོད་པར་སྟོན་གྱི་མྱུ་གུའི་ངོ་བོ་གཅིག་ཉིད་[K112a2]སོ་སྐྱེ་དང་འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་[308]ནས་[D112a2]བདེན་པ་གཉིས་[L103a5]སུ་བསྟན་པ་གཏན་མིན་ནོ། །

དེ་ལྟར་བྱས་ན་ངོ་བོ་མེད་པའི་ཆོས་[96a1][T107b3]མི་སྲིད་པས། གཞི་གྲུབ་པ་ཡིན་ན་ངོ་བོ་གཅིག་དང་ཐ་དད་ལས་མི་འདའ་ལ། ངོ་བོ་ཡོད་པ་ཁས་[K112a3]ལེན་ཀྱང་རང་[D112a3]བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པའི་ངོ་བོ་མེད་པ་མི་འགལ་ལོ། །

དེ་ལ་མྱུ་[L103a6]གུ་ལ་སོགས་པའི་དངོས་པོའི་ངོ་བོ་དོན་དམ་པ་[96a2]ནི། ཡང་དག་པའི་དོན་[T107b4]མངོན་སུམ་དུ་མཐོང་བ་རྣམས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་པར་གྱི་ཡུལ་ཉིད་ཀྱིས་[D112a4][K112a4]བདག་གི་རང་གི་ངོ་བོ་རྙེད་པ་ཡིན་གྱི། རང་གི་བདག་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། འདི་[L103b1]ནི་ངོ་བོ་གཉིས་བཤད་པའི་གཅིག་ཡིན་ནོ། །

ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཁྱད་པར་[96a3]ཞེས་པ་ནི་[T107b5]འཕགས་པའི་ཡེ་ཤེས་གང་ཡིན་གྱིས་རྙེད་པ་མིན་པར་[K112a5]ཡེ་ཤེས་[D112a5]ཀྱི་ཁྱད་པར་ཏེ་བྱེ་བྲག་པ་ཅིག་ལ་བྱེད་དེ། དེ་ཡང་ཇི་ལྟ་བ་འཇལ་བའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་རྙེད་པའོ། །[L103b2]

ཡེ་ཤེས་དེས་རྙེད་པའམ་གྲུབ་པར་བསྟན་པ་ན་དེས་གྲུབ་རྒྱུ་ཞིག་བྱུང་ན་[96a4]བདེན་གྲུབ་[T107b6]བོ་ཞེས

[304] D, K, L, Z: ལྟོས་　T: བལྟོས་

[305] Z: བསྟེན་　D, K, L, T: བསྟན་

[306] D だけは ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་ངོ་ངོ་བོའོ། །　となり、བོ་དང་དོན་དམ་བདེན་པའི་は抜けている。

[307] Z: པའི་　D, K, L, T: ཡིན་པའི་

[308] T, Z: བལྟོས་　D, K,L:　བལྟོས་

འཛིན་པ་དགག་པའི་[K112a6]ཕྱིར། རང་གི་བདག་ཉིད་[D112a6]ཀྱིས་གྲུབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་གསུངས་པས་འཕགས་པའི་མཉམ་གཞག་གི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་དོན་དམ་བདེན་པ་[L103b3]གཞལ་ན། བདེན་གྲུབ་ཏུ་འགྱུར་བས་དེ་ཤེས་བྱ་མ་ཡིན་པ་སློབ་[T108a1]དཔོན་[96a5][K112b1]འདིའི་ལུགས་སུ་སྨྲ་བ་ནི། ལུགས་ [D112b1]འདིས་མཉམ་གཞག་གིས་རྙེད་ཀྱང་བདེན་པར་མ་གྲུབ་པར་བཤད་པའི་དོན་ཡེ་མ་རྟོགས་བཞིན་དུ་མཁས་པའི་ལུགས་ཉམས་སུ་འདུག་[L103b4]པའོ། །

དོན་དམ་ལས་གཞན་ཀུན་[T108a2]རྫོབ་པའི་ངོ་བོ་ནི།[K112b2]

སོ་སོ་སྐྱེ་བོ་[D112b2]མ་རིག་[96a6]པའི་རབ་རིབ་ཀྱི་ཡིང་ཏོག་གིས་བློའི་མིག་མ་ལུས་པར་ཁེབས་པ་རྣམས་ཀྱིས་བརྫུན་པ་མཐོང་བའི་སྟོབས་ལས་བདག་གི་ངོ་བོ་ཡོད་པ་རྙེད་པ་ཡིན་ཏེ། བྱིས་པ་རྣམས་ཀྱི་མཐོང་[D112b3][L103b5]བའི་[112b3]ཡུལ་དུ་རང་[T108a3]གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་སྣང་བ་དེ་བཞིན་[96b1]དུ་རང་གི་ངོ་བོ་ཡོད་པ་ནི་མིན་ཏེ་ངོ་བོ་གཉིས་ཀྱི་གཅིག་ཡིན་ནོ། །

དེ་ལྟར་དོན་དམ་བདེན་པ་རྙེད་པ་ལ་རྙེད་མཁན་འཕགས་པར་[D112b4]གསུངས་པ་ནི་གཙོ་བོ་ཡིན་པ་ལ་[K112b4]དགོངས་ཀྱིས[309]། སོ་སོ་[L103b6]སྐྱེ་བོ་[T108a4]དབུ་མའི་ལྟ་བ་རྒྱུད་ལྡན་གྱིས་ཀྱང་མི་རྙེད་པར་བཞེད་པ་མིན་ནོ། །

ཀུན་[96b2]རྫོབ་རྙེད་པ་ལ་རྙེད་མཁན་སོ་སྐྱེ་རང་དགའ་བ་ལ་གསུངས་པ་ཡང་། ཀུན་[D112b5]རྫོབ་པའི་མཚན་གཞི་ཕྱི་ནང་གི་དངོས་པོ་[K112b5]རྣམས་མ་རིག་པའི་གཞན་དབང་གིས་མཐོང་བའི་[T108a5]གཙོ་བོ་[L104a1]ལ་དགོངས་ཀྱི། འཕགས་པའི་རྒྱུད་ཀྱི་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་དངོས་པོ་དེ་རྣམས་མི་རྙེད་[96b3]པར་བཞེད་པ་མིན་ནོ། །[D112b6]

ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པའི་མཚན་གཞི་བུམ་པ་[K112b6]ལ་སོགས་པ་རྙེད་པ་དབུ་མའི་ལྟ་བ་མ་རྙེད་པ་ལ་ཡང་ཡོད་[L104a2]མོད་ཀྱང་།[T108a6]གཞི་དེ་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཡིན་པར་ཚད་མས་རྙེད་པ་ལ་ནི།སྔོན་དུ་དབུ་མའི་ལྟ་བ་རྙེད་པ་ཞིག[310]ངེས་པར་དགོས་[96b4]ཏེ། གཞི་དེ་ཀུན་རྫོབ་[D113a1][K113a1]བདེན་པར་གྲུབ་ན་བརྫུན་པར་འགྲུབ་དགོས་ཤིང་།བརྫུན་པར་དངོས་སུ་འགྲུབ་པ་ལ་[L104a3]གཞི་དེ་[T108b1]ལ་སྔོན་དུ་བདེན་གྲུབ་ཚད་མས་ཁེགས་དགོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་བརྫུན་པ་མཐོང་[D113a2][K113a2]བའི་སྟོབས་ལས་ཞེས་པ་ནི། གང་ཟག་རང་དགའ་བ་དེ་[96b5]རྣམས་ཀྱིས་བརྫུན་པ་མཐོང་ཡང་དེ་དག་གིས་བརྫུན་པར་འགྲུབ་མི་དགོས་ཏེ། དཔེར་ན་[L104a4][T108b2]སྒྱུ་མའི་ལྟད་མོ་བས་སྒྱུ་མའི་རྟ་གླང་མཐོང་བ་ན་བརྫུན་པར[311][D113a3][K113a3]མཐོང་ཡང་།སྣང་བ་དེ་བརྫུན་པར་འགྲུབ་མི་དགོས་པ་བཞིན་ནོ། །

དེས་ན་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་འཛོག་བྱེད་[96b6]བརྫུན་པ་མཐོང་བས་རྙེད་པའི་དོན་ནི། ཤེས་བྱ་བརྫུན་པ་[T108b3]སླུ་བའི་དོན་འཛལ་བའི་[L104a5]ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་[D113a4][K113a4]རྙེད་པའོ། །

སྔར་བཤད་པའི་རང་བཞིན་ནམ་ངོ་བོ་དེ་གཉིས་ལས་ཀྱང་། ཡང་དག་པའི་དོན་མཐོང་བ་སྐྱེ་འཛལ་བའི་རིགས་

309 Z: ཀྱིས་ D, K, L, T: ཀྱི་
310 D, K, L: ཞིག་ T, Z: ཅིག་
311 Z: པར་ D, K, L, T: པ་

ཤེས་[312]ཀྱིས་རྙེད་པའི་[97a1]ཡུལ་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི། དེ་ཉིད་དེ་དོན་[T108b4]དམ་པའི་བདེན་པ་སྟེ། འདི་[D113a5]ནི་[K113a5][L104a6]རབ་རིབ་མཐུ་ཡིས་ཞེས་སོགས་ཀྱི་སྐབས་སུ་བཤད་པར་བྱའོ། །

ཤེས་བྱ་བརྫུན་པ་མཐོང་བ་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་རྙེད་པ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པར་སྟོན་པས་[97a2]གསུངས་ཏེ། དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་[T108b5]རྙེད་[D113a6][K113a6]པའི་གཞི་གཉིས་སོ་སོར་གསུངས་ཀྱི་[L104b1]གཅིག་ལ་རྙེད་ཚུལ་གཉིས་བྱུང་བ་མིན་ནོ། །

S1 二諦の一般的な設定

第一〔二諦の一般的な設定〕に四つがある。〔すなわち、〕**T1** 二諦に区別することによって諸法に二つずつのあり方（ངོ་བོ།）があることを述べること。**T2** 二諦の他の設定を示すこと。**T3** 世間〔の見方〕に基づいて世俗の分類を示すこと。**T4** 思念対象において錯誤している思念対象は言説においてもまた存在していないことを示すことである。

T1 二諦に区別することによって諸法に二つずつのあり方があることを述べること

第一〔二諦に区別することによって諸法に二つずつのあり方があることを述べること〕には、ここ[313]で二諦の自性 (svarūpa) を不顛倒にご存知である世尊方が行、すなわち思などの内の事物と芽などの外の事物である全ての事物、すなわち、一切の事物は二種類の自性をもっていると示されている。すなわち、それは何であるかと問うならば、世俗諦というあり方と勝義諦というあり方である[314]。

ここ〔偈〕では、たとえば芽という一つのものも分けたならば、世俗であるあり方と勝義であるあり方という二つのあり方があると示しているのであって、芽というあり方だけが凡夫と聖者に基づいて二諦であると示されているのでは決してないのである。

そうであるならば、あり方がない法はありえないので、基体が成立するならば、あり方は同一であるものか別異であるものかのいずれかであって、あり方があるという

[312] Z: ཤས་　D, K, L, T:ཤེས་

[313] 『入中論』の第 23 偈をさしている。

[314] MABh, 102.12–15（253a5–6）: འདི་ན་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་རང་གི་ངོ་བོ་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པར་མཁྱེན་པ་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་རྣམས་ཀྱིས། འདུ་བྱེད་དང་མྱུ་གུ་ལ་སོགས་པ་ནང་དང་ཕྱི་རོལ་གྱི་དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རང་གི་ངོ་བོ་རྣམ་པ་གཉིས་ཉེ་བར་བསྟན་ཏེ། འདི་ལྟ་སྟེ། ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའོ། །（この偈で二諦の自性を不顛倒にご存知である世尊達が行と芽などの内と外の全ての事物は、二種類の自性を持っていると示されている。すなわち、世俗のものと勝義のものである）とほぼ同じ内容である。

ことを承認しても自性によって成立しているところのあり方というのがないのと矛盾しないのである。

それ〔二つの存在のうちの一つ〕について、芽などの事物の勝義のあり方は正しい対象を現量において見ている者たちの特別な智慧の対象であることによって、自らのあり方を得ているものであって、自分の特質 (自性) によって成立しているのではないのである。すなわち、これは二つのあり方が説明されているうちの一つのあり方である[315]。

特別な智慧というのは、聖者の全ての智慧によって得られるものではなくて、その特別な智慧、すなわち、ある特別なものをさしているのである。さらに、如実 (ありのまま) を量る智慧によって得られたものである。

その〔聖者〕の智慧によって得られる、あるいは成立しているものとして示されているときに、それによって成立しているような何らかの原因が生じたのならば、真実として成立していると捉えることを否定するために、自らの自性によって成立しているものではないのであるとお説きになっているので、聖者の三昧の智慧によって勝義諦を量るのならば、真実成立していることとなってしまう。そのため、それ〔勝義諦〕が知の対象にならないというのはこの阿闍梨の説であると主張する者は、この説が三昧によって得られるけれども、真実として成立することがないと説いている意味を全く理解せずに賢者の説を損なわせるものである。

勝義とは別の世俗のあり方とは、「凡夫は無明という眼病によって知という目は残らず覆われている。〔その〕凡夫達が虚偽なものを見ている知の力によってそれ自体の存在を得ているものであって、凡夫達の見ている対象として」[316] 自身の本質によって成立しているかのように現われているその通りに、その自体が存在しているものではないのであるというのは、二つのあり方のうちの一つである。

以上のように勝義諦を得るという場合、得る人は聖者であるとお説きになっているのは、主なものであることをお考えになっているのであって、中観の見解を心に有している凡夫によってもまた得られないとご主張なさっているわけではないのである。

世俗を得るときにも得る者である〔考察をしていない〕普通の凡夫のことをさしておっしゃったのもまた、世俗であると述定される主語となる内外部の諸々の事物を無明に依存することによって見られる主なもの〔であることを〕お考えになっているのであり、聖者の〔心〕相続の言説の量によってその〔内外の〕諸事物は得られないとご主張なさっているわけではないのである。

世俗諦であると述される主語となる壺などを得ることは、中観の見解を得ていない

[315] MABh, 102.16–18（253a6–7）.

[316] MABh, 102.19–103.2（253a7–b1）.

（自分のものとしていない）人にも存在するけれども、その基体は世俗諦であると量によって得るためには、それ以前に必ず中観の見解を得る必要がある。なぜならば、その主語になるものが世俗諦として成立しているならば、〔その主語であるものは〕虚偽なものとして成立していなければならない。虚偽であるということが直接成立しているためには、その主語に対して前もって真実として成立しているということを量によって否定していなければならないからである。

したがって、虚偽なものを知覚している力によってというのは、〔考察をしていない〕普通の人たちは虚偽なものを知覚しているけれども、彼らによって虚偽なものであると成立している必要がないのである。例えば、幻を見ている観客は幻の馬、象を見ているときに、虚偽なものを見ているけれども、その現われているものが虚偽なものであると成立している必要がないのと同様である。

したがって、〔対象を〕世俗諦であると設定する根拠となるところの虚偽を知覚することによって得られるということの意味は、虚偽なる所知は欺く対象を量る言説の量によって得られるということである。

前に説明した自性あるいはあり方という二つのうちでも、正しい対象を知覚している、すなわち、量っている正理知によって認識される対象である所のそれは真実、すなわち勝義諦である。これについては、無明の眼病の力によってというなどの個所で説明しよう。

虚偽なる所知を知覚している言説の量によって認識されるものが、世俗諦であると教主がお説きになっている。すなわち、勝義のものと世俗〔のもの〕を得る二つの対象が別々であるとおっしゃっているのであって、一つ〔の対象〕について二つの得られ方が生じているのではないのである。

T2 བདེན་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་[95b4]གཞག་གཞན་བསྟན་པ།

གཉིས་པ་(བདེན་གཉིས་ཀྱི་རྣམ་[95b4]གཞག་གཞན་བསྟན་པ་)ནི། བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་གཞི་ལ་འདོད་ཚུལ་མི་འདྲ་བ་མང་མོད་ཀྱང་། འདིར་ཤེས་བྱ་ལ་བྱ་སྟེ་ཡབ་སྲས་[D113b1][K113b1]མཇལ་བའི་[97a3]མདོ་བསླབ་[T108b6]བཏུས་སུ་དྲངས་པ་ལས།

> འདི་ལྟར་དེ་བཞིན་[L104b2]གཤེགས་པས་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པ་གཉིས་ཐུགས་སུ་ཆུད་དེ། ཤེས་པར་བྱ་བ་ཡང་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་འདིར་ཟད་[D113b2][K113b2]དེ། དེ་ཡང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་སྟོང་བ་ཉིད་དུ་རབ་[T109a1]ཏུ་[97a4]གཟིགས་རབ་ཏུ་མཁྱེན། ལེགས་པར་མཐོང་[L104b3]ངུ་བྱས་པས་དེའི་ཕྱིར་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་ཞེས་བྱའོ། །

ཞེས་གསུངས་ཏེ། ཤེས་པར་བྱ་བ་ཡང་ཞེས་པས་ཤེས་བྱ་[D113b3][K113b3]དབྱེ་གཞི་དང་། འདིར་ཟད་

དོ་ཞེས་པས་བདེན་[T109a2]གཉིས་སུ་གྲངས་ངེས་པ་དང་། བདེན་པ་[97a5]གཉིས་ཀ་དེ་བཞིན་གཤེགས་[L104b4]པས་ཐུགས་སུ་ཆུད་པའི་ཕྱིར་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པར་བསྟན་ནོ། །[317]

དེས་ན་དོན་དམ་བདེན་པ་[D113b4][K113b4]ཤེས་བྱ་མ་ཡིན་པ་དང་། བློ་གང་གིས་ཀྱང་མ་རྟོགས་པ་སྤྱོད་འཇུག་གི་[T109a3]དགོངས་པར་འཆད་པ་ནི་ལོག་པར་འཆད་པའོ། །

ཀུན་[97a6]རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་དང་དོན་[L104b5]དམ་པའི་བདེན་པ་གཉིས་སུ་འབྱེད་པ་ནི་དབྱེ་བའི་ངོ་བོའོ། །

ཕྱེ་[D113b5][K113b5]བའི་དོན་ལ་ཡང་མི་འདྲ་བ་དུ་མ་ཞིག་འདུག་ཀྱང་། འདིར་ནི་གཉིས་ཀ་ལ་ངོ་བོ་ཡོད་ལ། དེ་ལ་ངོ་[T109a4]བོ་གཅིག་དང་ཐ་དད་གང་ཡང་མིན་པ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་དང་། ཆོས་[97b1]ཅན་རྣམས་[L104b6]བདེན་སྟོང་ལས་ངོ་བོ་ཐ་དད་ན་[D113b6][K113b6]བདེན་གྲུབ་ཏུ་འགྱུར་བའི་ཕྱིར། ངོ་བོ་གཅིག་ལ་ལྡོག་པ་ཐ་དད་པ་བྱས་པ་དང་མི་རྟག་པ་ལྟ་བུ་སྟེ། བྱང་ཆུབ་སེམས་འགྲེལ་[T109a5]ལས།

ཀུན་རྫོབ་ལས་ནི་ཐ་དད་པར། །
དེ་ཉིད་དམིགས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། །
ཀུན་རྫོབ་སྟོང་[L105a1]པ་[D114a][K114a1]ཉིད་དུ་བཤད། །
[97b2]སྟོང་ཉིད་ཁོ་ན་ཀུན་རྫོབ་ཡིན།
མེད་ན་མི་འབྱུང་ངེས་པའི་ཕྱིར། །
བྱས་དང་མི་རྟག་དག་བཞིན་ནོ། །

ཞེས་གསུངས་སོ། །

ཁང་[T109a6]པ་དང་པོ་བཞིའི་དོན་ནི་ཀུན་རྫོབ་ལས་ངོ་བོ་[D114a2][K114a2]ཐ་དད་པར་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཡོད་པ་[L105a2]མིན་ཏེ། ཀུན་རྫོབ་པ་རྣམས་བདེན་པས་སྟོང་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དང་། བདེན་སྟོང་ཉིད་[97b3]ཀྱང་གཞི་ཀུན་རྫོབ་ལ་འཇོག་པའི་ཕྱིར་ཞེས་པའོ། །

དེ་ནས་གཉིས་[T109b1]ཀྱིས་ནི་དེ་ལྟར་ཡིན་དང་[D114a3][K114a3]མེད་ན་མི་འབྱུང་བའི་འབྲེལ་བ་ངེས་ལ། དེ་ཡང་བདག་གཅིག་[L105a3]པའི་འབྲེལ་བ་ཡིན་པས་བྱས་མི་རྟག་བཞིན་དུ་ངོ་བོ་གཅིག་པར་བསྟན་ནོ། །[318]

ཕྱེ་བ་སོ་སོའི་ངོས་འཛིན་[97b4]ནི་སྣར་ཚད་མ་གཉིས་ཀྱིས་རྙེད་པ་སོ་[T109b2]སོའི་མཚན་[D114a4][K114a4]ཉིད་དུ་བཤད་པ་བཞིན་ནོ། །

གལ་ཏེ་འདི་དང་སྤྱོད་འཇུག་གཉིས་མཐུན་པར་འཆད་ན་དེ་[L105a4]ཉིད་ལས།

ཀུན་རྫོབ་དང་ནི་དོན་དམ་སྟེ། །
འདི་ནི་བདེན་པ་གཉིས་སུ་འདོད། །
དོན་དམ་བློ་ཡི་སྤྱོད་ཡུལ་མིན། །
བློ་ནི་ཀུན་རྫོབ་[D114a5][K114a5][T109b3]ཡིན་[97b5]པར་བརྗོད། །

[317] D, K, L, Z: ཏོ། ། T: ནོ། །
[318] D, K, L: ཏོ། ། T, Z: ནོ། །

ཅེས་གསུངས་པ་འདི་ཇི་ལྟར་བཤད་པར་བྱ་ཞེ་ན། དེ་ལ་ཁང་པ་དང་པོ་གཉིས་ཀྱིས་[L105a5]བདེན་གཉིས་ཀྱི་དབྱེ་བ་བསྟན་ལ། ཕྱེ་བ་སོ་སོའི་ངོ་བོ་ངོས་འཛིན་པ་ན་དོན་དམ་བདེན་པའི་ངོས་འཛིན་ནི། དོན་[D114a6][K114a6]དམ་ཞེས་པ་གཅིག་[T109b4]གིས་དང་། ཀུན་རྫོབ་བདེན་[97b6]པའི་ངོས་འཛིན་ཀུན་རྫོབ་ཅེས་པ་གཅིག་གིས་སྟོན་ནོ། །

ཁང་པ་སྔ་མས་དོན་[L105a6]དམ་བདེན་པ་བློའི་ཡུལ་མིན་པར་དམ་བཅས་པ་ཁང་པ་ཕྱི་མས་སྒྲུབ་པར་འདོད་པ་ནི།[D114b1][K114b1]གཞུང་དེ་དག་གི་དོན་དུ་གཏན་མི་སྣང་[T109b5]ངོ་། །

དེས་ན་བདེན་གཉིས་ཀྱི་ངོས་འཛིན་འདི་ནི་ཡབ་[98a1]སྲས་མཇལ་བ་བསླབ་བཏུས་སུ་དྲངས་པ་ལས།

> དེ་ལ་[L105b1]ཀུན་རྫོབ་ནི་འཇིག་རྟེན་གྱི་སྤྱོད་པར་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་[D114b2][K114b2]གཟིགས་སོ། དོན་དམ་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་བརྗོད་[T109b6]དུ་མེད་པ་སྟེ། ཤེས་པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ་[319]། རྣམ་པར་ཤེས་[98a2]པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ། ཡོངས་སུ་ཤེས་པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པ།[L105b2]མ་བསྟན་པ།

ཞེས་སོགས་[D114b3][K114b3]གསུངས་པའི་དོན་སྤྱོད་འཇུག་ཏུ་བཀོད་པའོ། །

དེ་ལ་དོན་དམ་བདེན་པ་ཤེས་[T110a1]པར་བྱ་བ་མ་ཡིན་པར་བཤད་པའི་དོན་ནི། འོག་ནས་བདེན་པ་གཉིས་ལ་འཇུག་པའི་[98a3]མདོ་དྲངས་པའི་དོན་འཆད་པར་འགྱུར་བ་[L105b3]ལྟར་དུ་[D114b4][K114b4]བློའི་ཡུལ་དུ་མི་འགྱུར་བ་ཡིན་ནོ། །

དེ་ལྟར་མི་འཇོག་པར་བློ་གང་གི་ཡང་[T110a2]ཡུལ་མིན་ན། རྒྱལ་བས་ཀུན་རྫོབ་དང་དོན་དམ་པ་སྟོང་ཉིད་ཀྱི་རྣམ་པ་ཅན་ཐམས་ཅད་མངོན་དུ་གྱུར་བས་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པར་[98a4]འཇོག་[D114b5][K114b5]པར་བཤད་པ་དང་འགལ་ཏེ།[L105b4]འོག་ཏུ་ཡང་མང་དུ་འཆད་པར་འགྱུར་རོ། །

ཀུན་རྫོབ་[T110a3]བདེན་པའི་ངོས་འཛིན་ནི་བློ་ཀྱུང་བ་དེར་འཇོག་པའི་དོན་མིན་གྱི་བློའི་ཡུལ་ཡིན་ལ། དེ་ཡང་འཇིག་རྟེན་གྱི་སྤྱོད་པར་ཞེས་གསུངས་[D114b6][K114b6]པས། འཇིག་རྟེན་ཏེ་ཐ་སྙད་པའི་[98a5]ཤེས་པ་བརྟན་པ་འཇལ་བའི་[L105b5]སྤྱོད་པར་ཏེ་སྤྱོད་ཡུལ་དུ་རྙེད་པའི་དོན་[T110a4]ཡིན་པས། བློའི་ཡུལ་ཀུན་རྫོབ་པར་འདོད་པའི་དོན་དེ་བཞིན་དུ་བྱའོ། །

ཤེས་བྱ་ལ་བདེན་པ་གཉིས་སུ་ཕྱེ་བ་[D115a1][K115a1]ནི། ཤེས་བྱ་ལ་དེ་གཉིས་སུ་གྲངས་ངེས་པར་སྟོན་པ་ཡིན་ཏེ། འདི་ལ་ལུང་[98a6]ནི་སྔར་དྲངས་པའི་ཡབ་[L105b6]སྲས་མཇལ་བ་དང་།[T110a5]འཕགས་པ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ངེས་པར་བསྟན་པའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་[D115a2][K115a2]ལས་ཀྱང་།

> གང་ཞིག་ཀུན་རྫོབ་དེ་བཞིན་དོན་དམ་སྟེ། །
> བདེན་པ་གསུམ་པ་གང་ཡང་མ་མཆིས་སོ། །

ཞེས་གསལ་བར་གསུངས་ཤིང་། རང་འགྲེལ་[98b1][L106a1]ལས་ཀྱང་།[T110a6]

> དེ་བཞིན་དུ་བདེན་པ་གཞན་གང་ཅུང་ཟད་ཅིག་ཡོད་[D115a3][K115a3]པ་དེ་ཡང་ཅི་རིགས་པར་བདེན་པ་གཉིས་ཀྱི་ཁོངས་སུ་གཏོགས་པ་ཁོ་ནར་ངེས་པར་བྱའོ། །

[319] D, K, L, T: མ་ཡིན་པ། Z: མ་ཡིན།

ཞེས་ས་བཅུ་པ་ལས་བདེན་པའི་མིང་ཅན་མང་དུ་གསུངས་པ་[L106a2]ཐམས་ཅད་བདེན་གཉིས་སུ་[T110b1]འདུས་པར་གསུངས་[98b2]ཤིང་། དེར་[D115a4][K115a4]བཤད་པའི་ཕྱེ་སྟེ་རྟོགས་པའི་བདེན་པ་ནི་ཕུང་པོ་དང་ཁམས་དང་སྐྱེ་མཆེད་ཀྱི་རྣམ་པར་བཞག་པ་ལ་བཤད་པའི་ཕྱིར་ན། སློབ་དཔོན་འདིས་ཀྱང་བདེན་པ་གཉིས་སུ་[L106a3]གྲངས་ངེས་པར་བཞེད་དོ། །

རིགས་པ་[T110b2]ནི་གཞི་[D115a5][K115a5]གང་ཞིག་བརྫུན་པ་སླུ་བའི་དོན་དུ་ཡོངས་[98b3]སུ་བཅད་ན། མི་སླུ་བའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཡིན་པ་རྣམ་པར་གཅོད་[320]དགོས་པས། སླུ་མི་སླུ་ནི་ཕན་ཚུན་སྤངས་ཏེ་གནས་པའི་དངོས་འགལ་ལོ། །

དེ་[L106a4]ཡིན་ན་ནི་ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་[D115a6][K115a6]ལ་ཁྱབ་[T110b3]པར་བྱེད་པས་གཉིས་དང་གཉིས་མ་ཡིན་གྱི་ཕུང་གསུམ་སེལ་བ་ཡིན་[98b4]ཏེ་དབུ་མ་སྣང་བ་ལས།

> ཕན་ཚུན་སྤངས་ཏེ་གནས་པའི་མཚན་ཉིད་ཀྱི་ཆོས་དག་ནི། ཅིག་[321]ཤོས་[322]དགག་པ་གཞན་སྒྲུབ་[L106a5]པ་མེད་ན་[D115b1][K115b1]མེད་པ་ཡིན་པའི་ཕྱིར།གཉིས་[T110b4]ཀ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱོགས་སུ་རྟོག་པ་ཡང་རིགས་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་དང་།

> གང་ཞིག་[98b5]ཡོངས་སུ་གཅོད་པ་གང་རྣམ་པར་བཅད་པ་མེད་ན་མེད་པ་དེ་གཉིས་ནི། ཕན་ཚུན་སྤངས་ཏེ་[D115b2][K115b2]གནས་པའི་[L106a6]མཚན་ཉིད་ཡིན་ནོ། །
> གང་དག་ཕན་ཚུན་[T110b5]སྤངས་ཏེ་གནས་པའི་མཚན་ཉིད་ཡིན་པ་དེ་དག་ནི། རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ལ་ཁྱབ་པར་བྱེད་པ་དག་ཡིན་[98b6]ནོ། །
> གང་དག་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ལ་ཁྱབ་པར་བྱེད་པ་ཡིན་པ་[D115b3][K115b3]དེ་དག་ནི། ཕུང་པོ་གཞན་སེལ་[L106b1]བར་བྱེད་པ་དག་[T110b6]ཡིན་ཏེ། དཔེར་ན་ལུས་ཅན་དང་ལུས་ཅན་མ་ཡིན་པ་ལ་སོགས་པའི་བྱེ་བྲག་ལྟ་བུའོ། །

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་ཏེ། འདི་ནི་དངོས་འགལ་གཞན་[99a1]ཐམས་ཅད་ལ་ཡང་ཤེས་[D115b4][K115b4]པར་བྱའོ། །

ཕུང་གསུམ་སེལ་བའི་དངོས་[L106b2]འགལ་ཞིག་[323][T111a1]སྟོན་རྒྱུ་མེད་ན་ནི། ཡོད་མེད་དམ་གཅིག་དང་དུ་མ་སོགས་གང་འདོད་ཅེས་[324]མཐའ་གཉིས་སུ་ཁ་ཚོན་བཅད་པའི་བརྟག་པ་བྱས་ནས་འགོག་ས་[325][99a2]མེད་ལ། ཡོད་ན་[D115b5][K115b5]དངོས་འགལ་གཅིག་འགོག་པ་ནི་ཅིག་ཤོས་[326]སྒྲུབ་པ་

---

[320] K, T, Z: གཅད་ D, L: གཅོད་

[321] D:K:L:གཅིག་ T, Z: ཅིག་ 以後 D, K, L は གཅིག と綴られ、T,Z は ཅིག と綴られる。

[322] Z: ཤེས་ D:K: L:T:ཤོས་

[323] D, K, L: གཅིག་ T, Z: ཅིག་

[324] Z: ཅས་ D,K, L,T: ཅེས་

[325] K, T, Z: ས་ D, L: པ་

[326] Z: ཤེས་ D, K, L, T: ཤོས་

[T111a2]མེད་ན་མེད་[L106b3]པ་ཡིན་པས། དབུ་མ་ཐལ་འགྱུར་བ་ལ་དངོས་འགལ་མེད་ཟེར་བ་ནི། དགག་གཞག་གི་རྣམ་གཞག་མ་ཆགས་པའོ། །

དངོས་འགལ་གཅིག་རྣམ་པར་[D115b6][K115b6]བཅད་ན་ཅིག་[327][99a3]ཤོས་ཡོངས་སུ་གཅོད་པ་དང་། གཅིག་འགོག་ན་[T111a3]ཅིག་[[328]ཤོས་སྒྲུབ་[L106b4]དགོས་པ་ལ་དབུ་མ་ཐལ་རང་ལ་ཁྱད་པར་ཡོད་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

T2 二諦の他の設定を示すこと

第二〔二諦の他の設定を示す〕は、異なった主張がたくさんあるけれども、ここ〔『入中論』〕では所知をさして言うべきである。すなわち、『大乗集菩薩学論』に引用されている『父子相見経』に、

> 如来は世俗と勝義の二つを以下のように理解されている。
> すなわち、所知は世俗諦と勝義諦〔の二つ〕に尽きる。
> それはまた、世尊は空であるとご覧になり、お知りになり、
> 正しく実現したので、それゆえ一切智者と言うべきである[329]。

とおっしゃっている。すなわち、「知られるべきものもまた」ということによって所知が分類の基体である〔と示され〕、「これに尽きる」と言うことによって二諦に数が確定されていること〔とが示され〕、二諦の両方を如来がご理解なさるので、一切智者と示されている。

したがって、勝義諦は所知ではないということと、如何なる知によっても認識されないということが、『入菩提行論』の真意であると説明することは、誤った説明である。

世俗諦と勝義諦という二つに分けられたものが分類されたものである（ངེ་བོ།）。

分けるということ自体の意味についてもまた、異なった複数〔の意味〕があるけれども、ここ〔『入中論』〕では、二つともにあり方があり、それ〔あり方があるもの〕については、同一の存在であるか異なった存在であるかのいずれでもないものはあり得ないので、諸々の有法（主題となるもの）は真実に成立しているものに関して空であるものと異なった存在であるならば、真実なものとして成立してしまうので、〔勝義諦と世俗諦の二つは〕同一の存在で異なった排除である。例えば、作られたものと無常

[327] D, K, L: གཅིག་ T, Z: ཅིག་
[328] D:K:L:གཅིག་ T, Z: ཅིག་
[329] ŚS, 236.26–27: punarapyuktam- etāvaccaitat jñeyam yaduta saṃvṛtiḥ paramārthaśca | tacca bhagavatā śūnyataḥ sudṛṣṭaṃ suviditaṃ susākṣātkṛtam | tena sa sarvajaña ityucyate | ŚSt, 142b3–4; PPS, 60b4–5.

なもののようである。すなわち、『菩提心の註釈』に

> 世俗とは異なったものとして、
> 真実が認識されることがない。なぜならば、
> 世俗は空性に他ならないと説かれている。
> 空性のみが世俗である。
> 〔空性〕なくして、〔世俗は〕生じ得ないからである。
> 作られたものと無常なものなどの如くである[330]。

と説かれている。

最初の四句の意味は、世俗と異なったものとして真実義は存在しない。なぜならば、諸々の世俗〔に属するもの〕は真実に関して空であるからであり、真実に関して空であることもまた基体である世俗を述定するからである。

その後の二句によって、そのようであり、また、〔諸々の世俗は空であること〕なしには、〔世俗のものは〕生じ得ないという結合関係を確定し、それもまた、同一性の関係であるので、作られたものは無常なものと同様に同一の存在であると示されているのである。

区別されたそれぞれの確定とは、前に〔勝義という正しいものを見る知と世俗という誤ったものを見る知の〕二つの量によって得られたものがそれぞれの定義であると説明した通りである。

もしこれ〔『入中論』〕と『入菩提行論』の二つが一致していると説明するならば、同書に、

> 世俗と勝義、すなわち、
> これらは二つの諦であると主張する
> 勝義というのは知の活動対象（སྤྱོད་ཡུལ།）ではないのである。
> 知は世俗であると述べる[331]。

とお説きになっているこのことについてどうのように説明することができるのかというのならば、その偈の中で最初の二句によって二諦の分類が示されている。分けられた各々の存在を確認するときに、勝義諦の確認は、勝義という一語によって示めし、世俗諦の確認は、世俗という一語によって示されている。

〔後半の〕前句が勝義諦は知の対象ではないと主張したことを後半の句によって論証

---

330 BCVV, 204（41a1）.

331 BCA, 9.2, 170.27–28: saṃvṛtiḥ paramārthaśca satyadvayamidaṃ matam| buddheragocarastattvaṃ buddhiḥ saṃvṛtirucyate|| BCAt, 31a1.

することを欲するというのは、それらの原典の意味であるとは決して考えられない。

したがって、二諦を確認しているこれについては、『大乗集菩薩学論』に引用されている『父子相見経』に、

> そのうち、世俗は世間の人たちが活動するものであると如来はご覧になる。勝義であるものそれは述べることができない。すなわち、知られるものではなく、認識されるものではなく、遍知されるものではなく、示されるものないのである[332]。

となどお説きになっている意味を『入菩提行論』に提示しているのである。

そのうち勝義諦は知られるものではないと説かれている意味とは、後に『入二諦経』を引用した意味を説明しているよう〔な意味での〕知の対象にはならないということである。

以上のように設定することができずに如何なる知の対象でもないとするならば、勝者は空性の形象を持っている世俗と勝義の一切を現前しているがゆえに、一切知であると設定されると説明しているのと矛盾するのである。それについては以下でも何度も説明する事になるであろう。

世俗諦というものを特定するとは知だけをそれ〔世俗〕であると設定するという意味ではなく、知の対象を〔世俗諦であると設定するの〕であり、それ〔知の対象〕についても「世間の働きである」と〔如来が〕お説きになっているので、〔世俗諦というのは〕世間、すなわち、虚偽なものを量る言説知の働きである。すなわち、活動対象として得られるという意味であるので、知の対象が世俗のものであると主張することの意味であることは以上のように考えるべきである。

所知を二諦に分けるということは、所知についてその二つ〔の諦〕に数が確定されていると示すのである。すなわち、それについての経証は前に引用した『父子相見経』と『聖真実決定説示三昧経』にもまた、

> あるものは世俗であり、同様に勝義である。第三の諦は何も存在しないのである[333]。

---

332 PPS, 60b5–6; ŚS, 236, 27–28: tatra saṃvṛtirlokapracāratastathāgatena dṛṣṭā | yaḥ punaḥ paramārthaḥ, so' nabhilāpyaḥ anājñeyo'vijñeyo'deśito'prakāśito; ŚSt, 142b4–5.

333 PPS, 61b5–6: འཇིག་རྟེན་མཁས་པའི་བདེན་པ་གཉིས་ཡིན་ཏེ། ཁྱོད་ཀྱིས་གཞན་ལས་མ་གཟན་རང་གིས་གཟིགས། དེ་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་དང་དོན་དམ་སྟེ། བདེན་པ་གསུམ་པ་གང་ཡང་མ་མཆིས་སོ། །（世間の学者の真実は二つである。すなわち、あなたが他の者から聴聞することなく、自らによってご覧になっている。それは、世俗諦と勝義〔諦〕である。第三の諦は何もないのである）ŚSt, 2431a4.

とはっきり説かれている。また、『入中論釈』にも、

> 同様に他の何らかの諦が少しでもあるのならば、それもまたそれぞれ二諦の中に必ず含まれることを確信すべきである[334]。

と『十地経』に諦という名前を持っているものが多く説かれている〔が、〕全ては、二諦に含まれると〔チャンドラキールティが〕説かれている。また、そこで説かれている〔二諦に〕分けて理解される諦というのは〔五〕蘊と〔十八〕界、〔十二〕処の設定をさしていると説明されているので、この規範師〔チャンドラキールテ〕が二諦に数が確定されているとご主張なさっている。

理証は、ある基体が虚偽な欺く対象であると肯定的に主張するならば、欺かない真実であることを否定しているはずであるので、欺くことと欺かないことは相互を排除する対立関係にある。

それ〔欺くことと欺かないことというは相互を排除して対立関係にあるの〕であるなら、全ての所知に遍充しているので、二つであり、二つでない第三項は退けられたものである。すなわち、『中観光明』に、

> 相互を排除して存在していることを特質としている〔二つの〕法は、一方が否定されることは他のものが肯定されることなしに〔否定は〕ないという関係にあるので、両者いずれでもない場合をさらに分けることは正しくないのである[335]。

と述べ、

> あるものを肯定するためには、あるものを否定することなしにはないという〔関係にある〕その二つは、相互に排除して存在するということを特質としているのである。
> 〔ある二つのものが〕相互に排除して存在していることを特質としている〔二つの〕ものは、あらゆるものに遍充しているものである。
> あらゆるものに遍充している二つのものは、他の場合を排除しているものである。例えば、体を持つものと体を持たないものなどの区別のようなものである[336]。

とお説きになっている通りである。このことは、他の直接対立項全てについてもまた知られるべきである。

---

334 MABh, 71.5–7（243b1）.
335 MA, 291a5.
336 MA, 291b3.

第三の場合を排除している何らかの直接的対立項が示すことができないならば、有と無、あるいは一つと複数などのどちらを主張するにせよ、二辺に完全に分類して考察して否定することができる余地がなく、〔第三の場合を排除している何らかの直接的対立項が示すことが〕あるならば、直接的対立項の一つを否定することはもう一方を肯定することなしにはないものであるので、中観帰謬派において直接的対立項はないというのは、否定と肯定の設定が成り立たないことになる。

直接対立項の一つを否定するならば、もう一方が肯定されるはずであり、一方が否定されるならば、もう一方が肯定されなければならないことについては、中観帰謬派と自立派に違いがない。

T3 འཇིག་རྟེན་ལ་ལྟོས་ཏེ་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་དབྱེ་བ་བཤད་པ།

གསུམ་པ་(འཇིག་རྟེན་ལ་ལྟོས་ཏེ་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་དབྱེ་བ་བཤད་པ།)ནི། ཀུན་རྫོབ་ལ་ཡུལ་ཡུལ་ཅན་གཉིས་ལས་ཐོག་མར་[D116a1][K116a1]འཇིག་རྟེན་པའི་ཤེས་པ་ལ་ལྟོས་ནས་ཡུལ་ཅན་[99a4]ལ་ཡང་དག་པ་དང་ལོག་པ་[T111a4]གཉིས་སུ་སྟོན་པ་ནི། ཤེས་བྱ་[L106b5]ལ་བདེན་པ་གཉིས་སུ་ཕྱེ་བར་མ་ཟད་བརྫུན་པ་མཐོང་བའི་ཡུལ་ཅན་ལའང་།[D116a2][K116a2]ཡང་དག་པ་དང་ལོག་པ་གཉིས་སུ་འདོད་དེ། དབང་པོ་གསལ་བ་སྟེ་འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུས་མ་བསླད་པའི་དབང་[99a5]པོ་[T111a5]དང་། དེ་ལ་བརྟེན་པའི་ཤེས་པ་དང་། དབང་པོ་[L106b6]སྐྱོན་ལྡན་ཏེ་འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུས་བསླད་པའི་[D116a3][K116a3]ཡུལ་ཅན་གཉིས་སོ། །

དེ་ལ་སྐྱོན་དང་ལྡན་པའི་དབང་པོ་ཅན་རྣམས་ཀྱིས་[337]བསླད་པའི་ཤེས་པ་ནི། དབང་པོ་ལེགས་[[338]པར་གྱུར་པ་སྟེ་[T111a6]འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་[99a6]རྒྱུས་མ་བསླད་པའི་ཤེས་པ་ལ་ལྟོས་ནས།[L107a1]ལོག་པའི་ཤེས་པར་[D116a4][K116a4]འདོད་ཅིང་། སྔ་མ་ནི་ཡུལ་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་འཛིན་པར་འདོད་དོ། །

ཁྱད་པར་དེ་གཉིས་ཀྱང་དབུ་མའི་ལུགས་མིན་གྱི་འཇིག་རྟེན་པའི་ཤེས་པ་[T111b1]ལ་ལྟོས་ནས་ཡིན་ནོ། །

ཡུལ་ཅན་[99b1]ལ་ཕྱིན་ཅི་[L107a2]ལོག་མ་ལོག་གཉིས་[D116a5][K116a5]སུ་ཕྱེ་བ་དེ་བཞིན་དུ། ཡུལ་ཡང་ཡིན་པར་སྟོན་པ་ནི། འཕྲུལ་གྱི་འཁྲུལ་རྒྱུའི་གནོད་པ་མེད་པར་དབང་པོ་དྲུག་གི་ཤེས་པ་རྣམས་ཀྱིས་གཟུང་བར་བྱ་བའི་[T111b2]དོན་གང་ཞིག་འཇིག་རྟེན་གྱིས་རྟོགས་པ་དེ་ནི། འཇིག་[D116a6][K116a6]རྟེན་ཉིད་དེ་ཁོ་ན་[L107a3][99b2]ལས་བདེན་པ་སྟེ་ཡང་དག་པ་ཡིན་གྱི། འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་[339]ནས་ཡུལ་དེ་དག་བདེན་པ་དང་ཡང་དག་པར་འཇོག་པ་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །

འཕགས་པ་ཞེས་པ་དང་[T111b3]དབུ་མའི་ལུགས་ཞེས་པ་ནི་[D116b1][K116b1]འདིར་དོན་འདྲའོ། །

ལྷག་མ་སྟེ་གཟུགས་བརྙན་ལ་[L107a4]སོགས་པ་གང་ཞིག་[99b3]དབང་པོ་རྣམས་ལ་གནོད་པ་ཡོད་པ་ན་ཡུལ་དུ་སྣང་བ་དེ་ནི། འཇིག་རྟེན་ཉིད་ལ་ལྟོས་[340]ནས་ལོག་པར་རྣམ་པར་བཞག་གོ། །

---

337 D, K: ཀྱི་ L, T, Z: ཀྱིས་

338 Z: ལགས་ D, K, L, T: ལེགས་

339 D, K, L: ལྟོས་ T, Z: བལྟོས་

340 D, K, L: ལྟོས་ T, Z: བལྟོས་

ཉིད་ཀྱི་སྐབས་[T111b4]ནི་[D116b2][K116b2]ཤེས་པ་དེ་རྣམས་འཁྲུལ་པར་འཇོག་པ་ལ་ནི། ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མ་ཉིད་ཀྱིས་ཆོག་གི་[L107a5]རིགས་ཤེས་ལ་མི་ལྟོས་པར་[99b4]སྟོན་པའོ། །

དེ་ལ་དབང་པོ་ལ་གནོད་པའི་རྐྱེན་ནང་ན་ཡོད་པ་ནི་རབ་རིབ་དང་མིག་སེར་ལ་སོགས་པ་[D116b3][K116b3]དང་ད་དུ་ར་[T111b5]ཟོས་པ་ལ་སོགས་པའོ། །

ད་དུ་ར་ནི་ཐང་ཕྲོམ་སྟེ། དེའི་འབྲས་བུ་ཟོས་ན་ཐམས་ཅད་གསེར་དུ་སྣང་[L107a6]བའོ། །

སོགས་པས་ནི་རིམས་ལ་སོགས་པ་[99b5]བསྡུའོ། །

དབང་པོ་ལ་གནོད་པའི་རྐྱེན་ཕྱི་ན་ཡོད་པ་[D116b4][K116b4]ནི། མེ་ལོང་དང་བྲག་ཕུག་ལ་[T111b6]སོགས་པ་ནས་སྒྲ་བརྗོད་པ་དང་། སོས་ཀའི་ཉི་མའི་འོད་ཟེར་བྱེ་མ་སྐྱ་[341]བོའི་ཡུལ་དང་ཉེ་བར་གྱུར་པ་ལ་སོགས་པ་[L107b1]སྟེ། དེ་དག་ནི་དབང་པོ་ལ་གནོད་པའི་རྐྱེན་ནང་ན་མེད་ཀྱང་། རིམ་[99b6][D116b5] [K116b5]པ་བཞིན་དུ་གཟུགས་བརྙན་དང་བྲག་ཆ་དང་སྨིག་རྒྱུ་ལ་ཆུ་[T112a1]ལ་སོགས་པར་འཛིན་པའི་རྒྱུར་འགྱུར་རོ། །

དེ་བཞིན་དུ་མིག་འཕྲུལ་མཁན་ལ་སོགས་པས་སྦྱར་བའི་རྫས་དང་སྔགས་[L107b2]ལ་སོགས་པ་ཡང་ཤེས་པར་བྱའོ། །[D116b6][K116b6]ཡིད་ཀྱི་དབང་པོའི་གནོད་པ་ནི་རྫས་[100a1]དང་སྔགས་ལ་སོགས་[T112a2]པ་དེ་དག་དང་གྲུབ་མཐའ་ལོག་པ་དང་། གཏན་ཚིགས་ལྟར་སྣང་དང་གཉིད་ཀྱི་གནོད་པ་སོགས་སོ། །

གཉིད་ནི་དབང་པོ་དྲུག་གི་ནང་ནས་ཡིད་ཀྱི་[L107b3]གནོད་[D117a][K117a1]པར་གསུངས་པས། རྨི་ལམ་དུ་དབང་ཤེས་ཡོད་པར་[100a2]སློབ་དཔོན་འདི་[T112a3]བཞེད་ཅེས་པ་ནི་ལོག་པར་བཤད་པ་ཆེན་པོའོ། །

དེ་ལྟར་ན་ཐོག་མ་མེད་པ་ནས་ཞུགས་པའི་བདག་ཏུ་འཛིན་པ་གཉིས་[D117a2][K117a2]ཀྱི་མ་རིག་པ་ལ་སོགས་པས་བསླད་པའི་[L107b4]གནོད་པ་ནི་འདིར་གནོད་པའི་རྒྱུར་མི་གཟུང་གི་སྔར་བཤད་པ་[T112a4]ལྟར་གྱི་[100a3]འཕྲལ་གྱི་དབང་པོ་ལ་གནོད་པའི་འཁྲུལ་རྒྱུ་རྣམས་གཟུང་ངོ་། །

དེ་ལྟ་བུའི་གནོད་པ་མེད་པའི་[D117a3][K117a3]ཤེས་པ་དྲུག་གིས་གཟུང་བའི་ཀུན་རྫོབ་པའི་དོན་དང་། དེ་ལས་བཟློག་པའི་[L107b5]དོན་ལ་ཡང་དག་དང་ལོག་པར་འཇོག་པ་ནི་འཇིག་[T112a5]རྟེན་པའི་ཤེས་པ་ཁོ་ན་ལ་[100a4]ལྟོས་ནས་ཡིན་ཏེ། དེ་དག་ཇི་ལྟར་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་དོན་དུ་[D117a4][K117a4]ཡོད་པ་ལ་འཇིག་རྟེན་པའི་ཤེས་པས་གནོད་པ་མེད་པ་དང་ཡོད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ནས་ནི་ཡང་[L107b6]ལོག་གཉིས་སུ་མེད་དེ། ཇི་ལྟར་[T112a6]གཟུགས་བརྙན་ལ་སོགས་སྣང་བ་ལྟར་གྱི་དོན་དུ་[100a5]མེད་པ་[D117a5][K117a5]བཞིན་དུ། མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་སྔོན་པོ་ལ་སོགས་པ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་སྣང་བ་ཡང་། སྣང་བ་ལྟར་གྱི་དོན་དུ་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །[L108a1]དེའི་ཕྱིར་[T112b1]ཤེས་པ་དེ་གཉིས་ལ་འཁྲུལ་མ་[K117a6]འཁྲུལ་ཡང་དབྱེར་མེད་དོ། །

འོ་ན་དབང་པོ་གཟུགས་[100a6]ཅན་ལ་འཕྲལ་གྱི་གནོད་པ་ཡོད་པས་ཡུལ་ལོག་པར་སྣང་བ་དང་། ཡིད་ཀྱི་ཤེས་པ་ལ་གཉིད་ལ་སོགས་པའི་[L108a2]གནོད་པ་ཡོད་པས། རྨི་ལམ་དུ་མིར་[T112b2]སྣང་[D117b1][K117b1]བ་སོགས་ལ་མི་ལ་སོགས་པར་འཛིན་པ་དང་། སད་དུས་སུ་སྒྱུ་མའི་རྟ་གླང་གི་སྣང་བ་ལ་རྟ་གླང་དང་[100b1]སྨིག་རྒྱུ་ཆུར་སྣང་བ་ལ་ཆུར་འཛིན་པ་རྣམས་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཡིན་པས། འཇིག་རྟེན་

[341] D, K, Z: སྐྱེ་ L, T: སྐྱ་

པའི་བློ་རང་དགའ་[L108a3]བས་ཀྱང་རྟོགས་[D117b2][K117b2]མོད་ཀྱང་[342][T112b3]ཡིད་ལ་གྲུབ་མཐའ་ངན་པའི་གནོད་པ་ཡོད་པས་ལོག་པར་བཟུང་བའི་དོན་རྣམས། འཇིག་རྟེན་པའི་བློ་རང་དགའ་བས་ཕྱིན་[100b2]ཅི་ལོག་ཏུ་མི་རྟོགས་པས། འཇིག་རྟེན་ཉིད་ལས་ལོག་པར་ཇི་ལྟར་བཞག་[D117b3][K117b3]ཅེ་ན།[L108a4]འདིར་གནོད་པ་ཡོད་མེད་[T112b4]དཔྱོད་པའི་གནོད་པ་ནི། ལྷན་སྐྱེས་ཀྱིས་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཏུ་འཛིན་པའི་གནོད་པ་ལ་མི་བྱེད་པས། གྲུབ་མཐའ་ངན་པས་བཏགས་པ་ནི་གྲུབ་མཐས་བློ་བསྒྱུར་[100b3]བ་ཁོ་ནས་ལོག་པར་[D117b4][K117b4]བཏགས་པའི་གཙོ་བོ་སོགས་ཡིན་ལ། དེ་[L108a5]དག་ཕྱིན་ཅི་[T112b5]ལོག་ཏུ་འཇིག་རྟེན་པའི་བློ་རང་དགའ་བས་མི་རྟོགས་ཀྱང་། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་མངོན་དུ་མ་ཕྱོགས་པའི་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་ལོག་པར་རྟོགས་ན། འཇིག་རྟེན་[D117b5][K117b5]པའི་ཤེས་པས་ལོག་པར་རྟོགས་[100b4]པ་ཡིན་ནོ། །

བདག་འཛིན་ལྷན་སྐྱེས་[L108a5]གཉིས་[T112b6]ཀྱིས་བཟུང་བའི་དོན་ལྟ་བུ་ནི། གནོད་པ་མེད་པའི་དབང་པོས་བཟུང་བ་ཞེས་པ་ཡིན་ལ། འཇིག་རྟེན་པའི་བསམ་པ་རང་དགའ་བ་ལ་[D117b6][K117b6]ལྟོས་[343]ནས་ཡང་དག་པའམ་བདེན་པ་ཡིན་མོད་ཀྱང་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་དོ། །

གལ་ཏེ་ཡང་[100b5]དག་[T113a1][T113a]པའི་[L108b1]ཀུན་རྫོབ་མི་འདོད་པས་ཡང་ལོག་གཉིས་སུ་མི་བྱེད་ཀྱང་། མ་རིག་པས་བསླད་པའི་ཡུལ་དང་ཡུལ་ཅན་རྣམས་[D118a1][K118a1]ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཅིའི་ཕྱིར་མི་འཇོག་ཅེ་ན། ཀུན་རྫོབ་ནི་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་འཇོག་དགོས་[T113a2]པའི་ཕྱིར་ལོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་[100b6]འཇོག་ན་ཡང་[L108b2]དེ་ལ་ལྟོས་[344]ནས་འཇོག་དགོས་ན། མ་རིག་[D118a2][K118a2]པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་བསླད་པ་ནི་འཁྲུལ་བར་ཐ་སྙད་པའི་ཚད་མས་མི་འགྲུབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

T3 世間〔の見方〕に基づいて世俗の分類を示すこと

第三〔世間〔の見方〕に基づいて世俗の分類を示すこと〕は、世俗には、対象と対象を持つもの（知）の二つがある。そのうち、最初に世間の知に関連して対象を持つもののについて正しいものと誤ったものの二つがあると示しているのは、所知を二諦に分けるのみならず、虚偽なものを見ている対象を持つものについてもまた正しい知と誤った知の二つがあると主張している。すなわち、明晰な感覚器官、すなわち一時的な迷乱の原因によって汚されていない感覚器官に依存している知と、過失がある感覚器官、すなわち、一時的な迷乱の原因によって汚されている対象を持つものの二つである。

その二つのうち、過失がある感覚器官を有している人々の迷乱の〔原因によって汚されている〕知とは、正しい清浄な感覚器官、すなわち、一時的な迷乱の原因によって汚されていない知に対比して誤った知であると主張される。一方、前者（明晰な感

[342] Z: བྱང་　D, K, L, T: ཀྱང་
[343] D, K, L: ལྟོས་　T, Z: བལྟོས་
[344] D, K, L: ལྟོས་　T, Z: བལྟོས་

覚器官）は、対象を顛倒せずに把握している知であると主張される。

その二つの区別についても、中観の説〔に関して〕のものではなく、世間の知に関して〔分けられているの〕ものである。

対象を持つものについて顛倒したものと顛倒していないものの二つに分けたのと同様に、対象についても〔二つに分けられる〕と示している[345]のは、一時的な迷乱の原因である障害なしに六つの感覚器官の知によって把握されている対象を世間が認識している場合、それは、世間のみに基づいて真実、すなわち、正しいものであって、聖者の知にとってそれらの対象が真実なもの、すなわち正しいものであると設定されるのではないのである。

聖者というのと中観の説というのはここでは同じ意味である。

残り（もう一方のもの）、すなわち、鏡像などは感覚器官に障害があるときに、対象として現われているものは、世間のみに関して誤っていると設定される。

〔世間のみというの〕「のみ」という言葉によってそれらの知が迷乱していると設定するためには、言説の量によって設定するので十分であり、正理知に基づいて設定されるのではないと示しているのである。

その場合、感覚器官に対して障害の縁が内にあるというのは、ティミラ眼病と黄目病などとタトゥラを食べたことなどである[346]。

タトゥラとは薬草であり、その果実を食べたならば、全てのものが黄色く現われる。

「など」という言葉によって、伝染病などが含まれている。

感覚器官に対して障害の縁が外にあるというのは、鏡と、洞窟などから話し声がするのと、春の太陽の光が白砂の地と近づいていることなどである。すなわち、それらは感覚器官に対する障害の縁が内にはないけれども、順次に鏡像と、こだまと、陽炎における水などとして把握する原因となっているものである。同様に魔術師などが用いている真言と薬なども〔同じようなものであると〕知られるべきである[347]。

意という感覚器官に対する障害というのは、それらの真言と薬などと誤った学説、誤った論証因と眠りという障害などである[348]。

眠りとは六つの感覚器官のうち、意の障害であるとお説きになっているので、夢に感官器官の知があるとこの阿闍梨〔チャンドラキールティ〕がご主張なさっているというのは大きく誤った説明である。

345 MABh, 104.1–3（253b5）参照。

346 文章の前後を少し変えているが、内容自体は『入中論釈』と一致している。MABh, 104.8–10（253b6–7）参照。

347 MABh, 104.10–17（253b7–254a2）参照。

348 MABh, 104.17–20（254a1–3）参照。

それゆえに、無始時来から生じている二我執の無明などによって汚された障害は、ここでは障害の原因であると捉えられないのであって、前に説明したように一時的な感官器官に対して害している迷乱の原因などであると捉えるべきである。

以上のような障害のない六識によって捉えている世俗の対象と、それとは逆の対象において正しいものと誤ったものを設定するのは世間の知だけに関して〔そのように設定している〕。なぜならば、それら〔世俗の対象とそれとは逆の対象〕が顕れている通りの対象として存在していることについて、世間の知によって障害されるものと障害されないものであるからである。

聖者に関しては正しいものと誤ったものという二つに〔分けられることが〕ないのである。なぜならば、鏡像などが顕れている通りの対象として存在しないのと同様に、無明を有する者たちに、青などが自らの特質によって成立しているものとして顕れるけれども、顕れている通りの対象としては存在しないからである。したがって、その〔鏡像の顕れを捉える知と青の顕れを捉える知〕二つの知において、迷乱しているものと迷乱していないものを区別することがないのである。

〔対論者が〕そうであるならば、感官器官である有色には一時的な障害があるので、誤った対象として顕れているものと、意識には眠りなどの障害があるので、夢の中で人として顕れるものなどを〔実際の〕人などとして捉える知と、目覚めたときに、〔夢の中で〕顕れた幻の馬と象の顕れに対しては馬と象であり、陽炎が水として顕れていたものに対して水であると捉えているものなどは顛倒しているものであると世間一般の知によっても理解されるけれども、意に誤った学説の障害があるので、誤って捉えられる諸対象は、世間一般の知によって顛倒したものであると理解することができないので、世間だけによって誤っているものであるとどのように設定するのかというならば、ここで障害があるかないについて考察するところの障害とは、倶生によって顛倒したものであると捉えているような障害のことをさして言っているのではない。そのため、誤った学説によって仮説されたものは、学説が知を変化しているものだけより誤って仮説された主なるものなどである。それらが顛倒していると世間一般の知によって理解することができないけれども、真実を現前にしていない言説の量によって誤っていると理解されるならば、世間の知によって誤っていると理解されるのである。

倶生の二我執によって把握されている対象のようなものは、障害のない感覚器官によって把握されているものと言われているので、世間の考えにとって正しいもの、あるいは真実なものではあるけれども、言説においても存在するものではないのである。

もし正しい世俗というものを認めないので、正しいものと誤ったものの二つに区別することができないけれども、無明によって汚された対象と対象を持つものは誤った世俗であるとどうして設定できないのであるかと問うならば、世俗は言説の量によっ

て設定されるべきものであるので、誤った世俗を設定するならば、それ（言説の量）によって設定する必要があるが、無明の習気によって汚されたものは迷乱していると言説の量によっては論証することができないからである。

T4 ཞེན་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བའི་ཞེན་ཡུལ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་པར་བསྟན་པ།

བཞི་པ་(ཞེན་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བའི་ཞེན་ཡུལ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་པར་བསྟན་པ་)ནི། ད་ནི་བཤད་ཟིན་པའི་ཡིད་ཀྱི་[T113a3]གནོད་པས་ཞེན་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བ་སྤྱིར་བསྟན་པའི་[101a1]དོན་དེ་ཉིད་མཚན་[L108b3]གཞི་[D118a3][K118a3]བྱེ་བྲག་ལ་དཔེར་བརྗོད་པའི་ཚུལ་གྱིས་བསྟན་པའི་ཕྱིར་བཤད་པ།

མི་ཤེས་པའི་གཉིད་ཀྱིས་ཡིད་རབ་ཏུ་བསྐྱོད་པའི་མུ་སྟེགས་ཅན་ཡིད་ལ་ཕྱིན་ཅི་[T113a4]ལོག་གི་གྲུབ་མཐའ་ངན་པ་དང་། གཏན་ཚིགས་ལྟར་[D118a4][K118a4][101a2]སྣང་གི་གནོད་པ་ཡོད་པ་འདི་དག་ནི། དེ་[L108b4]ཁོ་ན་ཉིད་ལ་འཇུག་པར་འདོད་པས་སྐྱེ་བོ་མ་བྱང་བ་གནག་རྫི་དང་བུད་མེད་ལ་སོགས་པ་ཡན་ཆད་ལ་གྲགས་པའི་སྐྱེ་བ་དང་། འཇིག་པ་ལ་[T113a5]སོགས་པ་ཕྱིན་ཅི་མ་ལོག་པ་[D118a5][K118a5]མ་བཟུང་བར་འཇིག་རྟེན་པ་རྣམས་ལས་ཕུལ་དུ་བྱུང་[101a3]བར་འགྲོ་བར་འདོད་པས། དཔེར་[L108b5]ན་ཤིང་ལ་འཛེག་པས་ཡལ་ག་ཕྱི་མ་མ་བཟུང་བར་སྔ་མ་བཏང་བ་[349]ལྟར། ལྟུང་བ་ཆེན་པོས་ལྟ་བ་ངན་པའི་རི་[T113a6]སུལ་[D118a6][K118a6]དུ་ལྟུང་བར་འགྱུར་ཞིང་། བདེན་གཉིས་ལེགས་པར་མཐོང་བ་དང་བྲལ་བས་འབྲས་བུ་ཐར་བ་ཐོབ་པར་མི་འགྱུར་[101a4]རོ། །

དེའི་ཕྱིར་མུ་[L108b6]སྟེགས་ཅན་འདི་རྣམས་ཀྱིས་རང་རང་གི་གཞུང་ལས་འབྱུང་བའི་བདག་ཉིད་[D118b1][K118b1]ཇི་ལྟ་བ་བཞིན་[T113b1]དུ་ཡོན་ཏན་གསུམ་ལ་སོགས་པ་གང་བརྟགས་པ་ནི། འཇིག་རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་ཡོད་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

འདིས་ནི་ལུགས་འདིས་བློ་འཁྲུལ་བ་[L109a1]ཞིག་[350]གི་[101a5]ངོར་ཡོད་པ་ལ། ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡོད་པར་[D118b2][K118b2]འཇོག་ཟེར་བ་ལེགས་པར་བཀག་གོ །

དེ་བཞིན་[T113b2]དུ་སྒྱུ་མ་དང་སྨིག་རྒྱུ་དང་གཟུགས་བརྙན་ལ་སོགས་པ་ལ་རྟ་གླང་དང་། ཆུ་དང་བྱད་བཞིན་སོགས་སུ་བརྟགས་པ་གང་[L109a2]ཡིན་པ་དེ་དག་ཀྱང་། འཇིག་རྟེན་ཀུན་རྫོབ་[D118b3][K118b3]ལས་ཀྱང་ཡོད་[101a6]པ་མིན་པ་ཉིད་དོ། །

དེ་ལྟར་ན་ཐ་སྙད་དུ་ཡོད་པ་[T113b3]ལ་ནི་ཚད་མས་གྲུབ་པ་ཞིག་[351]དགོས་སོ། །

དེ་འདྲ་བའི་ཞེན་ཡུལ་རྣམས་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མེད་ཀྱང་སྣང་ཡུལ་ལ་ནི་དེ་ལྟར་མི་བཞེད་དོ། །

ད་ལྟ་[L109a3]གཟུགས་[D118b4][K118b4]སྒྲ་སོགས་ཕྱི་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་དབང་ཤེས་[101b1]ལ་སྣང་བ་ནི།[T113b4]མ་རིག་པས་བསླད་པ་ཡིན་པས་ཤེས་པ་དེ་དང་། གཟུགས་བརྙན་དང་བྲག་ཆ་སོགས་སྣང་བའི་དབང་ཤེས་རྣམས་ལ། ཕྲ་རགས་[D118b5][K118b5]ཙམ་མ་གཏོགས་པ་[L109a4]སྣང་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་མ་འཁྲུལ་ལ་ཁྱད་པར་མེད་ཅིང་། སྔོ་སོགས་རང་གི་མཚན་ཉིད་[T113b5]ཀྱིས་

[349] Z: བར་ D, K, L, T: བ་

[350] D, K, L: ཞིག་ T, Z: ཅིག་

[351] D, K, L: ཞིག་ T, Z: ཅིག་

གྲུབ་པ་དང་།[101b2]གཟུགས་བརྙན་བྱད་བཞིན་དུ་ཡོད་པ་མི་སྲིད་ཀྱང་། བྱད་བཞིན་དུ་མེད་པའི་[D118b6][K118b6]གཟུགས་བརྙན་ཡོད་པ་བཞིན་དུ། རང་གི་མཚན་[L109a5]ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་མིན་ཀྱང་སྐྱེ་སོགས་ཡོད་དགོས་ལ། དེ་ཡང་ཕྱི་རོལ་གྱི་དོན་དུ་ཡོད་[T113b6]པ་བཞིན་དུ་གཟུགས་བརྙན་ཡང་གཟུགས་ཀྱི་སྐྱེ་མཆེད་[101b3]དུ་བཞེད་པ་[D119a1][K119a1]ཡིན་ཏེ། འོག་ནས་གཟུགས་བརྙན་གྱིས་དེ་སྣང་བའི་དབང་ཤེས་སྐྱེད་པར་ཡང་[L109a6]གསུངས་སོ། །

ཚུལ་དེ་དག་ནི་མིག་ལ་རྟ་གླང་དུ་སྣང་བའི་སྒྱུ་མ་དང་བྲག་ཆ་སོགས་[T114a1]ལ་ཡང་ཤེས་[D119a2][K119a2]པར་བྱ་སྟེ། ལུགས་དམ་པ་འདི་ཡི་རྣམ་བཞག་ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པའོ། །[101b4]

T4 思念対象において錯誤している思念対象は言説においてもまた存在していないことを示すこと

第四〔思念対象において錯誤している思念対象は言説においてもまた存在していないことを示す〕とは、さて、前に説明した意の障害によって思念対象について迷乱している知を一般的に説いたその同じ内容を、各々のものについて例えを述べるという仕方で示すために説明する。

無知という眠りによって突き動かされている外道、意に顛倒した誤った学説や誤った論証因という障害が心にあるそういう者たちは、

> 真実に入ると主張しているので、無学な凡夫の放牧者や女性などに至るまでの人に知られている生起と、滅などを顛倒せずに把握することなく、世間の者たちより優れたものになっていると主張するので、例えば、樹に登る者が、上の枝を捉えずに、下の枝を放してしまうのと同様に、大きな過ちによって正しくない見解の谷底に落ちてしまうことになり、二諦を正しく見ることを離れているので、〔目指すところの〕結果である解脱を得られないのである[352]。

それゆえに、これらの外道たちはそれぞれの原典にでているそれぞれの立場に応じて、「三徳など考察されているものは、世間の世俗においてでさえ存在するものはないのである」[353]。

このことによって、この学説（帰謬派）は、迷乱した知にとって存在しているものが世俗として存在していると設定すると主張していることを正しく否定している。

同様に、幻や陽炎、鏡像などにおいて馬と象、水と顔など〔がある〕と考察されているところのそれらのものもまた、世間の世俗〔という観点〕からも存在するものではないのである。

---

[352] 原文そのままではない。MABh, 105.13–20（254a5–7）参照。

[353] MABh, 105.20–106.1（254a7）参照。

そうであるならば、言説として存在しているものは量によって成立しているあるものである必要がある。

そのような諸々の思念対象は言説としても存在しないけれども、顕れの対象については以上のようにはお考えにならないのである。

さて、色声などの五つが自相によって成立しているものとして感覚器官の知に顕れているものは、無明によって汚されたものであるので、そのような知と鏡像やこだまなどが顕れている感覚器官の知には、微細なもの粗大なものということを除いては顕れている対象に対して迷乱しているか迷乱していないかの点についての違いがないのである。自相によって成立している青などと顔として存在している鏡像は存在し得ないけれども、顔として存在していない鏡像が存在しているように、自相によって成立しているのではなくても、青などは存在すべきであり、それもまた、外界の対象として存在しているように鏡像もまた色処であると主張されるのである。すなわち、以下で鏡像によってそれが顕れている感官知を生起させるのであるともお説きになっている。

それらのあり方は目に馬と象として顕れている幻やこだまなどについても〔同様に〕知るべきである。すなわち、この優れた説の独自な設定である。

S2 སྐབས་དོན་ལ་སྦྱར་བ།

གཉིས་པ། ནི། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་ཐ་སྙད་པའི་ཤེས་པས་མི་འཇོག་[L109b1]པ་དེའི་ཕྱིར། གཞན་སྐྱེ་འགོག་པ་ནི་འཇིག་རྟེན་པའི་ལྟ་བ་[T114a2]ཁོ་ན་[D119a3][K119a3]ལ་གནས་ནས་མི་བྱེད་ཀྱི། འཕགས་པའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་གཟིགས་པ་ཁས་བླངས་ནས་དོན་དམ་པར་འགོག་པ་ཡིན་ནོ། །

གང་[101b5]གི་ཚེ་གཞན་སྐྱེ་དགག་པ་འདི་ལ་དོན་དམ་གྱི་ཁྱད་པར་སྦྱོར་[L109b2]བ་ཡིན་པ་དེའི་ཚེ། [D119a4][K119a4]ཇི་ལྟར་མིག་ནི་རབ་རིབ་[T114a3]ཅན་གྱི་ཤེས་པས་སྐྲ་ཤད་ལ་སོགས་པ་དམིགས་པས། རབ་རིབ་ཀྱིས་མ་བསླད་པའི་ཤེས་པ་ལ་སྐྲ་ཤད་སོགས་མི་སྣང་བ་ལ་གནོད་པ་མིན་པ་[101b6]ཇི་ལྟ་བ་དེ་བཞིན་དུ། དྲི་མ་སྙེ་ཟག་[D119a5][K119a5]པ་མེད་པའི་ཡེ་[L109b3]ཤེས་སྤྱངས་པ་སྙེ་དེ་དང་བྲལ་བའི་སོ་སྐྱེའི་[T114a4]བློ་མ་རིག་པས་བསླད་པས། མ་རིག་པས་མ་བསླད་པའི་དྲི་མ་སྙེ་ཟག་པ་མེད་པའི་བློ་ལ་གནོད་པ་ཡོད་པ་མ་ཡིན་པས། དོན་དམ་པར་གཞན་[D119a6][K119a6]སྐྱེ་བཀག་[102a1]པ་ལ་འཇིག་རྟེན་པའི་ངོར་གཞན་སྐྱེ་གྲུབ་[L109b4]ཏུ་ཆུག་ཀྱང་མི་གནོད་དོ། ། དེའི་ཕྱིར་ཕ་[T114a5]རོལ་པོ་ནི་དམ་པ་མཁས་པ་དག་གིས་བཞད་གད་དུ་བྱ་བར་འོས་སོ། །

S2 本テキストの意味に関連させる

第二〔本テキストの意味に関連させる〕とは、真実なる対象を言説知によって設定することができない。それゆえ、他からの生起を否定することは、世間のものの見解のみに立って行うことができず、聖者の真実をご覧になっているものを承認した上で

勝義において〔他からの生起を〕否定するのである[354]。

他からの生起を否定することにおいて勝義という限定をつけた上で〔他からの生起を否定しているので〕ある。そのときに、目は眼病を持っているものの知によって毛髪などを認識しているので、眼病によって汚されていない知に毛髪などが顕れることはないということに対して障害することはないのと同様に、汚れ、すなわち、漏がない智慧を捨てている、すなわち、それと離れている凡夫の知は無明によって汚されているので、無明によって汚されていない汚れ、すなわち、漏がない智慧に対して障害することは存在しない。それゆえに、勝義において他のものからの生起を否定するときに、世間の人にとって他のものから生起が成立するとしても、〔他のものからの生起が勝義において否定されることに対して〕障害することはないのである。したがって、対論者は、優れた学者達によって笑われるものとされるに値する[355]。

S3 བདེན་གཉིས་སོ་སོའི་ངོ་བོ་བཤད་པ།

གསུམ་པ་(བདེན་གཉིས་སོ་སོའི་ངོ་བོ་བཤད་པ་)ལ་གཉིས། **T1** ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་[D119b1][K119b1]བཤད་པ་དང་། **T2** དོན་དམ་པའི་[102a2]བདེན་པ་བཤད་པའོ། །

T1 ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་བཤད་པ།

དང་པོ་(ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་བཤད་པ་)ལ་གསུམ། U1 ཀུན་[L109b5]རྫོབ་པ་གང་གི་ངོར་བདེན་ལ་གང་[T114a6]གི་ངོར་མི་བདེན་པ་དང་། U2 ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དེ་གང་ཟག་གསུམ་ལ་སྣང་བ་དང་མི་སྣང་བའི་[D119b2]ཚུལ་[K119b2]དང་། U3 སོ་སྐྱེ་དང་འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ཏེ་དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འགྱུར་ཚུལ་[102a3]ལོ། །

U1 ཀུན་རྫོབ་པ་གང་གི་ངོར་བདེན་ལ་གང་གི་ངོར་མི་བདེན་པ།

དང་པོ་(ཀུན་རྫོབ་པ་གང་གི་ངོར་བདེན་ལ་གང་གི་ངོར་མི་བདེན་པ་)ལ་གཉིས། **V1** དངོས་[L109b6]ཀྱི་དོན་དང་། **V2** ཉོན་མོངས་ཀྱི་རྣམ་[T114b1]གཞག་ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པ་བཤད་པའོ། །

S3 二諦それぞれの存在の説明

第三〔二諦それぞれの存在を説明すること〕に二つ〔がある〕。T1 世俗諦を説明することと、T2 勝義諦を説明することである。

---

354 MABh, 106.7–9（254b1–2）.

355 この箇所もチャンドラキールティの文章とほぼ同じであるが、所々にツォンカ自身の言葉が付け加えられている。MABh, 106.9–16（254b1–3）参照。

T1 世俗諦を説明すること

第一〔世俗諦を説明すること〕に三つ〔がある〕。U1 如何なる世俗の者にとって真実であり、如何なる〔世俗の者〕にとって真実ではないのかと、U2 唯世俗というものが、三種のプドガラに顕れるあり方と顕れないあり方、U3 凡夫と聖者によって勝義と世俗になる仕方である。

U1 如何なる世俗の者にとって真実であり、如何なる〔世俗の者〕にとって真実ではないのか

第一〔如何なる世俗の者にとって真実であり、如何なる〔世俗の者〕にとって真実ではないのか〕に二つ〔がある〕。V1 本論と、V2 煩悩の独自の設定についてを説明する。

V1 དངོས་ཀྱི་དོན།

དང་པོ་(དངོས་ཀྱི་དོན་)ནི།[D119b3][K119b3]འདིས་སེམས་ཅན་རྣམས་དངོས་པོ་ཇི་ལྟར་གནས་པའི་རང་བཞིན་ལྟ་བ་ལ་སྒྲིབ་པ་སྟེ་རྨོངས་པར་བྱེད་པའི་ཕྱིར་ན་གཏི་མུག་སྟེ།[102a4]མ་རིག་པ་དངོས་པོའི་ངོ་བོ་[L110a1]རང་བཞིན་གྱིས་ཡོད་པ་མ་ཡིན་[T114b2]པ་ལ། རང་བཞིན་གྱིས་[D119b4][K119b4]ཡོད་པར་སྒྲོ་འདོགས་པར་བྱེད་པ་ཡིན་ལུགས་ཀྱི་རང་བཞིན་མཐོང་བ་ལ་སྒྲིབ་པའི་བདག་ཉིད་ཅན་ནི་ཀུན་རྫོབ་བོ། །

འདི་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཞེས་པའི་བདེན་པ།[L110a2]ཀུན་རྫོབ་[102a5]པ་གང་གི་ངོར་འཇོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་ངོས་[T114b3][D119b5][K119b5]འཛིན་པ་ཡིན་གྱི། ཀུན་རྫོབ་པ་སྤྱི་ངོས་འཛིན་པ་མིན་ནོ། ། ངོས་འཛིན་དེ་ཡང་ལང་ཀར་གཤེགས་པ་ལས།

> དངོས་རྣམས་སྐྱེ་བ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ། །
> དམ་པའི་དོན་དུ་རང་བཞིན་མེད། །
> རང་བཞིན་[L110a3]མེད་ལ་འཁྲུལ་བ་[D119b6][K119b6]གང་། །
> དེ་ནི་[102a6]ཡང་དག་ཀུན་[T114b4]རྫོབ་འདོད། །

ཅེས་དོན་དམ་པར་རང་བཞིན་མེད་པ་ལ་རང་བཞིན་ཡོད་པར་འཁྲུལ་བའི་བློ་ཀུན་རྫོབ་པ་ཡིན་པར་གསུངས་པའི་དོན་ནོ། །

ཀུན་རྫོབ་དེ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་སྣང་དོར་སྒྲིབ་བྱེད་ལ་[D120a1][K120a1]ཡང་འཇུག་[L110a4]པས་སྒྲིབ་བྱེད་དོ། །

དེས་གང་ལ་སྒྲིབ་[T114b5]ན་[102b1]ཡང་དག་ཀུན་རྫོབ་འདོད་ཅེས་པས་ཡང་དག་པའི་དོན་ལ་སྒྲིབ་པས་ཀུན་རྫོབ་བམ་སྒྲིབ་བྱེད་དུ་འདོད་ཅེས་པ་སྟེ། ཡང་ལོག་[D120a2][K120a2]གཉིས་ཀྱི་ནང་ནས་ཡང་དག་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་སྟོན་པ་མིན་ནོ། །

རྐང་པ་དང་པོས་བསྟན་[L110a5]པའི་ཀུན་རྫོབ་དང་། རྐང་[T114b6]པ་ཕྱི་མ་གཉིས་ཀྱིས་བསྟན་[102b2]པའི་ཀུན་རྫོབ་གཉིས་གཅིག་ཏུ་མི་བྱ་སྟེ། དང་པོ་ནི། རང་གིས་དངོས་[D120a3][K120a3]པོ་རྣམས་སྐྱེ་བ་སོགས་སུ་གང་དུ་ཁས་ལེན་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཡིན་ལ། ཕྱི་མ་ནི་དངོས་པོ་རྣམས་གང་གི་ངོར་བདེན་པའི་བདེན་[L110a6]འཛིན་གྱི་[T115a1]ཀུན་རྫོབ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ཀུན་རྫོབ་བདེན་[102b3]འཛིན་དེའི་མཐུས་སྔོན་[D120a 4][D120a4][K120a4]པོ་ལ་སོགས་པ་གང་ཞིག་རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པ་མེད་བཞིན་དུ་དེར་སྣང་བར་བཅོས་པའི་བཅོས་མ་སེམས་ཅན་རྣམས་ལ་བདེན་པར་སྣང་བ་དེ་ནི། སྔར་[T115a2]བཤད་པའི་[L110b1]འཇིག་རྟེན་གྱི་ཕྱིན་ཅི་ལོག་གི་ཀུན་རྫོབ་[D120a5][K120a5]པ་དེའི་ངོར་བདེན་[102b4]པས་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཞེས་ཐུབ་པ་དེས་གསུངས་ཏེ། གསུངས་ཚུལ་ནི་སྔར་གྱི་མདོ་དེར་གསུངས་པའོ། །

གང་ཟག་གསུམ་པོ་གང་གི་ངོར་མི་བདེན་པའི་[T115a3]རྟོག་པས་བཅོས་[D120a6][K120a6][L110b2]པས་བཅོས་མར་གྱུར་བའི་དངོས་པོ་ནི་དེའི་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོར་མི་བདེན་[102b5]པས་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་ཞེས་བྱའོ། །

> རྟེན་འབྱུང་གཟུགས་བརྙན་དང་བྲག་ཅ་སོགས་ཅུང་ཟད་ཅིག་ནི་བརྫུན་ཡང་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་[D120b1][K120b1]སྣང་[T115a4]ལ། སྔོན་པོ་ལ་སོགས་པའི་[L110b3]གཟུགས་དང་སེམས་དང་ཚོར་བ་སོགས་ཅུང་ཟད་ཅིག་ནི་བདེན་པར་སྣང་སྟེ། ཆོས་རྣམས་ཀྱི་[102b6]ཡིན་ལུགས་ཀྱི་རང་བཞིན་ནི་མ་རིག་པ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ལ་རྣམ་པ་ཐམས་[D120b2][K120b2]ཅད་དུ་མི་སྣང་ངོ་། །
> དེའི་[T115a5] ཕྱིར་རང་བཞིན་དེ་དང་གང་ཞིག་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡང་[L110b4]བརྫུན་པ་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་དོན་བཤད་ན་ཅུང་ཟད་ཅིག་[103a1]ཅེས་པ་ནི། ནག་ཚོའི་འགྱུར་ལས་འགའ་[D120b3][K120b3]ཞིག་ཏུ་བསྒྱུར་བ་ལྟར་བདེའོ། །

གཟུགས་[T115a6]བརྙན་སོགས་བརྫུན་ཡང་སྣང་བ་ནི་བརྫུན་པར་སྣང་བ་ཡིན་ལ། དེ་ནི་བྱད་[L110b5]བཞིན་དུ་སྣང་བ་དང་དེས་སྟོང་བ་གཉིས་ཚོགས་པའི་བརྫུན་པ་ཡིན་[103a2]པས་དེའི་བདེན་སྟོང་[D120b4][K120b4]ནི་བྱད་བཞིན་དུ་བདེན་པས་སྟོང་བ་ཡིན་གྱི།གཟུགས་[T115b1]བརྙན་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པའི་བདེན་སྟོང་གི་དོན་མེད་དོ། །

དེའི་ཕྱིར་གཟུགས་བརྙན་བྱད་[L110b6]བཞིན་གྱིས་སྟོང་བར་གྲུབ་ཀྱང་། གཟུགས་བརྙན་རང་[D120b5][K120b5]གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་[103a3]འཛིན་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར་བདེན་པ་ཡིན་པ་[T115b2]ལ་འགལ་བ་ཅི་ཡང་མེད་པའི་དངོས་པོ་ཡིན་པས་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཡིན་ནོ། །

དེས་ན་གཟུགས་བརྙན་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་[L111a1]མིན་[D120b6][K120b6]པར་གསུངས་པ་ནི། བརྡ་ལ་བྱང་བའི་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར་བྱད་[103a4]བཞིན་གྱི་གཟུགས་བརྙན་ལྟ་བུ་[T115b3]དེ། བྱད་བཞིན་ཡིན་པ་དེ་བརྫུན་པས་དེ་ལ་ལྟོས་པའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་མིན་པ་ལ་དགོངས་ཀྱི།[K121a1]མཐོང་བ་བརྫུན་[L111a2]པའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་གསུངས། ཞེས་པས་བཤད་པའི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་མི་འཇོག་པ་ག་ལ་ཡིན།

དེ་[103a5]ལྟ་མ་ཡིན་[T115b4]པར་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་བདེན་པར་མེད་ན་[K121a2]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན་པར་འགལ་ན། རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་[L111a3]མེད་པར་གསུངས་པ་

དང་། བདེན་གྲུབ་འགོག་[356]པ་དང་བདེན་མེད་སྒྲུབ་པ་ཐམས་ཅད་ཐ་སྙད་དུ་བྱེད་པའི་[T115b5]རྣམ་གཞག་[103a6][K121a3]ཐམས་ཅད་དང་འགལ་བར་འགྱུར་རོ། །

དེའི་ཕྱིར་གཟུགས་བརྙན་སོགས་འཇིག་རྟེན་པའི་ཤེས་པ་རང་དགའ་བས་ཀྱང་འཁྲུལ་བར་[L111a4]ཤེས་པའི་ཡུལ་རྣམས་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མིན་གྱི་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་མོ། །[K121a4]ཞེས་ཟེར་བ་ནི་བདེན་[T115b6]གཉིས་ཀྱི་གྲངས་ངེས་[103b1]དང་། འཇིག་རྟེན་པ་ལ་ལྟོས་པའི་བདེན་བརྫུན་དང་། དབུ་མ་པས་འཇོག་པའི་བདེན་བརྫུན་ལ་གོ་བ་མ་ཆགས་པའི་གཏམ་དུ་སྣང་[L111a5]ངོ་། །

རང་བཞིན་ནི་མ་རིག་[K121a5]པ་དང་ལྡན་པ་ལ་ཐམས་ཅད་དུ་མི་སྣང་ངོ་ཞེས་གསུངས་[T116a1]པ་ཡང་། མ་རིག་པ་མ་སྤངས་པའི་འཕགས་[103b2]པས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་རྟོགས་པར་བཞེད་པས་ན། མ་རིག་པས་བསླད་པའི་ཤེས་པ་ལ་[K121a6]དགོངས་[L111a6]ལ། འཕགས་པ་སློབ་པའི་རྗེས་ཐོབ་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་དང་།[T116a2]སོ་སྐྱེའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་ལྟ་བ་རྣམས། མ་རིག་པ་དང་དེའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་བསླད་པ་ཡིན་པས་[103b3]མངོན་སུམ་དུ་མི་སྣང་ཡང་། སྤྱིར་[357]དོན་དམ་[D121b1][K121b1]བདེན་པ་སྣང་བར་འདོད་དགོས་སོ། །

> དེ་ལྟར་ན་རེ་ཞིག་སྲིད་[L111b1]པའི་ཡན་ལག་གིས་བསྡུས་པས་[T116a3]ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པའི་དབང་གིས། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་རྣམ་པར་གཞག་གོ། །

ཞེས་གསུངས་པས་ནི།[[D121b2][K121b2]ཆོས་རྣམས་[103b4]བདེན་པར་འཛིན་པའི་མ་རིག་[358]པ་གང་ཟག་དང་ཆོས་ཀྱི་བདག་འཛིན་དུ་གྲགས་པ་[L111b2]ནི།ཡན་ལག་བཅུ་གཉིས་ཀྱི་མ་[T116a4]རིག་པར་བཞེད་པས་ཤེས་སྒྲིབ་ཏུ་མི་བཞེད་དོ། །

མ་རིག་པ་བདེན་འཛིན་དེའི་དབང་[D121b3][K121b3]གིས་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་འཇོག་ཅེས་པ་ནི། བདེན་[103b5]པ་ཀུན་རྫོབ་པ་གང་གི་ངོར་འཇོག་པའི་འཇོག་ཚུལ་སྟོན་པ་ཡིན་གྱི། ཀུན་[L111b3]རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན་པའི་བུམ་སྣམ་[T116a5]སོགས་[D121b4][K121b4]བདེན་འཛིན་དེས་འཇོག་ཅེས་པ་མིན་ཏེ། བདེན་འཛིན་དེས་བཞག་པ་ནི་རང་གིས་ཐ་སྙད་དུ་ཡང་མི་སྲིད་པར་བཞེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་[103b6]ན་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཞེས་པའི་ཟུར་གྱི་བདེན་པ་གང་གི་ངོར་[L111b4]འཇོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་དང་། བུམ་[T116a6]སོགས་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་ཡོད་[D121b5][K121b5]པར་འཇོག་པའི་ཀུན་རྫོབ་རྣམས་མིང་མཚུངས་པས། དོན་ཡང་གཅིག་ཏུ་འཁྲུལ་བ་མང་དུ་བྱུང་སྣང་བས་ལེགས་པར་ཕྱེད་[104a1]པར་བྱའོ། །

འོན་བུམ་སོགས་འདི་རྣམས་སངས་མ་རྒྱས་པའི་གང་[L111b5]ཟག་ཐམས་ཅད་ཀྱི་[D121b6][K121b6][T116b1]ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར་བདེན་པ་ཡིན་ནམ། གང་ཟག་འགའ་ཞིག་གི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར་མི་བདེན་པ་ཡང་ཡོད་ཅེ་ན། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པར་འཇོག་པའི་[104a2]གཟུགས་སྒྲ་སོགས་

> དེ་ཡང་། ཉན་རང་དང་བྱང་སེམས་ཉོན་[D122a][K122a1]མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་[L111b6]པ་སྤངས་པ། འདུ་བྱེད་[T116b2]གཟུགས་བརྙན་སོགས་དང་འདྲ་བར་གཟིགས་པ་རྣམས་ལ་ནི། བཅོས་

[356] T, K: འགེགས་ L:འགོགས་ Z: འགགས་

[357] D, L, T, Z: སྤྱིར་ K:ཕྱིར་

[358] Z: རིགས་ D, T, L, K: རིག་

> མའི་རང་བཞིན་ཡིན་གྱི་བདེན་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། བདེན་[D122a2][K122a2]པར་མངོན་པར་རློམ་པ་[104a3]མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་དོན་བཤད་ན། གང་གི་ངོར་མི་[L112a1]བདེན་པའི་གང་ཟག་ནི་གསུམ་[T116b3]སྟེ། ཉན་རང་དང་བྱང་སེམས་སོ། །

དེ་ཡང་ཉན་རང་དང་བྱང་སེམས་གང་ཡིན་[D122a3][K122a3]ལ་མི་བྱེད་པས་ཁྱད་པར་སྨོས་པ་ནི། འདུས་བྱས་ཐམས་ཅད་གཟུགས་བརྙན་[104a4]བཞིན་དུ་རང་བཞིན་གྱིས་སྟོང་[L112a2]ཡང་དེར་སྣང་བར་མངོན་སུམ་དུ་རྟོགས་པ་ནི་ཁྱད་པར་[T116b4]གཅིག་གོ །

དེ་ཙམ་ནི་བྱང་སེམས་ས་བདུན་[D122a4][K122a4]པ་བ་མན་ཆད་དང་། ཉན་རང་འཕགས་པ་སློབ་པ་རྣམས་ལའང་ཡོད་པས་དེ་གཅད་པའི་ཕྱིར་དུ། གང་ཟག་གསུམ་པ་ལ་མ་རིག་[104a5]པ་སྤངས་པ་ཞེས་[L112a3]གསུངས་པས་དག་པ་སའི་བྱང་སེམས་དང་། ཉན་[T116b5]རང་དགྲ་[D122a5][K122a5]བཅོམ་པ་གཉིས་ལ་བྱ་སྟེ་དེ་གསུམ་གྱི་ངོར་མི་བདེན་པའོ། །

གང་ཞིག་མི་བདེན་པ་ནི་དེ་ཡང་ཞེས་པ་ཕྱི་ནང་གི་ཆོས་རྣམས་སོ། ། མི་བདེན་པའི་རྒྱུ་མཚན་ནི་བདེན་པར་རློམ་པ་སྟེ་[L112a4][104a6]བདེན་ཞེན་མེད་པའི་ཕྱིར་ཏེ། བདེན་[D122a6][K122a6]འཛིན་གྱི་མ་[T116b6]རིག་པ་ཟད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

དེས་ན་ཕྱི་ནང་གི་ཆོས་རྣམས་གང་ཟག་གསུམ་པོ་དེའི་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་ངོར་བདེན་པར་མ་གྲུབ་པར་སྟོན་པ་ཡིན་ནོ། །

དེ་ལྟར་འགྲེལ་བས་དེ་རྣམས་ཀྱི་ངོར་ཀུན་རྫོབ་[L112a5]བདེན་པ་མིན་[104b1]པར་ཡེ་[D122b1][K122b1]མ་བསྟན་པར་བདེན་པ་[T117a1]མིན་ཞེས་བསྟན་པ་ལ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་མིན་པར་བསྟན་པར་འཛིན་པ་ནི། ད་ཅང་ཡང་བློའི་འཇུག་པ་རྩིངས་པས་སློབ་དཔོན་གྱི་དགོངས་པ་རང་གི་བློའི་དྲི་མས་སྦགས་ནས་འཆད་[D122b2][K122b2]པའི་ལུགས་[L112a6]ངན་པའོ། །

དེ་[104b2]ལྟར་སྟོན་པ་ཡང་[T117a2]གང་ཟག་དེ་གསུམ་ལ་མིན་གྱི། དེ་གསུམ་གྱི་ངོར་བདེན་པ་མིན་པ་གང་ཟག་གཞན་བདག་ཅག་རྣམས་ལྟ་བུ་ལ་སྟོན་པ་ཡིན་ནོ། །

གང་ཟག་དེ་གསུམ་མིན་པའི་འོག་མ་[D122b3][K122b3]རྣམས་ལ་ནི་ལྷན་སྐྱེས་ཀྱི་བདེན་འཛིན་[L112b1]ཡོད་པས། དེ་རྣམས་ཀྱི་[T117a3]ཀུན་[104b3]རྫོབ་གང་ཡིན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ངོར་གང་ཡང་བདེན་པར་མ་གྲུབ་པར་སྟོན་མི་ནུས་སོ། །

ཐར་བཤད་པ་དེ་ལྟ་མིན་པར་དེ་དག་གི་ངོར་ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་[D122b4][K122b4]བདེན་པ་མིན་པ་བསྟན་ན་ནི། ཤིན་ཏུ་མ་འབྲེལ་བའི་སྟོན་བྱེད་དུ་འགྱུར་ཏེ། བློ་[L112b2][T117a4]དེའི་ངོར་གཞི་དེ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་[104b4]པར་འགྲུབ་པ་ལ་གཞི་དེ་བརྟུན་པར་འགྲུབ་དགོས་པས་དེ་ལ་བདེན་ཞེན་མེད་པ་རྒྱུ་མཚན་དུ་འགོད་པ་ནི་བཞད་[D122b5][K122b5]གད་ཀྱི་གནས་སོ། །

བློ་དེའི་ངོར་གཞི་དེ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་འགྲུབ་པ་ལ་གཞི་དེ་[T117a5]བརྟུན་པར་འགྲུབ་དགོས་པའི་རྒྱུ་མཚན་[L112b3]ནི། བུམ་སོགས་ལ་[104b5]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཞེས་པའི་ཚིག་ཟུར་གྱི་བདེན་པ་འཇོག་པ་ན་བློ་དང་དོན་[D122b6][K122b6]གཉིས་ལས། དོན་ལ་བདེན་པར་མི་འཇོག་པར། བདེན་འཛིན་ཀུན་རྫོབ་པའི་ངོ་བོ་ཉིད་དུ་[T117a6]བདེན་པར་གཞག་དགོས་པར་མཐོང་བ་ན། ཁྱད་པར་དེ་མ་སྦྱར་ན་[L112b4]བདེན་པར་མི་འགྲུབ་[104b6]ཅིང་བརྟུན་པ་ཡིན་པར་མཐོང་དགོས་[D123a1][K123a1]པའི་གནད་ཀྱིས་ཡིན་ནོ། །

V1 本論

第一〔本論〕は、これ（無知）によって諸々の衆生が事物が存在している通りの自性を見ることに対して覆っている。すなわち、眩ましているがゆえに、無知である。なぜならば、無明は事物それ自身が自性によって存在していないことに対して、自性によって存在していると増益すること、すなわち、真のあり方である自性（ཡིན་ལུགས་ཀྱི་རང་བཞིན།）を見ることに対して妨げるという自性としているところのもの（སྒྲིབ་པའི་བདག་ཉིད་ཅན།）が世俗である[359]。

この説は、世俗諦というの諦とは、いかなる世俗の知にとって〔諦を〕設定するのかという世俗を確認したものであって、世俗という一般のものを確認したものではないのである。その確認の仕方もまた『入楞伽経』に、

> 諸々の事物が生起するのは世俗においてであるが、
> 勝義においては自性がないのである。
> 無自性に対して迷乱している知は、
> 真実〔を覆い隠すという〕世俗であると主張しているのである[360]。

というように、勝義において自性がないものに対して自性があると迷乱している知が世俗のものであるとお説きになっている意味である。その世俗というのは世俗の語彙（サンスクリット語の意味）では、覆うものということも意味しているので、覆い隠すものである。

それ〔世俗〕が何を覆い隠しているのかと問うならば、「真実〔を覆い隠すという〕世俗であると主張する」と言っているので、真実の対象を覆い隠すので、世俗あるいは覆い隠すものであると主張しているということである。すなわち、正しい〔世俗〕と誤った〔世俗〕という二つのうちの正しい世俗のことを説いているのではないのである。

〔『入楞伽経』〕第一行目で説かれている世俗と、後半の二行で説かれている世俗の二つを同じであると考えるべきではないのである。なぜならば、一行目は、自分自身が〔世俗において〕諸々の事物が生じるなどと承認しているところの世俗であって、後半

359 MABh, 107.5–8（254b5）参照。

360 LA, 2.978, 131: LAt, 174b5–6: ཀུན་རྫོབ་ཏུ་དངོས་རྣམས་ཡོད། ། དོན་དམ་དུ་ནི་རང་བཞིན་མེད། ། རང་བཞིན་མེད་ལ་གང་ནོར་ན། ། དེ་ནི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་ཡིན། ། （世俗において諸々の事物が存在する。勝義として自性がないのである。無自性に対して誤っているのならば、それは世俗諦である。）

の二行は、諸事物がそれ〔真実であるととらえる知〕にとって真実であるところの真実執着〔という意味〕の世俗であるからである。

世俗すなわち真実執着の力によって、青などの何らかのものが、自性によって成立しているものではないのに、それ〔自性によって成立しているもの〕として現われるように作り出された作りものが、衆生にとっては真実なものとして現われているものであり、それが前に説明した世間の顛倒しているその世俗にとって真実であるので、世間の世俗の諦であると牟尼がお説きになっている。〔牟尼がお説きになった〕内容というのは前のテキスト〔『入楞伽経』〕にお説きになっているものである。

三種の人の知にとって、真実なものではない分別知によって作り出されたので、作りものとなっている事物は、その人の世俗〔の知〕にとっては真実ではないので、唯世俗と言われる。

> 縁起しているものの中で、鏡像やこだまなどのいくつかのものが、〔世間においても〕虚偽であるが、無明を有している者達に現われ、青等の色や心や受などのいつかのものは真実なものとして現われる。すなわち、諸法の真実のあり方(無自性) としての自性は無明を有している者たちには如何なる意味でも顕れることはないのである。
> したがって、その自性とあるものが世俗においてさえ虚偽なるものは世俗諦ではないのである[361]。

とお説きになっている意味を説明するならば、「いくつかのもの」といっているのは、ナクツォ〔翻訳師〕の翻訳では、「ある種のもの」と訳されているように理解するならば、良いのである。

鏡像などは虚偽であっても、現われは虚偽なものとして顕れているのであるが、それ〔虚偽なものとして顕れていること〕は、顔として現われていることとそれ〔顔〕に関して空であることの二つが合わさった時の虚偽なるものであるので、その〔鏡像〕が真実に関して空であるというのは顔としては真実なものではないという意味であって、鏡像が自らの特質によって成立しているような真実なものではないという意味ではないのである。

したがって、鏡像は、顔に関して空であると成立しているけれども、鏡像は、自らの特質によって成立しいると把握する世俗の知にとって真実なものであることに矛盾は何も存在しないという事物ではあるので、世俗諦である。

したがって、鏡像が世俗諦でないとお説きになっているのは、名前のいみについて学

[361] MABh, 107.11–17（254b6–7）.

んだ世間の世俗の知にとって、たとえば顔の鏡像のようなものは、顔であるということは虚偽なものであるので、これに関連して世俗諦ではないということを意図なさっているので、「虚偽な知覚をするものにとって世俗諦であるとお説きになっている」[362]ということによって説明された世俗諦と設定しないのはどうしてであろうか。

そうではなく、世俗において真実として存在しないならば、世俗諦であることが矛盾するというならば、自らの特質によって成立しているものは言説においてさえも存在しないとお説きになっていることと、真実として成立していることが否定されること、真実として存在しないことを論証すること一切を言説において行われること全ての設定と矛盾することになってしまう。

したがって、鏡像などは無思慮な世間の知によってもまた誤っていると知られる知の対象〔であるところの鏡像など〕は世俗諦ではないのであって、唯世俗であるというのは、二諦の数の確定、世間に依拠した真偽と中観派が設定するところの真偽〔の違い〕を理解していない話であると思われる。

自性は無明を有している者全てにおいて顕れないのであるとお説きになっていることについても、無明を断じていない聖者が真実を直接知覚において認識するとご主張なさっているので、無明によって汚された知のことをさして〔お説きになっているの〕であるが、有学の聖者の後得智と、凡夫の真実についての見解は無明とその気習によって汚されているので、〔真実は〕直接知覚においては顕れないけれども、一般的に勝義諦が顕れると主張すべきである。

> それゆえ、まずは〔十二支の〕輪廻の支分に含まれるので、有染汚の無明の力によって世俗諦が設定される[363]

とお説きになっているので、諸法は真実であると把握している無明は、人〔我執〕と法我執であると知られているものは十二支〔縁起〕の〔第一支である〕無明であると〔チャンドラキールティは〕ご主張なさっているので、所知障であるとご主張なさらないのである。

無明である真実執着の力によって世俗諦を設定するというのは、如何なる世俗〔の知〕にとって真実を設定するのかという設定の仕方を示しているのであって、世俗諦である〔ところの〕壺や布などがその真実執着によって設定されるというのではない

[362] MAK, 6.23, 7: samyagdṛśāṃ yo viṣayaḥ sa tattvaṃ mṛṣādṛśāṃ saṃvṛtisatyam uktam; MAKt, 205b6: ཡང་དག་མཐོང་ཡུལ་གང་དེ་དེ་ཉིད་དེ། ། མཐོང་བ་རྫུན་པ་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་གསུངས། །（正しい認識の対象であるもの〔それ〕は真実（tattva）であり、虚偽の認識の対象は世俗諦であると〔世尊が〕お説きになった）

[363] MABh, 107.17–19（255a1）.

のである。なぜならば、真実執着によって設定されたものは自説（帰謬派）によって言説においてもあり得ないとご主張なさっているからである。

したがって、世俗諦という一部である諦は、如何なる〔世俗の〕知にとって設定される〔その〕世俗と、壺などが世俗として存在していると設定される〔２つの〕世俗は、名称が同じであるので、意味もまた同じであると迷乱している者がたくさん顕れてきたように思われるので、正しく区別すべきである。

そうであるならば、これら壺などがまだ仏地を得ていない全てのプドガラの世俗〔の知〕にとって真実であるのか。それともある種のプドガラの世俗〔の知〕にとって真実でないことも存在するのかと問うならば、世俗諦であると設定されるところの色や声なども、

> また、有染汚の無明を断じて、諸行は鏡像などと同じようなものであるとご覧になっている声聞、独覚、菩薩たち〔の知〕にとっては、作りものの自性であって、真実ではないのである。なぜならば、〔有染汚の無明を断じた聖者たちにとってそれらの色声などを〕真実であると思い込むことはないからである[364]。

とおっしゃっている意味を説明するならば、そのプドガラにとって真実ではないというそのプドガラというのは、三種である。すなわち、声聞、独覚、菩薩である。

それについてもまた、声聞、独覚、菩薩であるもの全てをさして言っているのではないので、限定を述べるのが、全ての有為が鏡像のように自性に関して空であるけれども、それ〔有為〕として顕れると直接知覚において理解しているのが一つの限定である。

それだけは第七地の菩薩以下の者や声聞、独覚の有学の聖者たちにもあるので、それらを排除するために、その三種の者に対して無明を断じたとお説きになっているので、清浄地（第八地以上）の菩薩と、声聞と独覚の阿羅漢の二つをさしているとすべきである。すなわち、その三者にとって真実ではないのである。

あるものは、真実でないということがそれについても、というのは、内外の諸々の法である。真実ではない理由は、真実であると思い込むこと、すなわち、真実であると思い込む（རློམ་པ།）ことがないからである。なぜならば、真実執着の無明が尽きているからである。

したがって、内外の諸法は三種のプドガラの世俗の知にとって真実として成立していないと確立されているのである。

以上のように註釈しているので、彼ら〔三種の人の知〕にとって世俗諦ではないと

[364] MABh, 107.19–108.3（255a1–2）.

全く成立せずに真実ではないと論証しているときに、世俗諦ではないと論証していると捉えることは、甚だ知の働きが粗いので、阿闍梨の真意を自分の知の汚れによって汚して説明している誤った説である。

以上のように論証しているのもまた三種のプドガラにとって〔真実ではないと論証しているの〕ではなく、彼らの知にとって真実ではないということが他のプドガラである我々のような者において論証しているのである。

その三種のプドガラ以外の下の者達においては、倶生の真実執着（無明）があるので、彼らの全ての世俗〔の知〕にとって何も真実なものとして成立していないと論証することができない。

前に説明した通りのようではなく、彼ら（三種のプドガラ）の知にとって世俗諦ではないと論証しようとするならば、全く関係のない論証因になってしまうのである。すなわち、彼らの知にとって基体が世俗諦であると成立しているためには、その基体は虚偽なものであると成立する必要があるので、彼らに真実であるという思い込みがないということを理由として提示するのは笑うべきことである。

その〔三種のプドガラの知〕にとって、その基体は世俗諦として成立するために、その主題が虚偽なものであると成立していなければならないという理由は、壺などに対して世俗諦という時の言葉の一部である「諦」を設定するとき、知と対象の二つのうち、対象について諦であると設定することなく、世俗のものである真実執着にとってのみ真実であると設定しなければならないと考えたとき、その限定を結び付けないならば、真実であると成立することができず、虚偽なものであると見なければならないということであるからである。

V2　ཉོན་མོངས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པ་བཤད་པ།

གཉིས་པ་(ཉོན་མོངས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པ་བཤད་པ་)ནི།　ལུགས་འདི་ལ་ཉོན་མོངས་ཀྱི་ངོས་འཛིན་མངོན་པ་གོང་འོག་[T117b1]ནས་བཤད་པ་དང་མི་མཐུན་པ་ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པ་ཞིག་ཡོད་པ་དེ་ཤེས་པ་གལ་ཆེ་བར་[D123a2][K123a2][L112b5]སྣང་བས་དེ་[105a1]བཤད་ན།　དངོས་པོ་བདེན་འཛིན་ལ་གང་ཟག་དང་ཆོས་ལ་བདེན་འཛིན་གཉིས་ཡོད་ལ།　དེ་ཉིད་བདག་འཛིན་[T117b2]གཉིས་སུ་འང་བཞེད་པ་ནི་རྟེར་བཤད་ཟིན་ཏོ། །

བདེན་འཛིན་དེ་འཇུག་འགྲེལ་དང་།　བཞི་[D123a3][K123a3]བརྒྱ་པའི་འགྲེལ་པ་[105a2]གཉིས་[L112b6]ཀར་ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པར་བཤད་ལ།　མ་རིག་པ་དེ་ཉན་རང་དགྲ་བཅོམ་གྱིས་སྤངས་པ་དང་།　བཞི་[T117b3]བརྒྱ་པའི་འགྲེལ་པར་མི་སྐྱེ་བའི་ཆོས་ལ་བཟོད་པ་ཐོབ་པའི་བྱང་སེམས་ཀྱིས་[D123a4][K123a4]སྤངས་པར་བཤད་དོ། །

དེའི་ཕྱིར་ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་[105a3]མ་[L113a1]རིག་པ་ནི།　བདག་མེད་པའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་རིག་པའི་

མི་མཐུན་ཕྱོགས་དང་། དེ་ཡང་རིག་པ་[T117b4]དེ་མེད་པ་ཙམ་དང་། དེ་ལས་གཞན་པ་ཙམ་ལ་མི་བྱེད་ཀྱི། འགལ་[D123a5][K123a5]ཟླ་མི་མཐུན་ཕྱོགས་གང་ཟག་དང་ཆོས་རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་[L113a2]པར་སྒྲོ་འདོགས་པའོ། །

དེ་[105a4]ལྟར་བྱས་ན་ཆོས་ཀྱི་བདག་ཏུ་སྒྲོ་[365]འདོགས་པ་ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་[T117b5]པར་འཇོག་པ་དང་། ང་དང་ང་ཡི་བ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་[D123a6][K123a6]པར་འཛིན་པ་གཉིས་འཇིག་ལྟར་འཇོག་པ་རྣམས་མངོན་པ་བ་དང་མི་མཐུན་ནོ། །

མངོན་[L113a3]པ་བའི་ལུགས་[105a5]ཀྱིས་ནི་མཛོད་འགྲེལ་གྱི་གནས་དགུ་པ་ལས་བཤད་པ་[T117b6]ལྟར། གང་ཟག་རང་རྐྱ་[366]ཐུབ་པའི་རྫས་སུ་ཡོད་པར་འཛིན་[D123b1][K123b1]པ་འཇིག་ལྟ་ངར་འཛིན་དང་། བདག་གི་བ་རྣམས་གང་ཟག་རྫས་ཡོད་དེའི་[367]དབང་བསྒྱུར་བྱར་འཛིན་པ་ནི། འཇིག་ལྟ་བདག་[L113a4][105a6]གིར་འཛིན་པར་འཇོག་པ་ཡིན་ཏེ་ཆེས་མི་མཐུན་[T118a1]ནོ། །

གང་ཟག་རང་རྐྱ་[368]ཐུབ་པའི་རྫས་ཡོད་དུ་འཛིན་པ་[D123b2][K123b2]ནི་གྲུབ་མཐས་བློ་མ་བསྒྱུར་བ་ལ་ཡང་ཡོད་མོད་ཀྱང་། གང་ཟག་ཕུང་པོ་དང་མཚན་ཉིད་མི་མཐུན་པའི་གཞན་དུ་ཡོད་པར་འཛིན་པ་ནི་གྲུབ་[105b1]མཐས་[L113a5]བློ་མ་བསྒྱུར་བ་[T118a2]ལ་མེད་དོ། ། དེ་ལྟར་ན་མཐར་འཛིན་པར་ལྟ་བ་ཡང་གཉིས་སོ། །

[D123b3][K123b3]གལ་ཏེ་གང་ཟག་དང་ཆོས་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ཡོད་པར་འདོད་པའི་ཕྱོགས་ལ། དེ་ལྟར་འཛིན་པ་དེ་རྣམས་ཉོན་མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པ་དང་། བདག་འཛིན་[L113a6][T118a3][105b2]གཉིས་སུ་ཇི་ལྟར་སྒྲུབ་ཅེ་ན། གང་ཟག་དང་ཆོས་རང་བཞིན་[D123b4]གྱིས་[K123b4]གྲུབ་པ་ནི། དེ་འགོག་པའི་རིགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ཁེགས་པར་འགྱུར་ཞིང་། དེའི་ཚེ་དེ་ལྟར་འཛིན་པ་དེ་ཞེན་ཡུལ་ལ་འཁྲུལ་བའི་བདེན་འཛིན་དུ་འགྲུབ་ལ། དེ་གྲུབ་ན་[T118a4]གང་ཟག་[L113b1]དང་ཆོས་གཉིས་[105b3]བདེན་གྲུབ་ཏུ་འཛིན་པ་བདག་[D123b5][K123b5]འཛིན་གཉིས་སུ་འགྲུབ་བོ། །

དེ་རྣམས་གྲུབ་ན་བདེན་འཛིན་དེ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་རིག་པའི་འགལ་བ་མི་མཐུན་ཕྱོགས་སུ་འགྲུབ་པས། མ་རིག་པར་འགྲུབ་ཅིང་། དེ་མ་ཟད་[T118a5]བར་དུ་འཇིག་ལྟ་ཡང་མི་འཛད་པར་[L113b2]སྒྲུབ་ནུས་པས། ཉོན་[D123b6][K123b6][105b4]མོངས་ཅན་གྱི་མ་རིག་པར་འགྲུབ་པས་ཉོན་མོངས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པ་འཇོག་ཤེས་པ་ཤིན་ཏུ་གལ་ཆེའོ། །

འདོད་ཆགས་ལ་སོགས་པ་ཉོན་མོངས་གཞན་[T118a6]རྣམས་ཀྱང་བདེན་འཛིན་གྱི་གཏི་མུག་ལས་འཇུག་ཚུལ་[L113b3]ནི།[D124a1][K124a1]བཞི་བརྒྱ་བ་ལས།

ལུས་[105b5]ལ་ལུས་དབང་ཇི་བཞིན་དུ། །
གཏི་མུག་ཀུན་ལ་གནས་འགྱུར་ཏེ།

ཞེས་པའི་འགྲེལ་པ་ལས།

---

[365] Z: སྒྲ་ D, K, L, T: སྒྲོ་
[366] Z: རྒྱ་ D, K, T, L: རྐྱ་
[367] Z: དའི་ D, K, T, L: དེའི་
[368] Z: རྒྱ་ D, K, T, L: རྐྱ་

> གཏི་མུག་ནི་དེ་རྣམས་ཇི་ལྟར་བདེན་པར་རྟོགས་པ་[T118b1]ལས་རྨོངས་[D124a2][K124a2]པ་ཉིད་ཀྱི་ཕྱིར། དངོས་པོ་བདེན་པའི་རང་གི་ངོ་བོར་ལྷག་[L113b4]པར་སྒྲོ་འདོགས་པར་རབ་ཏུ་འཇུག་གོ ། འདོད་ཆགས་[105b6]ལ་སོགས་པ་དག་ཀྱང་གཏི་མུག་གིས་ཀུན་དུ་བརྟགས་པའི་དངོས་པོའི་རང་བཞིན་ཡོ་ན་ལ། སྡུག་[D124a3][K124a3]པ་དང་[T118b2]མི་སྡུག་པ་ལ་སོགས་པའི་ཁྱད་པར་སྒྲོ་འདོགས་པར་འཇུག་པ་ཉིད་ཀྱི་ཕྱིར། གཏི་མུག་[L113b5]ལས་ཐ་མི་དད་པར་འཇུག་པར་འགྱུར་ཞིང་། གཏི་མུག་ལ་བརྟེན་[106a1]པར་ཡང་འགྱུར་ཏེ། གཏི་མུག་གཙོ་བོ་ཉིད་ཀྱི་ཕྱིར་[D124a4][K124a4]རོ། །

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་[T118b3]བཤད་ན། འཇུག་གོ་ཞེས་པ་ཡན་གྱིས་གཏི་མུག་བདེན་འཛིན་དུ་སྟོན་ཏོ། །

ཆགས་སོགས་རྣམས་གཏི་[L113b6]མུག་ལས་ཐ་མི་དད་པར་འཇུག་པ་ནི། གཏི་མུག་དང་མཚུངས་[106a2]ལྡན་དུ་འཇུག་[D124a5][K124a5]གི་དེ་དང་བྲལ་བར་མི་འཇུག་པའོ། །

དེའི་རྒྱུ་མཚན་[T118b4]ནི་ཆགས་སོགས་ནས་འཇུག་པ་ཉིད་ཀྱི་ཕྱིར་ཞེས་པ་ཡིན་ནོ། །

དེ་ལ་ཡུལ་ལ་ཡིད་དུ་འོང་མི་འོང་གི་ཁྱད་པར་སྒྲོ་འདོགས་[L114a1]པ་ནི་ཆགས་སྡང་གཉིས་སྐྱེ་བའི་རྒྱུ་ཚུལ་[D124a6][K124a6]མིན་ཡིད་བྱེད་ཡིན་པས། ཆགས་[106a3]སྡང་གཉིས་ཀྱི་འཛིན་སྟངས་སྟོན་པ་མིན་[T118b5]ནོ། །

དེས་ན་གཏི་མུག་གིས་ཀུན་བརྟགས་པ་ཡོ་ན་ལ་ཞེས་སོགས་ནི། རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པ་ཡོ་[L114a2]ནའི་ཡིད་དུ་འོང་མི་འོང་སྒྲོ་བཏགས་[D124b1][K124b1]པ་ལ་བརྟེན་ནས་ཆགས་སྡང་གཉིས་འཇུག་པའི་ཕྱིར་ཞེས་པའོ། །

གཏི་མུག་གིས་[106a4]བཏགས་[T118b6]པའི་བདེན་གྲུབ་ཡོ་ན་ཆགས་སོགས་ཀྱི་དམིགས་རྣམ་གཉིས་ཀྱི་ནང་ནས་དམིགས་པར་སྟོན་པ་མིན་ཏེ། བདག་[L114a3]འཛིན་ལྷན་སྐྱེས་[D124b2][K124b2]གཉིས་ཀའི་དམིགས་རྣམ་གཉིས་ཀྱི་དམིགས་པ་གཞི་གྲུབ་པ་ཡིན་ལ། ཆགས་སོགས་ཀྱང་གཏི་[T119a1]མུག་དང་མཚུངས་[106a5]ལྡན་ཡིན་པས་དམིགས་པ་མཚུངས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ཚུལ་མིན་ཡིད་བྱེད་དེ་གཉིས་ཀྱིས་དྲངས་པའི་[L114a4]ཡུལ་[D124b3][K124b3]ལ་འདོད་པའི་རྣམ་པ་ཅན་དང་། མི་འདོད་པ་རྒྱབ་ཀྱིས་ཕྱོགས་པའི་རྣམ་པ་ཅན་ནི།[T119a2]ཆགས་པ་དང་སྡང་བར་འགྱུར་བས། གང་ཟག་རང་རྐྱ་[369]ཐུབ་པའི་[106a6]རྫས་ཡོད་དུ་འཛིན་པས་དྲངས་པའི་འདོད་མི་འདོད་ཀྱི་རྣམ་པ་ཅན་ཙམ་ཞིག་[D124b4][K124b4]འདོད་ཆགས་[L114a5]དང་ཞེ་སྡང་དུ་འཇོག་པ་མིན་པའི་ཕྱིར། ཆགས་སྡང་གཉིས་ཀྱང་འཇོག་[T119a3]ཚུལ་མི་འདྲའོ། །

གཏི་མུག་ལ་བརྟེན་པར་ཡང་འགྱུར་ཏེ་ཞེས་པ་ནི། རང་གི་མཚན་ཉིད་[106b1]ཀྱིས་གྲུབ་པར་འཛིན་པའི་གཏི་མུག་སྔོན་དུ་སོང་[D124b5][K124b5]བས་ཆགས་སོགས་འདྲེན་པའི་[L114a6]དོན་ནོ། །

ལུས་ལ་ལུས་དབང་ཞེས་པའི་དཔེ་ནི། དབང་པོ་[T119a4]གཞན་བཞི་ལ་ལུས་དབང་ཟུར་དུ་བཞག་པའི་རྟེན་མེད་པ་བཞིན་དུ། ཉོན་མོངས་གཞན་ཐམས་ཅད་ཀྱང་གཏི་མུག་ལ་བརྟེན་[106b2]ནས་[D124b6][K124b6]འཇུག་ཅིང་། དེ་དང་མི་འབྲལ་བར་འཇུག་པའི་[L114b1]དོན་ནོ། །

དེས་ན་གཏི་མུག་བཅོམ་པ་ཉིད་ཀྱིས་ཉོན་མོངས་[T119a5]ཐམས་ཅད་འཇོམས་པར་འགྱུར་བས། འདིའི་གཉེན་པོ་རྟེན་འབྱུང་རང་བཞིན་གྱིས་གྲུབ་པས་སྟོང་བའི་གཏམ་ཉིད་[D125a1][K125a1]ལ་གུས་པར་བྱ་བར་གསུངས་སོ། །

---

[369] Z: སྐྱ་ D, K, T, L: རྐྱ་

དངོས་[106b3]པོ་བདེན་འཛིན་འདི་ནི་འཁོར་[L114b2]བའི་རྩ་བའི་མ་རིག་པར་ཡང་སྟོང་ཉིད་[T119a6]བདུན་ཅུ་པ་ལས་གསུངས་ཤིང་། རིགས་པ་དྲུག་ཅུ་པ་ལས་ཀྱང་།

གང་ཡང་རུང་[D125a2][K125a2]བའི་གནས་རྙེད་ན། །
ཉོན་མོངས་སྦྲུལ་གདུག་གཡོ་ཅན་གྱིས། །
ཟིན་པར་འགྱུར་ཏེ་གང་གི་སེམས། །
གནས་[106b4]མེད་དེ་དག་ཟིན་[L114b3]མི་འགྱུར།

ཞེས་བདེན་[T119b1]འཛིན་གྱི་དམིགས་གཏད་གང་ཡང་རུང་བའི་གནས་ཤིག་རྙེད་ན། ཉོན་[D125a3][K125a3]མོངས་པའི་སྦྲུལ་གྱིས་འཛིན་པར་གསུངས་ཤིང་། ཡང་དེ་ཉིད་ཀྱི་མཇུག་ཐོགས་སུ།

གནས་དང་བཅས་པའི་སེམས་ལྡན་ལ། །
ཉོན་མོངས་[106b5]དུག་ཆེན་[L114b4]ཅིས་མི་འབྱུང་། །[T119b2]

ཞེས་གསུངས་པས་འདི་ནི་འཕགས་པའི་[D125a4][K125a4]བཞེད་པ་དམ་པའོ། །
ཁང་པ་ཕྱི་མ་གཉིས་ཀྱི་མཚམས་སྦྱོར་དུ།

གང་དག་གཟུགས་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཀྱི་རང་བཞིན་དམིགས་ཀྱང་། ཉོན་མོངས་པ་རྣམས་སྤོང་བར་འདོད་པ་དེ་དག་ལ་[L114b5][106b6]ནི།[[T119b3]ཉོན་མོངས་པ་སྤོང་བ་[D125a5][K125a5]མི་སྲིད་པ་ཉིད་དོ་ཞེས་བསྟན་[370]པའི་ཕྱིར་གསུངས་པ་

ཞེས་དང་། ཕྱི་འགྲེལ་ལས་ཀྱང་།

དངོས་པོར་དམིགས་པ་ཡིན་ན་ནི་འདོད་ཆགས་ལ་སོགས་པའི་ཉོན་མོངས་པ་རབ་འབྱམས་ངེས་པར་བཟློག་ཏུ་མེད་པ་རྣམས་[D125a6][K125a6]འབྱུང་[T119b4][107a1]ངོ་། །
ཇི་[L114b6]ལྟར་ཞེ་ན། རེ་ཞིག་གལ་ཏེ་དངོས་པོ་དེ་ཡིད་དང་མཐུན་པ་ཡིན་ན་ནི། དེའི་ཚེ་དེ་ལ་རྗེས་སུ་ཆགས་པ་བཟློག་པར་དཀའོ། །
ཅི་སྟེ་མི་མཐུན་ན་ནི་དེའི་ཚེ་དེ་ལ་ཁོང་ཁྲོ་བ་དང་ཚིག་པ་ཟ་བ་བཟློག་པར་དཀའོ། །[D125b1][K125b1]

ཞེས་[107a2]གསུངས་ཤིང་།[T119b5]ཡུལ་དེ་ཡིད་དུ་འོང་མི་འོང་[L115a1]གང་ཡང་མིན་པ་ཞིག་ནའང་མ་རིག་པ་སྐྱེ་བར་འགྲེལ་བ་ལས་གསུངས་ཏེ།

ཡུལ་དེ་རང་གི་མཚན་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པར་འཛིན་པ་ཞིག་[371]རྒྱུད་ལ་འཇུག་བཞིན་པ་ན། ཡང་ན་འདོད་[D125b2][K125b2]ཆགས། ཡང་ན་ཞེ་སྡང་སྐྱེ་དེ་[T119b6]གཉིས་[107a3]མིན་[L115a2]ནའང་གཏི་མུག་གི་རིགས་འདྲ་འཇུག་པར་

370 T, Z: བསྟེན་ D, K, L: བསྟན་
371 D, K, L: ཞིག་ T, Z: ཅིག་

བཞེད་ལ། སྤྱོད་འཇུག་ལས་ཀྱང་།

དམིགས་པ་དང་ནི་བཅས་པའི་སེམས། །
འགའ་ཞིག་ལ་ནི་གནས་པར་འགྱུར། །
སྟོང་བ་ཉིད་[D125b3][K125b3]དང་བྲལ་བའི་སེམས། །
འགགས་པ་སླར་[T120a1]ཡང་སྐྱེ་འགྱུར་ཏེ། །
འདུ་[L115a3]ཤེས་མེད་པའི་[107a4]སྙོམས་འཇུག་བཞིན། །

ཞེས་གསུངས་ཏེ་ཕྱོགས་འདི་ལ་སློབ་དཔོན་འདི་གཉིས་དང་སངས་རྒྱས་བསྐྱངས་གསུམ་འཕགས་པའི་དགོངས་པ་[D125b4][K125b4]འགྲེལ་བ་ལ་ཁྱད་པར་མེད་[T120a2]དོ། །

འདིའི་གནད་ཀྱིས་མི་རྟག་སོགས་བཅུ་དྲུག་གི་ལམ་ཙམ་[L115a4]གྱིས་མྱ་ངན་ལས་འདའ་[107a5]བར་བཤད་པ་ནི་དགོངས་པ་ཅན་ཡིན་ལ། ལམ་དེའི་དབང་དུ་བྱས་པའི་ཉོན་མོངས་ཀྱི་ངོས་འཛིན་རྣམས་[D125b5][K125b5]ཀྱང་ལྷག་མ་དང་བཅས་པ་[T120a3]ཡིན་ནོ། །

དེ་དག་ལ་བརྟེན་ནས་ང་རྒྱལ་སོགས་ཀྱང་ཤེས་པར་ནུས་ལ། ཐུན་མོང་མ་ཡིན་པའི་མ་རིག་པ་དང་འཇིག་[L115a5]ལྟ་[107a6]དང་མཐར་ལྟ་ལ་ཡང་ཀུན་བཏགས་[372]དང་ལྷན་སྐྱེས་གཉིས་ཀ་ཤེས་པར་བྱ་སྟེ་[D125b6][K125b6]ཚིག་མངས་སུ་དོགས་ནས་མ་བྲིས་[T120a4]སོ། །

དེ་བཞིན་དུ་ཆོས་རྣམས་བདེན་གྲུབ་ཏུ་འཛིན་པའི་རྣམ་རྟོག་ལ་སྒོམ་སྤང་ཆེ་འབྲིང་དགུར་བྱས་ནས། གཉེན་པོ་སྒོམ་ལམ་[107b1]དགུ་དང་སྦྱོར་[L115a6]བ་ཡང་། གཟུང་འཛིན་རྫས་ཐ་དད་དུ་འཛིན་[D126a1][K126a1]པའི་རྣམ་རྟོག་ལ་སྒོམ་སྤང་ཆེ་འབྲིང་[T120a5]དགུར་བྱས་ནས། སྒོམ་ལམ་དགུ་དང་སྤང་གཉེན་དུ་སྦྱོར་བར་བཤད་པ་བཞིན་དུ། རེ་ཞིག་ལ་ཆོས་ཀྱི་བདག་མེད་ཕྲ་རགས་གཉིས་ཀ་རྫོགས་པར་[D126a2][K126a2]རྟོགས་མི་ནུས་པའི་[107b2]གདུལ་བྱ་[L115b1]འགའ་ཞིག་གི་ངོར་གསུངས་པའི་དྲང་བའི་དོན་དུ་[T120a6]ཤེས་པར་བྱའོ། །

V2 煩悩の独自の設定の仕方について説明する

第二〔煩悩の独自の設定の仕方について説明する〕、この〔帰謬派の〕説では、煩悩の確認は上下のアビダルマに説かれているものと異なったある種独自のものがあることを知ることは重要であると思われるので、それを説明するならば、事物を真実なものであると執着する真実執着にはプドガラに対する〔真実執着〕と法に対する真実執着の二つがあり、その同じものが二我執であるともご主張なさっていることはすでに説明した。

その真実執着は、『入中論釈』と『四百論釈』の両方に有染汚の無明であると説明されており、その無明は声聞〔の阿羅漢〕と独覚の阿羅漢によって断じられると〔説明

372 T, Z: བརྟགས་ D, K, L: བཏགས་

されており〕、『四百論註』では「不生法忍の境地を得た菩薩によって断じられる」[373]と説明されている。

したがって、有染汚の無明というのは、無我という真実の明知の逆のものである。それについてもまた、その明知が単にないということや、それと単に別のものをさしているのではなく、それと逆のものであるプドガラと法が自性によって成立していると増益する知のことである。

そうであるならば、法我であると増益するものが、有染汚の無明であると設定することと、我と我所が自らの特質によって成立していると執着する二つ〔の知〕が有身見であると設定することは、アビダルマの考え方と異なっているのである。

アビダルマの立場に立つ者の説では、『倶舎論釈』の第九章に説明しているように、プドガラが独立自存の実有であると執着するものが有身見の我執である〔と設定〕し、我所はプドガラという実有の支配にあると執着するものが、有身見の我所執であると設定するのであり、全く異なっているのである。

プドガラは独立自存の実有であると執着するものは学説によって知が変えられていない者にも存在しているけれども、プドガラが蘊と異なった特質の別のものとして存在していると執着することは、学説によって知が変えられていない者には存在しない。それゆえ、辺執（実在論）の見方にも〔一般のプドガラと学説によって知が変えられたプドガラの〕二つの捉え方がある。

もしプドガラと法が自相によって成立していると主張する立場において、そのように捉えるものそれらは有染汚の無明と、我執の二つであるとどのように論証するのであるかと問うならば、プドガラと法は自性によって成立しているのは、それを否定する諸々の正理によって否定されることになり、そのときに、その〔プドガラと法が自相によって成立していると〕捉える知は、思念対象について迷乱している真実執着であると成立する。また、それが成立しているならば、プドガラと法の二つが真実として成立していると執着するものは二我執であると成立するのである。

それら〔二我執〕が成立しているならば、その真実執着は真実の意味を知る明知の対立物である逆のものであると成立するので、無明であると成立する。また、それが尽きない間は有身見も尽きないと論証することができるので、〔二我執が〕有染汚の無明であると成立することによって独自の煩悩の設定ができるということが非常に重要である。

貪欲などの他の煩悩もまた真実執着という無痴から生じるということについては、『四百論』に、

---

[373] CŚT, 221b6 参照。

身体には身の感覚器官〔がある〕通りに、
無痴はあらゆるものにおいて拠り所となっている[374]。

という註釈に

無痴はそれらのものがありのままに真実であるように理解しているからまさに愚痴であるがゆえに、事物は真実を本質としているものであると増益して生じるのである。
貪欲などもまた、無痴によって遍計執された事物の自性のみに対して、愛着するものや愛着さないものなどという区別を増益するものとして生じるものに他ならないので、無痴から離れることなく生じ、さらに、無痴を拠り所としているものともなる。なぜならば、無痴は根本的なものであるからである[375]。

とお説きになっている通りに解説するならば、「生じるのである」というところまでで無痴が真実執着であると示しているのである。

「貪欲などが無痴から離れることなく生じる」というのは、無痴と共に生じるのであって、それと離れて生じることはないのである。

その理由は、「貪欲など」から「まさに生じるもので他ならない」という箇所まででである。

それにおいて、対象に対して、好しいか好ましくないかを区別して増益するというのは、貪瞋の二つが生じる原因である非如理作意であるので、貪瞋という二つの〔対象の〕捉え方を示しているのではないのである。

したがって、「無知によって遍計執されたもののみに対して」などと言っているは、自性によって成立しているだけの、好ましいものや好ましくないものというものが増益されたものを拠り所として貪と瞋という二つが生じるからであるという意味である。

無痴によって仮設された真実成立しているのみのものは、貪などの認識対象と形象の二つのうちの認識対象を示しているのではない。なぜならば、倶生の二我執の認識対象と形象の二つのうち、認識対象は、基体成立しているのであり、貪などもまた無知と共に働くので、認識対象は同じであるからである。

非如理作意は、その二つによって引き出される対象に対して、望む形象を持っているものと、望まないという逆の形象を持ったもの〔の二つ〕が、貪欲と瞋恚〔の知の働き〕になるので、プドガラが独立自存の実有であると捉える〔知〕によって引き出された、望む望まないという形象を持ったのみのものが、〔非如理作為である〕貪欲と

[374] CŚ, 6.10, 66（7b2）.
[375] CŚT, 112b7.

瞋恚であると設定されるものではないので、貪欲と瞋恚の両方とも設定する仕方は同じでないのである。

〔『四百論』の註釈に、〕「無痴を拠り所とすることにもなる、すなわち」というのは、自相によって成立しているものであると捉える無痴を前提とすることによって、貪欲などが引き出されるという意味である。

「身体には身の感覚器官」という比喩は、他の四根に対して、身根を別において拠り所がないのと同様に、他の一切の煩悩もまた無痴を拠り所として生じ、それと離れることなく生じるという意味である。

したがって、無痴を滅ぼしたことによって一切の煩悩を滅ぼすことになるので、それ〔無痴〕の対治である縁起は自性によって成立しているものに関して空であるという他ならぬ〔仏の〕説に対して尊敬すべきであるとお説きになっているのである。

事物を真実であると執着するというこの〔真実執着〕は、輪廻の根本である無明であると『空七十論』にお説きになっている。『六十頌如理論』にもまた、

> なんらかの拠り所を得るならば、
> ずる賢い毒蛇〔のような〕煩悩によって、
> 捉えられることになってしまうのであるけれども、
> ある人の心になんらかの拠り所がない場合には、捉えられることはない[376]。

と真実執着の認識対象のいずれであっても、拠り所を得るならば、煩悩の蛇によって捉えることになるとお説きになっており、また同書のその直後に、

> 拠り所を伴っている凡夫において、煩悩という大きな毒がなぜ生じないのであろうか[377]。

とお説きになっているので、これは、聖者の最上のご主張である。

後半の二行の偈の導入の言葉において、

> 色などの自性を認識しても、諸々の煩悩を断じたいというそれらの者たちにおいては、煩悩を断じることはありえないと示すためにお説きになった[378]。

というのと、後の註釈にもまた、

> 事物を知覚しているものであるならば、貪欲などの決して退けることができな

---

376 YṢ, 16(22a6).
377 YṢ, 16(22a7).
378 YṢV, 90–91（28a5–6）.

> い巨大な煩悩が生じるのである。どのようにかというのならば、まずは、もしその事物は意と共通であるならば、そのときに、それに従う貪欲を排除することが困難である。
> もし共通でないならば、そのときに、それに対する瞋恚と怒りが生じることを退けることが困難である[379]。

とお説きになっており、その対象が好ましい好ましくないのいずれでもないものにおいても、無明が生じると註釈に説かれている。すなわち、その対象が自相によって成立していると捉えるというようなものが心に生じているときに、貪欲か怒りかが生じる。その二つでなくても無痴の同類のものが生じるのであるとご主張なさっており、『入菩提行論』にも、

> 認識対象を有している心は、
> 何らかのものに対して拠り所としている場合、
> 空性を離れた心が、一度消滅しても再生することになる。
> 無想定〔が生じてくるのと〕と同様である[380]。

と説かれている。すなわち、この主張についてこの二人の阿闍梨〔チャンドラキールティとシャーンティデーヴァ〕とブッダパーリタの三人は、聖者の真意を註釈することについて違いはないのである。

この本質的な内容によって、四諦十六行相の道だけで涅槃すると説明しているのは別の意図があり、その〔四諦十六行相の〕道に関連した煩悩の確認というのもまた別の意味があるのである。

それらによって傲慢などもまた理解できる。また、〔帰謬派〕独自の無明や有身見、偏見についてもまた遍計と倶生の両方を知るべきである。言葉が多くなるので、ここに書かなかった。

それと同様に、諸法が真実として成立していると把握する妄分別には修所断である大中〔小〕の九つがあるとして、対治である九つの修道と関連させるというのもまた、所取と能取が別の実体であると捉える妄分別知を大中〔小〕の九つの修所断として、九つの修道と所断と対治として関連させて説明しているのと同様に、最初に法無我が微細なものと粗大なものの両方を完全に理解することができないある種の所化に対してお説きになった未了義であると知るべきである。

---

379 原文そのままではない。YṢ 91(28a7) 参照。

380 BCA, 9.48–49, 209.6–12 : sālambanena cittena sthātavyaṃ yatra tatra vā|| vinā śūnyatayā cittaṃ baddhamutpadyate punaḥ| yathāsaṃjñisamāpattau; BCAt, 32b4.

U2 ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དེ་གང་ཟག་གསུམ་ལ་སྣང་བ་དང་མི་སྣང་བའི་ཚུལ།

གཉིས་པ་(ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དེ་གང་ཟག་གསུམ་ལ་སྣང་བ་དང་མི་སྣང་བའི་ཚུལ་)ནི། དངོས་པོ་འདི་དག་ཀྱང་བྱིས་པ་རྣམས་ལ་ནི་རང་བཞིན་མེད་བཞིན་དུ་དེར་སྣང་བས་སླུ་བར་བྱེད་ལ། དེ་དག་[D126a3][K126a3]ལས་གཞན་སྔར་བཤད་པའི་གང་ཟག་གསུམ་ལ་ནི། བཅོས་[L115b2][107b3]མར་གྱུར་བའི་དངོས་པོའི་རྟེན་[T120b1]ཅིང་འབྲེལ་བར་འབྱུང་བ་ཉིད་ཀྱིས་ནི་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་དུ་འགྱུར་གྱི་བདེན་པར་མི་འགྱུར་རོ། །

དེ་ཡང་ཤེས་སྒྲིབ་ཀྱི་མཚན་[D126a4][K126a4]ཉིད་ཅན་གྱི་ཉོན་མོངས་ཅན་མ་ཡིན་པའི་མ་རིག་པ་ཙམ་ཀུན་ཏུ་སྤྱོད་པའི་ཕྱིར། མ་རིག་པ་དང་དེའི་[L115b3]བག་ཆགས་[107b4]ཀྱིས་[T120b2]བསྐྱེད་པའི་སྣང་བ་དང་བཅས་པའི་སྤྱོད་ཡུལ་ཅན་གྱི་རྗེས་ཐོབ་ལ་གནས་པའི་འཕགས་པ་རྣམས་[D126a5][K126a5]ལ་སྣང་གི །འཕགས་པ་སྣང་བ་མེད་པའི་སྤྱོད་ཡུལ་མངའ་བ་མཉམ་གཞག་ལ་གནས་པ་རྣམས་ལ་ནི་སྣང་བ་མིན་ནོ། །

འོ་ན་ལུགས་འདིས་[T120b3]ཤེས་སྒྲིབ་[L115b4][107b5]གང་ལ་བྱེད་ཅེ་ན། འཇུག་འགྲེལ་ལས།

> དེ་ལ་མ་རིག་པའི་[D126a6][K126a6]བག་ཆགས་ནི་ཤེས་བྱ་ཡོངས་སུ་གཅོད་པའི་གེགས་སུ་གྱུར་བ་ཡིན་ལ། འདོད་ཆགས་ལ་སོགས་པའི་བག་ཆགས་ཡོད་པ་ནི་ལུས་དང་ངག་དག་གི་འཇུག་པ་དེ་ལྟ་བུའི་རྒྱུ་[T120b4]ཡང་ཡིན་ཏེ། མ་རིག་[107b6]པ་དང་[L115b5]འདོད་ཆགས་ལ་[D126b1][K126b1]སོགས་པའི་བག་ཆགས་དེ་ཡང་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་དང་། སངས་རྒྱས་ཁོ་ན་ལ་ལྡོག་པར་འགྱུར་གྱི། གཞན་དག་ལ་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་ཏེ། ལུས་དང་ངག་གི་[T120b5]འཇུག་པ་ནི་དགྲ་བཅོམ་པ་ལ་[D126b2][K126b2]ཡོད་[108a1]པ་སྤྲེའུ་ལྟར་མཆོང་[L115b6]བ་དང་། གཞན་ལ་ཀླངས་མོ་ཞེས་ཟེར་བའི་ལུས་ངག་གི་གནས་ངན་ལེན་སྣོན་པས་བཀག་ཀྱང་མ་ལོག་པ་ལྟ་བུ་ཡིན་ནོ། །

ཡང་ཞེས་པས་ཆགས་སོགས་ཀྱི་བག་ཆགས་ཤེས་[T120b6]བྱ་གཅོད་པའི་[D126b3][K126b3]གེགས་སུ་ཡང་[108a2]བསྟན་པས། ཉོན་མོངས་པའི་བག་ཆགས་[L116a1]རྣམས་ཤེས་སྒྲིབ་ཡིན་ཏེ། དེའི་འབྲས་བུ་གཉིས་སྣང་འཁྲུལ་པའི་ཆ་ཐམས་ཅད་ཀྱང་དེར་བསྡུའོ། །

ཉོན་མོངས་ཀྱི་ས་བོན་ལ་བག་ཆགས་སུ་བཞག་པ་[D126b4][K126b4][T120a1]གཅིག་[381]དང་།ཉོན་མོངས་ཀྱི་ས་བོན་མིན་པའི་བག་ཆགས་གཉིས་[L116a2][108a3]ལས་ཤེས་སྒྲིབ་ཏུ་འཇོག་པ་ནི་ཕྱི་མ་སྟེ། ཉོན་མོངས་ཀྱི་ས་བོན་ཐམས་ཅད་ཟད་པས་བདེན་འཛིན་མི་སྐྱེ་ཡང་། བག་ཆགས་ཀྱིས་བསྐྱེད་པས་སྣང་ཡུལ་[D126b5][K126b5][T121a2]ལ་འཁྲུལ་བའི་བློ་སྐྱེད་པའོ། །

སངས་མ་རྒྱས་པའི་འཕགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ནི་ཤེས་[L116a3]སྒྲིབ་ཀྱི་མ་རིག་[108a4]པ་མ་སྤངས་པས། རྗེས་ཐོབ་ཀྱི་སྣང་བཅས་ཀྱི་རྟོག་པ་དང་། མཉམ་གཞག་ཏུ་སྣང་མེད་དུ་འགྱུར་བའི་རེས་འཇོག་[D126b6][K126b6]ཡོད་ལ། སངས་[T121a3]རྒྱས་རྣམས་ཀྱིས་ནི་ཆོས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་པའི་རྣམ་པ་མངོན་པར་ཏེ་མངོན་[L116a4]དུ་གྱུར་པར་རྫོགས་པར་[108a5]ཏེ་མ་ལུས་པར།བྱང་ཆུབ་པ་སྟེ་

[381] T, Z: ཅིག་ D, k, L: གཅིག་

རྟོགས་པའི་ཕྱིར་སེམས་དང་སེམས་བྱུང་[D127a1][K127a1]གི་རྣམ་རྟོག་གི་རྒྱུ་བ་ཐམས་ཅད་[T121a4]གདན་ལོག་པས། མཉམ་གཞག་དང་རྗེས་ཐོབ་ཀྱི་སྣང་བའི་རྟོག་པ་ཡོད་མེད་རེས་འཇོག་པ་མེད་དོ། །

གདན་ཞེས་[L116a5]པའི་ཚིག་གིས་འཕགས་པ་[108a6]གཞན་ལ་[D127a2][K127a2]མཉམ་གཞག་ཏུ་ལོག་པ་ནི་རེས་འགའ་བར་སྟོན་ལ། དེའི་ཕྱིར་མཉམ་རྗེས་[T121a5]རེས་འཇོག་པ་ཡོད་དོ། །

དེས་ན་ཤེས་སྒྲིབ་ཀྱི་མ་རིག་པ་སྤྱོད་པའི་ཕྱིར། ཞེས་པ་ནི་སྣང་བ་ཡོད་པའི་རྒྱུ་མཚན་མིན་གྱི། མཉམ་རྗེས་སུ[D127a3][K127a3][L116a6]སྣང་བ་ཡོད་མེད་རེས་[108b1]ཇོག་ཏུ་འབྱུང་བའི་སྐབས་ཅེད་དོ། །

སེམས་དང་སེམས་བྱུང་གི་རྒྱུ་བ་ནི་རྣམ་[T121a6]རྟོག་ལ་བཞེད་པ་ཡིན་ཏེ། ཚིག་གསལ་ལས།

> རྣམ་པར་རྟོག་པ་ནི་སེམས་ཀྱི་རྒྱུ་བ་ཡིན་ན་དེ་དང་བྲལ་བའི་ཕྱིར། དེ་[D127a4][K127a4]ཁོ་ན་ཉིད་དེ་ནི་རྣམ་པར་རྟོག་པ་[L116b1]མེད་པ་ཡིན་ནོ། །
> ཇི་སྐད་དུ་མདོ་ལས།[[108b2]དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་གང་ཞེ་ན། གང་ལ་[T121b1]སེམས་ཀྱི་རྒྱུ་བ་ཡང་མེད་ན། ཡི་གེ་རྣམས་ལྟ་སྨོས་ཀྱང་ཅི་དགོས་ཞེས་གསུངས་སོ། །

ཞེས་[D127a5][K127a5]བཤད་དོ། །

U2 唯世俗が三〔種の〕プドガラにとって顕れるか顕れないかのあり方について

第二〔唯世俗が三〔種の〕プドガラにとって顕れるか顕れないかのあり方について〕は、これらの事物もまた凡夫にとっては無自性でありながら、それ〔自性があるもの〕として顕れるので、〔凡夫たちを〕欺くのであるけれども、それら以外、前に説明した三種のプドガラにとっては、作りものである事物は縁起しているがゆえにそれは唯世俗となるのであって、真実なものとならないのである。

それについても、所知障を特質としているところの不染汚の無明が普遍的に働いているので、無明とその習気によって汚された顕れを有するところの対象を見ている後得智に住している聖者たちには〔唯世俗が〕顕れるのであるけれども、顕れがない対象を有している三昧に入っている聖者たちには〔唯世俗が〕顕れないのである。

それならば、この〔帰謬派の〕説では、所知障は何をさしているのかというならば、『入中論釈』に、

> そのうち、無明の習気は所知を確定することに対して妨げとなっているものであり、貪欲などの習気があるということは体や言葉などが生じてくる原因でもある。すなわち、無明と貪欲などの習気というのもまた一切智者と仏のみにおいて退けられるものとなるのであって、他の者達（声聞、独覚、菩薩）におい

ては退けられないのである[382]。

と説かれている通りである。すなわち、体と言葉が生じてくるものは阿羅漢に存在している。〔それは、〕猿のように跳びはねたり、他のプドガラに愚かの者と言ったりするような体と言葉の罪を釈尊が否定されても、それは無くならないのと同様である。

「また」ということによって貪欲などの習気は所知を確定する妨げであるとしても示されているので、煩悩の諸々の習気は所知障である。すなわち、その結果である二つの顕れという迷乱している部分全てもまたそれ〔所知障〕に含まれるのである。

煩悩の種子を習気として設定したものと煩悩の種子でない習気の二つがあるうち、所知障であると設定するものは後者である。なぜならば、煩悩を生じさせる全ての種子が尽きたことによって真実執着が生じることはないけれども、習気によって汚されているので、顕れている対象について迷乱している知を生じさせるのである。

悟っていない諸々の聖者は、所知障の無明をまだ断じていないので、顕れを有する後得智の分別と、三昧に入ったときに顕れがなくなる知は交互に起こって来ることがあるけれども、諸々の仏は、全ての法の勝義のあり方と世俗のあり方を明らかに、すなわち、目の当たりになったものとして、すなわち、完全なものとして、すなわち、残すことなく悟り、すなわち、認識しているので、心と心所の妄分別の全ての動きが完全に退けられているので、三昧に入っている状況と顕れのある後得智の分別のあるなしが交互に起こることはないのである。

「完全に」という言葉によって他の聖者において三昧に入ったときに退けられるということが一時的なものであると示している。したがって、三昧智と後得智が交互に起こるのである。

したがって、「所知障の無明が働いているから」というのは、顕れがあるということの理由ではなく、三昧に入った状況と後得智において顕れがあるかないかが交互に生じるということに対する論証因である。

心と心所の動きというのは妄分別をさしているとご主張なさっているのである。すなわち、『プラサンナパダー』に、

> 妄分別は心の働きであるが、それと離れているので、真実義というのは妄分別がない〔という〕ことである。
> 以下のように経典に〔説かれている通りである。〕勝義諦とは何かと問うのならば、そこ〔勝義諦〕において心の動きさえないならば、諸々の文字については更に言うまでもないのである[383]。

---

[382] MABh, 393.17–394.3（342b6）.

[383] PSPD, 374.1–2: vikalpaś cittapracāraḥ tadrahitatvāt tattattvaṃ nirvikalpaṃ // yathoktaṃ

と説明されている。

U3 སོ་སྐྱེ་དང་འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ཏེ་དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འགྱུར་ཚུལ།

གསུམ་པ་(སོ་སྐྱེ་དང་འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ཏེ་དོན་དམ་པ་དང་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འགྱུར་ཚུལ་)ནི།

> དེ་ལ་སོ་སོའི་སྐྱེ་བོ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་པ་[L116b2]གང་ཡིན་པ་དེ་ཉིད།[384]འཕགས་པ་སྣང་བ་དང་བཅས་[108b3]པའི་སྤྱོད་ཡུལ་ཅན་[T121b2]རྣམས་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་ཡིན་ལ། དེའི་རང་བཞིན་སྟོང་པ་ཉིད་གང་ཡིན་པ་[D127a6][K127a6]དེ་ནི་དེ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་པའོ། །

ཞེས་གསུངས་པའི་རྩ་བའི་དོན་ནི། སོ་སྐྱེས་དོན་དམ་པར་[L116b3]གྲུབ་པར་བཟུང་བའི་བུམ་སོགས་དེ་ཉིད། སྔར་བཤད་པའི་འཕགས་པ་[T121b3][108b4]གསུམ་མཉམ་གཞག་ལས་ལངས་པའི་རྗེས་ཐོབ་[D127b1][K127b1]སྣང་བ་ཅན་རྣམས་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་ཙམ་ཡིན་པར་བསྟན་པས། དེ་རྣམས་ཀྱི་ངོར་བདེན་པ་ཙམ་གཅོད་ཀྱི་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པ་[L116b4]ཡིན་པ་མི་གཅོད་ཅིང་། སོ་སྐྱེས་བུམ་སོགས་ལ་དོན་དམ་དུ་[T121b4]གྲུབ་པར་འཛིན་པའི་ཞེན་[108b5]ཡུལ་[D127b2][K127b2]འཕགས་པ་ལ་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་འགྱུར་བར་སྟོན་པ་མིན་ཏེ་དེ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

གཞུང་ཕྱི་མའི་དོན་ནི་རྟེན་འབྲེལ་ཀུན་རྫོབ་པའི་རང་བཞིན་ཆོས་ཉིད་[L116b5]འཕགས་པ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་པར་སྟོན་པས་བུམ་པ་[T121b5]ལ་སོགས་པའི་གཞི་[D127b3][K127b3]གཅིག་ཉིད། སོ་སྐྱེ་ལ་[108b6]ལྟོས་ནས་ཀུན་རྫོབ་དང་། འཕགས་པ་ལ་ལྟོས་ནས་དོན་དམ་མོ། ། ཞེས་གཞུང་ལས་ཕྱིན་ཅི་ལོག་ཏུ་བཟློག་སྟེ་སྨྲ་བ་ནི། བློ་གང་གི་ངོར་ཀུན་རྫོབ་བདེན་པར་[L116b6]སོང་བ་དེའི་ངོར་བདེན་པ་ཁེགས་[D127b4][K127b4][T121b6]དགོས་པ་མ་ཤེས་པའི་གཏམ་མོ། །

> སངས་རྒྱས་རྣམས་ཀྱི་དོན་[109a1]དམ་པ་ནི་རང་བཞིན་ཉིད་ཡིན་ཞིང་། དེ་ཡང་སླུ་བ་མེད་པ་ཉིད་ཀྱིས་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཡིན་ལ། དེ་ནི་དེ་རྣམས་ཀྱིས་སོ་སོ་རང་གིས་རིག་[L117a1]པར་བྱ་བ་[D127b5][K127b5]ཡིན་ནོ། །

ཞེས་[T122a1]གསུངས་སོ། །

རང་བཞིན་ཉིད་ཡིན་ཞིང་ཞེས་པའི་ཉིད་ཀྱི་[109a2]སྒྲ་ནི་ངེས་གཟུང་ཡིན་ལ། དེས་གང་གཅོད་པ་ནི་འཕགས་པ་གཞན་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་བདེན་པ་ནི་མཉམ་གཞག་ཏུ་སྣང་མེད་[L117a2]ཀྱི་རང་བཞིན་དང་།[D127b6][K127b6]རྗེས་ཐོབ་ཏུ་[T122a2]སྣང་བཅས་ཀྱི་རང་བཞིན་དུ་འཇོག་པ་ལྟ་བུའི་རིས་འཇོག་མེད་པར། དུས་རྟག་ཏུ་རང་བཞིན་ལ་[109a3]མཉམ་པར་བཞག་པའི་ཆོས་ཉིད་ཡིན་ཞེས་པའོ། །

དེ་ཡང་ཞེས་སོགས་ཀྱི་དོན་ནི་དོན་དམ་བདེན་པའི་བདེན་པ་[D128a1][K128a1][L117a3]དེ་བདེན་གྲུབ་མ་ཡིན་པར་[T122a3]བསྟན་པར་བཞེད་ནས། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཟིགས་པའི་ངོར་སླུ་བ་མེད་པར་གནས་པ་བདེན་

---

sūtre / paramārthasatyaṃ katamat / yatra jñānasyāpy apracāraḥ kaḥ punar vādo ’kṣarāṇām iti / PSPDt, 120a3–4.

[384] Z: དེ་ཉིད་དོ་ D, K, L, T: དེ་ཉིད་

པའི་དོན་དྲུ་བ་ཤད་དོ། །

U3 凡夫と聖者によって勝義と世俗になる仕方

第三、〔凡夫と聖者によって勝義と世俗になる仕方〕は、

> それについて、凡夫たちにとっての勝義であるものそれ自体が、顕れを伴うものを活動対象としている聖者たちにとっての唯世俗であり、それの自性が空であることがそれら〔諸々の聖者にとって〕の勝義のものである[385]。

とお説きなっている前半の意味は、凡夫が勝義のものとして成立しているものであると把握している壺などそれは、前に説明した三昧から出た後の後得智の顕れを有する三種の聖者たちにとっての唯世俗であることを示しているので、彼ら〔後得智の顕れを有している聖者たち〕にとって真実であること全てを否定しているのであって、世俗諦であることを否定しているのではないのである。凡夫が壺などを勝義において成立していると把握する時のその思念対象が聖者にとって世俗となると示しているのではないのである。なぜならば、それ〔勝義において成立しているもの〕は存在し得ないものであるからである。

テキストの後半部分の意味は、縁起している世俗のものの自性であるところの法性が聖者たちにとっての勝義のものであると示しているので、壺などの同じ一つの対象が凡夫にとっては世俗であり、聖者にとっては勝義であるとテキストの真意を逆転して語る者は、世俗諦になるところのその意識にとって真実であることを否定しなければならないということを知らないという話である。

> 諸々の仏の勝義のものというのは自性のみである。それはまた、〔人〕を欺くことがないがゆえに勝義諦であり、それは彼らがそれぞれ自内証すべきものであるとおっしゃっている[386]。

とおっしゃっている。

「自性のみであり」と説かれている「のみ」という言葉は限定詞である。その〔限定詞〕によって否定されるのは、〔仏ではない〕他の聖者たちが〔認識する〕勝義諦とは、三昧においては顕れがないという自性〔を持つものとして設定され〕、後得智においては顕れを有しているという自性〔を持つもの〕であると設定される。〔仏が認識する勝義諦は〕このような交互的なものではなく、常に自性（＝空性）に等持している法性

[385] MABh, 108.13–16（255a5）.
[386] MABh, 108.16–19（ 255a5–6）.

であると言っているのである

「それについてもまた」というなどの意味は、勝義諦という時のその諦というのは、真実として成立しているものではないと示しているとご主張なさり、真実をご覧になっている〔仏の〕智にとって決して欺くことがないということに決まっていることが真実の意味であると説明しているのである。

T2 དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་བཤད་པ།

གཉིས་[109a4]པ་ལ་གཉིས། **U1** རྩ་བའི་ཚིག་དོན་བཤད་[D128a2][K128a2]པ་དང་། **U2** དེ་ལ་རྩོད་པ་སྤང་བའོ། །

T2 勝義諦を説明すること

第二〔勝義諦を説明すること〕に二つ〔がある〕。U1 偈の言葉と内容について説明することと、U2 それに対する論難を退けることである。

U1 རྩ་བའི་ཚིག་དོན་བཤད་པ།

དང་པོ་ནི།

> དེ་[387]ནི་དོན་དམ་[L117a4]པའི་བདེན་[T122a4]པ་བསྟན་པར་འདོད་པས། དོན་དམ་བདེན་པ་དེ་ནི་སྨྲས་བརྗོད་དུ་མེད་པའི་ཕྱིར་དང་། སྒྲ་དེའི་རྗེས་སུ་འབྲང་[388]བའི་ཤེས་པའི་ཡུལ་མ་ཡིན་པ་ཉིད་[D128a3][K128a3]ཀྱི་[109a5]ཕྱིར། དངོས་སུ་བསྟན་པར་མི་ནུས་པས་ཉན་འདོད་པ་རྣམས་ལ་དེའི་རང་བཞིན་[L117a5][T122a5]གསལ་བར་བྱ་བའི་ཕྱིར་དུ་སོ་སྐྱེ་རང་གིས་མྱོང་བའི་དཔེ་བཤད་པ།

ཞེས་གསུངས་པའི་ཤེས་བརྗོད་ཀྱི་ཡུལ་མིན་པའི་དོན་ནི་དངོས་[D128a4][K128a4]སུ་བསྟན་པར་མི་ནུས་པས་ཞེས་གསུངས་[109a6]པ་ལྟར་ཏེ། དེ་ཡང་ནག་ཚོའི་འགྲུར་ལས་མངོན་སུམ་[T122a6]དུ་བསྟན་པར་[L117a6]མི་ནུས་ཞེས་འབྱུང་བའོ། །

དེའི་དོན་ནི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་གཞན་ལས་ཤེས་པར་བྱ་བ་མིན་པར་གསུངས་པའི་[D128a5][K128a5]འགྲེལ་པ་ཚིག་གསལ་ལས།

> ཇི་ལྟར་རབ་རིབ་ཅན་དག་གིས་སྐྲ་ཤད་ལ་[109b1]སོགས་པའི་ངོ་བོ་ཕྱིན་ཅི་ལོག་པ་[T122b1]མཐོང་བ་ན། རབ་རིབ་[L117b1]མེད་པས་བསྟན་དུ་ཟིན་ཀྱང་། རབ་རིབ་མེད་པ་ལྟར་སྐྲ་ཤད་ལ་སོགས་པ་རང་གི་ངོ་བོ་མ་[D128a6][K128a6]མཐོང་བའི་ཚུལ་གྱིས། རྟོགས་པར་བྱ་བ་ཇི་ལྟར་གནས་པ་བཞིན་

[387] D, K, T, Z: དེ་ L:ད་

[388] Z: འབྲེང་ D, K, L, T: འབྲང་

རྟོགས་པར་མི་ནུས་ཀྱི།

ཞེས་རབ་རིབ་ཅན་ལ་རབ་[109b2]རིབ་མེད་[T122b2]པས་སྐྲ་ཤད་མེད་དོ་ཞེས་[L117b2]བསྟན་ཀྱང་། རབ་རིབ་མེད་པས་མཐོང་བ་འདྲ་བའི་སྐྲ་ཤད་མེད་[D128b1][K128b1]པ་མི་རྟོགས་པར་གསུངས་པས། ཉན་པ་པོས་དེ་ལྟར་མ་རྟོགས་ཀྱང་སྐྲ་ཤད་མེད་པ་མི་རྟོགས་པ་མིན་ནོ། །

དེ་དཔེར་བྱས་ནས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་བསྟན་པ་ན་[T122b3]མ་[109b3]རིག་པའི་རབ་[L117b3]རིབ་ཀྱི་བསླད་པ་དང་བྲལ་བས་མཐོང་བ་འདྲ་བ་[D128b2][K128b2]ཞིག་[389]མི་རྟོགས་ཀྱང་། སྤྱིར་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མི་རྟོགས་པ་མིན་པར་བཞེད་པས་ན། དོན་དམ་བདེན་པ་ནི་ཟབ་མོའི་དོན་ཅན་གྱི་ངེས་དོན་གྱི་ལུང་དང་། དེ་ལྟར་སྟོན་པའི་ངག་གིས་[T122b4]བརྗོད་མི་ནུས་པ་དང་། དེའི་[109b4][L117b4]རྗེས་སུ་འབྲང་བའི་[D128b3][K128b3]བློས་ཀྱང་རྟོགས་མི་ནུས་པ་མིན་ཏེ། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་ཤེས་བརྗོད་ཀྱི་ཡུལ་མིན་པར་གསུངས་པ་ཐམས་ཅད་ལ་ཡང་དེ་བཞིན་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

> མིག་རབ་རིབ་ཀྱིས་བསླད་པའི་མཐུ་ཡིས་རབ་[T122b5]རིབ་ཅན་གྱིས་རང་གི་[D128b4][K128b4]ལག་གི་བསེ་[L117b5]རུ་ལ་སོགས་[109b5]པའི་བཟའ་བཏུང་གི་སྣོད་ཀྱི་ནང་དུ། སྐྲ་ཤད་དང་ལ་སོགས་པས་སྦྲང་མ་ལ་སོགས་པ་མཐོང་བ་ན། སྐྲ་ཤད་དང་སྦྲང་མ་སོགས་ཡིན་པར་ངོ་བོ་ལོག་པ་གང་ཞིག་རྣམ་པར་བརྟགས་པ་ན། དེ་[D128b5][K128b5][T122b6]བསལ་བར་འདོད་ནས་སྣོད་དེ་ལ་ཡང་དང་ཡང་[L117b6]དུ་བསྒྲེ་བཟློག་བྱེད་པའི་[109b6]ཚོགས་ཐོབ་པར་རིག་སྟེ། མིག་དག་པའི་རབ་རིབ་མེད་པས་དེའི་གན་དུ་ཕྱིན་ནས། སྐྲ་ཤད་སོགས་དེ་དག་ཉིད་ཀྱི་བདག་ཉིད་གཞི་གང་དུ་མཐོང་བ་དེར་[D128b6][K128b6]མིག་གཏད་[T123a1]ཀྱང་སྐྲ་ཤད་ཀྱི་རྣམ་པ་དེ་དག་མ་དམིགས་ཤིང་། སྐྲ་ཤད་དེའི་རྟེན་ཅན་[L118a1]ཏེ་ཁྱད་པར་གྱི་ཆོས་གང་[110a1]ཡང་རྟོག་པར་མི་བྱེད་དོ། །
>
> ཡང་གང་གི་ཚེ་རབ་རིབ་ཅན་གྱིས་རབ་རིབ་མེད་པ་ལ། སྐྲ་ཤད་མཐོང་ངོ་ཞེས་རང་གི་[D129a1][K129a1]བསམ་[T123a2]པ་སྟོན་པར་བྱེད་པ་དེའི་ཚེ། རབ་རིབ་ཅན་གྱི་རྣམ་རྟོག་བསལ་བར་འདོད་པས་དེའི་[L118a2]ངོར་བྱས་ནས། འདི་ན་[390]སྐྲ་[110a2]ཤད་མེད་དོ་ཞེས་དགག་པ་ལྷུར་བྱེད་པའི་ཚིག་སྨྲ་མོད་ཀྱང་། སྨྲ་བ་པོ་འདི་[D129a2][K129a2]ལ་སྐྲ་ཤད་ལ་སྐུར་པ་འདེབས་པ་མེད་དོ། །
>
> རབ་རིབ་[T123a3]ཅན་གྱིས་མཐོང་བའི་སྐྲ་ཤད་ཀྱི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ནི། རབ་རིབ་མེད་པས་མཐོང་བ་དེ་ཡིན་གྱི།[[L118a3]རབ་རིབ་ཅན་གྱིས་མཐོང་བ་དེ་མིན་ནོ། །

དཔེ་[110a3]གཉིས་པོ་དེ་བཞིན་དུ་དོན་གྱི་[D129a3][K129a3]སྐབས་འདིར་ཤེས་པར་གྱིས་ཤིག ཤེས་པར་བྱེད་ཚུལ་ནི། མ་རིག་[T123a4]པའི་རབ་རིབ་ཀྱིས་གནོད་པ་བྱས་པ་སྟེ་བློ་བསླད་པས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མ་མཐོང་བ་རྣམས་ཀྱིས། ཕུང་[L118a4]པོ་དང་ཁམས་དང་སྐྱེ་མཆེད་ལ་སོགས་པའི་[D129a4][K129a4]རང་གི་ངོ་བོ་དམིགས་[110a4]པ་ནི། ཕུང་སོགས་དེ་དག་གི་ངོ་བོ་ཀུན་རྫོབ་པ་སྟེ་རབ་རིབ་ཅན་གྱིས་སྐྲ་[T123a5]ཤད་དམིགས་པ་ལྟ་བུའོ། །

---

[389] D, K, L: ཞིག་ T, Z: ཅིག་

[390] D, Z: ནི་ K, T, L: ན་

ཕུང་པོ་ལ་སོགས་པ་དེ་ཉིད་མ་མཐོང་བས་དམིགས་པ་དེ་དག་ཉིད།　མ་རིག་[L118a5]པའི་བག་ཆགས་[D129a5][K129a5]ཤེས་སྒྲིབ་དང་བྲལ་བའི་སངས་རྒྱས་རྣམས་ཀྱིས།　རབ་[110a5]རིབ་ཅན་མ་ཡིན་པའི་མིག་གིས་སྐྲ་ཤད་མ་མཐོང་[T123a6]བའི་ཚུལ་དུ།　ཕུང་སོགས་ཀྱི་རང་བཞིན་གང་དུ་གཟིགས་པའི་ཡུལ་དེ་ནི་སངས་རྒྱས་དེ་རྣམས་ཀྱི་དོན་དམ་[D129a6][K129a6]པའི་[L118a6]བདེན་པའོ། །

U1 偈の言葉と内容について説明すること [109a3]

第一〔偈の言葉と内容について説明することは〕、

> それは、勝義諦を示そうと望む者が、勝義諦それは言葉によって述べられることができない。また、その言葉にしたがって〔生じる〕知の対象ではないから、直接に示すことができないので、聴聞することを望んでいる者たちにその〔勝義諦の〕自性を明らかにするために、凡夫自身が経験しているような例えで説明をする[391]。

とお説きになっている知と述べるものの対象ではないということの意味は、直接に示すことができないとお説きになっている通りである。すなわち、それ (知と述べるものの対象ではない) についてもナクツォ翻訳師の翻訳に、「直接知覚されるものとして示すことができない」と出ている。

その意味は真実義の意味を「他のものから知ることができるものではない」とお説きになっている箇所の註釈は、『プラサンナパダー』に、

> ティミラ眼病を持つものたちが毛髪などの顛倒した存在が見えるとき、眼病にかかっていない者が〔毛髪などは顛倒した存在であると〕説いて示したとしても、〔眼病を持つ者が、〕眼病にかかっていない者のように毛髪などはそのもの自体が見えないという仕方で理解すべきものを存在している通りに理解できない[392]。

と眼病者に対して眼病にかかっていない者が毛髪がないと説いて示しても、眼病にかかっていない者が見ているのと同じ毛髪がないということを理解することができないとお説きになっているので、聞く者はそのような〔もの自体が見えないという〕仕方では理解できなくても毛髪がないということが理解できないわけではないのである。

---

[391] 原文そのものではない。MABh, 109.1–5（255a6）.

[392] PSPD, 392 : taimirikai[kai]kakeśavad andhabadhirādi rūpaśabdādivat kuṇ ādivyavahitaghaṭādivat siddhadevapiśācādiśarīravad viṣayāntaravyāpṛtasya viṣayāntaravan na gṛhyanta iti cet // ; PSPDt, 119b5.

それを例えとして、真実義が示されたときに、無明という眼病に汚されていない者が見ている通りのようなものを理解することができないけれども、一般的〔限定なしに〕真実義が理解できないというわけではないとお考えなっているので、勝義諦は深甚なる意味を持つ了義の経典とその〔了義の経典の〕通りに示す言葉によって述べることができないわけではない。また、それにしたがって生じる知によっても理解できないわけではないのである。すなわち、真実義の意味を知と述べる言葉の対象ではないとお説きになっている全ての場合においてもその通りに理解すべきである。

> 眼病に侵された目の力によって眼病者が自分の手にある角などでできた食器の中に、髪毛などによってミツバチなどを見たときに、髪毛とミツバチなどであるという顚倒した存在を分別したときに、それ〔顚倒した存在〕を取り除こうと望んで、その器において繰り返し混じったものを取り除こうとして苦労しているのを見て、健全な眼の病にかかっていない者がその〔眼病者〕の元に行き、毛髪などがそれらのそれ自体として何らかの基体に見えているその対象に目を向けても、それらの毛髪の姿は知覚されない。また、その毛髪を拠り所としているもの、すなわち、〔毛髪にある〕属性も分別することができないのである。
> また、眼病者が眼病のない者に対して、毛髪が見えると自らの考えを示したときに、眼病にかかっている者の妄分別を取り除こうと望む者が、その人を対象として、ここには毛髪がないのであると熱心に否定の言葉を主張するけれども、その主張する者自身は髪毛に対して損減することはないのである。
> 眼病者が見ている毛髪の真実義というのは、眼病のない者が見ているものであって、眼病者が見ているものではないのである[393]。

その二つの例の通りに実際の〔意味を〕この箇所で知るべきである。どのように理解したらいいのかというと、無明という眼病によって侵されている者、すなわち、知が汚されているので、真実義が見えていない者たちが、蘊界処などのそれ自体を知覚しているのは、それら蘊などの世俗のあり方〔を認識しているのである〕[394]。すなわち、眼病者によって毛髪を認識しているのようなものである。

蘊などの真実が見えていない者によって認識されているところの〔蘊などと〕同じものは、無明の習気である所知障から離れた仏たちが眼病にかかっていない目によって毛髪を見ないという仕方で、蘊など[395]の自性をご覧になっている〔知の〕対象はそ

[393] 『入中論釈』の言葉そのままではないが、ほぼ同じ内容である。MABh,109.10–110.5（255b1–255b4）.
[394] MABh, 110.5–8（255b4）参照。
[395] MABh, 110.8–11（255b7）参照。

の仏たちの勝義諦である。

U2 དེ་ལ་རྩོད་པ་སྤང་བ།

གཉིས་པ་(དེ་ལ་རྩོད་པ་སྤང་བ་)ནི། གལ་ཏེ་རབ་རིབ་མེད་པའི་མིག་གིས་སྐྲ་ཤད་དུ་སྣང་བ་[110a6]ཙམ་ཡང་མ་མཐོང་བ་བཞིན་དུ། སངས་[T123b1]རྒྱས་ཀྱིས་མ་རིག་པས་བསླད་པའི་བློ་ལ་སྣང་བའི་ཕུང་སོགས་ཀུན་རྫོབ་པ་མ་[D129b1][K129b1]གཟིགས་ན། དེ་རྣམས་མེད་པར་[L118b1]འགྱུར་ཏེ། ཡོད་ན་ནི་སངས་རྒྱས་ཀྱིས་གཟིགས་དགོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ཕུང་སོགས་ཀུན་[110b1]རྫོབ་པ་རྣམས་མེད་ན་ནི་སངས་རྒྱས་ཐོབ་[T123b2]པ་ཡང་མེད་པར་འགྱུར་ཏེ། དང་པོར་སེམས་བསྐྱེད་པའི་[D129b2][K129b2]གང་ཟག་ནི་མ་རིག་པས་བསླད་པ་ཅན་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ་ཞེ་ན།[[L118b2]སྐྱོན་འདི་མེད་ཚུལ་བཤད་ན། སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ཤེས་བྱ་མཁྱེན་ཚུལ་ནི་གཉིས་[110b2]ཏེ། དོན་དམ་བདེན་པའི་[T123b3]ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་ཚུལ་དང་།[D129b3][K129b3]ཀུན་རྫོབ་བདེན་པའི་ཤེས་བྱ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་ཚུལ་ལོ། །

དེ་ལ་དང་པོ་ནི། ཕུང་[L118b3]པོ་ལ་སོགས་པ་ཀུན་རྫོབ་པའི་སྣང་བ་རྣམས་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས། དེ་རྣམས་ཀྱི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མཁྱེན་[110b3]པའོ། །

[T123b4]གཉིས་པ་ནི། མི་སྣང་ཡང་[D129b4][K129b4]རྟོགས་པའི་ཤུགས་རྟོགས་སངས་རྒྱས་ལ་གཞག་ཏུ་མི་རུང་བའི་ཕྱིར། སྣང་ནས་མཁྱེན་དགོས་པས་[L118b4]ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་དེའི་ངོར། ཡུལ་དང་ཡུལ་ཅན་གཉིས་སུ་སྣང་བའི་ཚུལ་གྱིས་མཁྱེན་པའོ། །[T123b5]

སངས་[110b4]རྒྱས་ཀྱི་[D129b5][K129b5]ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པ་དེ་མ་རིག་པའི་བག་ཆགས་ཀྱིས་བསླད་ནས་ཕུང་སོགས་སྣང་བ་མིན་ཀྱང་། གང་ཟག་གཞན་གྱི་[L118b5]ཤེས་པ་མ་རིག་པས་བསླད་པ་ལ་སྣང་བ་སངས་རྒྱས་ལ་སྣང་དགོས་ཏེ། སྣང་བ་དེ་མེད་པར་མི་[T123b6]རུང་ལ་ཀུན་[D129b6][K129b6]རྫོབ་དེ་ཡོད་ན་ཇི་སྙེད་པ་[110b5]མཁྱེན་པས་དམིགས་དགོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

རབ་རིབ་དང་བྲལ་བའི་མིག་ཤེས་ལ། རབ་རིབ་ཅན་ལ་སྣང་བའི་སྐྲ་ཤད་དུ་སྣང་བ་[L118b6]མེད་ཀྱང་། སྣང་བ་དེ་མེད་མི་དགོས་པས་སངས་རྒྱས་དང་མི་[D130a1][K130a1]འདྲའོ། །[T124a1]

གཉིས་སྣང་འཁྲུལ་པའི་བག་ཆགས་མ་ཟད་ཀྱི་བར་དུ་ཇི་[110b6]ལྟ་བ་དང་། ཇི་སྙེད་པ་མངོན་སུམ་དུ་འཇལ་བ་གཉིས་ངོ་བོ་གཅིག་ཏུ་སྐྱེ་མི་ནུས་པས། མཉམ་རྗེས་རེས་འཇོག་ཏུ་[L119a1]འཇལ་[D130a2][K130a2]དགོས་པས་ཡེ་ཤེས་སྐད་ཅིག་མ་གཅིག་གི་སྟེང་[T124a2]ནས་དེ་གཉིས་འཇལ་བ་མི་འོང་ངོ་། །

འཁྲུལ་བའི་བག་ཆགས་མ་ལུས་པར་སྤངས་[111a1]པ་ན། ཡེ་ཤེས་སྐད་ཅིག་མ་རེ་རེའི་སྟེང་དུ་ཡང་ཡེ་ཤེས་གཉིས་ངོ་བོ་གཅིག་[L119a2]ཏུ་སྐྱེ་བ་རྒྱུན་[D130a3][K130a3]མི་འཆད་[396]པས། དུས་གཅིག་ཏུ་ཤེས་བྱ་གཉིས་མངོན་སུམ་དུ་[T124a3]འཇལ་མི་འཇལ་གྱི་རེས་འཇོག་མི་དགོས་སོ། །

དེས་ན།[111a2]

[396] D, K, L, T: འཆད་　Z: ཆད་

> མཁྱེན་པའི་སྐད་ཅིག་གཅིག་གིས་ཀྱང་། །
> ཤེས་བྱའི་དཀྱིལ་འཁོར་ཀུན་ཁྱབ་ཅན། །

ཞེས་གསུངས་[D130a5][K130a4][L119a3]པ་ཡང་མི་འགལ་ལོ། །

ཡེ་ཤེས་གཉིས་ངོ་བོ་གཅིག་ཡིན་ཀྱང་ཡུལ་[T124a4]གཉིས་ལ་ལྟོས་པའི་མཁྱེན་ཚུལ་མི་འདྲ་བ་གཉིས་འོང་བ་ལ་འགལ་བ་ཅུང་[111a3]ཟད་ཀྱང་མེད་པ་ནི། སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཉག་གཅིག་གི་[K130a5]ཁྱད་[D130a5]ཆོས་སུ་འདུག་པ་ལ།[L119a4]དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་མཁྱེན་ཚུལ་གཅིག་པུ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་[T124a5]མཁྱེན་ཚུལ་དུ་བྱས་ནས། ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཐུགས་རྒྱུད་ལ་མེད་པར་གདུལ་བྱའི་རྒྱུད་[111a4]ཀྱིས་བསྡུས་ཞེས། སངས་[D130a6][K130a6]རྒྱས་ཀྱི་ཇི་སྙེད་པ་མཁྱེན་པ་ལ་སྐུར་པ་ འདེབས་པ་དང་།[L119a5]ཁ་ཅིག་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པ་ཡང་སངས་རྒྱས་[T124a6]ཀྱི་ཐུགས་རྒྱུད་ལ་མེད་ཅེས་ཡེ་ཤེས་གཉིས་ཀ་ལ་སྐུར་བ་འདེབས་པར་སྣང་ངོ་། །

འདིའི་ལྷག་མ་འཁའ་ཞིག་[D130b1][K130b1]འབྲས་བུའི་[111a5]སྐབས་སུ་བཤད་པར་བྱའོ། །

གལ་ཏེ་གཉིས་སྣང་ཐམས་ཅད་ནུབ་[L119a6]པ་རྣམ་པ་དེ་ལྟ་བུའི་རང་བཞིན་ནི་[T124b1]མཐོང་བ་མེད་པ་མ་ཡིན་ནམ། དེས་ན་ཇི་ལྟར་སངས་རྒྱས་དེ་དག་གིས་དོན་དམ་བདེན་པ་གཟིགས་ཤེ་ན། [D130b2][K130b2]དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་གཟིགས་ངོར་གཉིས་སྣང་[111a6]ནུབ་པས་གཉིས་ཀྱི་ཚུལ་གྱིས་མི་གཟིགས་པ་ནི་བདེན་[L119b1]མོད་ཀྱི། འོན་ཀྱང་[T124b2]མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་དེ་དག་གིས་གཟིགས་སོ་ཞེས་བརྗོད་དོ། །

འདི་རྟོད་པའི་ལན་དུ་འགྲོ་ཚུལ་[D130b3][K130b3]ནི། ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་དེས་ཕུང་སོགས་ཀྱི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་[111b1]སུམ་དུ་གཟིགས་པའི་ཕྱིར་དང་། ཕུང་སོགས་[L119b2]རྣམས་གཟིགས་ངོ་[T124b3]དེར་མ་གྲུབ་པ་དེ་དག་གི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དང་། ཕུང་སོགས་མ་[D130b4][K130b4]གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་དེ་དག་གི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཟིགས་དགོས་པའི་ཕྱིར་ཏེ། རང་འགྲེལ་ལས།

> དངོས་པོ་བྱས་པ་ཅན་[111b2]ལ་མ་རེག་པར་རང་[L119b3]བཞིན་འབའ་[T124b4]ཞིག་མངོན་སུམ་དུ་མཛད་པས། དེ་ཉིད་ཐུགས་སུ་ཆུད་པའི་ཕྱིར་[D130b5][K130b5]སངས་རྒྱས་ཞེས་བརྗོད་དོ། །

ཞེས་སངས་རྒྱས་ཀྱི་དོན་དམ་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱིས་ཆོས་ཅན་ལ་མ་རེག་པར་ཆོས་ཉིད་འབའ་ཞིག་ཐུགས་སུ་ཆུད་པར་[397] [L119b4]གསུངས་[111b3]ཏེ།[T124b5]ཕུང་སོགས་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་དེ་དག་གི་དེ་ཁོ་ན་[D130b6][K130b6]ཉིད་གཟིགས་པར་གསུངས་པ་དང་དོན་གཅིག་གོ །

མཐོང་བ་མེད་པ་ནི་མཐོང་བ་དམ་པའོ་ཞེས་གསུངས་པའི་དོན་ཡང་། ཅི་ཡང་མི་མཐོང་བ་མཐོང་བར་མི་བཞེད་ཀྱི། །[T124b6]སྔར་[L119b5]བཤད་པ་ལྟར་སྤྲོས་པ་མ་[111b4]མཐོང་བ་ནི་སྤྲོས་[D131a1][K131a1]བྲལ་མཐོང་བར་འཇོག་པས། མཐོང་མ་མཐོང་གཞི་གཅིག་ལ་བྱེད་པ་མིན་ནོ། །

དེ་ལྟར་ཡང་སྟོད་པ་ལས།

[397] D, K, T, Z: ཆུད་པར་ L: ཆུད་པར་ཞེས་

གཟུགས་རྣམས་མི་མཐོང་ཚོར་བ་དག་ཀྱང་མི་མཐོང་ཞིང་། །
འདུ་ཤེས་[D131a2][K131a2][T125a1]མཐོང་བ་མེད་[L119b6]ལ་སེམས་པ་མི་མཐོང་ཞིང་། །
གང་ལ་རྣམ་[111b5]པར་ཤེས་དང་སེམས་ཡིད་མཐོང་མེད་པ། །
འདི་ནི་ཆོས་མཐོང་ཡིན་ཞེས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་བསྟན། །
ནམ་མཁའ་མཐོང་ཞེས་སེམས་ཅན་ཚིག་[T125a2]ཏུ་[D131a3][K131a3]རབ་བརྗོད་པ། །
ནམ་མཁའ་ཇི་ལྟར་མཐོང་[L120a1]སྙེ་དེས་འདི་བརྟག་པར་གྱིས། །
དེ་ལྟར་ཆོས་མཐོང་བ་ཡང་[111b6]དེ་བཞིན་གཤེགས་པས་བསྟན། །
མཐོང་བ་དཔེ་གཞན་གྱིས་ནི་བསྟད་པར་ནུས་མ་ཡིན། །

ཞེས་མི་མཐོང་བ་ཕུང་པོ་[D131a4][K131a4]ལྔ་དང་།[T125a3]མཐོང་བ་ནི་ཆོས་ཞེས་[L120a2]གསུངས་ལ། དེ་ནི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་དོན་ཏེ། སྲུས་རྟེན་འབྲེལ་མཐོང་བ་དེས་ཆོས་མཐོང་ངོ་ཞེས་[112a1]གསུངས་པ་བཞིན་ནོ། །

དེ་ཡང་དཔེར་ན་ནམ་མཁའ་ནི་ཐོགས་པའི་རེག་བྱ་བཅད་ཙམ་[D131a5][K131a5]ཡིན་ལ། དེ་མཐོང་དམ་རྟོགས་པ་[T125a4]ནི་དགག་བྱ་སྒྲིབ་[L120a3]ཐོགས་ཡོད་ན་དམིགས་སུ་རུང་བ་ལས་མ་མཐོང་བ་ལ་བྱེད་པ་དང་འདྲ་སྟེ། དེར་ཡང་[112a2]མཐོང་བ་ནི་[398]ནམ་མཁའ་དང་མ་མཐོང་བ་ནི་སྒྲིབ་ཐོགས་སོ། །

དཔེ་དེ་[D131a6][K131a6]བཞིན་དུ་མཐོང་བ་མེད་པར་སྟོན་པོ་མཐོང་བ་བཞིན་དུ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མཐོང་བ་[T125a5]ནི་ཀྲང་[L120a4]པ་ཐ་མས་བཀག་གོ །མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་གཟིགས་པའི་ཤེས་བྱེད་དུ་བདེན་པ་གཉིས་ལ་འཇུག་པ་[112a3]ལས།

ལྷའི་བུ་གལ་ཏེ་[D131b1][K131b1]དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ལུས་དང་ངག་དང་།
ཡིད་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་རང་བཞིན་དུ་[T125a6]འགྱུར་ན་ནི་[L120a5]དེ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གྲངས་སུ་མི་འགྲོ་སྟེ། ཀུན་རྫོབ་ཀྱི་བདེན་པ་ཉིད་དུ་འགྱུར་རོ། །
འོན་ཀྱང་[D131b2][K131b2]ལྷའི་བུ་དོན་དམ་པར་ན་དོན་དམ་པའི་[112a4]བདེན་པ་ནི་ཐ་སྙད་ཐམས་ཅད་ལས་འདས་པ། །
བྱེ་བྲག་མེད་པ་[T125b1]མ་སྐྱེས་པ་མ་འགགས་[L120a6]པ། སྨྲ་བར་བྱ་བ་དང་སྨྲ་བ་དང་། ཤེས་པར་བྱ་བ་དང་། ཤེས་པ་དང་བྲལ་བའོ། །

ཞེས་གསུངས་[D131b3][K131b3]པ་དྲངས་པའི་མདོ་ཐ་མའི་དོན་ནི། དོན་དམ་པ་གཟིགས་པའི་ངོར་དོན་[112a5]དམ་བདེན་པ་དེ། ཕུང་སོགས་ཀུན་རྫོབ་[T125b2]པ་མ་མཐོང་བའི་ཚུལ་[L120b1]གྱིས་གཟིགས་པ་མིན་པར། ཕུང་སོགས་ལུས་ཀྱི་དང་ངག་གི་སྤྱོད་ཡུལ་[D131b4][K131b4]དང་། ཡིད་ཀྱི་ཡུལ་དུ་འགྱུར་བ་ལྟར་ཡུལ་དུ་འགྱུར་ན་ནི། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་གཟིགས་པའི་ངོར་སྤྲོས་པ་དང་[112a6]མ་བྲལ་བས།[T125b3]དོན་དམ་བདེན་པར་མི་འགྱུར་གྱི་ཀུན་[L120b2]རྫོབ་ཀྱི་སྤྲོས་པར་འགྱུར་རོ་ཞེས་པ་སྟེ། དེ་[D131b5][K131b5]ལྟར་བྱས་ན་མ་གཟིགས་པའི་ཚུལ་གྱིས་གཟིགས་པའི་ཤེས་བྱེད་དུ་འགྲོའོ། །

མདོ་གཉིས་པའི་དོན་ནི་དོན་དམ་པ་མངོན་སུམ་དུ་གཟིགས་པའི་ངོར་ནི།[T125b4]དོན་དམ་[112b1]བདེན་པ

[398] Z: བའི་ D, K, L: བ་ནི་

ཅི་བྲག་མེད་པ་ནི་ཁྱད་[L120b3]པར་མི་འདྲ་བ་མང་པོ་མེད་[D131b6][K131b6]པའོ། །

གཞན་གསུམ་ནི་གོ་སླའོ། །

གཟིགས་ངོ་དེར་སྒྲ་བའི་བྱ་བྱེད་དང་བྲལ་བ་ནི་སླའོ། །

དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་གཟིགས་པའི་ཡེ་ཤེས་དེ་དོན་དམ་ཤེས་པ་དང་། [T125b5]དོན་དམ་བདེན་པ་དེའི་ཤེས་བྱར་འཇོག་[112b2]ཐུབ་[D132a1][K132a1][L120b4]ཀྱང་། ཡེ་ཤེས་དེའི་ངོར་བྱ་བྱེད་དེ་གཉིས་དང་བྲལ་བ་མི་འགལ་བ་ནི། བྱ་བྱེད་གཉིས་ནི་ཐ་སྙད་པའི་བློ་ཁོ་ནའི་ངོར་འཇོག་པའི་ཕྱིར་ཏེ། དཔེར་ན་རིགས་ཤེས་རྗེས་དཔག་[T125b6]ཡུལ་[D132a2][K132a2]ཅན་དང་། དོན་དམ་བདེན་པ་ཡུལ་དུ་འཇོག་ནུས་ཀྱང་། ཡུལ་དང་[L120b5]ཡུལ་ཅན་[112b3]གྱི་བྱ་བྱེད་གཉིས་རིགས་ངོར་མ་འཇོག་པ་བཞིན་ནོ། །

དེ་ནས་

> ལྟའི་བུ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཆོག་དང་[D132a3][K132a3]ལྡན་པ་[T126a1]ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་བར་ལས་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་[L120b6]བདེན་པའོ་ཞེས་བརྗོད་[112b4]པ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །
> ཆོས་ཐམས་ཅད་ནི་བརྫུན་ཏེ་སླུ་བའི་ཆོས་སོ། །

ཞེས་དྲངས་[D132a4][K132a4][T126a2]པའི་དོན་ནི། ཡིན་ཏེའི་བར་གྱིས་དོན་དམ་བདེན་པ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་ལས་འདས་པར་བསྟན་པ་དེའི་ཡུལ་[L121a1]ལས་འདས་ཚུལ། ཇི་ལྟར་ནས་མ་ཡིན་[112b5]ནོའི་བར་གྱིས་སྟོན་ཏེ། ཇི་ལྟར་འདི་དོན་[D132a5][K132a5]དམ་པའི་བདེན་པའོ་ཞེས་བརྗོད་[T126a3]པ་ན་སྒྲ་དེའི་རྗེས་འབྲང་གི་རྟོག་པ་ལ། ཡུལ་ཡུལ་ཅན་སོ་སོ་བ་གཉིས་སུ་ཆད་པར་སྣང་བ་ལྟར་[L121a2]ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཇི་ལྟ་བ་མཁྱེན་པ་དེ་ལ་དེ་ལྟར་སྣང་བའི་ཚུལ་གྱིས་དེའི་ཡུལ་[112b6][D132a6][K132a6]ལས་འདས་པ་སྟེ། གཉིས་སྣང་གི་ཆོས་ཐམས་[T126a4]ཅད་ནི་བརྫུན་པ་སླུ་བའི་ཆོས་ཡིན་པས། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་མི་སླུ་བ་འབའ་ཞིག་གཟིགས་པའི་ངོར་དེ་མེད་[L121a3]ཅེས་པའོ། །

དེ་རྣམས་ཐམས་ཅད་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་[D132b1][K132b1]གཟིགས་པའི་ངོར་ཞུང་སོགས་ཀུན་རྫོབ་[113a1]པ་མི་སྣང་བའི་ཁུངས་[T126a5]སོ། །

དེའི་ཕྱིར་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་གཟིགས་པའི་ངོར། དངོས་པོ་དང་དངོས་པོ་མེད་པ་ལ་སོགས་པའི་[L121a4]གཉིས་ཆོས་ཀྱི་སྤྲོས་པ་ཐམས་ཅད་སྲིད་པ་མ་[D132b2][K132b2]ཡིན་ཏེ། སྤྲོས་པ་དེ་དག་གི་རང་གི་ངོ་བོ་དེར་མ་[113a2]དམིགས་པའི་ཕྱིར་[T126a6]རོ། །

དེ་ལྟར་ན་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་བསམ་པ་ལ་དངོས་སུ་ན་འཕགས་པ་རྣམས་ཁོ་ན་ཚད་མ་ཡིན་གྱི། འཕགས་པ་མ་ཡིན་པ་ནི་[L121a5]དངོས་སུ་ཚད་མ་མ་ཡིན་པས།[D132b3][K132b3]གཞན་སྐྱེ་འཕགས་པའི་དོན་དམ་གྱི་གཟིགས་ངོར་བཀག་པ་ལ་[T126b1]འཇིག་རྟེན་[113a3]གྱིས་གནོད་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

U2 それに対して論難を退けること

第二〔それに対する論難を退けること〕は、もし、眼病にかかっていない者の目によって毛髪として顕れているものさえも見えていない通りに、仏は無明によって汚さ

れている知に顕れている蘊などである世俗のものをご覧にならないとするならば、それらは存在しないということになる。なぜならば、もし存在しているとするならば、仏が必ずご覧になるはずであるからである。

蘊など諸々の世俗のものが存在しないとするならば、仏〔の地〕を得る者もまた存在しないことになるのである。なぜならば、最初に菩提心を起こすプドガラは、無明によって汚された知を持つものであるからであるというのならば、この過失がないあり方について説明するならば、仏の智慧によって所知をお知りになるあり方には二つがある。すなわち、勝義諦という所知一切をお知りになるあり方と世俗諦という所知一切をお知りになるあり方である。

そのうち、第一は、蘊などの世俗のものの諸々の顕れをご覧にならないというあり方によって、世俗のものの真実義をお知りになることである。

第二は、顕れないけれども認識されるという間接的な認識というものを仏に〔あると〕設定することは不適切であるので、顕れてからお知りになる必要があるので、その如量智にとって、対象と対象をもつものの二つとして顕れるあり方でお知りになるのである。

仏のその如量智というのは、無明の習気によって汚されて蘊などが顕れることはないけれもど、他のプドガラの無明によって汚された知に顕れたものが仏に顕れる必要がある。なぜならば、顕れはないということは不適切であり、また、世俗があるならば、如量智によって知覚される必要があるからである。

眼病にかかっていない者の眼識に、眼病にかかっている者において顕れている毛髪の顕れは存在しないけれども、顕れそのものがない必要はないので、仏と異なるのである。

迷乱した二つの顕れの習気を尽きない間は、ありのままのものとある限りの全てのものを現量として認識する二つの智慧が一体として生じることはできないので、三昧智と後得智は交互に認識しなければならないので、一刹那の智慧においてその二つ〔の対象〕を認識することはあり得ないのである。

迷乱の習気を残すところなく断じたときに、各々一刹那の智慧においても二つの智慧が一体のものとして生じることが途切れることはないので、同時に二つの所知を現量において認識するかしないかということが交合に顕れる必要がないのである。

したがって、

> 一刹那の智慧によっても所知のマンダラは全て覆われる[399]。

[399] SDVV, 188（14b6）

と説かれたことも矛盾はないのである。

二つの智慧（如量智と如実智）は一体であるけれども、二つの対象に関して異なる 2 つのお知りになるあり方が出てくることにおいて矛盾は少しもないというのは、仏世尊のみの特徴としてある。それに対して、真実義をお知りになるあり方のみが仏のお知りになるあり方であると考えて、如量智は仏のお心に存在することなく、所化の心に属しているものと言って仏の如量智に対して損減し、ある者が如実智も仏のお心に存在しないと言うのは二つの智慧に対して損減している者であると思われる。

以上の残りは〔仏〕果の箇所で説明しよう。

もし二つの顕れ全てが滅したところの形象のような自性を見えることがないのではないか。したがって、それら諸仏は勝義諦をどのようにご覧になるのかと問うならば、真実義をご覧になる智にとって二つの顕れは消滅しているので、二つのあり方でご覧にならないというのは確かであるけれども、ご覧にならない仕方でそれら〔諸仏〕はご覧になっていると述べられている。

これが論難の答えになるあり方は、如実智は蘊などの真実そのものを直接知覚でご覧になるからであり、蘊などをご覧になっているその智にとって成立していないということがそれらの真実義であるからであり、蘊などを見られないという仕方で、それら〔蘊など〕の真実義をご覧になる必要があるからである。『入中論釈』に、

> 作られた事物に触れることなしに自性のみを目の当たりになさることによって、真実をご理解なさるので、仏と述べられているのである[400]。

と仏の勝義をお知りになる智慧によって、主題に触れることなく法性のみをご理解なさっていると〔チャンドラキールティは〕お説きになっている。すなわち、蘊などをご覧にならない仕方でそれらの真実義をご覧になるとお説きになっているのと同じ意味である。

見ることがないというのは、見ることの最上であるとお説きになっている意味もまた、何も見ないことが見ることであるとお考えになっているではなく、前に説明したように戯論を見ないというのは、離戯論を見ることであると設定しているので、見ることと見ないことは、同一の基体をさしているのではないのである。

以上のように、『摂頌』に、

> 諸々の色を見ることなく、受なども見ることもない、
> 想を見ることなく、思も見ることもない、
> 識、心、意を見ることがない、その〔人〕が法を見る者であると如来は示した。

---

[400] MABh, 201.17–19（283a2）.

> 虚空を見ると有情は言葉で表現する。
> 虚空はどのように見られるのか。このことによって以下のことを考察しなさい。
> 同様に法を見るということも〔それと同様であると〕如来は示した。
> 〔法を〕見ることは他の比喩によっては説明することができないのである[401]。

と言い、見ていないのは五蘊であり、見ているのは法であるとお説きになり、それ〔法〕は真実義を意味している。すなわち、縁起を見る者が法を見るとお説きになった通りである。

それについても〔さらに説明するならば〕、例えば、虚空は、妨げるものである触を排除されただけのものであるけれども、それを見る、あるいは理解するというのは、否定対象である妨げるものが存在するならば、知覚されるはずであるが、見られないことをさして、〔虚空を理解すると〕言っているのと同じである。その場合にも見えているというのは虚空であり、見えていないのは妨げるものである。

その比喩のように見えているのではなく、青を見るように、真実義を見ることは最後の二句によって否定されている。ご覧にならない仕方でご覧になっている典拠として、『入二諦経』に、

> 天子よ。もし勝義なものとして、勝義諦は身、口、意の対象の自性となるならば、それは勝義諦であるというはずの数には含まれないのである。すなわち、世俗諦のみになってしまうのである。
> しかし、天子よ。勝義なものとしては、勝義諦は全ての言説を超えており、無差別、不生、不滅、述べられるものと述べるもの、知られるものと知るものとを離れいるのである[402]。

とお説きになっているのを引用しているテキストの前半の意味は、勝義なものをご覧になっている知にとってその勝義諦は、蘊などの世俗のものを見ない仕方によってご覧になっているのではなく、蘊など身と口の行境と、意の対象となっているように対象となっているならば、真実義を直接にご覧になっている知にとって戯論と離れないので、勝義諦であることにならないのであって、世俗の戯論となってしまうのであると言っているのである。すなわち、以上のようであるならば、ご覧にならない仕方によってご覧になっていることの典拠となるのである。

---

401 PPSG, 52: rūpasya darśanu adarśanu vedanāye saṃjñāya darśanu adarśanu cetanāye / vijñāna-citta-manu-darśanu yatra nāsti aya dharma-darśanu nidiṣṭu tathāgatena // ākāśa dṛṣṭu iti sattva pravyāharanti kha nidarśanaṃ kutu vimṛṣyatha etam arthaṃ / tatha dharma-darśanu nidiṣṭa tathāgatena na hi darśanaṃ bhaṇitu śakya nidarśanena// PPSGt, 171（8b2–4）.

402 『世俗諦と勝義諦を示した経』（SPN, 247a3–5）に同じ文章がある。

第二のテキストの意味は、勝義なものを直接ご覧になっている知にとっては、勝義諦は無差別であるというのは異なる区別が多くはないということである。

他の三つは理解しやすいのである。

ご覧になっているその知にとって語る働きと離れることは理解しやすいのである。

真実義を直接にご覧になっている知が、勝義を知るのである。また、勝義諦は所知であることと設定することができてもその知にとってその二つの働きと離れていることが矛盾しないのは、二つの働きは、言説知のみにとって設定されるからである。例えば、正理知である比量は対象を持つものであり、勝義諦は対象であると設定することができるけれども、対象と対象を持つものの二つの働きは正理知にとって設定されないのと同様である。それから、

> 天子よ、勝義諦は一切の種類のものの最上のものを有している一切智者の智慧の対象に至るまでも超えているのである。すなわち、勝義諦であると述べられるようなものではない。全ての法は虚偽、すなわち欺く法である[403]。

と引用されている意味は、「のである。すなわち」までによって、勝義諦は一切智者の智慧の対象より超えていると示されているその対象より超えているあり方は、「〔勝義諦であると述べられる〕ようなものではない」までによって示されている。すなわち、これは勝義諦であると述べたときに、その音声に従った分別知において、対象と対象を持つもの〔の知〕はそれぞれ二つに分けられて顕れているように、一切智者のその如実智において、以上のような顕れ方によって、その対象より超えているのである。すなわち、二つの顕れの全ての法は、虚偽すなわち欺く法であるので、真実義と

---

[403] SPN, 247a5–: ལྷའི་བུ་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ནི་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཆོག་དང་ལྡན་པ་དང་། ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ཡུལ་གྱི་བར་ལས་ཡང་དག་པར་འདས་པ་ཡིན་ཏེ། ལྷའི་བུ་དེ་ལ་རྟོག་པ་དང་རྣམ་པར་རྟོག་པ་ཐམས་ཅད་འཇུག་པའང་མེད། ལྡོག་པའང་མེད་དོ། །དོན་དམ་པར་ན་དེ་ལ་ཕ་རོལ་ཡང་མེད། ཚུ་རོལ་ཡང་མེད། དབུས་ཀྱང་མེད་དེ། ལྷའི་བུ་འདི་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེན་པ་ཞེས་སྒྲོ་བཏགས་ཏེ་བརྗོད་མོད་ཀྱི། ཇི་ལྟར་དོན་དམ་པའི་བདེན་པའོ་ཞེས་བྱ་བ་ལྟར་ནི་མ་ཡིན་នོ། །ལྷའི་བུ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཀྱིས་ཀྱང་དོན་དམ་པར་ན་ཆོས་ཐམས་ཅད་དང་། སྒྲ་ཐམས་ཅད་ནི་བརྫུན་ཏེ་སླུ་བའི་ཆོས་སོ་ཞེས་བཀའ་སྩལ་ཏོ། །(天子たちよ、勝義諦は一切の種類のものの最上のものを有している。一切智者の智慧の対象に至るまでも超えているのである。すなわち、天子よ、それ〔勝義諦〕において全ての分別と妄分別を生じることもなく、退けることもないのである。勝義というならば、それには彼岸なく、此岸もない。中央もまたないのである。天子よ、これは勝義諦であると増益して述べるけれども、勝義諦であると述べられるようなものではないのである。天子よ、正覚者である如来によってもまた勝義においては、全ての法と語は虚偽すなわち欺く法であると示している)。ツォンカパは原文そのままではなく、省略して引用している。

いう欺かないもののみをご覧になっている智にとってそれ〔二つの顕れ〕は存在しないということである。

それら全ては真実義を直接にご覧になっている智にとって蘊などの世俗のものが顕れないということの根拠である。

したがって、真実義を直接にご覧になっている智にとって、事物と非事物などの二つとしての法という全ての戯論はありえないのである。なぜならば、それらの戯論の自体がそこに知覚されないからである。

そうであるならば、真実義を考えることおいて、直接には、聖者たちのみは量であって、聖者ではないものは、直接には量ではないから、聖者の勝義をご覧になっている智にとって他生を否定することにおいて世間によって侵害されないのである。

S4 བཀག་པ་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་པ་ལ་གནོད་བྱེད་བསྟན་པ།

བཞི་པ་ནི། （བཀག་པ་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་པ་ལ་གནོད་བྱེད་བསྟན་པ་） ཅི་སྟེ་གཞན་སྐྱེ་དོན་དམ་པར་བཀག་པ་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱི་གནོད་པ་བརྗོད་པར་འདོད་པས།[L121a6]དེ་ཁོ་ན་[D132b4][K132b4]ཉིད་རྣམ་པར་དཔྱོད་པའི་སྐབས་སུ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱི་མཐོང་བ་ཡང་[T126b2]ཚད་མར་ཁས་ལེན་ན་དེ་ལྟ་ཡིན་དང་[113a4]གལ་ཏེ་འཇིག་རྟེན་གྱི་མཐོང་བ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་ཚད་མ་ཡིན་ན་ནི། འཇིག་རྟེན་རང་དགའ་བས་དེ་ཁོ་ན་[D132b5][K132b5]ཉིད་[L121b1]མངོན་སུམ་དུ་མཐོང་བ་སྟེ་རྟོགས་པའི་ཕྱིར་དང་། དེ་ཡང་འཁོར་བ་ཐོག་མ་མེད་པ་ནས་ཡིན་[T126b3]པས། མ་རིག་པ་སྤངས་པར་ཁས་བླང་དགོས་པས་དེ་[113a5]ཁོ་ན་ཉིད་མངོན་སུམ་དུ་རྟོགས་པ་ལ་འཕགས་པ་གཞན་གྱིས་ཅི་[D132b6][K132b6]ཞིག་དགོས་ཏེ་མི་དགོས་ལ།[L121b2]འཕགས་པའི་ལམ་ཚོལ་བ་ཡིས་ཀྱང་ཅི་ཞིག་བྱ་སྟེ་དགོས་པ་མེད་དོ། །

འཇིག་[T126b4]རྟེན་རང་དགའ་བའི་བླུན་པོ་ནི། དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་ཚད་མར་རིགས་པའང་མ་ཡིན་[113a6]ནོ། །

དེའི་ཕྱིར་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་[D133a1][K133a1]དཔྱོད་པའི་སྐབས་སུ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་རྣམ་པ་ཀུན་ཏེ་[L121b3]ཐམས་ཅད་དུ་འཇིག་རྟེན་གྱི་མཐོང་བ་ཚད་མ་མིན་པ་དེ་ཡི་ཕྱིར། དེ་[T126b5]ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་སྐབས་སུ་འཇིག་རྟེན་གྱི་གནོད་པ་མེད་དོ། །

རྣམ་ཀུན་[D133a2][K133a2]འཇིག་རྟེན་ཚད་མིན་ཞེས་པས་[113b1]ལུགས་འདིས་ཚད་མ་གཏན་མི་འདོད་པར་སྟོན་པས། ལུགས་དེ་ཡང་དག་པ་[L121b4]མ་ཡིན་ནོ་ཞེས་སྨྲ་བ་དང་། ཁ་ཅིག་ལུགས་དེ་ལེགས་སོ་[T126b6]ཞེས་སྨྲ་བ་གཉིས་ཀས་ཀྱང་སློབ་དཔོན་[D133a3][K133a3]འདིའི་བཞེད་པ་མ་རྟོགས་བཞིན་དུ་སྨྲས་པས། རང་གི་དེ་ཉིད་སྟོན་པ་ཙམ་དུ་[113b2]ཟད་དེ། འཇིག་རྟེན་གྱི་མཐོང་བ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་རྣམ་པ་ཀུན་ཏུ་[L121b5]ཚད་མ་མིན་པར་བསྟན་པ་ལ། སྤྱིར་ཚད་[T127a1]མ་མི་བཞེད་པར་གོ་འདུག་པའི་[D133a4][K133a4]ཕྱིར་རོ། །

ཚད་མ་དང་གཞལ་བྱ་ཡང་ཚིག་གསལ་ལས་གསུངས་པ་ལྟར་ངོ་བོ་ཉིད་ཀྱིས་གྲུབ་པ་བཀག་ནས། ལྟོས་[113b3]འཇོག་གི་ཚད་མ་དང་གཞལ་བྱ་འཇོག་པར་བཤད་པ་ལྟ་[L121b6][T127a2]བུར་བྱེད་དགོས་ཏེ་འོག

དུ་འཆད་པར་འགྱུར་[D133a5][K133a5]རོ། །

S4 〔他からの生起を〕否定したことに対して世間のものによって拒斥することにおいて拒斥的な論証がなされること

第四〔〔他からの生起を〕否定したことに対して世間のものによって拒斥的な論証がなされること〕は、もし他生が勝義として否定されたことに対して、世間の拒斥を述べると主張することによって、真実義を考察する場合、真実義に対して世間の見もまた量であると承認しているならば、その通りであるけれども、もし世間の見が真実義において量であるならば、世間の一般的な知によって真実義が直接に見られる。なぜならば、理解しているからである。また、それについても輪廻は、無始時来からであるので、無明を断じていると承認しなければならないことによって、真実義を直接に理解するために、他の聖者がどうして必要であるのか。すなわち、必要でないのである。聖者の道を探すことも何の必要があるであろうか。すなわち、必要でないのである。

世間一般の愚者は、真実義に対して量であることは正理ではないのである。

したがって、真実義を考察する場合に、真実義に対してあらゆる場合において、すなわち全てにおいて世間の見は量ではないがゆえに、真実義の場合に、世間の拒斥は存在しないのである。

「いかなる場合に、世間は量ではない」と述べていることによって、この説が量は全く認められないと示しているので、この説が正しくないと述べ、ある者たちが、その説は優れていると述べることの両者によってもこの阿闍梨のご主張を理解せずに述べられるので、それ自体を示していることだけに尽きるのである。なぜならば、世間の見が真実義についていかなる場合において量ではないと示していることについて、一般的な量が認められないと理解しているからである。

量と所量にもまた『プラサンナパダー』にお説きになっている通りに、自体によって成立していることは否定されているから、関係して設定されものである量と所量を設定していると説明しているようにする必要がある。すなわち、以下で述べることになる。

S5 འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་པའི་གནོད་ཚུལ་བསྟན་པ།

ལྔ་པ་ནི། (འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་པའི་གནོད་ཚུལ་བསྟན་པ།) འོ་ན་ཇི་ལྟར་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་པར་འགྱུར་ཞེ་ན། འཇིག་རྟེན་ཉིད་ལས་གྲགས་ཤིང་གྲུབ་པའི་དོན་ནི། འཇིག་རྟེན་གྱི་གྲགས་པ་ཉིད་[113b4]ཀྱིས་གལ་ཏེ་སེལ་ན།[T127a3]གང་ཟག་[L122a1]དེ་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་[D133a6][K133a6]པར་འགྱུར་རོ། །

དེ་ནི་དཔེར་ན་ཁ་ཅིག་གིས་ངའི་རྫས་ཕྲོགས་སོ་ཞེས་སྨྲས་པ་དང་། གང་ཟག་གཞན་ཞིག་[404]གིས་དེ་ལ་དྲིས་པ་རྫས་དེ་ཅི་ཞིག་ཡིན། དེས་བུམ་པའོ་ཞེས་[L122a2]སྨྲས་པ་ལ། གཞན་དེས་བུམ་[113b5]པ་[T127a4]ནི་རྫས་མ་ཡིན་ཏེ།[D133b1][K133b1]གཞལ་བྱ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རྨི་ལམ་གྱི་བུམ་པ་བཞིན་ནོ། ། ཞེས་སུན་འབྱིན་པ་དེ་ལྟ་བུ་ལ་སོགས་པའི་ཡུལ་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་ཀྱི། གང་གི་ཚེ་འཕགས་པའི་དོན་[L122a3]དམ་གྱི་གཟིགས་པ་ལ་བརྟེན་ཏེ། སྐྱེ་བོ་དོན་[T127a5]དམ་[D133b2][K133b2]ལ་མཁས་[113b6]པ་ཚད་མར་བྱས་ནས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་གཏན་ལ་འབེབས་པ་དེའི་ཚེ། འཇིག་རྟེན་གྱི་གནོད་པ་ཡོད་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

མཁས་པས་ཕྱོགས་འདིས་གཞན་ཡང་དཔྱད་པར་བྱའོ་ཞེས་[L122a4]གསུངས་པ་ནི། ང་ནི་བུམ་པའི་བདག་[D133b3][K133b3][T127a6]པོ་དང་ལྷས་བྱིན་ནི་འཕྲོག་མཁན་མ་ཡིན་[114a1] ཏེ།[405]ཞེས་པ་དང་། ངའི་ཞིང་སྟེང་དུ་སྐྱེས་སོ་བྱས་པ་ན་ཅི་ཞིག་སྐྱེས་ཞེས་འདྲི་བ་ལ་མྱུ་གུའོ་ཞེས་བྱས་པ་ན། མྱུ་གུ་ནི་སྐྱེ་བ་མེད་དེ་གཞལ་བྱ་ཡིན་པའི་[L122a5]ཕྱིར་ཞེས་པ་དང་། རྨི་ལམ་[D133b4][K133b4]གྱི་གང་ཟག་[T127b1]དང་མྱུ་གུ་བཞིན་ཞེས་སྨྲ་བ་ད་ལྟ་དབུ་[114a2]མའི་རིགས་པ་ཆེན་པོར་འདོད་པ་རྣམས་ལ་འཇིག་རྟེན་གྱིས་གནོད་པར་བསྟན་ཏོ། །

S5 世間のものによって拒斥なされる拒斥の仕方を示す

第五〔世間のものによって拒斥なされる拒斥の仕方を示すこと〕は、そうであるのならば、どうして世間によって拒斥されることになるのであるかと問うならば、世間のみより知られ、成立していることの意味は、世間の知られることだけによって、もし除かれるならば、そのプドガラに対して世間によって拒斥されることになってしまうのである。

それは、例えば、ある者たちが「私の実体が奪われた」と語り、また、他のプドガラが「その実体とは何であるか」とその者に尋ねる。彼が「壺である」と言うことに対して、その他の者が「壺は実体ではないのである。すなわち、所量であるがゆえに夢の壺と同様である」と述べ、論難するこのようなことなどの対象に対して世間によって拒斥するのであって、聖者の勝義をご覧になることに依り、勝義について巧みな者が量であることをさして真実義を確定するときに、世間の拒斥があるのではないのである。

巧みな者がこの主張によってさらに考察すべきであるとお説きになっているのは、「私は壺の所有者〔ではなく〕、デーヴァダッタ（Devadatta）は奪った者ではない。すなわち」と述べ、また、「私の畑に生えた」というときに、「何が生えたのか」と尋ねることに対して「芽〔が生えた〕」というとき、芽は生じることがないのである。なぜならば、所量であるからと述べ、また、夢の中のプドガラと芽と同様にと述べるそのような偉大なる中観の者であると主張している者たちにおいて、世間によって拒斥され

[404] T, Z: ཅིག་　D, K, L: ཞིག་
[405] Z: མ་ཡིན་ཡིན་ཏེ།　D, K, L, T: མ་ཡིན་ཏེ།

ると示しているのである。